いわてのお寺さん

盛岡とその周辺

発刊にあたって

株式会社　テレビ岩手
代表取締役社長　中野士朗

『お寺さーん　何となく懐かしい響きですね。お寺の庭を遊び回った幼いころ……。

大方の人が、こんな思い出をお持ちではないでしょうか』今から二十七年前出版した〝いわてのお寺さん〟のあとがきです。

今ではどうでしょう。お寺の風景も世につれ、随分うつろいでしまいました。そういえばめっきり子どもの姿が消えました。お寺からも、門前からも、街角からも……。代りに肩をすぼめた彷徨びとの影が、境内に見られるようになりました。

遊びのお寺さんから、学びの寺、そして今、癒しの寺。

杉木立に蝉時雨、時のたっぷりしみ込んだ境内は黄昏の暗愁をゆっくり、ゆっくり解きほぐしてくれます。癒しの時代は、お寺さん出

番の時代でもあります。

〝花は無心にして蝶を招き、蝶は無心にして花尋ぬ〟は良寛の言葉です。

この言葉を噛みしめながら遠き故郷のお寺を、今しみじみと懐かしんでおります。普段何気なく通り過ぎているお寺も、一歩足を踏み入れると、それぞれに歴史があり、由緒があります。

先ごろ『いわてのお寺さん～北上・花巻とその周辺～』を発行したところ、大変なご好評を頂きました。各方面からの強い要望もあり、この度『いわてのお寺さん～盛岡とその周辺～』を発刊いたします。北上・花巻とその周辺編と同じようにご愛読いただければ幸いです。

二十七年ぶりに発刊する『いわてのお寺さん』各地編が、新しいふるさと発見となりますよう願っています。

平成十五年八月

いわてのお寺さん〈盛岡とその周辺〉　もくじ

■発刊にあたって

■第1ブロック　盛岡市―寺の下・中心部・北部（21寺）

久昌寺（きゅうしょうじ）……12
長松院（ちょうしょういん）……14
臨江庵（りんこうあん）……16
祇陀寺（ぎだじ）……18
千手院（せんじゅいん）……22
大慈寺（だいじじ）……24
永泉寺（えいせんじ）……28
円光寺（えんこうじ）……30
連正寺（れんしょうじ）……32
金剛珠院（こんごうじゅいん）……33
長福院（ちょうふくいん）……34
三明院（さんみょういん）……35
峯諦院（ほうじゅいん）……36
遠光寺（おんこうじ）……38
永祥院（えいしょういん）……40
本正寺（ほんしょうじ）……44
正覚寺（しょうがくじ）……46
広宣寺（こうせんじ）……48
永福寺（えいふくじ）……50
松園寺（しょうおんじ）……54
蟻塔庵（ぎとうあん）……56

■第2ブロック　盛岡市―寺町かいわい　……（23寺）

大泉寺（だいせんじ）……58
光照寺（こうしょうじ）……60
東願寺（とうけんじ）……62
本誓寺（ほんせいじ）……66
證明寺（しょうみょうじ）……68
専立寺（せんりゅうじ）……70
清養院（せいよういん）……72
龍谷寺（りゅうこくじ）……74
光台寺（こうだいじ）……78
徳玄寺（とくげんじ）……80
吉祥寺（きちじょうじ）……84
以信院（いしんいん）……86
報恩寺（ほうおんじ）……88
正傳寺（しょうでんじ）……92
恩流寺（おんりゅうじ）……94
東禅寺（とうぜんじ）……98

聖寿禅寺（しょうじゅぜんじ）……（100）
法泉寺（ほうせんじ）……（102）
教浄寺（きょうじょうじ）……（106）
源勝寺（げんしょうじ）……（108）
法華寺（ほっけじ）……（112）
願教寺（がんきょうじ）……（114）
真行寺（しんぎょうじ）……（116）

■第3ブロック　盛岡市―西部・南部、矢巾町（21寺）

【盛岡市】
青山寺（せいざんじ）……（118）
天昌寺（てんしょうじ）……（120）
長松寺（ちょうしょうじ）……（124）
不退院（ふたいいん）……（129）
感恩寺（かんのんじ）……（130）
得道寺（とくどうじ）……（132）
岩手真宗会館（いわてしんしゅうかいかん）……（133）
宮澤寺（きゅうたくじ）……（134）
大松院（だいしょういん）……（136）
長善寺（ちょうぜんじ）……（140）
清水寺（せいすいじ）……（142）
大泉院（だいせんいん）……（144）
龍源寺（りゅうげんじ）……（146）
如法寺（にょほうじ）……（150）
【矢巾町】
高傳寺（こうでんじ）……（152）
龍泉寺（りゅうせんじ）……（156）
誓岸寺（せいがんじ）……（158）
本浄寺（ほんじょうじ）……（160）
實相寺（じっそうじ）……（162）
観音寺（かんのんじ）……（166）
大光院（だいこういん）……（167）

■第4ブロック　紫波町……（22寺）

勝源院（しょうげんいん）……（170）
来迎寺（らいこうじ）……（172）
善念寺（ぜんねんじ）……（174）
本誓寺（ほんせいじ）……（176）
長岩寺（ちょうがんじ）……（180）
蟠龍寺（ばんりゅうじ）……（182）
覚王寺（かくおうじ）……（184）
廣澤寺（こうたくじ）……（188）
光圓寺（こうえんじ）……（190）
極楽寺（ごくらくじ）……（194）
欣求寺（ごんぐじ）……（196）
願圓寺（がんえんじ）……（198）
隠里寺（いんりじ）……（200）
称名寺（しょうみょうじ）……（202）
黄金堂（こがねどう）……（204）
高金寺（こうきんじ）……（206）
長徳寺（ちょうとくじ）……（208）
正養寺（しょうようじ）……（210）

鳳仙寺（ほうせんじ）……（214）
正音寺（しょうおんじ）……（216）
常光寺（じょうこうじ）……（218）
江岸寺（こうがんじ）……（220）

■第5ブロック　玉山村、滝沢村、雫石町、松尾村、西根町、岩手町、葛巻町　…（28寺）

【玉山村】
東楽寺（とうらくじ）……（224）
常光寺（じょうこうじ）……（226）
寶徳寺（ほうとくじ）……（228）
喜雲寺（きうんじ）……（232）
浄泉寺（じょうせんじ）……（234）
妙光寺（みょうこうじ）……（236）
桂松院（けいしょういん）……（237）
【滝沢村】
東林寺（とうりんじ）……（238）
清雲院（せいうんいん）……（240）
【雫石町】
廣養寺（こうようじ）……（244）
臨済寺（りんざいじ）……（246）
永昌寺（えいしょうじ）……（248）
妙誓寺（みょうせいじ）……（250）
上和野馬頭観世音（かみわのばとうかんぜおん）…（251）
【松尾村】
鷲連寺（じゅれんじ）……（252）
【西根町】
大泉院（だいせんいん）……（256）
東慈寺（とうじじ）……（258）
聖福寺（しょうふくじ）……（260）
龍松寺（りゅうしょうじ）……（262）
吉祥寺（きちじょうじ）……（264）
【岩手町】
正覚院（しょうがくいん）……（268）
沼福寺（じょうふくじ）……（270）
大蓮寺（だいれんじ）……（272）
寶積寺（ほうしゃくじ）……（276）
明圓寺（みょうえんじ）……（278）
【葛巻町】
宝積寺（ほうしゃくじ）……（282）
柳滝院（りゅうぜんいん）……（284）
正福寺（しょうふくじ）……（286）

▼歴史・史跡に関するコラム

「らかん公園」と飢饉と供養塔……（20）
城下盛岡と寺院……（96）
安倍氏と厨川柵
—前九年の役・後三年の役—……（122）
みちのく「黄金の国」の跡……（148）
古代国家が造った城柵
—徳丹城・志波城—……（154）

近世盛開けの動乱
—斯波氏の興亡・九戸政実の乱— …… 178
源氏と藤原氏ゆかりの史跡
—紫波町陣ヶ岡・五郎碑— …… 186
米づくりの水をめぐって
—鹿妻穴堰・越前堰・山王海ダム— …… 192
中世の紫波五山 …… 197
湧水の里・水の伝説 …… 254
地名の山来
—盛岡・岩手・紫波— …… 274

▼伝統行事に関するコラム
お盆と舟っこ流し …… 26
お寺の祭り・裸まいり …… 42
舞にとけあう供養と娯楽
—剣舞・さんさ踊り— …… 64
踊りつがれる文化遺産
—神楽・田植踊り・鹿踊り— …… 138
チャグチャグ馬コと南部曲がり家
—伝統のある良馬産出地— …… 242

▼人物・植物に関するコラム
盛岡の桜めぐり …… 76
宮沢賢治の信仰 …… 82
盛岡ゆかりの名僧
—万長老、烏地黙雷、烏地大等— …… 104

啄木そのふるさと …… 230

▼信仰・仏教に関するコラム
仏教と経典について …… 52
盛岡の羅漢さま …… 90
仏像と菩薩について …… 110
観音信仰と三十三観音の巡礼 …… 126
盛岡三十三観音・当国三十三ヵ所 …… 128
悟りを開いた仏・如来について …… 164
かくし念仏 …… 168
明王・仁王・天部の神々 …… 212
お彼岸と仏教行事 …… 222
修験と山岳信仰 …… 266
お地蔵さまの信仰とご利益 …… 280
民衆の信仰拠点
—大更説教所・浄土庵・念仏太夫— …… 288

■主な宗派の概況 …… 289

☆あとがき …… 296

☆参考文献・協力機関 …… 297

題字揮毫　中野　士朗
装　幀　千澤　秀世
イラスト　西山　久美子

宗門・宗派別寺院の目次

【天台系寺院】

▼天台宗

千手院（盛岡市）……22

正覚院（岩手町）……268

▼本山修験宗

三明院（盛岡市）……35

峯壽院（盛岡市）……36

大光院（矢巾町）……167

覚王寺（紫波町）……184

【真言系寺院】

▼真言宗智山派

連正寺（盛岡市）……32

金剛珠院（盛岡市）……33

▼真言宗豊山派

長福院（盛岡市）……34

永福寺（盛岡市）……50

▼高野山真言宗

桂松院（玉山村）……237

▼真言宗醍醐派

黄金堂（紫波町）……204

【浄土系寺院】

▼浄土宗

円光寺（盛岡市）……30

正覚寺（盛岡市）……46

蟻塔庵（盛岡市）……56

大泉寺（盛岡市）……58

光台寺（盛岡市）……78

吉祥寺（盛岡市）……84

不退院（盛岡市）……129

誓岸寺（矢巾町）……158

来迎寺（紫波町）……172

善念寺（紫波町）……174

極楽寺（紫波町）……194

欣求寺（紫波町）……196

隠里寺（紫波町）……200

称名寺（紫波町）……202

大運寺（岩手町）……272

▼浄土真宗本願寺派
願教寺（盛岡市）……114
真行寺（盛岡市）……116
本浄寺（矢巾町）……160
浄泉寺（玉山村）……234
妙誓寺（雫石町）……250
▼真宗大谷派
光照寺（盛岡市）……60
本誓寺（盛岡市）……66
證明寺（盛岡市）……68
専立寺（盛岡市）……70
徳玄寺（盛岡市）……80
岩手真宗会館（盛岡市）……133
本誓寺（紫波町）……176
光圓寺（紫波町）……190
願圓寺（紫波町）……198
正養寺（紫波町）……210
▼時宗
教浄寺（盛岡市）……106
【禅系寺院】
▼臨済宗妙心寺派
長松院（盛岡市）……14
臨江庵（盛岡市）……16
東禅寺（盛岡市）……98
聖寿禅寺（盛岡市）……100
法泉寺（盛岡市）……102
臨済寺（雫石町）……246
▼黄檗宗
大慈寺（盛岡市）……24
▼曹洞宗
久昌寺（盛岡市）……12
祇陀寺（盛岡市）……18
永泉寺（盛岡市）……28
永祥院（盛岡市）……40
松園寺（盛岡市）……54
東顕寺（盛岡市）……62
清養院（盛岡市）……72
龍谷寺（盛岡市）……74
報恩寺（盛岡市）……88
正傳寺（盛岡市）……92
恩流寺（盛岡市）……94
源勝寺（盛岡市）……108
青山寺（盛岡市）……118
天昌寺（盛岡市）……120
長松寺（盛岡市）……124
宮澤寺（盛岡市）……134
大松院（盛岡市）……136
長善寺（盛岡市）……140
清水寺（盛岡市）……142
大泉院（盛岡市）……144
瀧源寺（盛岡市）……146

如法寺（盛岡市）……150
高傳寺（矢巾町）……152
龍泉寺（矢巾町）……156
實相寺（矢巾町）……162
観音寺（矢巾町）……166
勝源院（紫波町）……170
長岩寺（紫波町）……180
廣澤寺（紫波町）……182
蟠龍寺（紫波町）……188
高金寺（紫波町）……206
長徳寺（紫波町）……208
鳳仙寺（紫波町）……214
正音寺（紫波町）……216
常光寺（紫波町）……218
江岸寺（紫波町）……220
東楽寺（玉山村）……224
常光寺（玉山村）……226
寶徳寺（玉山村）……228
喜雲寺（玉山村）……232
東林寺（滝沢村）……238
清雲院（滝沢村）……240
廣養寺（雫石町）……244
永昌寺（雫石町）……248
鷲連寺（松尾村）……252
大泉院（西根町）……256
東蘊寺（西根町）……258
聖福寺（西根町）……260
龍松寺（西根町）……262
吉祥寺（西根町）……264
沼福寺（岩手町）……270
寶積寺（岩手町）……276
明圓寺（岩手町）……278
宝積寺（葛巻町）……282
柳善院（葛巻町）……284
正福寺（葛巻町）……286

【日蓮系】

▼日蓮宗

遠光寺（盛岡市）……38
以信院（盛岡市）……86
法華寺（盛岡市）……112
妙光寺（玉山村）……236

▼法華宗本門流

本正寺（盛岡市）……44

▼本門佛立宗

広宣寺（盛岡市）……48

▼日蓮正宗

感恩寺（盛岡市）……130
得道寺（盛岡市）……132

【単立】

上和野馬頭観世音（雫石町）……251

第1ブロック

盛岡市――寺の下・中心部・北部

檀家の大工が匠の技を傾注した山門

奕葉山（えきようざん） 久昌寺（きゅうしょうじ） 曹洞宗

◆盛岡市大慈寺町一一五
◆電話 〇一九―六二三―一三七八
◆住職 第三世 海野一義

「代々続く」という山号

盛岡バスセンターから明治橋方向に行くと、左奥に風格ある建物が見えます。久昌寺の山門です。その南側に寺が連なり、「寺ノ下寺院群」として市の環境保護地区になっています。

久昌寺は、江戸時代前期（一六二四～二八年）、祇陀寺の奇山快秀和尚によって開かれました。当初、閑居の庵（いおり）でしたが、約三〇年後（一六五六年）、大檀那の十一屋（下ノ橋町）の協力により伽藍を建立。報恩寺九世・蘭翁嫩芝大和尚を開山導師に勧請し、自らは二世となり、奕葉山久昌寺を号しました。それは、代々続く山、長久に栄える寺を意味しています。

創建以来、久昌寺は三回火難に遭いました。江戸時代中期（一七二九年）の大火の後、一〇世により再建されますが、明治一七年、さらに明治三一年に焼失。現在の本堂は、大正五年、二一世・義岸和尚の代に建立されました。

総ケヤキの扇たる木造り

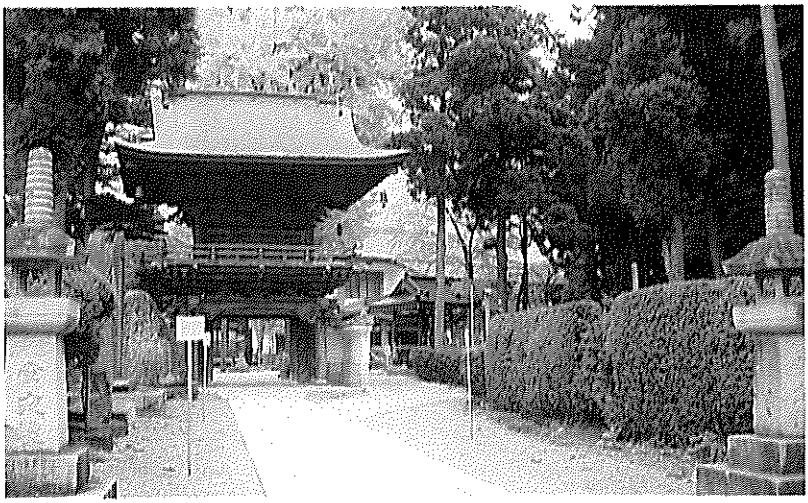
久昌寺のシンボルは、総ケヤキ造りの山門です。昭和八年、勝源院（紫波町）の山門を模し、檀家の船大工が匠の技と情熱を注いで築造しました。

山門の名物は、まず、屋根から扇状に突出する扇たる木造り。南部家から下賜された鯱（しゃち）。現在は、後継に座をゆずり、当の鯱は玄関内に〝隠居〟し、来訪者を迎えています。

山門の周囲にはめ込まれた獅子頭、天女、昇り龍、降り龍など数々の彫刻は、時を経た味わいをみせています。「季節や時間によって表情が異なるといって、よく山門を見に来る人がいます。季節は冬がいいという人が多いですね」という住職。

●略図は37ページ参照

明治末、暁亭による襖絵（部分）



山門を発願した三一世は、その当時、大国寺（川井村）の住職だった三世・義雄に命じて、伐採から四～五年たった木材を集めました。木材を川流しで運搬する際、一本が滝の中途にひっかかり、どうやっても動かなかったものが、十数年たって三世が現場に姿を見せたとたん、ゆっくり流れ落ちたという逸話があります。

墨絵とゆかりの画人

内部で目を引くのは、襖絵です。羅漢さま、竹林の七賢人、天井の大きな龍。いずれも真野暁亭の作品です。

先ごろ、暁亭の経歴が判明しました。明治七年、東京に生まれ、一一歳で河鍋暁斎の門下となり、再三展覧会で受賞し、絵師として六一歳の生涯を終えました。

明治三八年、暁亭は建碑大画会の際に来盛し、その後、岩手に逗留したようです。おそらく、二一世・義岳は絵を通じて暁亭の知遇を得、本堂建立にあたり墨絵の作成を頼んだとみられます。また義岳自身も、本堂内陣の天井を飾る「花鳥の絵」約一四〇枚を描きました。

住職の海野家は、画人の家柄です。義岳の父は南部藩の絵師だった梅岳で、三岳は兄です。そうしたことから久昌寺には梅岳・三岳の絵が伝わっています。また、後年の人に、海野経がいます。

久昌寺には著名人の墓も多く、代表的なものに新渡戸稲造の父祖の墓があります。また、藩政時代に力士の世話をした関係から力士の墓が多く、当時の相撲用の太鼓が残っています。

仏像　地蔵菩薩坐像（市文化財）、七体観世音（盛岡三三観音二番）、白子観世音（同一〇番）

社会事業　久昌寺保育園（財団法人）

関連記事　お盆と舟っこ流し

六〇年つづく坐禅会と新設の禅堂

万歳山（ばんざいさん） 長松院（ちょうしょういん）

臨済宗妙心寺派

◆盛岡市大慈寺町〔一一〕
◆電話 〇一九一六一一一一〇六八七
◆住職 第一七世 佐藤勝也

隠居所から菩提寺へ

南大通りの南側、臨江庵と隣り合って長松院があります。平成一四年末に真新しい山門が完成し、伽藍（がらん）にいっそうの風格が備わりました。明治一七年の大火で山門を焼失した後、一〇〇年余の空白を経て再建されたものです。

長松院は、江戸時代前期（一六二四～四四）、聖寿禅寺の涼室宗薫（仏恵広照禅師）を勧請し、弟子の法岩常公和尚によって開創されました。

当初、聖寿禅寺の隠居寺として開かれたとみられます。ところが、藩政下にあって、藩主と同じ菩提寺に墓所を持てない中級・下級の武士が、長松院に墓所を求めました。そのなかで、聖寿禅寺の大道和尚の伝法を得た大輪祥曄和尚が寺を再構築（中興開山）して住職となり、現在に至っています。

藩公側室ゆかりの秘仏

長松院には、七月……日、地域と力を合わせて例祭を行う子安延命地蔵尊があります。盛岡城下の地誌『盛岡砂子』にも、「御下貴財の女、懐胎すれば必ず安産を祈願」とあり、参詣人が多く、ことに祭りに群衆したこと、慈覚大師の作像であることが書かれています。

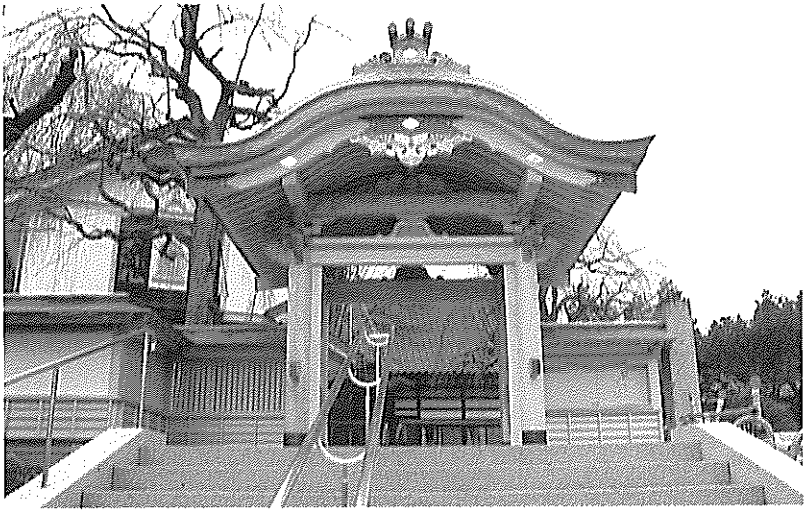
地蔵尊は五〇年に一度のご開帳という秘仏で、平成一一年に四〇〇年の開帳が行われました。

この地蔵尊には次の伝えがあります。盛岡城築城のころ、南部重信公の側室・長慶院が上田に高源寺を建立し、……から移した尊像に香花をたむけていました。没後、聖寿禅寺の地蔵堂に移されますが、火災に遭遇。聖寿禅寺の本

●略図は37ページ参照

本堂と棟つづきに子安延命地蔵を安置

堂内に安置すれば、南部家の菩提寺のため庶民の参詣は許されないので、道安和尚は、本寺の長松院を拡充して安置しました。



現在の本堂は火災のあと明治一九年に再建されますが、そのときも、本堂と棟つづきに堂が造られました。

坐禅修養の場として

長松院には六〇年継続している禅道会があります。毎週土曜日、夜七時から坐禅会を実施。また年一回、松島の瑞巌寺から師を招いて禅問答を行い、日ごろの成果を確認し合います。

臨済禅がめざすのは、各人にそなわる真実の自己にめざめること。その昔、達磨大師は九年間の坐禅によって悟りを開き、さかのぼれば、古代インドで、釈迦が悟りを開いた行法です。

近年、長松院では、要請にこたえて中学生の体験学習、企業の社員教育、スポーツ選手などの坐禅を実施してきましたが、このたび、新しい禅堂が完成。平成一四年夏、観音堂を併設する会館内に設けられました。

かつて、子どもが問題を抱えたときお母さんと二人で一年間、坐禅修養をしたことがあり、そうした経験をふまえ、「今後、子どものために禅堂を活用することも考えたい」と、住職は抱負を語っています。

余録　日本の芸術文化に大きな影響を与えた禅宗。昭和四五年、長松院に「茶筅塚（ちゃせんづか）」が建立され、師範と社中の方々が毎年、茶筅供養を行っている。宗派は異なるが、長松院にも、先代大黒さんの弟子が主宰する茶道教室がある。

仏像　子安延命地蔵菩薩（市文化財）、貞伝観世音（盛岡三十三観音三番）

関連記事　お地蔵さまの信仰とご利益

閻魔王など十王像を今に伝える

慶雲山 臨江庵

臨済宗妙心寺派

◆盛岡市大慈寺町二一一
◆電話 〇一九―六五―五四五〇
◆住職 第一五世 藤村顕僧

天台宗からの改宗

昔、臨江庵付近は街道の分岐にあたり、北上川も近いことから、物資と人の行き交う地として栄えました。また、北上川渡し（新山舟橋）付近は景色がよく、「舟橋の夕照」として、詩歌や絵の題材になりました。

臨江庵のおこりは、この地を通りかかった天台宗の修行僧が、沼や沢のある景色にひかれ、余生を過ごす草庵を建立したことに始まります。池に臨む地から「臨江」を号したとされます。

この僧の没後、無住となりましたが、南部家の勢威とともに臨済宗が盛んになり、延宝三年（一六七五）、面目を改め、聖寿禅寺（南部家菩提寺）の末寺として開山しました。

「生前の罪」と十王信仰

明治一七年の盛岡の大火で、臨江庵を含む付近一帯が類焼しました。火災後、大正一四年に堂宇を再建。それが現在の本堂です。火災で古い記録や什器の大半を焼失しましたが、幸いにも地蔵尊・脱衣婆・十王像（一〇体）は残り、今に伝えています。

死後、生前の罪を裁くという十王。十王の中で、よく知られているのが閻魔王です。死者を裁くという考え方はインドから中国に伝わり、道教と融合して十王信仰となり、日本でも鎌倉時代以降に広まりました。

●略図は37ページ参照

回忌に対応する十三仏

浄土教では、人は死後、極楽か地獄へ行くとされ、生前の罪のため、いったんは地獄に送られます。

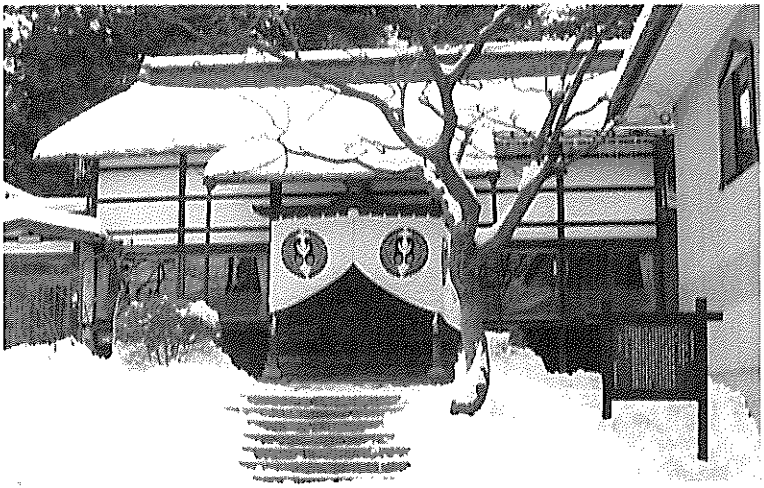
極楽往生するように、遺族は初七日から回忌の供養をします。

そのとき、三途の川を渡って冥界に入った人は、初七日、二七日から七七日まで、さらに百ヵ日、一周忌、三周忌と、十王それぞれによる裁判があります。五七日には裁判長である閻魔王が判決を言い渡し、七七日には太山王によって罪が確定します。

いっぽう亡者が一日も早く極楽に行けるよう、十三仏が救助します。初七日から七日ごとに七回、百ヵ日、一

周忌、三回忌、七回忌、一三回忌、三三回忌、合わせて十三の回忌ごとに、それぞれ救済にあたる仏さま（五如来、一明王、七菩薩）が決まっています。十王というのは、実は十三仏の化身。甘やかされると怠けるのが人間ですから、早く罪を認めるよう叱るのですが、本当は慈悲深い仏さま。僧侶や遺族も押んでくれますが、生前、ふだんからいろいろな仏さまを押んでいれば、より早く極楽へ行けるということになります。

死者を裁く信仰に基づく十王像



たとえば、おそろしい顔をした閻魔大王の本地は地蔵菩薩。本来は一体であるお地蔵さまが、地獄の六道に合わせ六つの姿に変化して救済します。

このようにみていくと、閻魔さん、お地蔵さまのどちらも臨江庵にあることがうなずけます。

どんな重罪でも、地獄で罪をつぐなうのは最長で三三年。あとは極楽に行くので、三三回忌がすめば遺族も安心してよい、とされます。

余録　「裁（さば）入り」というのは、昔、奉公人が年一回、正月の一六日に仕事が休みとなり、都会から縁（裁）深い故郷へ帰る日。十王経によると、この日は地獄の閻魔王の祭日で、鬼たちも休むので亡者も解放されるという。

仏像　十王像一〇体（市文化財）

餓死供養の大石仏を発願した一四世天然和尚

青龍山（せいりゅうざん） 祇陀寺（ぎだじ） 曹洞宗

◆盛岡市大慈寺町三一一六
◆電話　〇一九―六二三―一三四四
◆住職　第一五世　吉田公雄

開創を伝える『祇陀寺本誌』

いまも住民に愛用されている共同井戸「青龍水」。青龍は祇陀寺の山号で、祇陀寺境内の湧水が、その水源になりました。龍と祇陀寺については、創始にまつわる話が伝えられています。

祇陀寺は、久山俊昌和尚により天正八年（一五八〇）に再興されました。俊昌は、それまでの経緯を『祇陀寺本誌』にあらわし、その中で、おおむね次のように伝えています。

鎌倉時代の末ごろ、金沢（石川県）の祇陀寺の開祖である祖継大智大和尚は、中国から帰国して東北を遊歴しており、村で托鉢しつつ、南昌山の岩窟で禅修行をしました。あるとき、永い眠りから覚めたという龍があらわれ、仏法鎮護の神となることを告げ、大智に微物を畢生して、一宇を建て、山門開闢（かいびゃく）のおりに鎮護の証とするよう告げました（一三二〇年）。

そのあと、師僧・大智の遺志を委ねられた光巌長老によって、青龍山港月庵が開かれました（一三六八年）。

南昌山の山根には、青龍をまつる南昌平があります。中世のころ、南昌山の青龍神が風雨を守護するという信仰があり、昔の開山和尚が青龍権現を崇信し、鎮守にしたとみられます。

それから、百数十年。金沢の祇陀寺が焼け、ときの住持・久山俊昌和尚が港月庵を訪ね、南部利直の家臣・河村一夕斎の帰依（開基）を得、諸人の協力を得て復興し、祇陀寺と改号しました。

その後、南部の総領寺として三戸から報恩寺が移るにおよび、当時の住職は、報恩寺から鳳庵存龍大和尚を勧請開山に迎えたものとみられます。

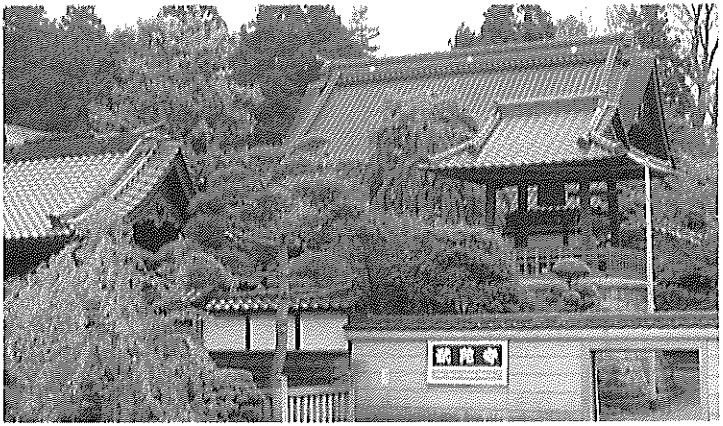
●略図は37ページ参照

開基にまつわる寺宝

祇陀寺の歴代の和尚の中には、久昌庵（快秀）、長松寺（芳天）の開山和尚をはじめ、応物寺（青森県）を再興し、日本初の灯台を建てた八戸生まれの玄梁。藩公の愛妾に薬湯をすすめて病を快癒させ、いま温泉郷になっている上鶴宿一帯を与えられた六世・玄梁。いま茶畑「らかん公園」にある石仏の建立を発願した一四世・天然がいます。飢饉による餓死者を供養する十六羅漢の建立は、孫弟子の泰恩（長松寺）に引き継がれ、艱難辛苦のすえに完成をみました。

祇陀寺も寺の下の他の寺院と同様、何度か火災で焼失しました。現在の本堂は明治二六年に建立され、そのあと山門、庫裏とつづき、鐘楼建立の昭和五年まで、明治一七年の火災から半世紀で今の伽藍がほぼ整い、その後、昭和五二年に位牌堂を建立しています。

貴重な仏物も焼失したとみられますが、いま、客間に使われている板襖（着色板絵）八枚は、かつて花巻城にあったというものです。また、寺宝として、開基にまつわる「龍珠石（含玉石）・龍の鱗・玉」をはじめ、道元禅師の真蹟、源義経写経文、弁慶法師写経文などが伝来しています。



余話　朝八時と夕方五時、祇陀寺の鐘が響くと、今の音色はだれそれ、と近在の人たちは音を聞き分けるという。ガランドウは寺院の伽藍から出た言葉だが、歴史のある寺院空間を、現代の文化に活用し、生かすことを試行してきたという住職。近年、心がけているのは花のある境内。住職は、鐘であれ花であれ文化的な活動であれ、お寺の存在が、現代に生きる人の救い・癒しになるようにしたいと話す。

仏像　馬頭観世音（盛岡…観音四番）、十一面観世音（同八番）

関連記事　「らかん公園」と飢饉と供養塔、盛岡の桜めぐり

「らかん公園」と飢饉と供養塔

僧と民衆の熱意による石仏

盛岡市茶畑の「らかん公園」には二体の石像が並んでいます。高さ一・三六～一・九七メートル、大きな十六羅漢と五智如来です。

かつて、この地には、祇陀寺二四世天然和尚が兼務する祇陀寺の末寺、宗龍寺がありました。天然和尚は、南部藩の大飢饉の餓死者を供養するため、石像仏の建立を発願。孫弟子にあたる長松寺・泰恩和尚がその遺志を受け継いで、一三年の歳月をかけて嘉永二年（一八四九）に完成しました。

石像建立のための寄進は、青森県の下北から、南の仙台領岩谷堂まで、藩を越えて五万八〇五三人に及びました。施主銘に、鍵屋茂兵衛・糸屋治郎兵衛・徳田屋治助らがみられます。

石仏には飯岡山の安山岩、台座には安庭山の花崗岩を使い、原図を描いたのも、石工も、地元の職人。まさしく、郷土の人々の熱い思いを結集したものとなりました。

建造に先立って石仏を試作し、それによって関係者は信仰を深め、決意を固めました。試作の釈迦如来の石像は、いまも長松寺の墓地に建っています。

（らかん公園略図37ページ）

悲惨をきわめた四大飢饉

江戸時代になると、米が財政の基礎とされ、水稲栽培がおし進められました。ところが、冷涼な気候の南部藩では、やませの影響でたびたび凶作・飢饉に襲われました。

とくに「南部藩四大飢饉」といわれる、元禄（一六九五～）、宝暦（一七五五）、天明（一七八三～）、天保（一八三三～）の大凶作は悲惨をきわめました。土用中に霜が降って北風が強い、土用に綿入れを着るほど、とあり、元禄の大凶作のときは平年作の一四万俵が四万俵の収穫にとどまりました。

大飢饉の年には二万数千人から五万人近くの餓死者が出、松尾村では「百穀一粒も実らず、わらびの根葛を掘って身命をつなぐ、草むら、木かげに倒れ伏し、泣き悲しみ、その声山野にひびき、終に飢えて死んでいく」と記されています。

そうした飢饉の年には、城下の寺院（東願寺・永祥院・円光寺・報恩寺）に窮貧小屋が建てられ、あるいは、僧は托鉢をして窮民を救助しました。

藩では富豪から資金の協力を得、備荒貯蓄の制度を設け、幕末近く（一八五六年）には穀蔵を築造。その御蔵（現下町資料館）は、当時の白漆喰壁

のまま、いまも明治橋際に建っています。

しかし、こうした対策も自然災害のまえには非力で、根本的な救済にはほど遠いものでした。（御蔵略図37ページ）

無言の語りべ餓死供養塔

滝沢村鵜飼の滝沢ニュータウンの北側に、高さ一メートル数十センチの四基の古碑があります。三基は、道路整備のとき鵜飼と高屋敷から、そばの柳の木とともに移されました。

「餓死供養塔」「飢饉供養塔」と刻まれたこれらの碑は、一八〇〇～一八五五年に建立。石塔の解説には、「無名の村民によって立てられ、苦難の道を歩んできたことを物語る」とあります。

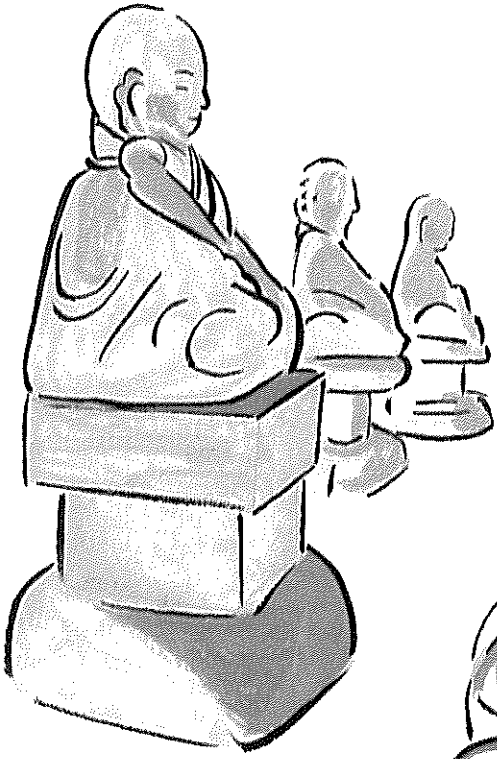
各地に建立された餓死供養塔ですが、お寺の境内に建てたものも多く、現在、盛岡市では半数以上がお寺にあります。

天明の飢饉では、餓死者四九〇人を弔う東願寺の石碑。

東禅寺の「南無地蔵願王」の千人塚。

天保の飢饉のとき御救い小屋で餓死した四八三人を弔う報恩寺の巡礼八角柱餓死供養塔。

ほかに、天昌寺に二基、乙部の如法寺に一基あります。



三〇年ごと開帳の観音さまと由緒ある諸仏

妙法山（みょうほうざん） 千手院（せんじゅいん） 天台宗

◆盛岡市紺屋町一一三四
◆電話　〇一九―六二二―五三三〇
◆住職　第二二世　矢澤亮腹

諸人の心のよりどころ

「寺ノドのお観音さん」と呼ばれ、山門の大きな提灯（ちょうちん）がトレードマークの千手院。厄よけの千手観音をはじめ、火防や商売繁盛など諸人の心のよりどころになっています。

不動明王と毘沙門天（びしゃもんてん）を脇侍（わきじ）とする天台独自の形式をとる千手観音は、開帳が三〇年に一度という秘仏です。古記録は焼失しましたが、藩書上には、春日の作の像で念願により玉城清水の尊体を遷座、とあります。

千手院は、江戸時代前期（一六七七年ごろ）、法輪院（廃寺）の末寺として権少僧都円秀大和尚により開山。当初の小庵から、南部行信公の帰依を得て堂宇を建立し、祈願所となりました。

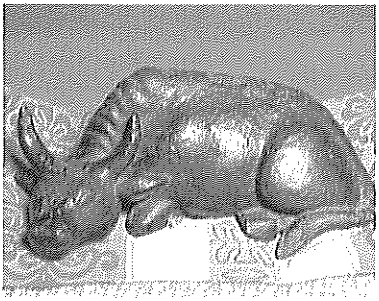
宝物を引き継ぐ

千手院は、旧本寺の法輪院（広福寺）に伝わった仏像・絵など約二〇点を引き継いでいます。その中に、歴代藩主の一代守本尊八躰仏、愛宕山頂太郎坊堂の太郎坊坐像、弁財天坐像などがあり、往時の名刹の宝物をしのばせます。

広福寺はもと紫波町に所在する斯波氏の祈願所でしたが、南部氏の時代になって盛岡の愛宕山に移転。法輪院を号して天台宗の懇録寺院（三〇〇石）となり、水福寺とともに、お城・藩主・領内安泰の祈祷を担っていましたが、明治二年に廃寺となりました。

千手院は、さらに、同じ法輪院の末寺だった護念山西光院（山崎阿弥陀堂）を合併して阿弥陀如来像、聖徳太子像を移管し、阿弥陀如来像は水子供養の本尊として安置しています。西光院は、慈覚大師を開基とする大寺のあとに所在し、市内加賀の古刹と目されたお寺でした。

●略図は37ページ参照



「野田の塩の道」の逸話がある「撫でべご」に交通安全を祈願する人も多い。

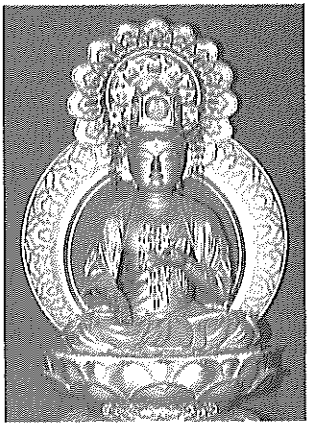
「塩の道」の鉄の牛

仏像とは異なるユニークな像もあります。かつて、必需品の塩は海岸から内陸部へ、険しい北上山地を牛で運搬しました。その「野田の塩の道」にちなんだ鉄製の「撫で牛」です。

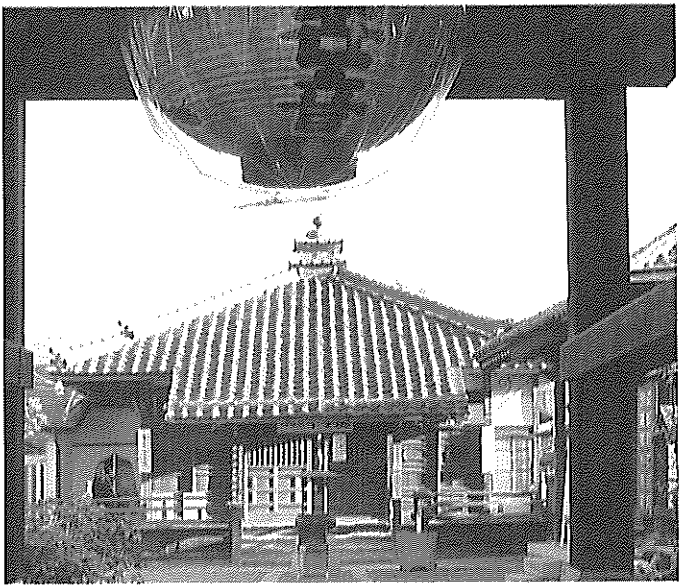
二〇〇年ほど前のこと。背赤の牛がすっかり弱って境内に倒れ込み、牛を追って、「こいつのために塩が全部、中津川で溶けてしまった。ぶっ殺してやる」と野田の牛方が怒鳴ってきました。それを聞いた寓円和尚は「畜生も仏門に助けを求めてきたのだ。どんな牛方にも、ときに追い方の誤りがあるのではないか」と、さとしました。牛方が自分の非を悟って牛をなでたとき、すでに牛はこと切れていました。悲しんだ牛方は、当時の名工・藤田善九郎に頼んで鉄像を造り、千手院に寄贈しました。

憐れみを乞うように頭を地につけた牛の像は、以来、参詣の人々になでられて黒光りを放ち、いまも交通安全を祈願する人が絶えないということです。

もうひとつ、千手院といえば、盛岡の寺院で元祖となった節分会（二月三日）の豆まきがあります。開運と厄祓いの冬の風物詩、そこで使う豆は、魔目、摩滅からきたということです。



南部重直公の守本尊と伝えられる虚空蔵菩薩



仏像　千手観音（盛岡三観音五番）、阿弥陀如来（市文化財・盛岡三観音三〇番）

原敬の墓。中国明代の様式をもつ本堂

福聚山（ふくじゅさん） 大慈寺（だいじじ） 黄檗宗

◆盛岡市大慈寺町五―六
◆電話　〇一九―六二二―四七〇九
◆住職　第二〇世　松居信善

●略図は37ページ参照

藩公の姫君の帰依

共同井戸「青龍水」付近から、長く伸びる塀が途切れると、幅広い石段の上に、お伽話（おとぎばなし）の竜宮城を思わせる山門。市の環境保護地区の「寺ノ下寺院群」の景観を代表するように、大慈寺があります。

大慈寺は、江戸時代前期（一六七二年）、徳信和尚によって開かれました。嗣子のいない伯父の養子として育った徳信は、両親の反対を押して仏門に入門。黄檗に上って修行を積み、盛岡に下向したのちも、出世を願うことなく、ひたすら法をひろめる生活をしました。これを聞いた重信公からの糧料給与も固辞していましたが、ついに、与えられた地に一宇を建立し、大慈寺と号しました。

二代・逸堂和尚になり、行信公の息女（光源院殿貞林賢慧大姉）の帰依を受け、現在の寺地を買収（一七〇一年）して堂塔を建立し、景観が整いました。

本山を模した本堂

年月を経て、明治一七年、当時の下ノ橋刑務所から出火した大火で類焼し、大慈寺のすべてを失いました。末寺の天福院を移築し、仮普請の庫裏でしのいでいた明治二七年、原敬の援助により山門を建立しました。さらに、原敬は、腐朽が著しい本堂・庫裏の改築について住職の願いを快諾し、大正七年に新築再建されました。

黄檗宗は、同じ禅宗の中でも日本化されずに中国の明代（みんだい）の様式を保っている宗派です。それは建物にもみられ、本山の堂舎は萬福寺方式といわれ、他

に類を見ない南中国の近世の寺院建築をそのまま伝えるというものです。大慈寺の本堂は、その萬福寺を模して建立されました。

市の保存建造物になっている山門は揚土門といわれ、土を塗り固めたものです。ちなみに、原宰相の葬儀の際に、この山門を勅使が通ったことから勅使門とも呼ばれました。

大正一三年、あさ夫人が建てた原家位牌堂も、異国の伽藍を思わせます。こうした建物にとどまらず、黄檗宗では経文なども唐音で読むのを本来の姿としています。

境内に建つ原敬の別荘

大慈寺は、「原敬の墓」でもよく知られています。大正一〇年に東京駅頭で刺殺された郷土出身の平民宰相・原敬は、先祖の代に深い縁のあった大慈寺を引き立て、遺言によって大慈寺に葬られました。その墓所は、山門の左手にあり、いまも訪れる人が多く花が絶えません。

また、境内には、あさ夫人から寄贈された原敬の別荘が移築されています。もと鎌倉にあったもので、この簡素な建物で、原首相は多忙な生活の合間にくつろいだといわれ、別荘の室内には「腰越荘」の額が掛けられています。その筆致は、明治から昭和期にかけての政治家で、政友会元老として原内閣を成立させた人物、公爵でもあった西園寺公望によるものです。

仏像・絵　木造十一面観世音立像（盛岡三三観音六番）、紙本着色十一面観世音立像＊、紙本着色涅槃図＊（三件とも市文化財）

歴史資料　寺實短規二七巻＊、寺實短規増補八巻＊（二件とも市文化財）

＊は大慈会所有

関連記事　お盆と舟っこ流し

お盆と舟っこ流し

お盆の由来

正月とならぶ国民的大行事であるお盆。お盆はサンスクリット語の音訳から出たことばで、正しくは「盂蘭盆会（うらぼえ）」といい、「逆さまにつるされた苦しみ」という意味があります。

盆行事の由来によく出されるのが『盂蘭盆経』です。――釈尊の高弟が「餓鬼道」に堕ちて苦しんでいる母を救おうと、釈尊に教えを請うた。釈尊は七月・五日の自恣（じし）（夏の三ヵ月の修行が終わる日）に僧たちに飲食（おんじき）で供養せよと弟子に教え、それによって母は救われた――というものです。

このほかに、古来からのしきたりの影響もあります。中国の道教では、正月・五日を上元、七月・五日を中元、十月・五日を下元としてお祭りをしました。「中元の日」には、目上の人、父母、お年寄りに礼をつくし、先祖を供養する習わしがありました。

日本で初の盂蘭盆会は、六〇六年、推古天皇のときに行われました。それが寺院の行事となり、鎌倉・室町時代になると、古来の祖霊信仰と結びついて庶民に広がりました。こうしたなかで、地方の多くは八月・一～一六日に、都市部では七月・一～一六日のお盆が定着しました。

お盆行事と太田の夜景

古くからのお盆の風習として、各家で仏壇とは別に、精霊を迎えるための棚を作ります。そして、全国的に迎え火、送り火が焚かれ、このとき盛岡では、かぼ火を焚きます。

このほか、新仏があると、灯籠本（とうろうぼん）を立てる地域もあります。家より高く立てた竿のてっぺんに一かたまりの杉の葉をゆわえつけ、夜に、その下の四角な灯籠に灯りを入れるものです。

この時期、盛岡市太田では、夕闇の中にぽつぽつと、ちょうどピラミッドの稜線のように赤や黄の豆電球が光っている光景が見られます。このようにして、その年亡くなった人をしのび、供養する夜景は、古きよき風習を思わせ、情緒があります。

仏典に由来するのは、お盆に行う無縁仏への供物です。また、多くの寺院では、施餓鬼（災難を与える餓鬼に施す法会）が行われます。

（盆おどりは64ページ参照）

慰霊の風物詩「舟っこ流し」

お盆の八月一六日、盛岡の北上川では、伝統の仏事『舟っこ流し（市文化

財）」が行われます。夕顔瀬橋、明治橋付近の川に舟を浮かべ、僧の読経のなかで火を放って流すこの行事は、川の町・盛岡の慰霊の風物詩です。

打ち上げ花火も加わって盛り上がるこの催しは、現在、近くの町内会と寺院（久昌寺・永祥院・天昌寺・東願寺）による協賛会が行います。

そのおこりは、二百七、八十年前、大慈寺の和尚様が南部氏の姫君の命をうけ、川原で川施餓鬼（水死したものの供養）を行ったというもので、いわば官製行事として続きました。

それとは別に、ある年、津志田の売れっ子遊女十数人が溺流にのまれたのを哀れみ、町人たちが位牌と供物を乗せて盛大な舟っこ流しをしました。これが現在の原形といわれています。

藩政の終わりごろ、行事の主体が町民になると、多くの人が集まって供物や灯篭を流して供養しました。川岸には行灯（あんどん）が立ちならんで真昼のように明るく、観音講やら各講中の人々の法号、詠歌が高らかに響いたと記録されています。

明治以降の舟っこ流しは、五穀豊穣を祈り、古くからの水死者や戦没者をふくめ、万霊に回向（えこう）する行事となり、今に続いています。

伝来する幽霊の絵と七福神像

盛香山（せいこうざん） 永泉寺（えいせんじ） 曹洞宗

◆盛岡市大慈寺町八―三三
◆電話 〇一九―六二―二一三九
◆住職 第二二世 石ヶ森道弘

不穏な戦国時代の開山

永泉寺の前に立つと、山門近くの三〇〇歳ちかいケヤキの大樹と「禁葷酒」の石柱が迎えてくれます。ニラやネギなどの香草や酒は遠慮ねがうという禅寺等にみられる標語です。

その昔、永泉寺のあたりは北上川舟航の起点の地として商人や水夫が多く住み、交通の要衝として栄えました。

永泉寺が開創されたのは、天正三年（一五七五）、織田信長が武将との戦いに明け暮れ、近郷では、南部氏が北から力を伸ばしてきた時代です。当時、斯波氏領内にあった源勝寺の末寺として、師僧の源勝寺九世・天室清耽和尚を勧請し、尽室長吞和尚が開山。中野村新山館に一宇を建立しました。開山地に関しては、旧地らしい跡もなく、古くは明治橋を新山舟橋（新山渡し）と呼んだことから、新山は付近一帯を差し、当初から現在地だったとも考えられます。

そのころの教線の広がりは目覚ましく、長吞はさらに聖福寺（西根町）を、師僧の清耽は大松院（盛岡市）ほか二寺を開山。四世・風岩大薫和尚も梁川（梁川小学校地内）に長江寺を開きますが、明治末に永泉寺に併合されています。

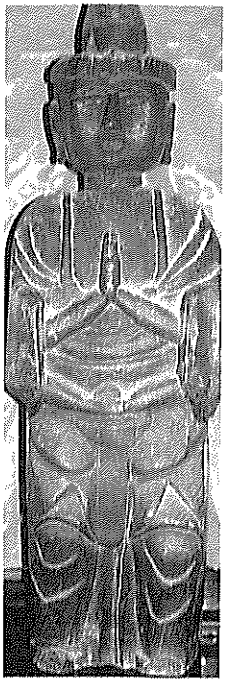
過去に三回火災に遭い、現本堂は明治一五年に建立されました。その二年後、付近一帯をのむ大火があった際、難を逃れたのは不幸中の幸いでした。

●略図は37ページ参照

商業社会に生まれた七福神

永泉寺には「陰」と「陽」の絵と像が伝わっています。

陰のほうは、嫉妬に狂ったもとめ（本妻）が、死後、幽霊となって、おなめ（妾）の首をかむ絵。もうひとつ



瀧ノ上観音と呼ばれる千手観音。力強く素朴な室町後期の像。

は「中陰」の過程を描いた九相図。これは、小野小町ともいわれる美貌の女性が死没し、遺体が自然の中で白骨になるまでを描いた、これもまた、すさまじい絵です。住職は、「体が自然に朽ち果てる期間が四九日（中陰）。その間、死者の魂はこの世にあるとみて、生者は供養をするのです」と話します。

陽のほうでは、明治一〇年、檀家の骨董屋を通じて入手した左甚五郎作と伝えられる七福神があります。

七福神信仰は、室町の末、商業社会が確立し始めたころ「七難即滅、七福即生」の経典の言葉に基づき、像が造られたことに始まりますが、水泉寺の七福神にも商売繁盛の逸話があります。

石鳥谷の酒造家が、霊夢により、像を借りて自宅に勧請したところ、銘酒の醸造に成功。酒名を七福神とした、というものです。

平成二年に改修したお堂内には、七福神と並んで滝ノ上観音がまつられ、こちらの像にも逸話があります。以前、旧中野村白滝（現岩山の裏側の川目地内）滝上御堂にありましたが、明治初年の山火事で類焼。観音さまも灰になったとみていたところ、翌朝、水泉寺の山門脇に鎮座していたので、人々は、みずから飛んで水泉寺に避難したといって崇めたということです。

余話　第二次世界大戦直後、お寺を遊撃演説に開放したときのこと。弁天様が消え、六福神になってしまった。紅一点を欠いては福の神様たちもさびしかろうといって、昭和二七年、篤志家が二代目弁天様を寄贈。住職は、弁天様（女）を盗んだのは男のしわざか？　二代目は戦後の女性だから、やや大振りな像になった、とユーモアたっぷりに話す。

仏像・絵　十六羅漢図一六幅（市文化財）、滝ノ上観音（盛岡三十三観音七番）

関連記事　盛岡の羅漢さま

切支丹の悲話を伝え、建造物にも歴史の重み

紫雲山（しうんざん） 円光寺（えんこうじ）

浄土宗

◆盛岡市南大通三―一一―四九
◆電話　〇一九―六五四―二六〇一
◆住職　第三二世　加藤光順

●略図は37ページ参照

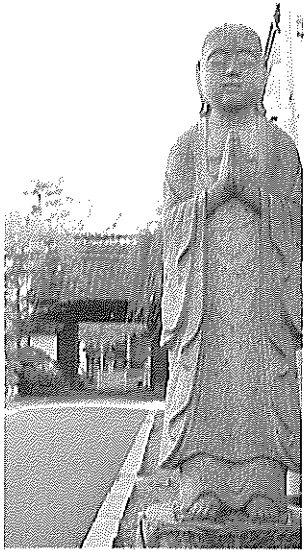
鐘楼にかかる三代目の鐘

明治六年まで使われていた舟橋の跡と明治橋わきの御蔵（現下町資料館）。藩政のころ、城下の奥州街道の玄関口を示す二つの遺跡は、市の文化財になっています。その御蔵の裏手が円光寺の境内になっています。

円光寺は、江戸時代前期（一六六一～七二年）、光台寺三世・生蓮社良往上人が開山。それから約三〇年（一六八八～一七〇二年）、八世・良観上人（中興）が本堂を建立し、引き続き山門、梵鐘（初代小泉仁左衛門作）を備えると、「円光寺の晩鐘」として、舟橋八景に数えられました。

いまも山門から境内に入ると、まず、そびえるような鐘楼が目にとまります。ただ、現在のものは往年の名鐘ではなく、三代目です。

初代の鐘は、幕末、軍用に供した光台寺の鐘の代替として移設された後、第二次世界大戦のおりに、円光寺の二代目の鐘とともに供出しました。昭和六二年、三代目を鋳造する際に、その往年の名鐘をしのんで「舟橋八景晩鐘聲――」と刻銘されました。



参道と築約300年の山門。山門を入って右手にキリシタン弾圧を伝える首塚がある。

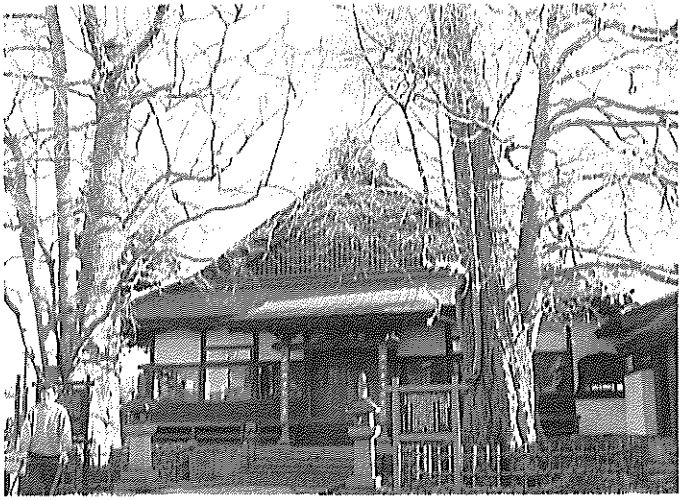
三〇〇年を経た桂と本堂

本堂の前に、一対の巨樹があります。高さ二十余メートル、夫婦カツラと呼ばれる雌木と雄木で、樹齢およそ三〇〇年。円光寺とともに星霜を重ねたこの樹は、桜より一足早く花をつけ、山寺の紫雲にふさわしく、けむるような情景を見せてくれます。

本堂、山門ともに約二〇〇年を経た建物で、盛岡市の保存建造物になっています。

現住職になって内陣を整えたとき、

長年のロウソクと線香の煤を磨き落とすと、脇板から絵が浮き出てきました。かすかに花らしい図柄が見える天井も、年月の重さを伝えています。そして、火災に遭うことのなかった円光寺には、古像の本尊をはじめ、多くの貴重な仏像が伝来しています。



首塚と生目観音の伝承

境内に、観音堂と並び建つ首塚。そこには希有な伝承があります。

江戸時代前期（一六七五年）、キリシタンとされた材木商が小鷹の刑場で斬首されました。奥女中の娘・蓮子は悲嘆し、暗夜、父親のさらし首を盗み出し、寺々を回りますが、門は閉ざされていました。幸い、円光寺のくぐり戸が開いていたので、生首の回向を願すると、僧は厳粛覚悟で受けてくれました。夜が明けて蓮子が白首をすると、おとがめとは逆に、藩主の行信公はその孝心をほめ、やがて側室となり、世子の信恩公が誕生しました。

円光寺には首塚が建てられ、五〇石を給付。お蓮の方は父の菩提のために観音堂を建立し、平景清の墓所、日向国（宮崎県）延岡にあった十一面観音像（別名、生目観音）を遷座したと伝えられています。

また、後年、お蓮の方の子孫から寄贈されたという油絵「少女愛犬図」（安田田鵬作）が伝わっています。

円光寺には、藩政時代の剣豪たちの墓があり、近代では、昭和二二年没の郷土の偉人、海軍大将で元首相の米内光政の墓があります。

また、画家の深沢省三・紅子夫妻の菩提寺で、その縁を示すように、両氏の絵が大書院を飾っています。

仏像　木造十一面観音立像（別名生目観音・市文化財・盛岡三三観音二一番）

樹木　夫婦カツラ（市天然記念物）

関連記事　盛岡の羅漢さま、「らかん公園」と飢饉と供養塔、お地蔵さまの信仰とご利益

病の快癒に奉安された豆腐買地蔵尊

湯殿山（ゆどのさん） 連正寺（れんしょうじ）

真言宗智山派

◆盛岡市南大通二丁目二一一三
◆電話 〇一九—六二三—八九六〇
◆住職 第七世 帯刀大東

明治一二年に仏堂建立

寺の下の中でも寺院の密集する個所に連正寺があります。門柱に「湯殿山祈願所・真言宗」とあり、弘法大師ゆかりの四国八八ヵ所にならった陸中八八ヵ所に、その名をつらねています。

連正寺は、鉄門海上人が開山。本寺の注連寺（山形県朝日村）で即身仏（ミイラ）となったことで知られる鉄門海は、江戸中期（一八二〇年）に来盛して布教したとされ、それを引き継いで、明治一二年の仏堂建立になったとみられます。

明治一七年の大火で一切を焼失したため詳細は不明ですが、ほぼ同縁起をもつ金剛珠院をみると、当時の信仰をうかがうことができます。

本寺に何代も生えてきた桜がありますが、本尊の大日如来は、その初代木を彫ったもので、一二年に一回、湯殿山開山の正年（注）に開帳されます。

伝来する仏像等に、河南の商人らの寄進による豆腐買地蔵尊、稲荷社、弘法大師像、奉額があります。四〇〇年ぐらい前の作とみられる豆腐買地蔵は、明日をもしれない重病人が豆腐を食べてもちなおし、全快を喜んで奉安したという伝えがあります。同じくらい古像とみられる不動明王像は、その昔、今のらかん公園付近に湧水があり、そばの滝にまつってあったといわれますが、どういう経緯で連正寺に安置されたのか、定かではありません。

●略図は37ページ参照

関連記事 お地蔵さまの信仰とご利益

「内丸のお湯殿山」と呼ばれる祈願寺

湯殿山 金剛珠院

真言宗智山派

◆盛岡市内丸一七―一八
◆電話 〇一九―六二二―〇四二一
◆住職 第五世 森本政信

縁日に行う護摩祈祷

医大病院の東側にある金剛珠院は、『内丸のお湯殿山』とも呼ばれる真言宗の祈願のお寺です。

真言とは、原語（仏の言葉）で、『祈願を唱える文句（呪文）』のことで、縁日の六月八日、一二月八日には護摩祈祷を行っています。

本尊は、一二年ごとの丑年に開帳する金剛界胎蔵界両部大日如来で、脇仏に弘法大師、興教大師、不動明王、子安地蔵尊、八体仏をまつっています。

本山の注連寺は出羽三山（山形県）の修行地にある名刹で、江戸時代中ごろ（一八二九年）、信者が見守るなかなった鉄門海上人を安置しています。即身仏になる一〇年ほど前、鉄門海上人が盛岡に赴いて布教・説導を行い、それが金剛珠院を開く礎となりました。

「我に祈願するものに対しては諸願を満足せしめん」の言葉を残し即身仏と

●略図は37ページ参照

明治初期、二僧（佐藤長全・清岳）が紫波・岩手・碑貫の各地を回って効験を説き、年々、先達となって出羽三山に参詣したほか、講中をつくり、自ら加持祈祷を行いました。

明治一三年、仮本堂から現在地に移転して仏堂を建て、現寺号で創建されました。その後、平成四年に仏堂を修復し、庫裏を新築して現在に至っています。同じ山号の連正寺も注連寺の末寺で、金剛珠院とともに陸中八八ヵ所（四国のお遍路のうつし）に挙げられています。

仏像・絵 両界大日如来坐像、紙本着色如来荒神曼陀羅（二件とも市文化財）

ご利益をつかさどる繁華街近くの「お不動さん」

斗米山（とつこべさん） 長福院（ちょうふくいん）

真言宗豊山派

◆盛岡市中ノ橋通二丁目三一一七
◆電話　〇一九一六五一一〇七八
◆住職　第一〇世　熊谷妙香

中央公民館に展示の愛染明王

繁華街の近く、肴町から中ノ橋通りを突っ切ったところに、門に立派な仁王像のある長福院があります。藩政のころ、城下の葺手町（屋根ふき業者の町）に建立され、いまも変わりなく「お不動さん」と親しまれ、気軽に立ち寄ってお参りする姿がみられます。

なお、この仁王さまは、もと南部家菩提寺の聖寿禅寺にあったもので、明治はじめ廃仏毀釈の難を受けた際に、この場所に移されました。

長福院は、年代は不詳ですが、藩政時代に、城の鬼門鎮護にあたった永福寺の末寺として開山しました。

本尊の不動明王像は、三〇〇余年前に比叡山から南部家の守護仏として奉安されたと伝えられています。今も、八日には開帳し、毎月三日と、八日の縁日には護摩法要を修養しています。

その昔から祈願寺として、具体的で身近なご利益をつかさどってきた長福院には、それぞれの願いに対応する仏像が伝来しています。火防の不動明王。商売繁盛の斗米稲荷。恋愛・愛情の愛染明王。愛染明王は金剛菩薩の化身とされ、真言宗では愛欲貪染をそのまま浄菩提心とする仏像として、特に重視されます。

この像にちなんで境内のカツラは「愛染桂」と呼ばれ、往年のヒット映画『愛染かつら』の記念撮影が行われました。桃山時代の作とみられる愛染明王像は、現在、盛岡市中央公民館に常設展示されています。

●略図は37ページ参照

仏像　木造愛染明王坐像（市文化財）

祈願寺として十二支の諸仏をまつる

感応山 神通寺 三明院

本山修験宗

◆盛岡市神明町一一
◆電話 〇一九―六五四―二二〇九
◆住職 第二一世 平井政衛

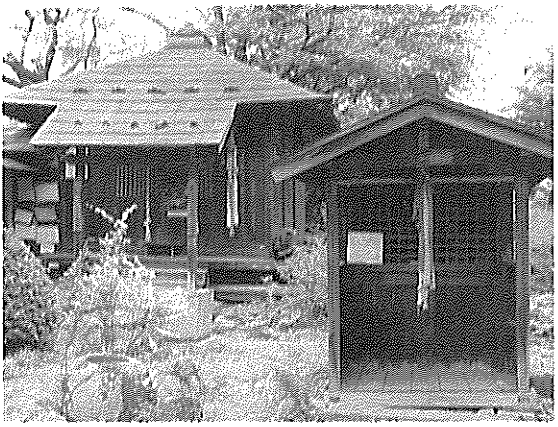
尊像をいだいて修験の道へ

三明院の主旨は、山そのものを仏として修行に励み、山伏姿に象徴される修験です。

四代目・法導院が三戸から盛岡に入り、江戸時代前期（一六七一年）、現在地に感応山神通寺を開山。南部家の信仰を得て、祈願職をつとめました。

それから約五〇年（一七一九年）、大火で堂宇を焼失しますが、同年、聖護院ノ宮忠誉法親王から三明院の院号を授与され、二五年後（一七五三年）仮本堂を復興して今に至っています。

仏像だけは焼失をまぬがれました。三明院の本尊で、辰・巳年の守本尊とされる普賢延命菩薩は、運慶と鋳師珍華に造らせた源頼朝の護持仏と伝えられ、のちに足利尊氏がこれを一代守本尊とし、効験を得たとされます。さらに二百数十年後、源氏の目臣が奉持して鎌倉を出、修験の道に入った子孫とともに移動して京都から北国を回り、ここに至ったということです。



●略図は37ページ参照

真言八祖画像は、明治四四年、帝室博物館に買い上げとなりました。

ほかにも、祈願寺として十二支の諸仏、宗祖の神変大菩薩（役の行者）の尊像等々を祀っています。また、盛岡八幡宮の山蔭の土中から出現した「山蔭の観音」は盛岡三三観音の札所、本堂に安置されている弘法大師像は、陸中八八ヵ所の札所（五九番）となっていることから、ゆかりの仏像に参詣者が訪れます。

仏像 山蔭の観音（盛岡……観音……番）

関連記事 修験と山岳信仰

旧馬町にある牛馬守護・交通安全の祈願所

亀慶山（きけいざん）城南寺（じょうなんじ）　峯壽院（ほうじゅいん）

本山修験宗

◆盛岡市清水町一―八
◆電話　〇一九―六二―二四一九
◆管理者　伊藤吉彦

盛岡三三観音の一番札所

町名変更の前は「馬町」といった、むかし馬市が開かれた地に峯壽院（峰寿院）があります。ふつう「馬頭観世音」と呼ばれ、牛馬守護の霊仏として崇められました。

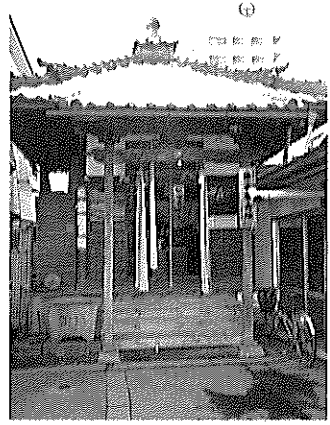
馬頭観世音の源は、もと天台宗の近江国（滋賀県）の園城寺。今の栃木県を経て奥州に入り、新渡戸神酒之進（新渡戸仙岳の祖）が法明坊と号して祀っているとき、藩主・信直公の信仰あつく、峰寿法印の称を授与されました。江戸時代前期（一六六三年）、旧地の神貫郡里川口（現花巻市）から現在地に移って峰寿院と改号。以来、南部領内の牛馬安全守護の祈願所として人々に知られ、盛岡三三観音が設定された際、一番札所となりました。

馬頭観世音は、観音さまでは唯一、怒りの表情をし、頭に馬頭をのせています。本来の功徳（くどく）は、馬が草をむさぼるように、人々のあらゆる苦悩を食い尽くし、断ち切るとされます。その慈悲はすべての生きものに及ぶことから、大事な牛馬や、交通安全の守護仏として信仰されました。

明治一七年、河南の大火で観音堂を焼失してから仮堂でしのいでいましたが、大正一二年、新渡戸仙岳らの尽力でお堂を再建しました。

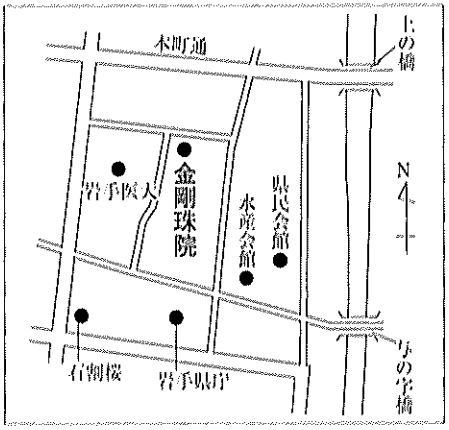
いまも毎年、七月一八、一九日には夏祭りを、一月一八、一九日にはお年越し祭りが行われています。

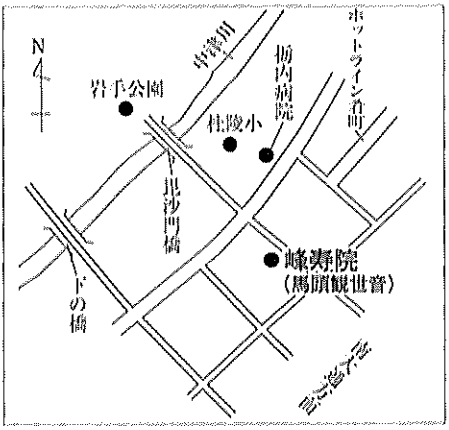
●略図は37ページ参照

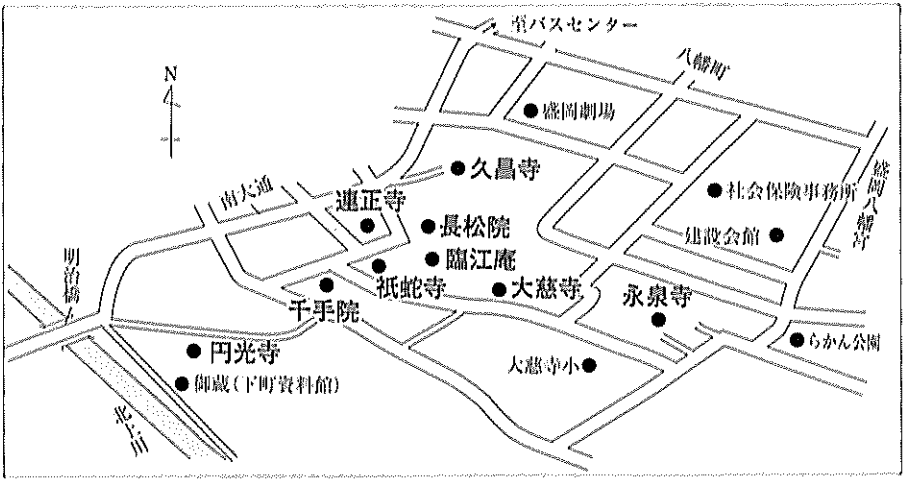


仏像　馬頭観世音（盛岡三三観音一番）

N
県公会堂
盛岡市役所
中津川
三明院
長福院
啄木・賢治青春館(旧九十銀行)
ホテルサンオーボン
←盛岡駅
大通
岩手公園
中三
茶屋町


上の橋
本町通
金剛珠院
岩手医大
県民会館
永福会館
N
石割桜
岩手県庁
寺の宇橋


N
中津川
柳内病院
ホットライン盛岡
岩手公園
桂陵小
下出沙門橋
峰寿院
(馬頭観世音)
下の橋
北上川


N
盛バスセンター
八幡町
盛岡劇場
久昌寺
南大通
蓮正寺
長松院
臨江庵
社会保険事務所
建設会館
盛岡八幡宮
明治橋
祇蛇寺
大慈寺
千手院
永泉寺
円光寺
御蔵(下町貴料館)
大慈寺小
らかん公園
北上川

境内を子らの園地に保育園を設置

東中山（とうちゅうざん） 遠光寺（おんこうじ） 日蓮宗

◆盛岡市山王町一―一六三
◆電話　〇一九―六五一―四七一七
◆住職　第四世　上原禎雄

前住職の布教活動

中ノ橋通りを東進し、盛岡八幡宮境内に建つ「さくら会館」を目印に、道路の反対側を見ると、遠光寺の標石があります。通りからは見えませんが、そこから約五〇メートル奥が境内。建物に挟まれた参道は、乗用車一台がやっと通るくらいの道幅です。

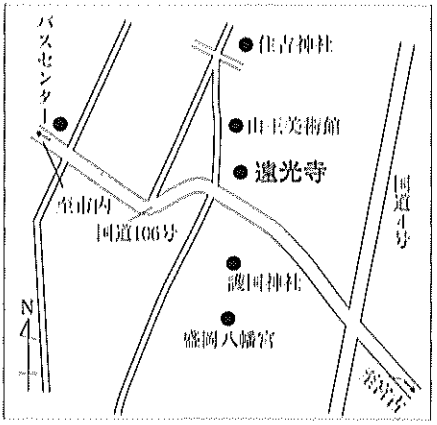
開山した大正末ごろは、付近に民家はなく、測候所（地方気象台）のあるこんもりと茂った松山を背に、梨畑の中に堂宇があり、八幡宮の境内が見わたせる閑静な地だったといいます。

遠光寺は、千葉県市川市の法華経寺に起源をもつお寺です。

大正一二年、八幡町の沢田氏から寄進された現在地に、それまで法華経寺内にあった正善坊を移転建立し、その際、寺号を遠光寺とし、正中山から現山号に改めました。開山は、法華経寺大荒行堂伝師布施日健（ふせにっけん）上人。

その経緯を平易にいうと、法華経寺で修行していた前住職が日健に従って東北に下り、盛岡にあった信仰拠点・日蓮宗盛岡教会所に足を止め、そこを軸に布教に奔走し、道場として現在の遠光寺を開いたものです。

前住職の二世・上原教秀上人は、岩手県内はもとより、他県にも足を伸ばして熱心に布教活動をしました。昭和一二年に玉山村に妙光寺を、さらに青森県三戸町に経王寺を開山。この二寺は遠光寺の末寺になっています。



五〇年後の新本堂

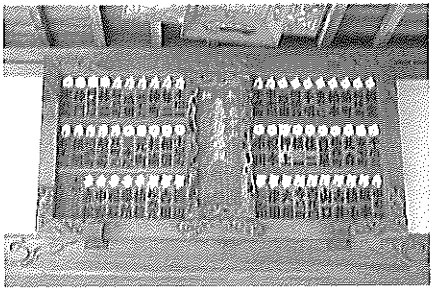
細い参道から境内に入ると、子どもを守る神様の千代子安稲荷社と無縁仏の塔があります。

江戸の千代田城にあった千代子安稲荷社は、明治の神仏分離令で法華経寺

に移されたのち、昭和五年に遠光寺に遷座しました。無縁仏の塔は、市内で参詣する人のない無縁墓石一〇〇余を集め、その霊を弔っているものです。

遠光寺の本堂は、参道から少し離れて位置しているので、一般とやや異なる感じがあります。それというのも、敷地の多くを子どもの保育施設に使ったことによります。

戦後すぐのころ、地区の児童遊園として境内を開放すると同時に、カギッコたちの託児を実施。それを継承し、児童福祉法による保育園を設置しました。



本堂正面に掲げる奉納額

かつて隣接地には市立の母子寮がありました。それが移転した跡地に、昭和四六年、老朽化していた開山当時の堂宇を取り壊し、念願の本格的な本堂を建立し、現在に至っています。

余録　保育所（託児所）は、大正から昭和初期のころ、保育に欠ける子を民間篤志家が世話をしたり、お寺を開放して行ったのが始まり。農繁期の季節託児所が多かったが、県内初の常設保育所（児童福祉施設）は、昭和五年に清蓮院が開設したアケボノ保育園（盛岡市愛宕町）。職場の託児所はこれより早く、明治四二年に小岩井農場が開設。現在、盛岡市内二三の私立保育園のうち、八園はお寺がベースとなって開設されている。

社会事業　山王保育園、第一山王保育園（社会福祉法人）

地域をあげて「酒買さん」の例祭

水養山（すいようざん） 永祥院（えいしょういん） 曹洞宗

◆盛岡市材木町四―一〇
◆電話　〇一九―六二二―四六八四
◆住職　第二六世　遠藤勝巳

滝沢村鵜飼に開山

材木町商店街と中央通のちょうど中間、市街地の近くにゆったりと構える永祥院があります。市の環境保護地区になっている境内付近は、街のオアシスといった風情があります。

永祥院は、法光寺（青森県三戸郡名久井村）一〇世・瀾室存雲大和尚により、滝沢村鵜飼の地に開山。孫右衛門をはじめ村の有力者とともに一寺を建立し、元和九年（一六二三年）に没しました。二世・守室玄秀の代になり、城下町建設が進む盛岡の現在地に移転（一六二四～一六四三）しました。

そのとき、藩は報恩寺の支配下に置こうとしますが、命に服しなかったので拝禄不可となりました。

永祥院は江戸時代中期（一七七八年）と、大正元年の二回火災に遭い、行基大師作とされる盧舎那仏（三・三メートル余）をはじめ仏像等を焼失。現在の本堂は、火災後の大正一五年に再建されたものです。

また、平成一二年には、老朽化した山門が改築されました。

住民をつなぐ神仏

藩制のころ、城下の人々を脅かしたのは大火と水害でした。幕末期の大火（一八六五年）の際に材木町が類焼をまぬがれたのは、岩鷲山（岩手山）大権現のご加護だとして、住人は岩手山を望む夕顔瀬橋の中央に高さ三メートルの御神灯を奉献しました。いま御神灯は橋のたもとにあり、橋上には、代わりのミニチュアが置かれています。

昭和三〇年代になり、岩手山神社は、祭礼ごと材木町から中央通に移転になりました。その後、永祥院の酒買地蔵

●略図は41ページ参照

お堂を開扉し「酒買さん」の祭りがはじまる

尊が注目されるようになり、現在、「酒買さん」の例祭は、地域をあげての行事となっています。

酒買地蔵尊と商売繁盛

酒買地蔵尊は、今から二〇〇年ほど前、材木町の大店の酒屋が寄進したもので、次のような伝説があります。

材木町のある酒屋に、よく買いに来る小僧がいました。いつも酒樽を返さないので、あるとき酒屋は小槌で小僧の眉間をなぐりつけ、よろよろ帰る小僧をつけて行くと、永祥院のお堂のところで姿が見えなくなりました。お堂の下に酒樽がころがっていますが、和尚にそんな小僧はいないといわれ、ふと見ると、地蔵の顔に傷がありました。後悔した酒屋は、以来、お地蔵さんに酒を供え、商売に励んで大繁盛しました。

いつとはなしにこの話が人々に広まり、この地蔵尊は商売繁盛の守り本尊として多くの信仰を集めるようになりました。

初めは銅製の地蔵尊でしたが、盗難に遭い、現存するのは後継の像です。

余話　近年、永祥院付近にも高層ビルやマンションが建ち並ぶ。街が都市化するほど、〝ふるさとの風景〟がお寺に凝縮されていく。住職は、出勤前に墓参をする人、現代的ファッションの若者がお年寄りの手をひいて歩く姿に、寺は多様なかたちで人を結ぶ場であることを感じるという。

仏像　酒買地蔵尊（市文化財）、清水観世音（別称・幸田観世音・盛岡三三観音一四番）

関連記事　お盆と舟っこ流し、お寺の祭り・裸まいり、お地蔵さまの信仰とご利益、「らかん公園」と飢饉と供養塔

お寺の祭り・裸まいり

○「よ市」のまちの酒買さん・材木町

七月下旬、「よ市」でにぎわう材木町の通りに、突然、特大の地蔵さまが出現します。これは、永祥院の「酒買地蔵尊」の縁日の、いわば看板です。上日にわたって住民あげての祭りが繰り広げられ、「酒買」にちなんで盛岡の清酒四銘柄も祭りに参加します。

自慢のひとつは、担ぎ手が〝メシより好き〟という大神輿。古くから奥羽街道・秋田街道筋で栄えてきた商人町の心意気がほとばしります。

また、冬には、この「酒買さん」に裸参りが奉納されます。

○炭つけの奇祭・實相寺

矢巾町の實相寺には、「せあどたき（祭灯焚き）」、別称「炭つけ祭り」が伝承されています。焼観音（聖観音）のお年越しの日（現在は二月第一土曜日）、場所は寺の裏手にある観音堂の境内。観音さまに見立てた二本の杉の木を立て、周囲に豆がらを敷き、さらに三～四メートル積み上げた杉の枝に火を放ちます。こうして、昔、付近に大火があったとき身代わりになって延焼を止めた観音さまをまつります。クライマックスは、燃え残った炭をだれ彼かまわず顔や手に塗りつけ、お互いの無病息災を祈る場面。「炭つけ祭り」といわれるゆえんです。

○地域の広場として・不退院

お寺の祭りでは比類ないにぎわいをみせる虚空蔵さん（千日堂不退院）の縁日は、七月一、二、一三日。五〇軒以上の屋台が並び、境内に出現したステージでは、町内の婦人たちが晴れの衣装で師りの披露。幾重にもできる盆師りの輪。祭りにも、下町らしいなつかしさと人情味がただよいます。虚空蔵菩薩は、十三仏のひとつで、丑・寅生まれの一代守本尊。例年、三割ほどは新参者で、この日のために住職がしたためる「案内はがき」が縁の下の大きな力になっているようです。

厳寒期に行われる裸参り

厳寒期に雪中を駆けたり、水をかけたり、大勢で押し合ったりと、各地に伝わる「裸祭り」は動的です。同じ流れをもちながら、裸参りは対照的に静的な緊張感があります。

沐浴で心身を清めた若者たちが注連を身につけ、採物を手に、素足にわらじの姿で、ゆっくりと大地を踏みながら堂社に祈願する――裸参りはこのように行われます。

盛岡市では、教浄寺・一月一四日。盛岡八幡宮・一月一五日。桜山神社・一月一

六日。雫石町では一月第三日曜日に三社座神社から永昌寺まで。西根町では、女性の荒行で知られる平笠裸参りが一月八日に行われます。

○もとになった仏教の寒行

裸祭りは、旧年のけがれをはらって正月を迎えるという古い民俗信仰のひとつです。それが古く格式ある寺院の年頭行事に結びついて広まりました。正月の修（しゅう）正（しょう）会で、僧侶が仏に罪過を懺悔（さんげ）して罪を消し、天下太平、兆民快楽（けらく）を祈るとき、心ある人が呼応（こおう）して行をしたというものです。

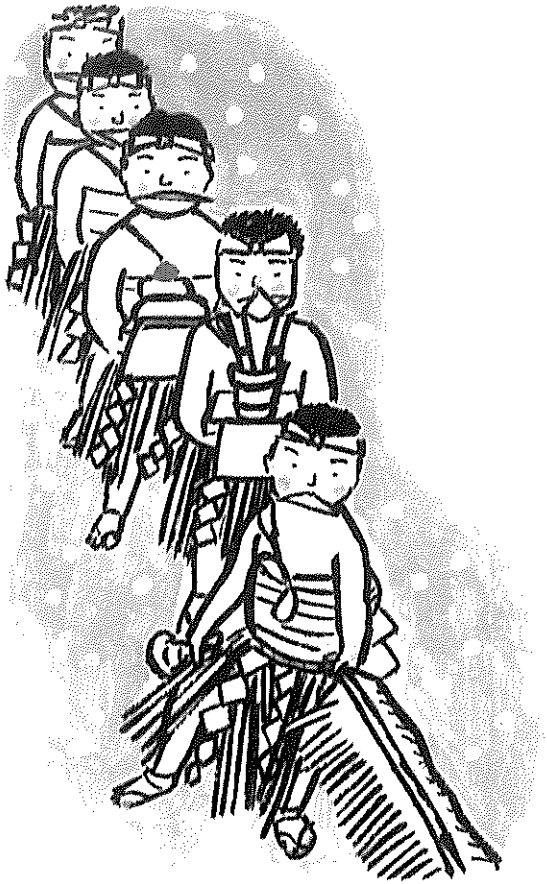
明治の裸参りの記録に、もと真言宗、日蓮宗などの行者の寒行に起因し、古くより熱心者の間で行われ、盛岡では主に教浄寺のお阿弥陀さまだったが近年は八幡宮が多数、とあります。

○はじまりは教浄寺から

盛岡の裸参りの始まりは、教浄寺とされます。藩政のころ、教浄寺の本尊・お阿弥陀さまを年越祭に開帳すると、貴賤が群集して盛岡一のにぎわいをみせ、熱心な信者たちが裸参りをしました。江戸時代後期は民間の阿弥陀崇拝は高まったときでもあります。

明治維新で中断し、裸参りが復活すると、目的が戦勝祈願に変わり、盛岡八幡宮が主になりました。

現在、盛岡の裸参りの主な担い手は、南部火消の心意気といなせな気風を受け継ぐ地区消防団。そこに一般の若者たちが自発的に参加し、伝統を引き継いでいます。



宮沢賢治の遺志、経本発行にかかわった若き住職

名字山（みょうじざん） 本正寺（ほんしょうじ） 法華宗

◆盛岡市材木町七―一
◆電話　〇一九―六二三―七九〇八
◆住職　第二二世　熊谷日恵

異体同心の力で開山

材木町通りの光原社に隣接し、北上川のほうに少し奥まって建つ本正寺。昭和一二年、開創五〇周年記念に建立された参道の碑に、開山の縁起が刻印されています。

純導院日慈（じゅんどういんにちじ）上人（京都本能寺、尼崎本興寺、両本山一〇六世）が、いまの秋田県鹿角市に布教で滞在のとき、南部藩の中心地である盛岡に道場がないことを憂い、法堂を建てるよう委嘱。信徒は少数ながら、異体同心、万難を排して明治二一年秋に精舎を完成しました。開堂の導師は寺島日諒上人。

五〇周年を前にした昭和八年、本堂の前に、当時としては斬新な発想による納骨舎利大宝塔が竣工。七世・松本日宗上人が住職のときです。

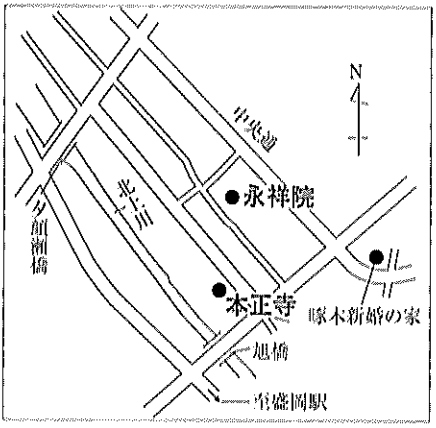
賢治の「法華経」の校正者

日宗上人が盛岡在職中に、宮沢賢治が世を去りました。死の直前、賢治は国訳の法華経を千部印刷して知己友人に分けることを遺言。賢治の父親がそれを実行しようというとき、校正には、若いのにとてもまじめな日宗という坊さんがいい、と紹介した人がいました。

この話を受けた日宗は、「一世一代の仕事、喜んでお引き受けいたします。一所懸命やります」と快諾。赤い表紙の『国訳妙法蓮華経』が、昭和九年六月に発行されました。

本には、二つ誤植がありました。黄金（こがねいろ）＝黄黄（きいろきいろ）、邪見（じゃけん）＝雅見（しゅけん）で、人々はたったの二つと精度の高さに驚きますが、日宗は宮沢家を訪れて「汗を流してざんげしています」と、おわびしたということです。

その後、日宗は香川県丸亀市の本照寺に転住し、法華宗教学部長を務めました。



納骨堂を建立し、賢治の「法華経」の校正者でもある在りし日の日宗上人

宿縁を思わせる立地

材木町の法華寺（ほっけじ）と呼ばれる本正寺の後ろを流れる北上川。盛岡一〇〇景にあげられ河岸の材木町裏石組三六〇メートル、川面の向こうにそびえる岩手山、夕顔瀬橋、旭橋。これらは盛岡を代表する景観にあげられています。

こうした情感あふれる眺めとは裏腹に、三〇年ほど前、近くで建築工事があったとき、人骨が出土。この地域一帯が九五〇年ほど前の「前九年の役」の古戦場跡にあたることから、その関連が頭をよぎったという熊谷住職は、本正寺の立地もそうした菩提の追善供養の宿縁があるように思える、と話します。

余話　本正寺に着任して半世紀以上という住職は、本山から中興号を授与。さらに権大僧正に叙任、大本山本興寺長老に補任され、「日恵」を名乗る。長年にわたって保護司を務め、藍綬褒章受章。僧衣の姿で保護対象者宅を訪ねたとき、近所の人に「葬式ですか？」と聞かれて困ったこともあるという。

関連記事　宮沢賢治の信仰

明治はじめ請来の由緒ある仏像

十劫山（じゅっこうざん） 正覚寺（しょうがくじ） 浄土宗

◆盛岡市上田二丁目五―一二
◆電話　〇一九―六五二―六七〇二
◆住職　第二六世　柴内興僧

本堂に残る盛岡城の古材

正覚寺は、上田の商店街からバイパス側に少し引っ込んだ場所にあります。現在の上田は文教地区になっていますが、明治はじめに学制ができるころ、仁王小学校や桜城小学校よりも早く、正覚寺に「上田小学校」の看板があり、子どもらを教えていたということです。

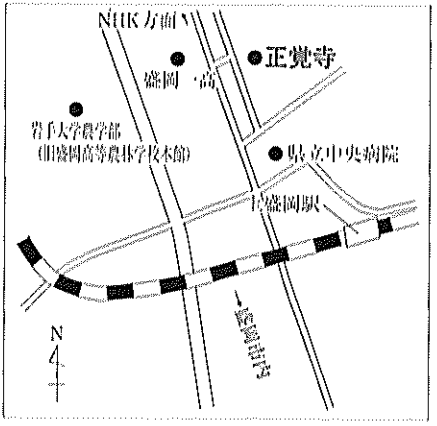
上田地域は、城下町盛岡の奥州街道の北口にあたります。城下町建設のとき、その防衛のため同心（足軽）町になりました。正覚寺は、城下町建設が進んでいた時代（一六一六年）、南部彦七郎晴政公（開基）の領地を譲り受け、念誉天竜大和尚によって開かれました。

幕末期の「御領内寺院鑑」によると、藩主への年頭のごあいさつで、本寺・大泉寺の役寺をつとめています。

そのころ町内の火災で類焼。本堂の再建（一八六四年）のときに盛岡城の建物の古材が使われました。お城にかかわる木材で、唯一現存するのが正覚寺に使われたものとみられています。

廃仏毀釈の嵐の中で

正覚寺には、廃仏毀釈の難をのがれた由緒ある仏像があります。明治になって神仏分離令が発令されると、仏教を排斥し、仏堂や仏像を壊す動きが全国に広がりました。そのころ、津田倫応大和尚と信徒が力を合わせ、貴重な仏像を正覚寺に請来しました。



・阿弥陀如来像

明治に廃寺となった、盛岡藩の天台宗の惣禄だった愛宕山法輪院広福寺にあった像です。阿弥陀如来像は全高およそ二メートル。江戸中期、京都の大仏師の手による密教系の天台宗ゆかりの仏像です。

慈悲相にすぐれた閻引地蔵
（世不見地蔵）

志和稲荷の本尊だった汗掻観音

・大日如来像

盛岡城内に勧請された三社のひとつ大日堂のご本尊が、この大日如来像。金蒔絵と南部家の紋のある豪華な宮殿が付いています。熱心な密教信者だった南部重信公がこの仏像を加賀野の妙泉寺（真言宗）に遷座すると、歴代藩主のみならず、霊験あらたかだとして大勢の庶民が参詣しました。

妙泉寺は廃寺となりますが、現在、一帯は「妙泉寺地区」として盛岡市の環境保護地区になり、往時をしのぶように大日堂蟻塔庵があります。

・聖観音立像

顔から汗が流れるように見えるので「汗掻観音」ともいわれる高さ五二センチの像。桃山時代ころの作とみられる美しい彫りの聖観音立像は、志和稲荷神社のご本尊として崇敬され、秘仏とされていました。

ほかにも、茨城県笠間の閻引地蔵尊とともに知られる、慈悲相にすぐれた「世不見地蔵尊」、大迫城主の兜神といわれる無生観音が伝わっています。

余話　由号にある「劫」は、仏教的数値観で、とてつもなく長い時間をさす。億劫は、悠久すぎてささいなことに着手する気にならないことからきたもの。青年時代、一年間米国に滞在し、英語で説法したという住職。仏教は自然的、平和的、寛容な宗教に思えるという。

仏像　文中の仏像：一体（市文化財）、無生観音（盛岡：…観音・八番）

関連記事　お地蔵さまの信仰とご利益

法華宗から独立し一宗派として五十数年

広宣寺（こうせんじ） 本門佛立宗

◆盛岡市高松一丁目一一一四
◆電話　〇一九―六六一―七九七四
◆住職　第二世　柴崎泉重

盛岡における五〇年

NHK盛岡放送局の東南、盛岡バイパスの上方にあるキリスト教会と隣り合って広宣寺があります。そこは高松ノ池と聖寿寺・榊山稲荷神社をつなぐ北山散策路にほど近い丘陵のてっぺん。境内の入り口、寺号を刻んだ大きな石柱は、市街地と岩手山を眺望する位置に建っています。

広宣寺は、高祖日蓮の開宗七〇〇年を迎えた昭和二七年、いまの中央通（帷子小路）に開創になりました。師命により布教に赴いた一世・日益上人の努力がここに結実しました。その数年後、現在地を購入。開創から一〇年余りたった昭和三九年に、念願の本堂と庫裏が竣工しました。この建物は、東日本の拠点だった乗泉寺（東京）を移築するかたちで建立されました。

そのあとも境内は順次拡張され、開創五〇年を前にして伽藍の大改修を実施。平成一一年一〇月に落慶法要を実施しました。

本堂の完成後、昭和四〇年代から五〇年代にかけて、さらなる教化活動によって、八戸別院・広流寺（末寺）が開創になりました。

清新の風を求める

本門佛立宗が一宗派として独立したのは、昭和三二年、法華宗との協定が

成立したときで、佛立開導は日扇聖人です。

反骨の仏教改革者であった日扇（長

松清風）は、法華経本門の教えに感銘を受け、宗祖・日蓮の教義を継承しながらも、常に清新の風を求めました。日扇の開導の源流となったのは、幕末期（一八五七年）に六人で開講した本門佛立講です。

本山の宥清寺（京都）は、鎌倉時代（一二〇八年）、日蓮聖人の直弟・日弁上人が建立した由緒ある寺院です。明治の初め、日扇は、無住で荒れはててい た宥清寺を借り受けて弟子とともに入寺し、教えをひろめました。現実中心で人間本位の民衆仏教は、激動の時代を生きる人々の心をとらえて浸透しました。

そして現在、全国に三〇〇ヵ寺を有する宗門になっています。

今を生きる人に立脚して

広宣寺では、毎朝六～八時（冬期は三〇分遅れ）に勤行を実施し、これに合わせて、およそ二〇人の信者が朝参詣に訪れます。各人の可能な時間だけ本堂に座して、「南無妙法蓮華経」のお題目を唱和します。また、毎月第二日曜日は「家族の日」。お勤めのあと七〇～八〇人の信者が家族とともに朝食をとりながら交流し、親睦を深めます。

広宣寺で一日の始まりを祈る信徒のために、住職は毎日欠かすことなく、三～一〇分の一日法話を行います。住職によると、「ふだんからアンテナを高くして、心あたたまるちょっといい話。あるいは、現実が自分の思いどおりにならなくても不安やあせりをなくする心の持ち方。そういう、生きる勇気や喜びにつながるものをテーマにする」ということです。

こうした実践は、現実を重視し、今を充実させるために、より一層、生きる人の側に添うという教義に基づくものといえましょう。

修法を今に引き継ぐ旧盛岡藩主の祈願寺

盛岡山 宝珠 永福寺

真言宗豊山派

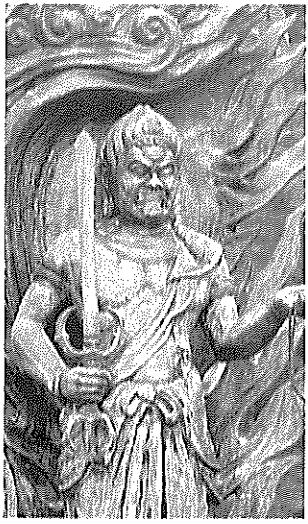
◆盛岡市下米内一一一一
◆電話 〇一九―六六一四四一四
◆山主 第六一世 熊谷精海

「聖天の御山」として

JR山田線の山岸駅と至近の地に永福寺があります。道に面して水掛不動尊があり、境内には旅姿の弘法大師像があります。

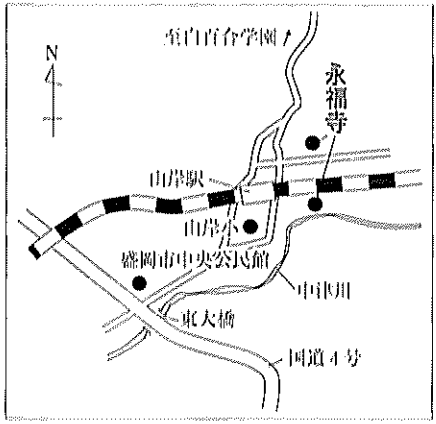
四〇〇年ほど前、南部氏に伴い盛岡に移った永福寺は、盛岡城の鬼門鎮護の寺として八〇〇石余を有しました。南部氏の祈願寺として藩の筆頭寺院となり、そのご祈祷は領内安泰から各種の現世利益におよびました。

真言密教では、大日如来は宇宙のすべてを包含し、真理や働きを十一面観音などの仏さまであらわし、天尊（歓喜天など）を媒体として、より身近な祈願をします。つまり、大日如来から十一面観音へ、歓喜天へと降臨して、祈願が現実のものになります。祈願目的により天尊も異なるため、永福寺は「聖天の御山」とも呼ばれ、出世聖天をはじめとし、四五体もの聖天像を今に伝えています。



水福寺歴代の法印（高位の祈祷僧）

道に面する水掛不動尊



は聖天修法の大家で、永福寺流を確立しました。「盛岡」の地名が、藩公と法印の連歌から生まれたことからも、当時の永福寺の地位がうかがわれます。

隆盛からの急転

寺伝によると、永福寺の創建は平安遷都と同年（七九四年）で、坂上田村麻呂

が建立した奥州六観音のひとつ、十一面観音堂に始まります。

当初の三戸から盛岡に移り、現境内の北側にあたる盛岡山（現桜が丘団地）に拠を定めました。古木が茂る三万余坪の広い敷地に、荘厳な七堂伽藍が建ち並び、そのさまは、京都の比叡山になぞらえたとされました。

明治になり、他の盛岡藩主ゆかりの寺院と同様、永福寺は明治維新と神仏分離・廃仏毀釈の嵐にもろに巻き込まれました。藩は賊軍にくみし、永福寺は盛岡城を受け取りに来た官軍の宿舎となり、やがて、東坊と境内墓地だけを残して没収されました。祈願寺として、藩の扶持のみで維持されていたため、廃寺同様になりました。

密教寺院の姿を伝える

明治以降、密教寺院の姿を取り戻す努力が続きます。

大正一三年、法灯を守る草庵に錫を止めた六〇世・道安僧正が復興に着手し、昭和一七年、かつての東坊の跡に、本堂（歓喜院）を再興しました。

現住職になって内内陣（本尊奉安殿）を整え、昭和五二年、線路を挟んだ地に回向堂「覚薄院（蓮華坊）」を再建しました。

真言宗といえば弘法大師、その足跡の四国八八ヵ所のお遍路が浮かびます。若いころ、住職はお遍路の大半を徒歩で巡礼し、効験を体感。そのとき、信仰とは書物を読み頭で理解するものではなく、自ら実践してこそ得られると確信したといいます。

まさしく、密教とは言葉ではあらわせない、体験的に理解する神秘の世界。真言宗は、それを人々に開く教えです。とくに歓喜天法（聖天法）は聖天行者以外は修してはいけないという深秘の法です。現住職はその修法者として、往古の永福寺流を引き継いでいます。

仏像・絵　聖天像・聖天画像一四体一幅（市文化財）

関連記事　地名の由来、お地蔵さまの信仰とご利益

仏教と経典について

日本の仏教の特徴

お経（経典）にはぼう大な種類があります。それを大きく分けると、大乗、小乗、密教になります。

「大乗」は、だれでも救われる可能性がある大きな乗り物という意味からきた呼び方で、日本の仏教は大乗を基調とします。大乗と区別するため、選ばれた者が救われる小さな乗り物として「小乗」と呼びます。必ずしも正しい用法とはいえませんが、古い伝統的な仏教やいまの東南アジアに広がる仏教をさしています。

密教は大乗仏教の一系統で、言葉で説かれた顕教に対して、秘密教からきた呼び方です。ネパール・チベット・蒙古と同じ起源をもち、日本には、空海が伝えた真言宗（東密）、最澄による天台宗系（台密）があります。

日本の仏教は、「祖師仏教」といわれます。最澄（天台宗）、空海（真言宗）、法然（浄土宗）、栄西（臨済宗）、道元（曹洞宗）、親鸞（浄土真宗）、日蓮（日蓮宗、法華宗）、一遍（時宗）などの宗祖の努力で広まったことから、各宗派とも経典だけでなく、経典の教えを説く宗祖の著作が重視されます。

多様に説かれる大乗経典

大乗経典より前に、釈尊の説を中心に編纂されたものを「小乗経典」といい、『阿含経』などがあります。

日本でお経といえば『大乗経典』になります。これらの経典は西暦紀元あたりから一〇世紀ごろまで、長い年月にわたってつくられつづけたので、思想的にそれぞれ独自に発展し、多岐多様に説かれました。

主な経典に、般若心経、法華経、華厳経、無量寿経などがあります。

○般若心経

よく写経にも使われ、数あるお経の中で、もっとも有名です。『摩訶般若波羅蜜多心経』ともいわれ、その意味は、智慧で彼岸を渡る（悟りを開く）というもの。すべての人を彼岸へ渡らせることを宣言したことから、大乗仏教の基本経典といわれます。

七人の僧がこの経典の漢訳を成し遂げました。日本でよく使われるのは、玄奘三蔵訳の、全六〇〇巻からなる『大般若経』の要点を、わずか二六二字にまとめたものです。

般若心経は、天台、真言、浄土、禅の各宗（臨済・曹洞・黄檗）などで読誦されます。

○法華経・華厳経

この二つは、大乗仏教の双璧といわれます。『法華経』は紀元前後にインドで成立し、中国を経て日本に伝わり、最初に講じたのは聖徳太子といわれています。『法華経』は法を説き、『華厳経』は仏陀の正覚の内容を説いて、壮大なドラマが展開します。

○浄土三部経ほか

『無量寿経』『阿弥陀経』『観無量寿経』は浄土三部経といわれ、浄土系各宗派の法事でよく読誦されます。無量寿経は長く、阿弥陀経は短いものですが、いずれも、極楽浄土と極楽往生するための実践法を説いています。

このほか、よく読まれるお経には、『正信念仏偈（しょうしんねんぶつげ）』（真宗系）、『修証義』（曹洞宗）、『理趣経（りしゅきょう）』（真言宗）、『大悲心陀羅尼（だいひしんだらに）（大悲咒（だいひしゅ））』（真言宗・禅宗各派）があります。

藩政下で作られた絵のお経

藩政時代の南部藩において、全国的にもめずらしいお経が作られています。般若心経を絵にした『盲心経（めくらしんきょう）』と、絵ときのお経『観音盲和讃（めくら）』です。安代町田山で考案されたもので、同地には元禄年間（一六八八～一七〇四年）（一説に正徳年間）、文盲者のために農耕や年中行事を絵にした『盲暦（めくれき）』がありますが、絵のお経のほうも江戸期にできたとみられています。

現在、どちらも、盛岡市中央公民館郷土資料展示室に収蔵されています。

（盛岡市中央公民館略図87ページ）

「盛岡大仏」と七〇〇基の「碑林」のある寺

大吉山（だいきつざん） 松園寺（しょうおんじ） 曹洞宗

◆盛岡市上米内字松末平七八―五七
◆電話 〇一九―六六一―七七七〇
◆住職 第二世 髙橋智雄

ニュータウンに対応して

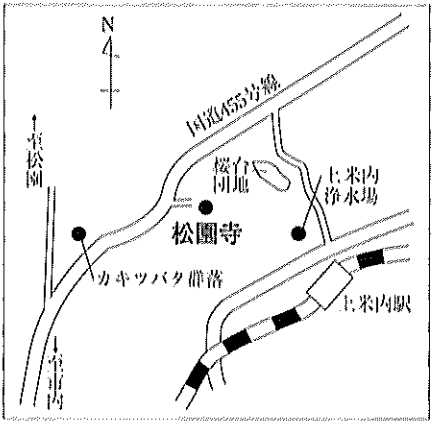
国道四五五号を北進して松園への分岐を過ぎ、カキツバタ群落（県天然記念物）を過ぎると、「松園寺」の石柱と山門があり、さらに二〇〇メートルほど行くと「盛岡大仏」の大看板があります。ここから坂道を登っていくと、中腹一帯を埋めるように堂宇群が並んでいます。

松園寺は、今から十数年前に開創された新しい寺院です。昭和六二年五月、恩流寺二二世・喜峰雄仙大和尚により開山。開基は、樋下建設の創業者で、県議会議員でもあった樋下正光氏。

県内一の規模をもつ住宅団地の松園は、人口の増加と経済発展を背景に、昭和四五年から県の住宅建設計画に基づいて造成されました。新世代の住民も、近い将来、よりどころとなる寺院が必要になるとの認識に立ち、寺院が創建されました。

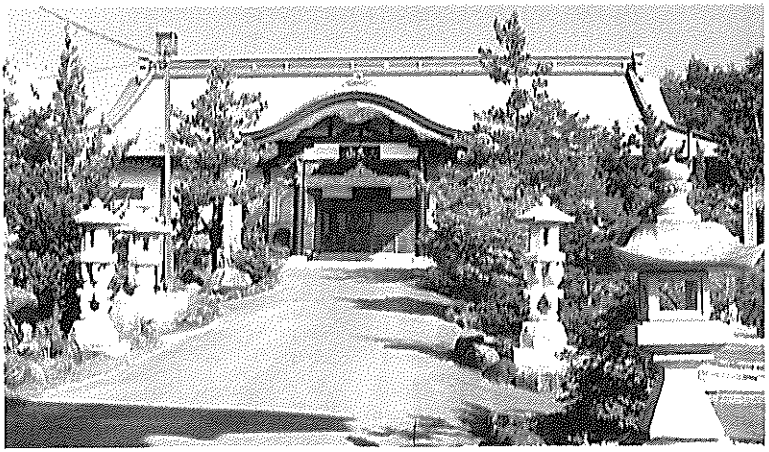
小高い山に建つ

その昔、四季の野花が咲き、秋には萩刈り場になっていた小高い山。そこを二〇メートルほど切り崩して、松園寺の境内地が拓かれました。その当時、東北自動車道建設の真っ最中だったことから、崩した土砂は道路の盛土になりました。



本堂の裏手、山腹の斜面に、大きな自然石に「三界萬霊塔」と刻んだ碑があります。これは、当時、土地区画整理や道路工事によって撤去を余儀なくされた石仏や無縁仏の供養のために、さらには、古い墓碑を供養するものとして建立したというものです。

山域に入って、まず目を引くのは古今の作者による句や歌、住句をしたためた大石板です。その数七〇〇余基。「碑林」というだけあって、寺域を埋



庭園墓地にふさわしいゆったりした境内には、鐘楼があり、慈母観音像をはじめ、数多くの石仏が並んでいます。

奈良の大仏に匹敵する大きさ

もうひとつ、だれもが目を見張るのは、奈良の大仏に匹敵する大きさの「盛岡大仏」です。

青銅の大仏（阿弥陀如来坐像）は、高さ一七メートル。その重さは、花崗岩の台座を含めて約一七〇トン。銅像は銅板にして運び、韓国の鋳造技術者一二人が約二ヵ月がかりで溶接し、総工費七億円をかけて建立され、平成一一年七月に開眼式が行われました。

そばには施主（開基）の像と、趣旨が紹介されています。

幼き日、両親亡く育ち、太田橋を手をつなぎ歩く子らを見るたび、羨ましく感じたこと。少年の日の夢が、成人して亡き両親をまつり、大仏建立の念願になったこと。僧の心で尽くしたいと思い、人々のしあわせを祈って建立したとあります。

そして、家内安全・無病息災・商売繁盛・交通安全の四つの願いを込めた盛岡大仏であることがうたわれています。

高さ17メートルの盛岡大仏

め尽くすように林立しています。

中心には約一四五坪という本堂があり、ひときわ広く高く感じる空の下、

古い縁により、例祭に早池峰神楽を奉納

大日堂（だいにちどう） 蟻塔庵（ぎとうあん） 浄土宗

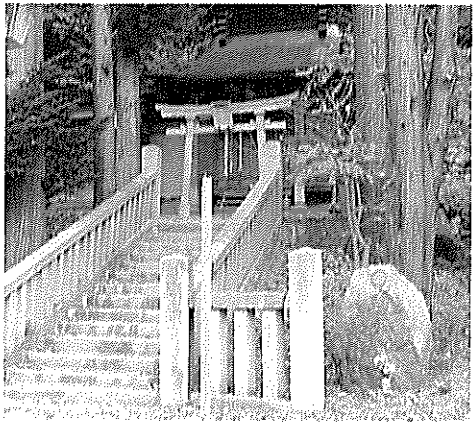
◆盛岡市浅岸字加賀野桜山一
◆電話　〇一九―六二一四七六九
◆兼務住職　光台寺二五世
岩瀬英宏

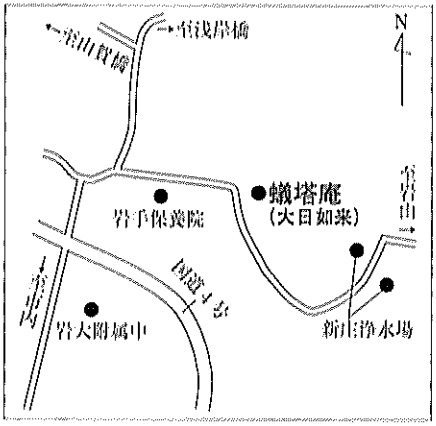
人々の熱意で再興

岩山のふもと、新庄浄水場に続く木々の繁る丘陵地は『妙泉寺地区』として市の環境保護地区になっています。この地は、明治の一時期、いま岩手公園口にある桜山神社が置かれた霊域で、藩政時代は妙泉寺（真言宗）がありました。いま、その歴史を秘めて、蟻塔庵が建っています。

江戸時代前期（一六七九年）、南部重信公が、妙泉寺山に大日堂を建て城内から大日如来を遷座すると、大勢の人が参詣しました。ところが明治になって寺禄を失い、妙泉寺とともに廃寺になりました。近在の人々が再興に動きますが、官庁は認可しませんでした。

これを知った光台寺住職・岩瀬豊英和尚は、公に祀ることができるよう、配下にあった蟻塔庵を大日堂の跡に移しました。蟻塔庵は、南部家の祈願所として建立（一六六一～七二年）された念仏堂です。こうして、現在の大日堂蟻塔庵となりました。





再興を実現した人々の熱意は今に引き継がれ、毎年、六月二八日の例祭は、「講」を中心に実施されます。この日は、大迫妙泉寺（現早池峰神社）との古い縁戚により、早池峰神楽（国文化財）が奉納されるほか、住民参加のさまざまな催しが繰り広げられます。

第2ブロック

盛岡市――寺町かいわい

幽遠な逸話を伝承する古刹

亀通山（きつうざん） 大泉寺（だいせんじ） 浄土宗

◆盛岡市本町通一丁目一四一一
◆電話　〇一九一六五一一五七六六
◆住職　第三二世　鈴木智覚

●略図は87ページ参照

約八〇〇年前の開創

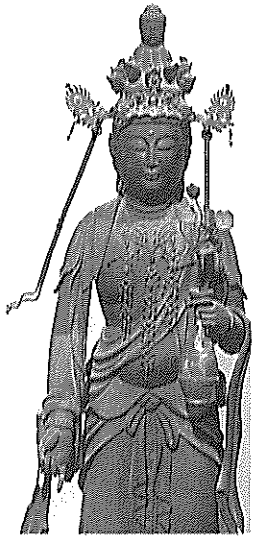
大泉寺は、寺町のなかでも、いちばん中心地寄りに立地しています。藩政のころ、寺院は基本的に城の外郭に置くとされましたが、どういう経緯によるものか、大泉寺だけが外堀の内に建立されました。

由緒によれば大泉寺の開創は古く、いまから八〇〇年ほど前にさかのぼります。鎌倉時代前期（一二二五年）、奥州で伝道を志した法然上人の門弟・顕然房好覚が、いまの二戸市に専立庵悟真寺を建立。その後、九世までの事績は不明ですが、一〇世・慶誉学幢のときに復興しました。

ところが、十数年後の「九戸政実の乱」（一五九一年）により堂宇を焼失。再建を胸に、学幢が戦死者の供養を行っているとき、老亀に法会を請われる夢をみました。その荒れ寺における法会が機縁となり、南部二六代・信直公を願主とし、寺の復興を果たしました。二戸城下の新しい境内から清泉が湧き、亀甲が発見されたので、現在のように改号するとともに、亀甲を寺宝としました。それは今も保管されています。

その後、南部氏の命により盛岡に移転（一六二九年）。当時の二一世・大誉梅山は、お寺の確立に努めるなかで増上寺と交渉をもち、将軍家の菩提寺である増上寺の末寺に加わりました。そこから有力寺院と目され、南部藩の盛岡以北の浄土宗の本寺として多くの末寺を有することとなりました。

現在の本堂は、大火で類焼したあと、江戸時代中期（一八二五年）に再建したものです。本堂は、独特の宝形式反り屋根の建物として、盛岡市の保存建造物になっています。



見るも優美な十一面観世音。

おかんの墓とその伝承

参道の石段から山門をくぐると、すぐ右に「おかんの墓」があります。墓の主は、伝説の貞婦・おかんです。

おかんは、九戸政実の家臣・畠山重勝の一人娘。九戸城落城に際して、父親はおかんを家僕の三平に託し、二人は夫婦となりました。盛岡へ出て築城の人夫をしていた三平は、仕事中に大負傷しました。それを機に、かねておかんに横恋慕していた組頭が露骨に迫り、三平への危害を察したおかんは夫の装束で変装して、身代わりに亡くなりました。

深く後悔した組頭は、大泉寺に弟子入りをしておかんの霊を弔い、遺族の生計を助けました。以来、おかんの墓碑をたたくと、成仏のあかしに、カンと音をたてたということです。

怪談に登場する皿を保管

もうひとつ伝承があります。あの有名な、怪談「番町皿屋敷」の皿四枚を保有していることです。

怪談の皿については、次の経緯が伝えられています。

江戸幕府御徒目付の遠山主膳（青山主膳）は、家宝の皿が破損したとき、家庭のもつれのもとになった女中・お菊に罪を着せ、手打ちにしました。それにより、一家は亡霊に悩まされることとなりました。

この不祥事により、主膳は家禄を失って浪人になりますが、その主膳を、江戸で南部重直公が召し抱えました。

やがて、代目が盛岡に移り、増上寺に納めていたいわくの皿を、菩提寺の大泉寺に奉納したということです。

仏像・絵　阿弥陀如来坐像、十一面観世音菩薩（盛岡三三観音・二六番）、紙本着色阿弥陀三尊来迎図屏風（三件とも市文化財）

関連記事　近世幕開けの動乱

鎌倉時代、親鸞の弟子による開山

彦部山（ひこべさん）長誓山（ちょうせいざん）光照寺（こうしょうじ）

真宗大谷派

◆盛岡市本町通二丁目六―二四
◆電話　〇一九―六二二―五四九二
◆住職　第二九世　千葉文雄

●略図は87ページ参照

真宗の初期の寺院

寺町通りの日本の道一〇〇選の碑から少し南側、寺町の入り口に、むかし寺門懸門がありましたが、その簡所に南接して光照寺があります。名須川、北山に集合する寺院の中で、大泉寺とともに、最も市内寄りに位置し、現在地に移り約一〇〇年になります。

寺町にある寺の多くは南向き、すなわち、かつてのお城に正対していますが、光照寺は通りに面して、東向きに建っています。開放的な明るい境内に入ると、すぐ右に建つ『親鸞聖人御弟子信圓房遺跡』と刻まれた碑が目に入ります。刻銘どおり、信円房は親鸞面授の弟子の一人で、光照寺を開いた人物です。

鎌倉時代のはじめ（一二二三～一八）、信円房は布教の使命を担い、是信房（本誓寺開祖）とともに奥州に赴きました。和賀を経て紫波町彦部の草庵を拠点に布教し、文永三年（一二六五）にその生涯を閉じました。

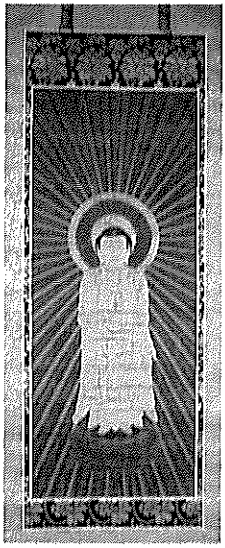
こうした経緯から、光照寺は開創七五〇年前後とみられ、浄土真宗の初期の寺院にあげられます。

信円房こと千原長左衛門尉信秀は、源氏の支族にあたる父親が『治承の乱』に参加して敗退し、京都に隠棲中に誕生しました。長じて京の公卿に仕えますが、主（あるじ）の左遷に心傷つき、親鸞門下に入ったと伝えられています。

移転と二つの山号

光照寺が現在地に堂宇を構えたのは、明治三〇年の火災後、明治三五年です。それ以前の三〇〇年あまり、江戸時代をとおして三ツ石神社の裏側、本誓寺に近接した地にありました。

紫波本誓寺の『音羽会資料集』を見ると、本誓寺の盛岡移転に際して、ひと足早く天正年間（一五七三～九二）



寺宝の阿弥陀画像

に鉈屋町に移転して寺院を経営していた光照寺が、藩庁の寺社奉行との間の窓口となった、とあります。

光照寺の山号に、発祥地の彦部にちなんだものと、もうひとつ長膏山があります。これは元禄（一六八八～一七〇三）以降、大火後に再建用材の提供を受けた生石長山を記念して改号したという言い伝えがあります。

入口に建つ開山の信圓房の碑

蓮如から下付された絵像

光照寺の寺宝のひとつに、信円房が親鸞から授与されたという金銅阿弥陀仏（約一八センチ）があります。七難を消滅するとして世に称賛された仏像で、明治の火災のあと、焼け跡から損傷もなく発見されました。

宗祖・親鸞亡きあと、室町時代、蓮如上人の布教により教団の礎が確固としたものになりました。光照寺二世・浄的が、本願寺の中興と仰がれる蓮如上人から「阿弥陀画像」を下付され、寺宝として大切に保管しています。ほかに、親鸞聖人・是信房・信円房の対座を描写した「連座ノ影像」、本山である東本願寺二世・教如が自身を描かせ、自筆の讃文をしるした「教如聖人壽影」が伝来しています。

いま、光照寺を訪れる人々に、川柳の愛好者がいます。

昭和の初め、プロレタリア派柳人として広く知られた鶴彬（本名・喜多一二）は、「川柳界の小林多喜二」とも評され、評論の代表作「井上剣花房と石川啄木」を発表しますが、特高に検挙され、留置所で赤痢にかかり二九歳で夭折しました。

盛岡に住む兄の縁により、名須川町にある墓所（光照寺跡地）に葬られますが、東京でも生地でもない地に建てられた鶴彬の墓は、人に知られることなく、愛好者の間では〝幻の墓〟といわれていました。この墓が、没後三九年を経た昭和五二年、作家・堀澤光儀によって紹介され、以来、遠来からも訪れる人がいるということです。

「岩手」の地名発祥を伝える三ッ石神社ゆかりのお寺

松峰山（しょうほうざん） 東顕寺（とうけんじ） 曹洞宗

◆盛岡市名須川町一一
◆電話 〇一九―六二二―四〇四一
◆住職 第三〇世 村井泰定

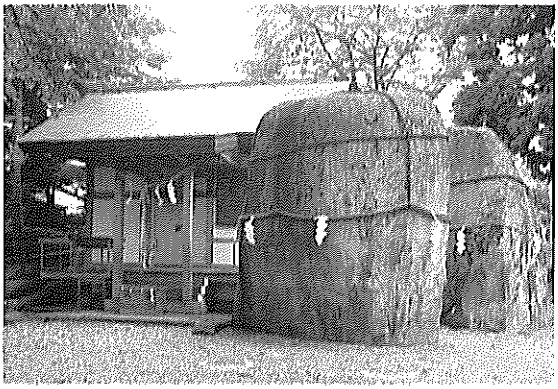
●略図は87ページ参照

盛岡で開かれた最古の寺

寺町通りの「塩の道」の碑から少し南、「鬼の手形」の案内板に従って行くと、東顕寺があります。東顕寺の建物で最古とみられる山門の奥に、二〇〇年前に建立された本堂があります（一八〇六年完成）。入母屋造り、向拝天井の組み物や、内部の海老虹梁や扇垂木を備えた本堂は、市の保存建造物になっています。

東顕寺は、昔から盛岡にあった寺では最古とみられ、約六二〇年前に開創されています。

南北朝時代の終わりごろ（一三八四年）、永沢市の正法寺二世・月泉良印禅師の一番上の弟子である古山良雲禅師（出羽庄内の人）によって開山され、開基は、不来方の館主・福士淡路守五郎政長。不来方というのは盛岡以前の地名で、政長は、南部氏の命により南方警備の任をもっていました。



盛岡の名所のひとつ三ツ石神社の巨石

開山した地は中野地区で、町名変更以前には、里東顕寺（ひがしけんじ）という地名がありました。

やがて、福士氏の居館の北西、石間（現内丸）に移転します。そこは奇岩怪石が累積し松が繁っていたので、現山号になったといわれています。

藩祖の御霊をまつる神社

盛岡城の築城に伴って再度移転し、またも、岩にゆかりのある現在地になりました。それは、いまも裏側にある三ッ石神社を管理させようという意図を含むものでした。

与えました。三ツ石神社が城からみて鬼門に位置することから、城の守護のために藩祖を祀ったとみられます。

いま、三ツ石神社は、盛岡の名所の一つに挙げられています。注連縄をつけた三個の巨大な花崗岩には「鬼の手形」の伝説があり、それが岩手の地名の発祥とされ、さらには、盛岡の夏を彩るさんさ踊り発祥の神社として、多くの参拝者や観光客が訪れます。

南部一七代・利直公は、築城に際してこの神社に南部氏の祖・光行の御霊を迎え、管理する東顕寺に五一石余を

京仏師の作と伝える仏像

東顕寺は、藩政時代の大火で類焼し、古記録や寺宝の多くを焼失しました。それでも、「東顕寺開創記」「三石記」「三石松号証記」「南部利直黒印状」などの貴重な文書、すぐれた仏物が伝来しています。

本尊の釈迦牟尼仏は両脇侍のある三尊形式で、京都の大仏師・駒野丹下定正の作と伝えられます。それを菩薩させるすぐれた作りで、報恩寺の五百羅漢などとともに、盛岡藩の曹洞宗寺院と京仏師との関係をうかがわせる貴重な仏像といわれています。

十一面観音菩薩像（全高八七センチ）も、京の七条仏師の作に通じる面容といわれています。この像は、もと三石神社の本地仏でしたが、明治の神仏分離により東顕寺に遷されました。

仏像・碑　十一面観音菩薩坐像（盛岡三三観音・五番）、大黒天立像、餓死亡霊供養塔（三件とも市文化財）

関連記事　お盆と舟っこ流し、獅にとけあう供養と娯楽、「らかん公園」と飢饉と供養塔、盛岡の羅漢さま、地名の由来

舞にとけあう供養と娯楽

――剣舞・さんさ踊り――

（念仏）剣舞――祈りと鼓舞と

祖霊が訪れるお盆に舞うものとして、剣舞が伝承されています。その芸態は多種多様ですが、盛岡市周辺にみられるのは大きく二つ、「念仏剣舞」と「高舘剣舞」があります。

念仏剣舞は、先祖や新しい仏の供養を阿弥陀仏に祈願するもので、阿弥陀堂をあらわす大笠をつけて踊ります。

高舘剣舞は、太刀を振りかざして勇壮に舞うもので、舞いで武士を鼓舞し、城を攻めたという伝えがあります。源氏が攻め落とした城が高舘で、それは源義経の居城とも安倍氏の館ともいわれます。ほかに有史以前、都の山に住む鬼神を征伐したときの「剣」という伝えや、聖徳太子のころの供養踊りがもとになったとするものがあります。

永井の大念仏剣舞には、次のような伝えがあります。

――平安のころ、比叡山で修行していた梅若丸が一二歳のとき人買いにさらわれ、諸国をめぐる途中で病死する。あわれんだ村人が塚をつくってその霊を弔い、仏教の悟りをひらいた和尚様が供養のために踊りを創始した。その塚は、いま東京都墨田区の木母寺の境内にあり、この寺（天台宗）の起因にもなった――

さんさ踊り――武士も興じた盆踊り

盛岡の盆踊りの最初の記録は、藩政のころのお触れに出ています。延宝三年（一六七五）、「盆中踊、相撲、花火、御停止」と奢侈を戒めています。当時、百姓や町人に加わって、侍も踊りに興じていたのでしょうか。いま目にする盛岡の夏祭り、さんさ踊りの大群舞は、すでにそのころ芽吹いていたのかもしれません。

さんさ踊りは、古くから盛岡とその周辺に伝えられてきた盆踊りです。日本古来の踊りに仏教の先祖供養の考え方が結びついた盆踊りは、「先祖とともに楽しむ」というように、娯楽の要素を強めつつ受け継がれました。

さんさ踊りの発祥伝説

さんさ踊りのおこりについては諸説あります。僧侶が精進して地獄の苦しみから母親を救い、その喜びを踊ったとするもの。これは盆踊り一般に共通します。また、僧侶が仏教の教えを説きながら伝授したとの伝えもありますが、わが国では空也上人がはじめ、一遍上人（時宗開祖）がそれを引き継い

で全国に広まりました。

ほかにも、平安後期の「前九年の役」のとき、安倍氏を攻めた八幡太郎義家（源義家）が関東武士の士気を鼓舞するために夜を徹して踊り、それを住民たちが見て覚え、伝えたというものがあります。この由来をもつ盛岡市の「黒川さんさ」は、激しく荒々しいなかに曲線的な身のこなしが要求され、かつては男子の踊りとされていました。

近郷各地の由来に出てくるのが、盛岡市東顕寺の三ツ石にまつわる伝説です。

――盛岡市三ツ割の里にしばしば悪鬼が現れて住民を脅かしたので、三ツ石大権現に悪鬼退治を祈願した。大権現は鬼をこらしめ、以後やらないという誓約に三ツ石に手形を押させて退散させた。住民は里の平安を喜んで三ツ石の周りを踊りくるい、これがさんさ踊りの始まりとなった――

この岩の手形から岩手の地名が生まれ、鬼が来ない所から、盛岡の旧名「不来方」になったとされています。

「さんさ」の名称にもいろいろな伝えがあります。

悪鬼退散を喜んだ住民たちが笛を手に踊った笛踊りからきたとか、ある和尚さまが修行中の坊主を集めて、「みな踊れ、さぁさ」と声をかけた、あるいは、南部の殿様が「さぁさ踊れ」と自らも踊ったとするものがあります。

また、盆踊りの種目が三三あったから、ともいわれています。

親鸞廟本堂に準じた本堂、伝わる数々の寺宝

石森山（せきしんざん） 本誓寺（ほんせいじ）

真宗大谷派

◆播磨市名須川町三一一六
◆電話　〇一九一六五一一八九四
◆住職　第二九世　吉田是行

親鸞の高弟・是信房が開く

寺町の一角に、コーナーをつくるように建つ真宗の三寺。現在、それぞれ寺院として独立していますが、本誓寺はその中心に位置しています。

奈良・平安の仏教から、鎌倉時代になると大衆を救済する新仏教がおこりました。親鸞を開祖とする浄土真宗（真宗）もそのひとつです。その時代（一二二五年）、親鸞の弟子・是信房は師命により奥羽伝道に赴きました。

本誓寺の伝えによれば、是信房は和賀で布教し、のちに紫波町彦部に仏堂を建立しました。それが本誓寺です。そこを拠点として五〇年あまり布教した是信房は、その地で生涯を閉じました。

親鸞の高弟二四人の一〇番に、是信房の名前があります（親鸞門信交名牒）。

親鸞自刻と伝えられる御寓影

●略図は87ページ参照

移転と教線のひろがり

是信房による開創から約三七〇年を経て、本誓寺は紫波町二日町に移転（一五八四年）します。ところが、間もなく斯波氏から南部氏の時代になり、藩の指令により盛岡の現在地に移りました（一六三五年）。

一連の移転は一四世是空、一五世空円、一六世賢勝のときにあたります。この間、開創地に正護寺を建立。ほかに、紫波町の願円寺・光円寺と教線をひろげたことから、「本誓寺が動くとお寺ができる」といわれました。

紫波の堂舎は長いあいだ支院として存続しましたが、明治に独立した寺院となり、同じ本誓寺を号しています。

なお、紫波町彦部にあった是信房の墳墓は幕末期（一八五〇年）に盛岡本誓寺に移されました。

御真影にまつわる逸話

本願寺は近世まで五六の末寺を有す

親鸞御廟本堂を模した本堂

る名刹で、数々の寺宝が伝えられています。

親鸞の自刻とされる親鸞聖人坐像（八五センチ）は、本山の東本願寺に登録されている一体で、諸国に知られた宝物です。親鸞が是信房との別離に贈ったとされ、「後の世の記念に残す面影は弥陀たのむ身のたよりともなれ」とご詠歌されたということです。

ある檀家が盛岡へ移転するときの模様を仔細に伝えています。御真影（坐像）を奉じて盛岡城下京町（本町）の近江屋新七家に立ち寄り、旅装を正装に整え、新しい寺まで敷かれた荒菰の上を入山したとしています。

軸装の「光明本尊」（一二八×九九センチ）は、是信房が奥州の布教状況報告のために上洛し、親鸞に対面したとき、喜びのあまり授けたものと伝えられ、その由来から、宗門第一の至宝となっています。

荘重華麗な宮殿に入りの阿弥陀如来立像（全高一八一センチ）は、河内屋（河内国平野郡）の寄進によるもので、全国宝物参攷簿に登録されています。

県内でも数例しかないという輪転蔵の「経蔵」は、近江系商家の小野氏が施主となって寄進したものです。

建物では、本願寺の本堂は、京都の親鸞聖人御廟本堂に準じた構造となっています。明治三〇年、四ヵ寺が全焼した火災後、大正七年に完成しました。

仏像　木造阿弥陀如来立像、木造聖徳太子立像、木造親鸞聖人坐像（三体とも市文化財）

樹木　ホンセイジシダレ（市天然記念物）

関連記事　盛岡の桜めぐり、近世幕明けの動乱

寺町通りの塀に近接して建つ本堂

梅応山（ばいおうざん） 證明寺（しょうみょうじ）

真宗大谷派

◆盛岡市名須川町三一一五
◆電話　〇一九一六二三一〇六三七
◆住職　第二六世　松見亶成

開山前史の口伝

證明寺は、歴史と新しさが調和した美しい景観の寺町通りにあります。

道沿いに長く続く築地ふうの寺院の塀。その東側の塀に接するように建つ證明寺の本堂は、通りを背にし、本誓寺に正対しています。おそらく、従前からこのように配置され、下寺、脇寺のあり方を形にしたものとみられますが、現在、独立した一寺院として運営されています。

言い伝えによると、證明寺の開山は江戸時代前期（一六九九年）で、開基は明慶法師。ただ、それ以前に遠野市にあって、證明寺屋敷の地名が残っていたこと、かつては天台宗だったという伝えがあります。

口伝からの推量ながら、天台宗の僧侶であった明慶が、現在の真宗に転宗し、それを機に盛岡に移ったことが考えられます。

明治期に無住の時代があり、裏付ける史料もないため、来歴の詳細は不明ですが、本山の東本願寺から下付された親鸞聖人の絵像に、「明和九年（一七七二）・本誓寺下・森岡・證明寺」の裏書きがあるので、開創した元禄のころから現在地にあったとみられます。

道路拡幅と堂宇の改修

堂宇に関しては、天明年間（一七八一～八八）の火災の記録に『本誓寺等四ヵ寺とも類焼』とあり、その前後のことは不明です。現在の堂宇は明治一二年に建造。それから二〇年ほどのちに近隣に火災があって、一部に焼けこげがありましたが、類焼はまぬがれました。

ここ数十年、盛岡市の北側に住宅地

●略図は87ページ参照

が伸びて道路の交通量が急増し、寺町通りを含む盛岡・岩泉線（現国道四五五号）は拡幅の必要に迫られました。

昭和六一年、道路整備に伴って境内地が縮小になり、そのときに本堂の全面的な補修を行い、庫裏を改築して現在に至っています。

澄明寺の本尊、阿弥陀如来像は、鎌倉時代の春日仏師の作と伝えられています。詳しい調査はしていないとのことですが、仏教美術的にも価値があるとみられる像です。

また、寺宝として、前田の親鸞聖人絵像、聖徳太子絵像、七高僧絵像、田山釈迦絵像、梅花の絵図が伝来しています。その多くは数百年前に制作されたものとみられます。

余録　歴代の宗主は、上人（しょうにん）と呼ばれるが、浄土真宗（真宗）では、真理をさとった人という意味で、宗祖の親鸞を「聖人」という。親鸞聖人は妻帯し結婚生活をしたことで知られ、僧侶の身分を奪われて俗名のまま越後に流されたことから、非僧非俗と呼ばれる。それは、僧と俗を超えて人間は等しく平等であるという立場を示すものとなり、在家仏教に大きな励ましを与えた。

出家が中心ではない浄土真宗は、他宗とは異なる点も多い。

たとえば、戒名ではなくて、「法名」と呼ぶ。本来、死後の名ではなく、生前に仏弟子になったあかしにもらうものという。中国の儒教にもとづく位牌（いはい）はなく、お墓の卒塔婆もなく、清め塩を使用せず、お盆の精霊棚をしつらえることもない。

言葉のうえでも、追善供養ではなく「追悼法要」、地鎮祭は「起工式」、冥福を祈るではなく「哀悼」、「お悔やみ」を使う。また、方角や大安・仏滅・友引などの日の吉凶、占いなど呪術的なものを否定している。

親鸞の教えを今日的に問う試行

騎雲山（きうんざん） 専立寺（せんりゅうじ）

真宗大谷派

◆盛岡市名須川町三―一七
◆電話 〇一九―六二二―一〇六六
◆住職 第二五世 日野岳唯照

「九戸政実の乱」後の移転

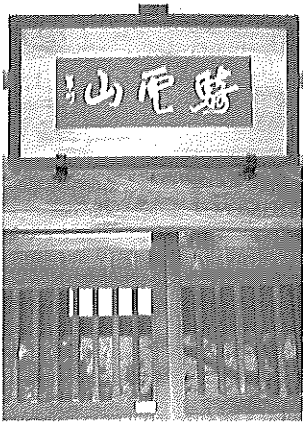
専立寺は、寺町の一角に、同宗派の本誓寺・證明寺と集合して立地しています。

専立寺の歴史は古く、いまから約八〇〇年前にさかのぼり、平安から鎌倉時代に移行するころの人物、平好覚に始まります。

京都にあった好覚は、平家の滅亡に遭遇し、世をのがれるため、平安末期（一一八六年）に一二歳で仏門に入りました。当時、浄土宗をひらいた法然上人の弟子となって顕然房好覚を名乗り、やがて、上人に代わって奥州巡化に出立しました。そして、陸奥の福岡（二戸市）に創設した庵が専立寺です。好覚は、七六歳（一二五〇年）のとき、この庵で生涯を閉じています。

それから三百数十年、豊臣秀吉の天下統一のころ、「九戸政実の乱」によって草庵を焼失。このため、九代目の円覚は盛岡に移り、本誓寺に同居しました。その後、一二代・唯源のときに、本誓寺一六代・賢昌（賢勝）の誘いにより、浄土宗から真宗大谷派に転宗しました。過去、三度火災に遭い、江戸中期以前の資料は残存しませんが、以上のような来歴が伝えられています。

●略図は87ページ参照



現在の堂宇は、明治三〇年の火災ののち、大正一一年に再建されたものです。

火災の焼失をまぬがれて伝来するものに、慈覚大師の作と伝えられる阿弥陀如来立像（本尊、約五七センチ）と、壁三枚分もある大きな「大坂冬の陣」の絵図があります。

絵図には、大坂城を守る豊臣方の配備、寄せ手の徳川の布陣がくわしく描かれていますが、作年代は、後年の元禄年間（一六八八～一七〇三）とみられ、制作の意図や入手経路などは不明です。

よりよく生きる教え

専立寺は、浄土宗から浄土真宗に転じていますが、そのどちらも念仏宗といわれています。本尊が阿弥陀如来であることも、よりどころとする教典も一緒ですが、大きく違う点は、法然上人の教えは「念仏為先」、すなわち、かぎりない念仏行を重視します。対して、親鸞聖人の教えは「信心為先」といわれます。

多くの鎌倉仏教の祖師と同じように、親鸞も比叡山で修行し、やがて法然上人の門に走ります。親鸞は、法然の念仏の道をさらにおしすすめ、阿弥陀仏の大慈悲を知り自然に称える念仏、すなわち感謝の念仏、「報恩念仏」であると説きました。

浄土真宗では、自分たち人間は決して立派な存在ではないという自覚をもとに、たとえば、先祖の供養ではなくて、先祖に感謝し阿弥陀如来へ報恩感謝するとしています。したがって、法事も供養ではなく、故人の遺志をついで少しでもしっかりと生きるために仏の教えを聞き、人生の意義を考える場であるとしています。

儀礼を超える取り組み

専立寺の住職は、常に「報恩」を念頭におきながら、葬儀のときにも、人間の共同的悲苦に直面した人の救いになるような説教を心がけているといいます。さらに、「お寺を儀礼の場だけに終わらせるのではなく、もっと開かれた場にしなければ。そのためにも、お寺でおもしろく生きることを試みたい」と話します。その新しい芽を模索しつつ、子どもの夏休み行事にお寺を開放してきました。

儀礼やしきたりを超える延長線上で、宗派をこえたお寺の役割、存在意義を深めたいと、七～八年前、盛岡で「宗派に関係なく入れるお寺」を創始しました。現在、会員は八十数人、四七世帯になっているということです。

いまに引き継ぐ仏教の社会事業

寶鏡山 清養院 曹洞宗

◆盛岡市名須川町七一
◆電話 〇一九―六二四―六一四一
◆住職 第二七世 稲田泰麟

賢治の作品に登場する天気塔

寺町通りに面して建つ赤瓦の二つの山門。南側が清養院の山門です。

中学生の宮沢賢治が最初に下宿したという清養院。山門近くにある「天気塔」は、もと永福寺にあったものですが、賢治の『銀河鉄道の夜』に出てくる「天気輪の柱」のヒントになったという説があります。天気輪は寺や墓地、村境などに立てて農耕の天候を祈りつつ亡者の菩提をとむらうもので、天と人間の交信を図るとされ、賢治の宇宙観につながるともいわれています。

清養院の開山縁起については、江戸後期と明治期の火災により史料は残存しませんが、当初、上田門前町の地に、東顕寺二世・天翼舜賀大和尚（一四七一年没）が開創。その後、現在地に移転（一四八七年）したと伝えられています。

現在の本堂は、明治三〇年の火災のあと二五世・洞器泰巌のときに、一三年がかりで再建。このとき、資金をはじめ木材調達に至るまで、全檀信徒が結集したことが語り継がれています。

昭和二五年、二六世・露山泰堂のときに、山門を入ってすぐ左手に位牌堂を建立。その後、今から二〇年ほど前の道路拡幅に際して境内地の一部を提供するとともに、南側に位牌堂等を新設しました。旧位牌堂は、いまは鎮守堂として、極彩色の美しい聖観世音像（三九センチ）と、その応化身で、火伏で有名な秋葉三尺坊大権現をまつっています。

●略図は87ページ参照

古い天台寺絵図、新しい襖絵

清養院では、山岸の故米内末吉氏から寄贈を受けた、古く、大きな「八葉山天台寺絵図」（一九二×二〇三センチ）をたいせつに保管しています。

吉川保正氏（元岩手県文化財委員、彫刻家）によれば、天台寺に伝わったもので、その隆盛がうかがえる絵ですが、当の天台寺にたずねても分からないという回答。現在、傷みが激しいため一般公開は控え、写真の複製図を作ることにしています。

位牌堂階下の大書院等には、光彩を

故吉川保正氏作の屏風絵（部分）

放つ日展作家・大政穂積画伯による襖絵をはじめ、晩年の吉川保正氏が描いたユニークな襖絵が目を楽しませてくれます。その後、遊女を描いた屏風絵は、吉川氏の遺作となりました。

県内初の常設保育所設置

清養院は、社会事業の面からも特筆されるお寺です。

二六世・泰堂和尚は、寺門教化事業として、盛岡市から旧来内村役場庁舎（通称関口、現愛宕町）を借りて農繁託児所を開始。この託児所は、地域の大きな要望によって、昭和五年に岩手県で最初の常設認可岩手県第一号託児所になり、その後、アケボノ保育園に改め、昭和一二年には母子支援施設アケボノ母子園を開設しました。

晩年の泰堂和尚は、「岩手の社会事業の先鞭をつけたのは仏教の社会事業。それは岩瀬豊英師（光台寺二三世）の指導によるもの」と語っていたといいます。

言葉どおり、県立の教護施設の前身になったのは、岩瀬豊英師をはじめとする盛岡市各宗協会有志寺院による仏教社会事業の施設でした。現在、社会福祉法人アケボノ会が設置・経営している施設も、もとをたどれば、曹洞宗子女教化主導施設だということです。

仏像　木造釈迦如来坐像（市文化財）、聖観世音（盛岡三三観音二二番）

社会事業（社会福祉法人）アケボノ保育園、アケボノ母子園

関連記事　宮沢賢治の信仰

啄木の両親が出会ったモリオカシダレの寺

虎嶽山（こがくさん） 龍谷寺（りゅうこくじ）

曹洞宗

◆盛岡市名須川町七一一
◆電話 〇一九一六二一一八一四四
◆住職 第二二世 上舘文道

寺町通りに面した山門

その美しい景観から、数々の受賞に輝いた寺町通り。龍谷寺はこの通りに面して建っています。

通りのシンボルとも目される赤瓦の山門をくぐると、真正面の本堂の前に、国の天然記念物「龍谷寺のモリオカシダレ」が枝を広げています。老木で寿命に近いとされながら、近年、樹勢を盛り返し、四月二〇日ごろには観桜の人々を楽しませています。

龍谷寺は、江戸時代前期（一六一八～一五年）、報恩寺六世・滝堂梵積大和尚によって開かれました。開山後、江戸期に二度の火災（一七七八、一八一八年）で堂宇を焼失。幕末のころ（一八五六年）、一五世・中興泰中喜道大和尚のときに庫院を再建し、授戒会を実施したとあるので、本堂はそれ以前に再建されたとみられます。

他の建造物は、昭和七年、一九世・吾山全霊大和尚のときに山門を、現住職になって位牌堂ならびに集会所（平成二年）、開山堂（同四年）が建立されました。

片腕の観音像、片葉の葦

龍谷寺には、片葉観音ともいわれる片腕のない櫻川観世音菩薩が伝来し、次の伝説があります。

●略図は87ページ参照

伝説を秘める櫻川観世音

その昔、松前（北海道）へ通じる一筋の道が通り、龍谷寺付近に鬱蒼（うっそう）とした木立があり、櫻川が流れていました。あるとき、観音さまを携えた旅僧がここで野宿すると、夜に盗賊が襲ってきました。賊が太刀を振り下ろした一瞬、閃光が走り、太刀が折れてしまったので賊は逃走。朝に僧が見ると、仏像の片腕が飛んで川岸に漂い、腕に触れた葦（あし）はみな片葉になっていました。

江戸時代の地誌『盛岡砂子』には、龍谷寺の北に、片葉の葦が生える池と「着枠ヵ島」と呼ばれる箇所があると記しています。平安のころ、安倍一族

を滅ぼした源義家が安倍宗任を連行する途中、京に上っても見苦しくないように、宗任はここで新しい鎧に着替えたという話があります。

江戸時代、よく知られた龍谷寺の片葉の葦にからめて、櫻川観世音の話が形づくられたとも考えられますが、世人の願いを一生に一回は聞き届ける観音さまとして信仰されました。

啄木の伯父と名僧伝

一六世・対月大和尚は石川啄木の伯父にあたり、詩人・啄木に多大な影響を与えました。生涯、対月を師と仰いだ啄木の父・一禎。対月の妹カツとの縁も、龍谷寺の対月のもとで役僧をしているときに生じました。

対月は武術にたけ、和漢の書を修め、和歌や茶道をよくした多才な人物。啄木の発心力の強さ、真剣な性行、背格好まで、父親よりも伯父さん似に見える、と金田一京助は記しています。

対月の前の一五世・泰中は、清貧高徳で世に知られた名僧です。報恩寺に昇住したのち、大授戒会には二八〇〇余人が参集。小学校の『郷土誌本』に「泰中さん」として掲載されました。

漢詩壇にその名を馳せた一九世・全霊大和尚は、生涯、受刑者の更正保護事業に情熱を注ぎました。

盛岡一高の教壇に立った二〇世・馨文大和尚は、野球部長として甲子園に出場。柔軟な思考で人々の敬愛を受け、県仏教会連盟会長として旧刊の『いわてのお寺さん』をまとめました。

仏像　櫻川観世音(盛岡三十三観音一二番)

樹　龍谷寺のモリオカシダレ

関連記事　盛岡の桜めぐり、啄木そのふるさと、お地蔵さまの信仰とご利益

盛岡の桜めぐり

形と色と老若の競演

○石割桜

盛岡の桜を代表するのは、やはり樹齢三五〇年の石割桜（国指定記念物）でしょう。その地はいま盛岡地方裁判所の前庭ですが、桜が芽吹いたころ、そこは盛岡城主の分家の庭。根をおろした場所はまんじゅう型の大きな自然石（長径七・五尺）の、落雷でできた割れ目でした。

厳しい環境にめげることなく、中心市街地で生きつづけ、いまも四月中旬になると、盛岡の桜の開花を告げています。

（石割桜略図37ページ）

○米内浄水場のしだれ桜群

盛岡市の北東、水道記念館（国登録文化財）のある米内浄水場の桜群は、五月の連休が終わるころ花開きます。その木々はヤエベニシダレヒガン（市保存樹木）。八重で紅、空に広がる大輪の花火のように咲くさまは、盛岡の観桜のフィナーレを飾るにふさわしいあでやかさです。場所は離れますが、上米内赤坂にもシダレザクラ（市指定記念物）があります。

（米内浄水場略図54ページ）

○報恩寺から公民館へ

お寺にある桜であげたいのは、推定樹齢二六〇年の報恩寺のヒガンザクラ。数十本の桜が花開く境内の山門のわきで、ひときわ人目を引きます。

報恩寺から歩いて約五分、盛岡バイパスから公民館への道の左側、歩道沿いにある愛宕町のベニシダレ（市指定記念物）は、二〇〇年ほど前、そこに建つ武家屋敷の庭木として植えられました。のちに、鉱山学者で俳人の山口青邨は、この桜のある屋敷で育ちました。

（盛岡市中央公民館略図87ページ）

○聖寿禅寺と祇陀寺の桜

盛岡人の花見でにぎわった場所のひとつに、榊山稲荷神社を含む「山桜山」があります。藩政のころ、そこは藩主・南部家の菩提所、聖寿禅寺の境内。聖寿禅寺は明治維新の廃藩という大きな試練に遭いますが、桜花は人々を楽しませました。

盛岡では、ソメイヨシノのあとを追って、いろいろな花が一斉に開花します。ちょうどそんな季節に、寺の下かいわいで注目されるのは、祇陀寺の鐘楼に寄り添って咲く、あざやかな紅色の八重桜です。その名もギダシベニ。まだ若木なので、これから地区のシンボルに育つことが期待されます。

ほかに、数ある寺院の桜花の中から、

珍しい木をあげてみます。

寺院にある希少の桜
・天然記念物

○龍谷寺のモリオカシダレ

大正九年、龍谷寺本堂前にある桜が盛岡の特産と判明しました。モリオカシダレと名づけられたこの木は、しだれ桜のように枝がたれ、花・幹・葉はソメイヨシノに似ています。短命の木なので、一六〇年の樹齢は、もうかなりの老木。いま、龍谷寺では子孫の若木を育てています。（国指定記念物）

○法華寺のモリオカシダレ

四月下旬、法華寺の山門をくぐると、本堂前に大きく広げた枝にあふれるような桜花が迫ってきます。その樹齢は七、八〇年、これから百年近く生きるとみられる〝壮年〟です。

龍谷寺のモリオカシダレは老木のため、法華寺のモリオカシダレが後継樹に指定されました。ただ、龍谷寺のものに比べてみると、花が大きいなど多少異なるため、植物学上、新変種の検討を要するという指摘もあります。

（市指定記念物）

○本誓寺のホンセイジシダレ

本誓寺本堂の右側にある桜は、幹が途中で大きく曲がり、そこから垂れた枝に、小さく清楚な白い花をばらばら咲かせます。花に派手さはありませんが、たいへん珍しい木なので、ホンセイジシダレの名がつけられました。

（市指定記念物）

藩公の奥方・源秀院殿の霊廟と「むかで姫伝説」

衆宝山 光台寺（しゅほうざん こうだいじ） 浄土宗

◆盛岡市名須川町八一四
◆電話 〇一九一六二二一四七六九
◆住職 第二五世 岩瀬英宏

故寺の山寺号で開山

十数年前、「日本の道一〇〇選」に選ばれた寺町通り。通りの西側に長く延びる塀の奥に、光台寺の本堂があります。二〇年ほど前、寺町通り（国道四五五号）の拡幅にあたり、光台寺は境内地二五〇坪ほどを供しました。

光台寺は、いまの山形県（羽前国北村山郡東根町）にある光台寺の住僧・導連社良心故関大和尚が盛岡に移錫して一宇を建立し、故寺の山寺号を称したことに始まります。織田信長が台頭した安土桃山時代の始め（一五七二年）のことです。

現在の光台寺は、福島県いわき市の専称寺を本寺としています。専称寺はかつての名越派の本山ですが、いまは浄土宗に統括されています。

開山後、江戸中期に二回（一七〇四年、一八一八～二〇年）火災に遭い、現在の堂宇は、幕末のころ（一八五九年）、良恩菩了のときに建立されたものです。

むかでの怨霊を鎮める

寺町を遊歩する修学旅行生が訪れるスポットのひとつに、源秀院殿御霊屋があります。光台寺の墓地の西側、大きな石塔（高さ約二メートル）がある箇所です。

●略図は87ページ参照

源秀院殿（於武）は、蒲生氏郷（がもううじさと）の養妹で、南部二七代の藩主・利直公の奥方になりました。「九戸政実の乱」のとき、蒲生氏郷は南部信直・利直の父子に援兵を送りますが、これを機縁に縁組みとなったのです。

於武の方は、光台寺の大阿一白和尚に深く帰依し、遺言によって光台寺に葬られました。この霊廟は、むかで姫伝説でもよく知られています。於武の方が出た蒲生家の祖が「むかで退治」で有名な俵藤太秀郷（たわらとうたひでさと）で、輿入れの際にいわくの矢の根を持参した、ということにちなむものです。

伝説によると、於武の方の霊廟近くに、俵藤太に射られたむかでの怨霊が夜な夜な出てきて悪さをし、いろいろ手を打っても収まらない。時の光台寺の住職が仏像を刻んで安置し、供養をして、ようやく鎮まったといいます。

それから、住職の徳を慕う参拝者があとをたず、南部家では寺領一五〇石を与え、立派な伽藍を建立して供養したとされます。

覚山地蔵と豆腐

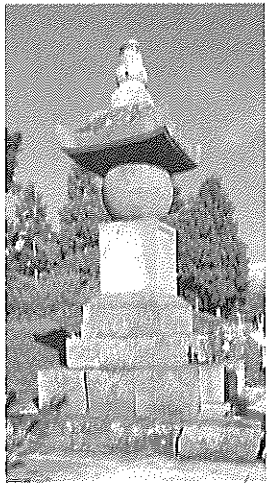
もうひとつ、伝説をもつ地蔵尊があります。かつては上田覚山にあり、近在の信仰を集めた覚山地蔵尊で、南部の殿様が豆腐屋のために刻ませたと伝えられています。この殿様が江戸吉原で辻斬りをして追われたとき、豆腐屋がかくまって助けたといわれ、この地蔵尊には、よく豆腐が供えられました。

光台寺の寺宝として、仏像では藤原様式をもつ「阿弥陀如来立像」と両脇侍、また、市内ではめずらしい「五劫思惟の阿弥陀如来坐像」があります。五劫とは一一億六千万年という長い時間のことで、その間、思惟にふけっていたために螺髪が伸びてしまい、頭がふくらんだ如来像です。

ほかに、珍しいものでは平福百穂の「ヤマトタケルの熊襲退治」を描いた絵があり、百穂は明治一〇年生まれなので、一八歳のときの作品です。

仏像・絵　阿弥陀如来立像（市文化財）、聖観世音（盛岡三三観音一三番）、如意輪観世音（同三三番）、六曲片双盛岡城下絵屏風（市文化財）

関連記事　お地蔵さまの信仰とご利益



螺髪が伸びた如来像（上）
源勇院殿霊廟（下）

三百数十年前の建物に残る賢治が使った部屋

池水山（ちすいさん） 徳玄寺（とくげんじ）

真宗大谷派

◆盛岡市名須川町一五―八
◆電話　〇一九―六二二―八二四九
◆住職（兼務）石田盛興

南部氏と同じ紋所

寺町通りを、光台寺のところから西に曲がると三寺が並んでいます。その真ん中、光台寺と吉祥寺の間に徳玄寺があります。

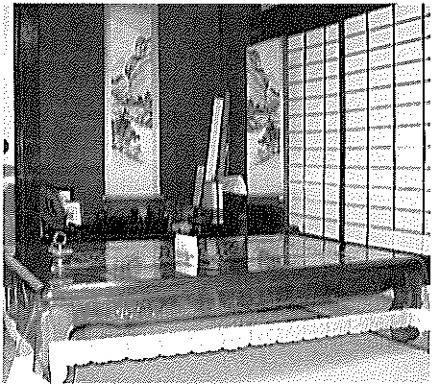
静かな落ち着きを漂わせる、瓦葺（かわらぶ）き屋根の山門と本堂。徳玄寺がこの地に堂宇を構えて三六〇年あまり、幸いにも火災に遭ったことがなく、幾度か改修をしたものの、往時の姿をとどめる建物として、残り少ない古い建物のひとつになっています。

徳玄寺は、室町時代から戦国の世に代わるころ、青森県五戸で開山しました。武士の石澤善次郎政邑は三戸郡五戸村に下り（一四六〇～六六年）、原野を開墾して、石澤村と号していました。やがて、善次郎は長男の善五郎を伴って京都に上り（一四六九～八七年）、本願寺法主・蓮如上人の弟子となり得度しました。法主から、善次郎は玄永、善五郎は保玄の法名をいただき、山号と本尊を授与されて五戸に帰り、一宇を建て遠近の人々を化導しました。

それからおよそ一五〇年、南部氏が三戸から盛岡に移るにおよび、江戸時代前期（一六二四～四四年）、玄海のときに現在地に移転しました。

開基の玄永（善次郎）の生国や氏素性は不明ですが、徳玄寺の紋は南部家と同じ九曜付き向かい鶴です。ここから、古くから南部氏とかわりがあったと推察されます。

●略図は87ページ参照



宮沢賢治が下宿した部屋

「餓掛けの松」の伝説

江戸時代の盛岡城下の地誌『盛岡砂子』に、徳玄寺の「餓掛けの松」の伝説が載っています。

その昔、みすぼらしい老人が如来の首を菅筵（すがむしろ）に包んで売りにきたので、

言い値の三貫文で買い取りました。翌日、庭の松の木に銭が掛かっていたので、忘れたものと思い預かっていましたが、とうとう現れませんでした。

その後、御首を持って東都に上った住職が、ぴったりの御体を見つけますが、その値が二〇金。名作の仏像であってもあまりに高いので、御首を離そうとしましたが、どうしても離れないので、やむなくその値段で買い取り、徳玄寺の本尊にしました。

この如来のご利益は著しく、祈願すると願いがかなうというので信心する者が多く、往時は参詣者でにぎわったといいます。そのころ、「銭掛けの松」を兼題にした俳句会がよく徳玄寺で開かれたらしく、その句が本堂に掲げられています。

伝説の「銭掛けの松」は、昭和初期まで参道わきに古株がありましたが、境内整備のおりに土中に埋まったので、そばに供養塔を建立しました。

その実から芽吹いた二代目が、いまでは樹齢約一〇〇年になりました。

なお、徳玄寺とは逆に、西隣りの吉祥寺には、「首なし弥陀」の伝説があります。

賢治、中学五年の下宿先

徳玄寺には、中学時代の宮沢賢治が下宿した部屋があります。

五年生になって寄宿舎を出された賢治は、清養院を経て、大正二年五月から徳玄寺に下宿し、盛岡中学を卒業しました。賢治が確固とした信仰をもったのは中学の終わりから盛岡高等農林学校に入ったころといわれ、寺院での下宿生活や、このころ寺町で体験した坐禅（報恩寺）や法話（願教寺）が大きく影響したとみられています。

関連記事　宮沢賢治の信仰

宮沢賢治の信仰

寺院に下宿した多感なころ

明治四二年（一九〇九）、一三歳の宮沢賢治は郷里の花巻を離れ、盛岡中学校（現盛岡一高）に入学しました。中学四年生の三学期、賢治は、寄宿舎の舎監排斥騒動にかかわって寮を追われ、卒業までの一年間、お寺に下宿しました。

最初、清養院（曹洞宗）に下宿し、五月に徳玄寺（浄土真宗）に移りました。このころ賢治は、近くにある報恩寺（曹洞宗）でたびたび参禅し、剃髪して登校したといいます。

多感な年ごろにあった賢治は、たくさんの文学書や宗教書を読み、両親の影響で幼時に抱いた仏教をさらに身近に感じ、深めていきました。

大正三年（一九一四）、中学校を卒業した賢治は、鼻の手術とその後の発熱で入院生活を送りました。そのあと、父の同意を得て盛岡高等農林学校への進学を決め、翌年一月から三ヵ月ほど教浄寺（時宗）に下宿して受験勉強に打ち込みました。そして、その年の四月、盛岡高等農林学校に首席で入学しました。

教浄寺にある賢治の詩碑には、次のように刻まれています。（巻）

僧の妻面膨れたる
飯盛りし仏器さへげくる
雪やみて朝日は青く
かうかうと僧は看経

生涯を貫く信仰をもつ高農時代

盛岡高等農林学校は、明治三五年、わが国で最初に盛岡に設置されました。岩手の最高学府であった高等農林には全国から学生が集まり、優秀な農業学徒を世に出しました。賢治も優秀な農学士の一人で、卒業後、研究科生として県内の土性調査に当たりました。

当時の高等農林の本館（国文化財）は、宮沢賢治のころのまま、今も岩手大学構内に建っています。

賢治は、このように学業に励むいっぽうで信仰も深めていきました。

中学の終わりから高等農林に入ったころ、願教寺（浄土真宗）の仏教夏期講習会に参加して、高僧・島地大等の法話を聞き、また、当時発行された大等編「漢和対照妙法蓮華経」を読んで大きな感動を覚えます。高等農林在学中、この教典を常に座右に置いて愛読

したことが、賢治の生涯を貫く信仰につながりました。（岩手大学―旧盛岡高等農林学校略図46㌻）

最期に残した言葉

浄土真宗の篤信であった賢治の父・政次郎は、賢治のことをこう言っていました。

「賢治には前生に永い間、諸国を巡礼して歩いた宿習があって、小さいときから大人になるまでどうしてもその癖がとれなかったものだ」

法華経を心のよりどころとし、それを自らの内で発展させていった賢治は、昭和八年、三八歳でその生涯を閉じました。

死を前にした賢治は、「今生で返せなかった恩は次の生、またその次の生で報じたい」と両親あてに書き残し、臨終の直前、父母弟妹に次のように遺言しました。

「国訳の法華経を千部印刷して、知己友人にわけて下さい。校正は北向さんにお願いして下さい。本の表紙は赤に。お経のうしろに、『私の一生のしごとは、このお経をあなたのお手もとにおとどけすることでした。あなたが、仏さまの心にふれて、一番よい、正しい道に入られますように』ということを書いて下さい」（森荘已池「賢治と法華経の関係」より）

これを父親が書き言葉にし、「後記」として記載されました。

「歯生いの弥陀」と呼ばれ信仰を集めた本尊

三峰山 吉祥寺 浄土宗

◆福岡市名須川町二五一二
◆電話 〇二九一六二二一四七九
◆住職 第二五世 武田真和

藩主・重直公茶毘の地に建立

寺町通りの光台寺から西側、三寺が並ぶなかで最も上盛岡駅寄りに吉祥寺があります。街に落ち着きを与えている瓦屋根と白い壁。本堂は昭和三年、二九世・豊民和尚のときに再建され、山門はそれ以前からの建物です。

吉祥寺は、青森県の良昌寺の徒弟・秀廓和尚によって開かれました。江戸時代前期（一六六五年）、秀廓が盛岡に来て念仏教化していたとき、藩主の南部二九代・重信公から、兄・二八代重直公の茶毘の地および供米地を与えられて堂宇を建立。山号は、戒名の即性院殿三峰大居士に由来します。

現在は光台寺の末寺となっています。

希少な仏像の「首なし」伝説

開山の秀廓が迎えたという本尊・阿弥陀如来像（像高九七センチ）は、

口もとから白い歯がみえる本尊の阿弥陀如来（部分）

●略図は87ページ参照

「歯生いの弥陀」とも呼ばれています。それは、口もとに螺鈿の白い歯があるからです。歯生いは全国的にも珍しく、わずか四体といわれています。伏した目には玉眼が入り、宋風を模して瞳に赤い輪が描かれています。やさしさと親しみが感じられるこの仏像は、作品としても優品で、鎌倉時代、慶派の流れを引く仏師が制作したものとみられます。光背と台座は、像よりおそく二世・良真のときに修造されました。

この本尊は、「首なし弥陀」ともいわれ、次の伝説があります。

吉祥寺開山の際に、本尊として青森の常念寺から当時めずらしい名作の仏像を還しますが、首がありませんでした。二世・良真のころ、みすぼらしい虚無僧に一夜を供したおりに、「我にそが首のみあり。されど、いま路銭乏しければ、二〇〇文にて取り換えられ

たし」というので、言うとおりにしました。翌朝、出立した虚無僧を見送っていた住職は、後ろ姿が忽然と消えるのを見、昨夜渡した銭が山門の松に掛けられていました。以来、阿弥陀さまは完成された姿になったといいます。

仏像招来にかかわる不思議

類似する伝説が隣接する徳玄寺にもありますが、住職によれば、先々代が書き残したものに伝説があった以外は一切不明で、仏像調査では、首が別物とは考えにくい、という鑑定だったそうです。

「それ以上に不思議に思うのは」と住職。改築前の間口五間の本堂にしては、ご本尊が大きすぎるといいます。仏像の招来に藩公の関与があったとも考えられるが、何も手がかりがないということです。また、大和法隆寺から勧進された如意輪観音絵像がありますが、これに関する経緯もつまびらかではありません。

仏像では、ほかに本尊の両脇侍を含む二五菩薩が伝来しています。これについても、近辺では、ほかに、住職の知るかぎりでは来迎寺（紫波町）にあるのみといいます。

なお、本堂を改築したのち、内陣の構造上、二五菩薩を従来の雲形からはずして安置しているので、いつか元の位置に戻したいということです。

余録　藩政のころ将軍家の菩提寺が浄土宗だった関係から、浄土宗の寺院には、徳川家の紋所の「葵」をつけることが許されているという。

仏像・絵・鐘　木造阿弥陀如来立像、紙本着色如意輪観世音菩薩像（盛岡三三観音二四番）、青銅製半鐘（三件とも市文化財）

法華経の「以信得入」にちなむ寺号

上行山（じょうぎょうざん） 以信院（いしんいん） 日蓮宗

◆盛岡市名須川町一八一一五
◆電話 〇一九―六三―四八九四
◆兼務住職 田口僧之

隠居所から庵へ

建物が所狭しと並ぶなか、大樹が枝を広げる敷地に以信院があります。法華経の「以信得入」にちなむ以信院は、法華寺六世・宗元院日普上人のころ、その末寺として開かれました。

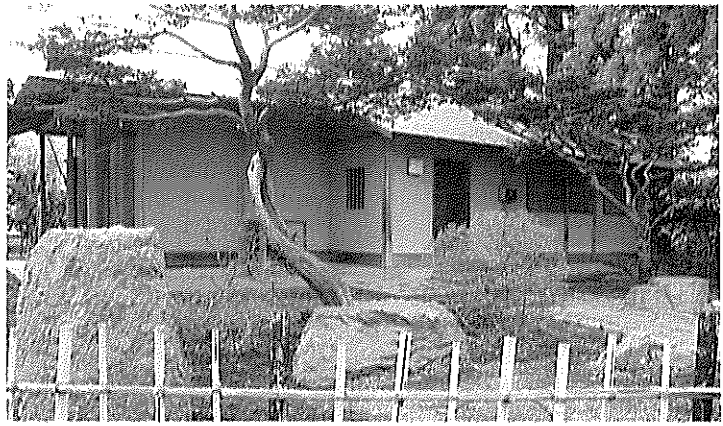
信仰あつい八日町（現本町通）に住む人が（石川新左衛門の先祖）、老齢になって自分の隠居所を庵とし、以信院得入日栖を名乗って初代庵主になったとみられています（一六八四～八八年）。開山は玄妙院日什聖人。

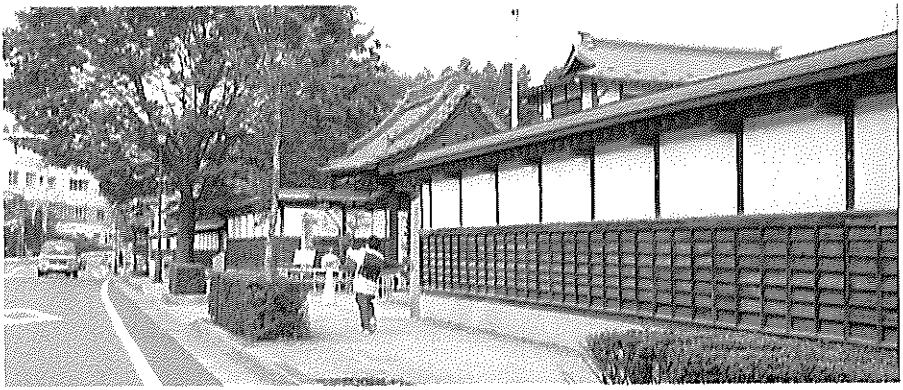
当時、盛岡城の建材料に周囲の土がとられて低くなり、田んぼの中に、以信院の池と木立がこんもり浮島のように遠望され、人々は、そこに雁（かり）が下りる情景を「那須川の落雁」として、盛岡三六景に数えました。戦後の改革で境内は狭まりましたが、大樹が往時をしのばせます。

かつて、以信院の庫裏には本堂のような極彩色の彫刻の欄間があり、その部屋に、ほぼ等身大の威厳に満ちた祖師像がありました。その日蓮聖人坐像は、五〇年ほどまえの法華寺の火災後、本寺へ還しました。

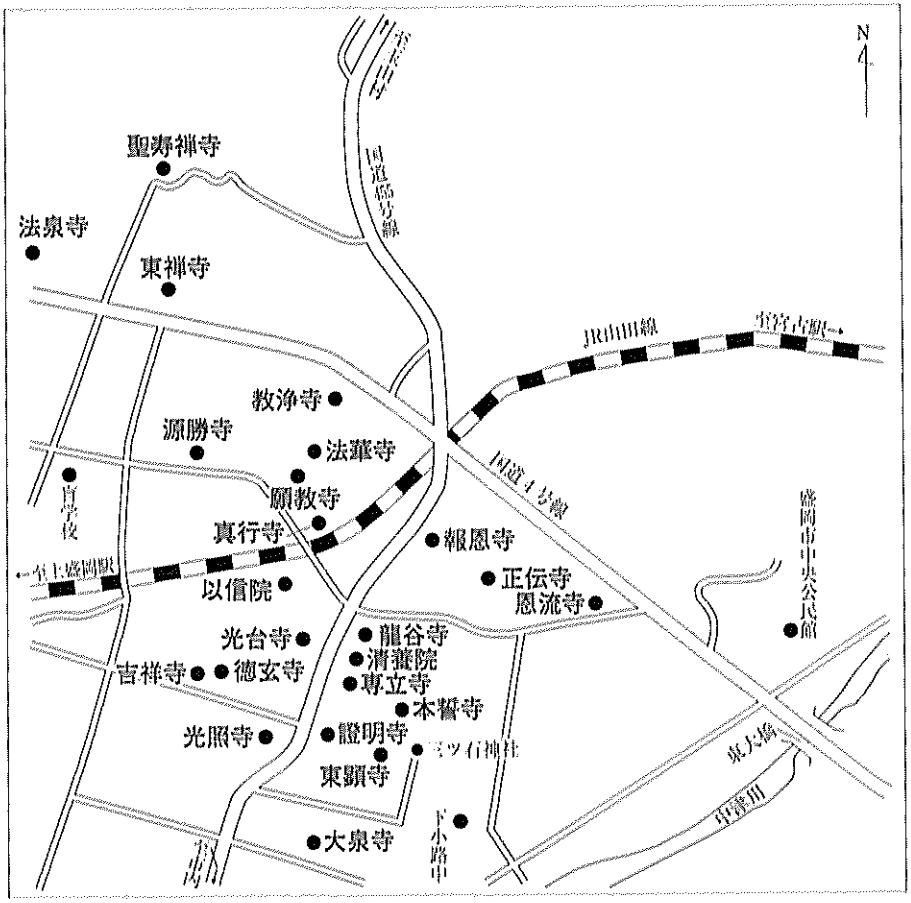
その庫裏を、一時期、学童保育所に供していましたが、老朽のため撤去しました。現在の本堂は、昭和五八年、法華寺二四世の隠居を機に秋田杉を使って数寄屋造りに新築。設計者は黒川紀章です。また、以信院には勝海舟の書があります。

もともと無檀家の隠居寺だったため、本寺が経費を扱っています。





盛岡の美しい街並みを代表する寺町通りは「日本の道100選」に選ばれ（昭和62）その数年後に盛岡市の都市景観総合賞を受賞している。



五百羅漢と三〇の末寺を有する名刹

瑞鳩峰山（ずいきゅうほうざん） 報恩寺（ほうおんじ） 曹洞宗

◆盛岡市名須川町三二―五
◆電話　〇一九―六五―四四一五
◆住職　第三八世　天藤全孝

●略図は87ページ参照

三戸から移り総禄寺院に

道路に面して建つ、仁王像のある報恩寺の山門。威風堂々のたたずまいは岩手・青森県三〇ヵ寺の本寺の存在感があります。

三門の形式は、寺域を悟りの境地として涅槃（ねはん）にたとえ、その場に入るための空・無相・無作の三解脱（げだつ）門を意味しますが、報恩寺は真門一門形式。中門は旧山門で、もと盛岡城内にあったとされます。

報恩寺は、室町時代の初頭（一三九四年）、南部家一三代・行守公によって開かれました。病を得て剃髪した行守は、父祖の菩提と、自身および一族主従の参禅道場として一寺を建立。報恩の名称は、中国では古来、父の菩提寺には「報恩」を、母には「慈恩」としたことに習ったとみられます。

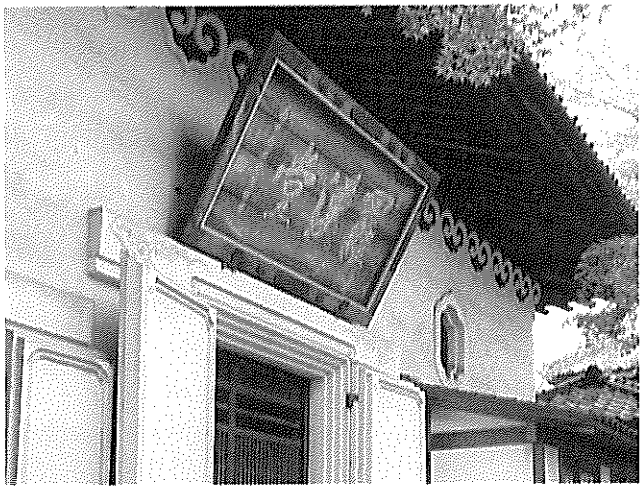
行守没後の衰亡、法光寺宿寺などを経て、江戸時代前夜（一五九六年）、新潟県柏崎市の香積寺五世・通山長徹を本師と仰ぐ久山舜桂が再興し、南部家から二〇〇石が給されました。

数年後、南部氏築城の地に神社仏閣が移されることになり、報恩寺も三戸から現在地に移転。以降、領内二〇〇余寺の総禄寺院に位置付けられ、盛岡五山に数えられる名刹となりました。

明治初頭には、家老の楢山佐渡の切腹（処刑）の場となり、維新を象徴する舞台となりました。

観光と修行道場として

報恩寺は、五百羅漢のお寺として有名です。本堂わきの羅漢堂に並ぶ羅漢像は四九九体。これだけ現存する木像は全国でも類がないといいます。



寺伝によると、羅漢堂内の中央にある毘盧舎那仏は弘法大師の作、本堂の釈迦牟尼仏・文殊菩薩・普賢菩薩の三像は聖徳太子の作とされ、もと大和の寺院にあったものを京都で譲り渡しを受けたとしています。

報恩寺の果たす機能は、檀家の葬祭にとどまるものではありません。五百羅漢は盛岡の観光名所として仏教文化を示し、伝統保持に寄与しています。日に三回、報恩寺の梵鐘の音は寺町の情緒をかもし、人々にやすらぎをもたらしています。

さらに、現在は修行僧こそいませんが、一般の修行道場として、週一回の坐禅会（土曜日一九時～）、月例の羅漢講（一五日）と修証会（晦日）が継続されています。

禅宗において、坐禅は修行と信仰の根本です。同じ禅宗でも臨済禅は壁を背に座り、問答もしますが、曹洞宗のそれは黙照禅といわれ、壁に面してひたすら黙々と行われます。

般若心経などの写経も、心を安らかに持ち人々の幸せを祈るという仏道修行のひとつ。修証会は、坐禅（修）とさとり（証）のための催しで、住職の法話が行われます。

本山の永平寺でも講師を務める住職の法話は、人々の心にしみる深い含蓄があります。さらに、機関紙「報恩」紙上で、「単なる言葉に終わらせることなく、高祖・道元にならい自分自身が生涯体しつづけ、日々の精進につとめる」と表明しています。

仏像　五百羅漢（市文化財）、十一面観世音（盛岡三三観音二七番）

建造物・鐘等　羅漢堂、梵鐘、蓮華八角柱餓死供養塔（三仏とも市文化財）

関連記事　「らかん公園」と飢饉と供養塔、盛岡の羅漢さま、宮沢賢治の信仰

盛岡の羅漢さま

著名な修行者・十六羅漢

羅漢という言葉は、ふだんあまり耳にしませんが、茶畑のらかん公園の「十六羅漢」、報恩寺の「五百羅漢」といえば、多くの盛岡の人はうなずき、親しみを感じます。

羅漢とは、梵語のアルハン（阿羅漢）の略で、煩悩を断ち、仏道を修行し、限りない功徳をそなえた人々のこと。十六羅漢は著名な仏弟子で、仏教の教えを護り広めることを誓って、釈迦の生前・没後に活躍しました。

唐の時代の僧、玄奘が教典を翻訳して中国に羅漢の名称を伝えると、十六羅漢が像や絵画に表現されるようになりました。

第一尊者から第一六尊者までのうち、第一のピンドラバラダージャは、日本の民間信仰でいう通称オビンズル様で、死者の安穏往生を導き、また、患部と同じ部分をなでると治癒するとされ、もてはやされました。

十六羅漢を描いたものは、盛岡市内では報恩寺、円光寺、永泉寺、東顕寺、祇陀寺、源勝寺に伝わっています。

報恩寺の五百羅漢

木造の五百羅漢でよく知られているのは盛岡市の報恩寺です。

五百羅漢像のある寺院は、全国に四八寺。東北では、青森県・秋田県・山形県に一寺ずつ、岩手県には三寺あります。前沢の西岩寺のものは残存数が二九体と少なく、遠野の大慈寺ゆかりのものは、住職の義山和尚が餓死者供養のために駒倉山麓の自然石に刻んだものです。

報恩寺のものは桧寄木造で、五百体のうち四九九体が現存しています。報恩寺第一七世墨樹一華和尚が大願主となり、四年をかけて享保一九年（一七三四）に完成。京都で七人の仏師によって像が造られ、盛岡に搬送したときの箱は台座に再利用されました。

数、状態ともによく、造立の年代や製作者も明確であること、また願主一代で成し遂げた例は少なく、ここから、墨樹和尚の信徳の高さと信徒の篤実な信仰心をうかがうことができます。

五百羅漢の五百は、多数を意味しています。そうしたことから各尊者に個別の名前はなく、報恩寺の像はその服装から印度僧、西域僧、支那僧を連想させます。珍しいものとして、額上に手をかざして彼方を望むマルコ・ポーロの像、威厳のある王者の風貌をしたフビライ・ハンの像があります。

築二六〇年余の羅漢堂

報恩寺の五百羅漢の収納は、本堂の西前にある方形の建物で、外側が十蔵仕上げになっています。

この羅漢堂は、享保一九年（一七三四）五百羅漢と同時に築造。このとき巨材が惜しみなく使われ、梁や柱などには、正伝寺との境、松坂の松の大木が用立てられました。当時の屋根は松皮ぶきで、土間はたたき仕上げというものでした。

造立の翌年、八月二〇日から一週間落慶供養が行われ、そのとき、近辺は出店や見世物小屋が繰り出してにぎわったということです。

完成から一一〇年余りのち、嘉永三年（一八五〇）から大修理が行われました。内陣天井には郷土の画人、初代狩野林泉による「八方睨みの龍」が描かれ、正面扉の上に一五代藩主南部利剛筆による扁額「羅漢堂」が掲げられました。

江戸期には虎を飼育した緑ゆたかな寺

養廣山（ようこうざん） 正傳寺（しょうでんじ） 曹洞宗

◆盛岡市愛宕町三―二三
◆電話 〇一九―六二三―八三六四
◆兼務住職 稲田泰麟

城建設のため現在地へ

寺町通りから盛岡市中央公民館方向に進むと、報恩寺に隣接して、緑に囲まれた正傳寺（正伝寺）があります。墓地には老杉が繁り、前庭も木立に覆われ、その中に、岩手・宮城・青森三県の遭難者二万九〇七三人を供養する「三陸海嘯遭難死者供養塔」（明治二九年）が建っています。

正伝寺は、室町時代の中ごろ（一四四四年）東顕寺二世・天叢舜賀大和尚が開山。前からあった天台宗の寺院を改宗したとされますが、これを事実上の開創としています。開基は不明です。

開創の地は見沙門淵でしたが、盛岡城を築くために現在地に移転。現在の堂宇は江戸時代中期（一八二七年）に一七世・淵拏道隆和尚のときに再建されています。

伽藍配置で多く見られるのは囲む形ですが、正伝寺は平屋で直線的に並んでいます。盛岡の大方の寺院が大火に罹災しているなかで、正伝寺に火災の記録はなく、堂宇の古い姿をとどめているのは貴重とされています。

動植物にちなむ逸話

二千余坪という正伝寺の広い境内には多種多様の植物があります。その中には、北限が岩手という芭蕉があり、本堂前に二十数本繁っています。この株の大本は皇居にあり、原敬が総理大臣のころ、菩提寺の大慈寺（盛岡市）に株分けされたものを、さらに分けてもらい、丹精して育てたものです。

ほかに、八月に花をつける娑羅双樹（ナツツバキ）があり、菩提樹もあります。釈迦が涅槃に入るや、時ならぬ白花をつけたという娑羅双樹は、四方に二本ずつあったことになぞらえ、双樹といわれるようになりました。

釈迦がその樹下で悟りを開いたことから、菩提樹（原語ボーディ・ドルマ）は仏教の聖木になり、実が数珠に用いられました。

動物に関する逸話もあります。

江戸時代初期（一六二四年）、大坂夏の陣が終わって盛岡への帰途、南部利直公が駿府（静岡）の徳川家康を訪

●略図は87ページ参照

ねると、カンボジアから献上された雌雄二頭の虎を与えられました。盛岡城内の鍛冶屋御門内に檻を作って飼っていましたが、あるとき、雄虎が逃げ出して多くの負傷者を出したため、やむなく射殺。この虎を正伝寺に葬るとともに、雌虎を正伝寺境内に移しました。これにちなんで「龔虎山」と号しますが、虎が死んだあと、現在の山号に改めました。

海にゆかりの魚藍観世音

伝来する仏像のひとつに、「秋葉山大権現」があります。これは観音菩薩の応化身で、手には剣と索、両肩に翼をつけ、白狐に乗り、火炎に包まれた像です。秋葉さんというと、昔から刀難・火難・水難に霊験あらたかな天狗として広く信仰されてきました。

また、内陸にはめずらしい、海上安全や大漁祈願などに功徳のある魚藍観世音（陶器製彩色）があります。

墨蹟では、正伝寺に墓がある山崎鯢山の作品を多く所蔵しています。鯢山は下閉伊郡津軽石に生まれ、出府して儒学と詩を学び、幕末に藩学作人館の助教になりました。ほかに、明治一一年に盛岡に生まれ、外交官として幾多の苦難を乗り越えてきた出淵勝次の「無一物」という禅語の書があります。

観音様の応化身「秋葉大権現」は火難・水難などの霊験で信仰された。

仏像　魚藍観世音（盛岡三三観音二八番）

忠臣・栗山大膳の碑、淑子菩薩像が並ぶ境内

開田山（かいでんざん） 恩流寺（おんりゅうじ）

曹洞宗

◆盛岡市愛宕町二一一〇
◆電話 〇一九―六二―二一八一
◆住職 第二四世 豊巻宗道

藩公も眺めた庭

寺町の東端、盛岡バイパス近くに恩流寺があります。境内にある大きな岩は「鞍懸石」といわれ、約九五〇年前の「前九年の役」のとき、進軍してきた八幡太郎義家（源義家）が愛馬の鞍をかけて休んだという伝えがあります。

恩流寺が檀家をもつようになったのは明治以降で、藩政のころは格式ある士族寺でした。当初、報恩寺住職の隠居所（別荘）だったものを、江戸時代前期（一六…年）、報恩寺七世・慶室恕悦和尚が開山。開基は南部信行公と伝えられています。

風情ある日本庭園を眺めつつ、信行公が碁や将棋を楽しんだといわれ、開山当時は社交場として使われました。近年、都市化によって由緒ある庭園の規模も縮小され、バイパスの開通によって庭の斜面と裏山が二分され、地勢も大きく変わりました。

口に紅をさした淑子菩薩（部分）

●略図は87ページ参照

三〇年前の飛行機墜落事故

恩流寺の裏山、かつて法輪院があった地に南部藩お預けの身であった栗山大膳の墓所があり、恩流寺の境内に大膳の碑があります。

福岡城主黒田家の家老として藩政改革をすすめた大膳は、藩の危機を救うため、政道の乱れを顧みない主君を幕府に直訴。この話は講談や芝居の題材になり「黒田騒動」として世に知られました。碑文は、同じ配流の身だった方長老によるもので、大膳の忠節をしたためています。

ほかに下田将監京極丹波の墓がありますが、なぜ丹波国宮津城主の墓が盛岡にあるのかは不明です。

大膳の碑と並んで、約三〇年前の悲惨な事故を物語る「淑子

「薬師像」があります。

昭和四六年夏、雫石町で全日空機墜落事故が発生し、一瞬にして一六二人の命を奪いました。このとき恩流寺に安置した三〇体の遺体の中に、札幌市の堀江淑子さん（二七歳）がいました。ご両親が供養の石仏（二・七メートル）を建立すると、この仏像をだれからともなく淑子薬師と呼ぶようになりました。

移管になった六地蔵尊

恩流寺から少し東進してバイパスを横切ると、盛岡市中央公民館（旧南部家別邸、御薬園跡）になります。

この辺りを「盛岡御城下図」で見ると、恩流寺と御薬園の間に、今はない四寺院が描かれています。明治はじめ廃仏毀釈の波をうけて廃寺となるとき、天台宗の惣禄・愛宕山法輪院（広福寺）にあった六地蔵尊が恩流寺に移管になりました。

恩流寺に伝わる仏像や絵の中でも、この六体の地蔵尊（各九三センチ）は美術的に見ごたえがあります。縁起は不明ですが、作者は同一人とみられ、法衣部分に、蒔絵の花模様がほどこされています。

ほかに、秘話をもつ柱観世音があります。江戸中期、米内川の洪水で観音様を流失したあと、浅岸に住む人の枕元に観音様が現れ、姿を見たいなら床柱にとっておいた角材を削るようにというお告げ。翌日、床柱を削ってみたところ、節目が観音様の姿に見えたので恩流寺に納めたといわれるものです。また、南部藩唯一のお抱え釜師、小泉家三代・仁左衛門清尊の作（一七〇九年）の半鐘が伝来しています。

仏像・鐘　柱観世音（盛岡三三観音二九番）、半鐘（市文化財）

城下盛岡と寺院

五〇年で盛岡二三町が完成

盛岡築城（一五九八年〜）とともに城下町建設が進められました。

城下は同心円的な「五ノ字」の町割にされ、城を中心に、上級武士の町、商人や職人の町、平のさむらいの町、街道のはずれには上田組丁、仙北組丁といった足軽（同心）の町がつくられました。

城と武家屋敷と街道の整備に約四〇年かかりますが、並行して、二戸町を皮切りに、それぞれの出身地名を町名にした町人街が形成され、五〇年ほどの間に盛岡二三町ができました。

城下の整備とともに中津川には橋が架けられ、水害防止のために、北上川に堤防を築きます。当初、北上川は、いまの大通付近に大きく湾曲していて、御田屋清水（サンビル前）のところで直角に曲がって城の西側を流れていました。この流れを、ちょうどいまの開運橋から雫石川の落合まで直進するように堤防を築き、さらに、中津川の落合から下流にも築堤し、城下を拡大しました。

江戸時代中期の盛岡の地図をみると、北上川の東側は現在とほぼ同じです。盛岡の都市は、二五〇年前にほとんどできていたことになります。

寺院の移転と配置

南部氏が盛岡に入るとき、ゆかりの寺院も移されました。先祖の菩提である東禅寺は遠野から、永福寺・報恩寺・教浄寺・聖寿寺はそれぞれ旧地の三戸から移転しました。これを盛岡五山といい、高い格式を持っていました。

ほかにも、紫波郡から本誓寺、光照寺、源勝寺をはじめ、今は廃寺となった数ヵ寺が移転しました。

小さな祈願寺は別として、檀家をもつ寺は基本的に城郭（堀の内側）の外側、寺町の北山などに置くとされました。このため、南部氏以前からのお寺も再配置されました。東顕寺はいまの県庁付近から、光台寺もいまの岩手銀行本店付近から移動し、祇陀寺は穀町から寺の下に移ります。

ほかの寺の下寺院群は従来の場所でお堀の外側になりますが、お寺参りのときは惣門を出て、お堀端を登って行くかたちになりました。

配置するとき、意図的になされた寺院があります。城の真北の聖寿寺と、鬼門の方向に配置され城下を守るとされた山岸の永福寺です。

とくに真言宗・大和の長谷寺の流れをくむ永福寺は、正月をはじめ城中の

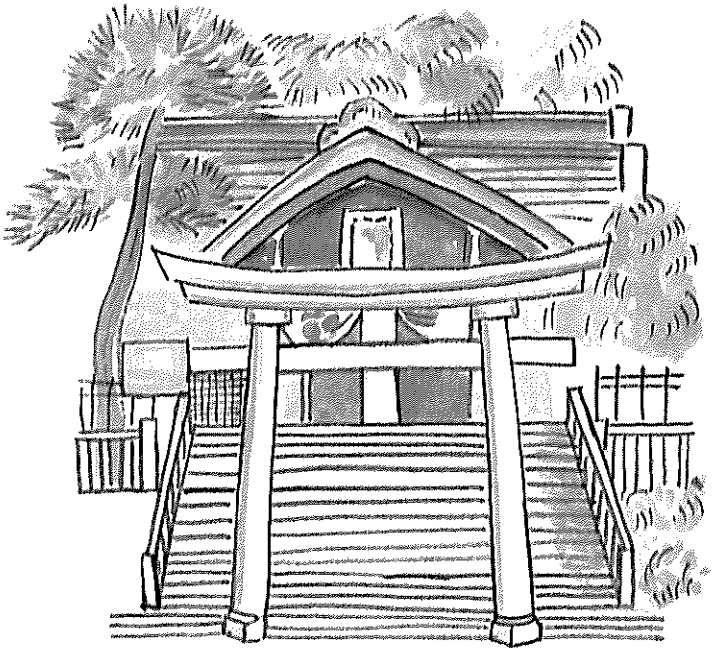
あらゆる祈願やお祓いを取り仕切る寺に位置づけられ、それが三〇〇年以上続くことになりました。

藩政下のお寺の役割

盛岡築城とお寺は深いつながりがありました。それは、先祖供養の場であり、学問所だったこと。また、徳川三代以後になると、キリシタン禁制とのかかわりから、人々に檀家寺を決めさせ、寺請け制度を確立するという藩政上から、お寺とは切っても切れない縁がありました。

中世までのお寺は、檀家を持たないお寺もあり、庶民の修行の場になっていましたが、近世になると檀家を持ち、お寺の境内に墓地をつくり、祭祀に付す場所もできていきました。

このような寺院のほか、藩の宗教政策として、また、行楽の地として、八幡宮が造営されました。延宝九年（一六八一）八月に最初の祭礼が行われ、それから三〇年ほどすると、城下二三町から山車や練物などが出て、いっそう盛んになっていきました。



（盛岡八幡宮略図37㌢、祭りの山車行事は市文化財）

南部氏を開基とし、藩公とその一族が眠る

大宝山（たいほうざん） 東禅寺（とうぜんじ）

臨済宗妙心寺派

◆盛岡市北山二丁目九―一七
◆電話 〇一九―六六―二三六四六
◆住職 第二四世 石崎正和

裏山一帯に広がる墓地

江戸時代から三百数十年間、森閑としていた寺町は、盛岡バイパスや国道四五五号によって環境が激変しました。東禅寺も大きな影響を受け、いま、山門は盛岡バイパスに面しています。

しかしながら、本立に抱かれた裏山の広大な墓地は静寂で、西側の南部利直公の墓を基点に、藩公と一族の墓が、ぐるり山をめぐるように配置されています。ちょうど反対側の東側には、利直公の側室で、二九代重信公の実母・松子ゆかりの花輪地蔵があります。

近代では、東京駅や旧岩手銀行本店の設計に加わった葛西万司や、鉱山学者で俳人の山口青邨が葬られています。

また、藩政時代の庶民にかかわるものでは、天明の飢饉による餓死者の回向に建立された千人塚「南無地蔵願王」が、バイパスの南側にあります。

盛岡五山のひとつ

東禅寺の開創は、約六五〇年前にさかのぼります。鎌倉時代から南北朝時代になったころ（一三三四～三六年）、南部氏を開基とし、無俣妙什和尚が遠野附馬牛に開山。南部家一三代・守行公から関係が始まり、寺伝によれば、守行公が大槌氏との戦いで没したとき、開山師が焼香師を勤めました。

二七代・利直公死没に際しては二世・大英和尚が三戸に赴いて焼香師をし、

●略図は87ページ参照

東禅寺に葬られたほか、三一代、三五代、三七代、三九代藩公の墓が建てられました。

二九代・重倍公が盛岡に移ったとき、東禅寺も現在地に移転し（一六三三年）、二四〇石を供されて、名刹の盛岡五山に名をつらねました。

遠野にある東禅寺の旧地は、本来の禅宗（臨済宗）の伽藍配置をとどめるまれな遺跡といわれます。

往時について、「無侭和尚より数代ノ後住探元和尚ノ時、寺領千石」（『篤焉家訓』）とあり、奥州二州諸山の筆頭だったが兵火で焼亡（一五九〇～一六一〇年）、のちに盛岡に移ったとあります（『和漢禅刹次第』）。

なお、現在は、臨済宗本山・妙心寺の末寺となっています。

弘法大師の筆と伝える写経

本堂には、約八〇〇年前のものと伝えられる須弥壇があり、本尊の釈迦三尊が安置されています。この木彫の仏像は遠野の悲劇の豪族、阿曽沼家の娘・妙心が寄贈したものです。中尊は三尺（約九〇センチ）の坐像で、運慶一三代・仏光春日作といわれ、その彫りは鋭く、力強さがあります。

東禅寺に伝わる古記録には、おびただしい寺宝が載っていますが、明治の廃仏毀釈のあおりで、多くを散逸しました。

力強い彫りの本尊・釈迦如来

伝世の主なものに、利直公夫人の念持仏という十一面観世音。旧地から出土した無垢薩埵（むくぼさつた）の鉄像。弘法大師・空海の筆になる般若理趣経があります。

無垢薩埵は菩薩とほぼ同義で、鉄像（全高一八センチ）は開山和尚の看経仏ではないかといわれています。

弘法大師筆の経文については、次の寺伝があります。高野山釈迦院の和尚の夢に弘法大師があらわれ、写経の残りを無侭和尚に依頼するよう告げました。無侭は高野山に上ってこれを完成し、返礼に、理趣経（弘法大師と無侭による写経）を授与されました。伝えの真偽はともかく、貴重な古記録です。

その経典や伝来の仏像から、当初、東禅寺は真言宗だったとみられます。

供養塔　南無地蔵願王（市文化財）

関連記事　お地蔵さまの信仰とご利益、「らかん公園」と飢饉と供養塔

累代藩主の墓がある南部家の菩提所

大光山（だいこうざん） 聖寿禅寺（しょうじゅぜんじ）

臨済宗妙心寺派

◆盛岡市北山二丁目二二一五
◆電話 〇一九一六六一一三六四一
◆住職 第三八世 岡 祖泰

藩公の墓から散策路へ

聖寿禅寺から裏山一帯は、旧桜山と呼ばれ、一般に親しまれてきました。境内にある盛岡藩士の戊辰戦死之碑のあたりから石段を登ると、木々に抱かれて南部氏累代の墓があります。その中に、大正一〇年、鎌倉から移した南部家の始祖・光行公の墓があり、鎌倉時代の代表的な五輪石塔といわれています。

林間を進むと、高松ノ池と要石山を結ぶ北山散策路に合流します。この北山というのは、盛岡城の北を意味します。京都御所と比叡山にならい、寺院は城を守護する意味をもって配置されますが、城の真北に置かれたのが、南部家の菩提寺・聖寿禅寺でした。

藩政のころ五重塔を建立

聖寿禅寺の歩みは、そのまま南部氏と重なります。源頼朝の平泉攻略に加わった甲斐（山梨県）の南部光行公は、軍功によって奥州に領地を得ました。鎌倉時代のはじめ、南部二代・実光公は、父光行の菩提を弔うため、青森県南部町に寺を建立。開山は特賜両朝国済三光国師で、寺号を三光庵（三光寺）と称しました。

これを聖寿禅寺としたのは、江戸時代前期（一六七二～八〇年）、大道生安禅師のときです。中興に迎えられた大本山の京都花園妙心寺二四二世の大道和尚は、沼地だった上田地区の開発をはじめ、城下の時鐘（内丸所在・市文化財）を構想した人物でもあります。

聖寿禅寺は、南部氏の築城に伴って盛岡に移転し、いまの岩手大学農学部付近（高源寺）の仮本堂を経て、現在地に堂宇を建立。寺領五〇〇石を行し、盛岡五山にあげられました。

●略図は87ページ参照

法隆寺の夢殿を模した八角形の本堂

境内には仁王門（長福院所在）のある大伽藍や諸堂が建ち、藩が二〇万石になると（一八〇五年）、江戸の谷中の塔を模した五重塔が建立されました。城より高い塔は遠くから目印とされ、城下の図面にも描かれています。

かつては五重の塔だった千体地蔵堂

明治からの苦難

明治の廃藩置県、廃仏毀釈は聖寿禅寺にとって激震となりました。諸堂は壊され、方長老の作庭という名園・緑風苑も荒れ放題。かろうじて残ったのが五重塔の最下層部でした。これが現存する千体地蔵堂です。

再建への道のりは長く、本格的な本堂再建まで、約九〇年を要しました。日本女子医大学長を務めた久慈直太郎氏の寄進により、かつての本堂の地に、法隆寺の夢殿を模した八角堂が建ったのは昭和三四年でした。

荒廃していた庭園は榊山稲荷神社の宮司によって修復され、市民に親しまれる名勝地となりました。

余録　南部の四霊（始祖光行、二六代信直、二七代利直、三六代利敬）をまつる桜山神社は、もともと城内にあったが、城の破却により移転を余儀なくされた。加賀野妙泉寺山から北山へ移され、明治三二年に城のあった地へ戻った。聖寿禅寺付近の旧桜山の呼称はここからきている。戦後まで、檀家は約三〇家。旧桜山霊園として一般に墓地を供するようになったのは、ここ二〇年くらいという。

仏像　マリア観音像（市文化財）、聖観世音（盛岡三三観音一七番）

社会事業　聖光保育園（社会福祉法人）

関連記事　盛岡の桜めぐり、盛岡ゆかりの名僧、お地蔵さまの信仰とご利益

中井汲泉の画碑がある方長老ゆかりの寺

大智山（だいちざん） 法泉寺（ほうせんじ）

臨済宗妙心寺派

◆盛岡市北山二丁目一六一八
◆電話 〇一九一六六一四九八〇
◆住職 第一五世 目時祐行
管理者 福田 玄

臨済宗の三ヵ寺

数十年前、国道四号が北山を通過したとき、三ヵ寺が盛岡バイパスの北側になりました。上田側から法泉寺、聖寿禅寺、東禅寺です。盛岡市にある臨済宗五ヵ寺のうちの三寺が、バイパス沿線に並ぶかたちになりました。

中世から藩政時代、武士階級の多くが禅宗（臨済宗、曹洞宗、黄檗宗）に帰依しますが、なかでも、上層部に信仰されたのが臨済宗でした。法泉寺を含む三ヵ寺とも南部家とゆかりが深く、城を守護する意味合いから城の北側に置かれ、居城に正面して建立されました。

法泉寺は、江戸時代前期（一六二四～四四年）、東禅寺の住職・東岩によって開かれました。それから数十年を経て（一六七一年）、南部二九代重信公が、三〇代行信公の母堂の菩提のために寺を建立（再興）して、法泉寺と称したとされます。

藩政時代、法泉寺の付近に、幕府からの預かり人だった学僧・方長老の居所がありました。二四年間にわたる方長老の滞留中、藩主・重信公をはじめ諸公は多くのことを学び、藩に多大な功績を残した人物です。そのひとつに造園があります。法泉寺の庭も方長老の作庭術によるもので、盛岡三大名園のひとつとして知られました。

●略図は87ページ参照

バイパスと往古の道

南部氏の居城地以前、盛岡を不来方（こずかた）といったころ、盛岡を通過する幹線道路は北山を通っていました。北から通

日本画家・中井汲泉の画碑

んできた奥州街道は、北上川や中津川などの河川が屈曲する低地の湿地を避けて迂路を東にとり、北山の山麓に沿って東へ進み、東部の岩山山麓の丘陵地から南下して北上川を渡り、仙北町方面に抜けました。大街道筋には古い松並木があったことから、北山付近に松坂の地名があったとされ、「前九年の役」で破れたあと安倍宗任が都に連行されるようすを伝える着替ヶ島（龍谷寺）や、源義家が愛馬の鞍を掛けて休んだという石（恩流寺）の伝承があります。奇しくもその道筋は、現在のバイパスの路線と軌を一にしています。

さらに今後、法泉寺に至近の場所を、国道四五五号と国道四号を結び、さらに市内に通じる新路線が通過します。完工し開通すれば、周辺の環境はまた大きく変貌するでしょう。昔も現代も、北山は道路とのかかわりが大きな地域といえそうです。

三五〇年後の顕彰碑

法泉寺の境内に入ると、多くの碑が目を引きます。天明と天保の飢饉供養塔、一字ずつ経文を墨書した小石が奉納されている一石一字妙典の経塚（一七二六年建立）があり、中でも斬新なのは、日本画家・中井汲泉の画碑です。

京都出身の汲泉は、雪の美しさに憧れて盛岡に住むこと二七年、盛岡中学（現盛岡一高）で二四年間、教壇に立ち、戦中戦後の地方文化に貢献し、岩手日報文化賞を受賞。この画碑は、教え子や知己によって三〇年ほど前に建立されました。また、方長老を顕彰する記念碑が、昭和六〇年、「方長老…五〇年まつり」に建立されています。

お寺につづく墓地には、江戸時代からの儒者、剣客、歌人、俳人、医師、画工、書家等の墓があります。そこには、南部藩お抱えとなった郡士八幡城主・金森頼錦（一七六三年没）、天覧相撲の名行司・長瀬越後守藤原定道（一八三九年没）、盛岡藩の代表的画人・田鎖鶴立斎（光龍、一八二九年没）が葬られ、戦後では、洋画家・五味清吉（一九五四年没）の墓があります。

関連記事　盛岡ゆかりの名僧

盛岡ゆかりの名僧

――方長老、島地黙雷、島地大等――

知識を伝授した流人・方長老

〝南部藩お預け〟という、いわば罪人として、四年間盛岡に逗留した高僧がいました。その人は、法界寺（北山）の門前の庵で暮らした方長老で、無方規伯、芳長老、玄法、無法、白雲、海援などと号しました。

徳川家康の時代、朝鮮国との国交に関する国書偽造によって流罪になりましたが、幕府からお金や扶持がつき、南部氏にも厚遇されました。方長老を慕って遠方から来た人も多く、その中には、原敬の先祖や木津屋商店の先祖もいます。

博識だった方長老から盛岡の諸公は多くのことを学びました。濁酒から清酒を醸すこと、アマドコロを使った黄精の製法、築庭（法泉寺・聖寿禅寺ほか）、牛乳飲用などの栄養改善、殖産興業を勧めたのも方長老です。

方長老は、晩年の七一歳で赦免となり、江戸に帰りました。

近代仏教を救った黙雷

日本の仏教の歴史で、明治四年（一八七一）から一五年ほどを「黙雷時代」という呼び方があります。黙雷とは、後年、願教寺（北山）の住職となった島地黙雷です。

江戸時代の終わりから明治の始めにかけて、日本は神の国であり、神様をうやまって天皇をたっとぶのは日本国民のつとめとされ、幕府の政策下にあった仏教が日本各地で攻撃にさらされました。廃仏毀釈といわれるように、寺院や仏像が焼かれたり、寺院に僧がいなくなるような状況に陥りますが、このとき黙雷は、仏の教えこそが人々の生きるともしびになるとして、仏教各宗派の独立と自由な布教を認めさせて仏教を守り、人々に光明を与えました。

黙雷は、山口県の山奥にある小さなお寺の子に生まれ、厳格な父親に仏教や学問の教えを受けます。京都にのぼって浄土真宗の本願寺を改革して盛りたて、さらに、時の政府に廃仏政策を変えるよう働きかけます。

外国の宗教を学ぼうと、ヨーロッパやギリシャ、インドを訪ねた黙雷は、神仏分離、信教の自由、政教分離といった近代的な考え方を打ち出しました。

黙雷五五歳の明治二五年（一八九二）、願教寺の住職となり、七四歳で没しました。願教寺に、次代の住職・大等の墓と並んで黙雷の墓があります。

学問と修法をきわめた大等

大等は新潟県に生まれ、天台宗本山の重職にあった父の厳訓のもとで成長しました。若いころからその学識は人に知られ、仏教学説の深奥を究めただけでなく、真言の密行を修し、一代の宗師と仰がれる高僧でもありました。昭和二年（一九二七）、五十代半ばで没し、その墓は願教寺にあります。

島地大等は、明治から大正にかけての日本仏教哲学の大家で、東京大学教授として、東大をはじめ各大学で仏教教理史を講義しました。

黙雷の一女と結婚し、黙雷が隠退したあと願教寺の住職に就任。明治三九年（一九〇六）、当時の住職・島地黙雷とともに夏期仏教講座を開いたのをはじめ、仏教婦人会の創立、「むつみ幼稚園」の開園など、仏教教育に功績を残しました。

夏期講座は、毎年八月に一週間開かれ、宮沢賢治が、「本堂の高座説ける大等がひとみに映る貴なる薄明」と歌ったように、夜明けまえの一時間、灯明のなかで行われました。仏の道、日本や西洋の文学の話に、多くの人が救われただけでなく、その考えを深めて世のために尽くす人も出ました。

「おあみださん」に奉納された裸まいり

擁護山（ようござん） 教浄寺（きょうじょうじ） 時宗

◆盛岡市北山一丁目一三一一五
◆電話 〇一九一六三一七七〇六
◆住職 第五七世 松尾正弘

自害の南部氏 一〇代をまつる

寺町通から北山に曲がった寺院群のなか、道路から奥まって教浄寺があります。広い境内地から保育園児たちの歓声が途絶えると、後方がバイパスとは思えない静けさです。

石段を登った本堂前には宮沢賢治の詩碑、そして、秋には見事な紅葉を見せる古木のイロハモミジが参詣者を迎えてくれます。

教浄寺は、鎌倉から南北朝時代へ移るころ（一三三三年）、南部一〇代・茂時公の菩提のために、弟の南部一一代・信長公が三戸に開創しました。鎌倉幕府滅亡に際し、茂時は北条高時に殉じて自害し、その亡骸（なきがら）は、当時、新しい道場だった清浄光寺に葬られました。清浄光寺は、神奈川県藤沢市にある時宗総本山で、遊行寺（ゆぎょうじ）の通称で呼ばれています。

こうした背景から、茂時の法名にちなんで寺号を教浄寺とし、覚阿湛然和尚を開祖に、清浄光寺の末寺として開かれました。

三戸での二八〇年を経て、江戸時代前期（一六一二年）、三一世・元鵬軒其阿上人のときに、南部家に関係する寺院として現在地に移転。以降、二〇〇石の寺領を有する寺として、盛岡五山の一つに名をつらねました。

●略図は87ページ参照

阿弥陀信仰の高まり

教浄寺には、鎌倉中期の制作とされる阿弥陀如来像（高さ三六センチ）が伝来しています。玉眼入りのこの木造は、恵心僧都が三礼して一刀を用いたとされる入念の作で、南部家代々の守護尊とされていました。

盛岡に移るにあたり、南部利直公がこれを教浄寺に奉納。入仏式を記念して一七日間開扉し、人々の参詣を許したということです。通常は、年一回の祭日にご開帳し、ほかは秘仏とされています。

教浄寺の属する時宗は、念仏宗のひとつです。始祖の一遍上人は、名号の「南無阿弥陀仏」を唱えることを説きつつ庶民に念仏札を配り、踊りと念仏を組み合わせ、諸国をめぐって修行と説法の一生を終えました。

阿弥陀信仰は身分の貴賤をこえてひ

左に宮沢賢治の詩碑がみえる境内

ろまり、「おあみださん」と呼ばれ、人々に崇敬されました。教浄寺の祭日ともなると、そのにぎわいは大変なもので、江戸中期には、庶民の信仰行事の裸まいりも奉納されました。

これが盛岡周辺の裸まいりの始まりと伝えられています。

殿様も下馬して参詣

教浄寺の山門には、由緒ある由号額があります。江戸中期、遊行四九世・一法上人を介して賜った勅額です。当時、参道入り口（一一五メートル前方）に下馬札を立て、表敬のため藩主みずから馬を下りて参詣しました。

現在、山門の前にはフェンスがめぐらされ、ふだんは閉じています。これについて住職は、崇敬の精神を引き継ぐという意味合いから、と話します。

また、教浄寺には皇太子妃・雅子さまの先祖、由屋家の墓があり、平成一五年四月、由家他人海軍大将の御霊を合祀し、顕彰碑を建立しました。

余話　父親に盛岡高等農林学校の受験を許された宮沢賢治は教浄寺に下宿し、本堂の片隅で一心に勉強をしたという。下宿中に詠んだ詩が文語詩稿五〇篇に収められており、賢治は死の数日前まで推敲を繰り返したとされる。

仏像・鐘等　阿弥陀如来立像、付・厨子、一遍上人立像、真教上人立像、納札、半鐘（六件とも市文化財）、聖観世音（盛岡三三観音一九番）

社会事業　淳友保育園、淳友乳児院（社会福祉法人）

関連記事　お寺の祭り・裸まいり、宮沢賢治の信仰、お地蔵さまの信仰とご利益

千三百年を経た県内最古の聖観音像

円峰山（えんぽうざん） 源勝寺（げんしょうじ） 曹洞宗

◆盛岡市北山一丁目一三一五
◆電話 〇一九―六二―二四八七九
◆住職 第三五世 石亀良孝

●略図は87ページ参照

紫波町土館の源勝寺跡

鯱（しゃち）のある赤瓦の源勝寺の山門。市の環境保護地区になっている北山寺院群の景観を代表するように、山門は通りに面して建っています。

源勝寺はもと紫波町にあって、旧地の土館源勝寺跡（町文化財）は、寺館とも源勝寺館とも呼ばれ、郭（くるわ）や空堀、土塁が築かれていて、館の機能を備えた造りになっています。

源勝寺は、石清水氏（開基）により、天台宗の寺院として開かれました。曹洞宗に改宗開山したのは、室町のころ（一四五四年）、雲林寺（静岡県森町）の四世・劫外長現和尚が東北を布教したおりに、斯波氏の帰依を得て、紫波郡土館にあった源勝寺に入ったときと伝えられます。

曹洞宗布教六系統の一つ

斯波氏と石清水氏の菩提寺としておよそ一三〇年。三戸の出身で南部二六代・信直公と親交のあった九世・天室清耽和尚は、斯波氏が滅亡したのち南部氏の庇護を受け、千刈りの寺田を給与。二七代・利直公のときに紫波の主要寺院とともに盛岡城下に移転し、寺領二〇石を授与されています。どちらも墨印状が現存しています。

当初、光台寺隣接の地に立地しましたが、その後、利直公の奥方（源秀院）の御霊屋造立のため、法華寺とともに現在地に移転しました（一六六三年）。

いまの本堂は約二四〇年前の建造物（一七六三年）で、火災で焼失した寺院が多いなか、古い伽藍のひとつに数えられています。

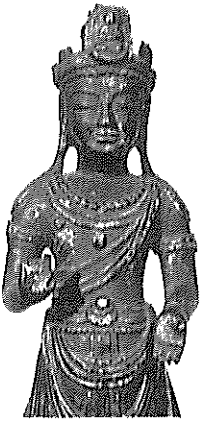
県内にもっとも多いのは曹洞宗の寺院で、ほぼ半数におよびます。その教線は六系統で広がりましたが、盛岡では、その六寺に報恩寺と源勝寺が入り、現在、源勝寺または雲林寺（源勝寺の本寺）を本寺とする寺院は県内に三一を数えます。

京仏師作の仏像

源勝寺の山門から入って右側にある堂は、志和稲荷の分社といわれます。源勝寺には、県内最古の仏像である聖

観音像が伝来し（高さ二七・五センチ）、伝承は不明ながら、志和稲荷分社の本尊（「盛岡砂子」）だったという説、また、源勝寺が土館にあったときの本尊ともいわれています。

この銅製の聖観音像は、頭が大きいなど白鳳時代（六四五～七〇九）の特徴をもち、一三〇〇年の歴史を秘めて



岩手県最古の1300年前の観音像（右）と雲版（上）

現存しています。

このほか、源勝寺にはすぐれた仏像、絵、什器が数多く伝来しています。

県内に『出山釈迦図』は数多く伝わっていますが、源勝寺のものは白眉で、室町時代をくだらないというもの。また、延命地蔵半跏像は、報恩寺の五百羅漢の前年（一七三〇年）、同じ一派の京都の大仏師によるもので、墨書銘から、駒野丹下定孝の作と知ることができます。このように、盛岡藩の曹洞宗寺院には京仏師とのつながりを示す仏像が伝わっています。

また、禅宗の法具のひとつ、藤田勝助恒正作（藤田家三代目）の作銘のある洗練された鋳銅製の雲版があります。これは、寝起きや食事、坐禅の合図に打ち鳴らすもので、その名称は、雲形をかたどったことからきています。

仏像・絵　銅製聖観音立像（国重要美術品、県文化財、盛岡三十三観音二〇番）、出山釈迦図、絹本着色蓮華図（二件とも市文化財）

関連記事　古代国家が造った城柵、盛岡の羅漢さま

仏像と菩薩について

仏像とは何か

仏像は、仏の姿がだれにでも分かるよう人間の姿で、とくにお釈迦さまの姿をモデルにして造形されています。

お釈迦さまは、今から約二五〇〇年前、ヒマラヤ山の南麓、カピラ城の王子として生まれました。二九歳で出家し、六年間の苦行のすえに三五歳で悟りを開きました。それから八〇歳で亡くなるまで、自ら悟った仏の教え、人間はどう生きるべきか、また、この世にはたくさんの仏がいて、人々を守っていることを説きました。

仏像は、仏の心を全身で表現しています。お釈迦さまの没後、弟子たちが師の教えを経典（お経）にまとめましたが、お経が読めない人にも仏教の神髄が一目で分かるよう、仏像が造られました。慈悲の心を伝え、人間を見守り、その姿でいろいろなメッセージを送り、正しい方向へ導いてくれるというものです。

最初に造られた像は、お釈迦さまが亡くなって約三〇〇年後の、インドの仏伝の像です。そして、紀元一世紀の中ごろになると、お釈迦さまの法話に出てくる仏たちの像が造られるようになりました。

仏像は大きく四種類

仏弟子の手で、長い年月にわたって経典がまとめられると、多くの種類の仏像が造られるようになりました。

大きく分けると、如来・菩薩・明王・天部の四つのグループになります。

「如来」というのは、真理を究めて悟りを開いた仏様で、釈迦如来、阿弥陀如来、薬師如来、大日如来などです。

「菩薩」は次で説明しますが、「明王」は実際に働く状態の力強い像で、不動明王、愛染明王などがあります。

「天部」というのは、仏法を守護する仏で、仁王や四天王などです。

身を犠牲にして救う菩薩

菩薩は、わが身を犠牲にして衆生を救ってくれる仏です。

菩薩のなかでも、とくに人々に親しまれているのが、人間のいろいろな願いに合わせて姿を変えるという観世音菩薩、つまり「観音さま」です。

地獄の六道には、それぞれ救済してくれる観音さまが配されています。聖観音＝地獄道、千手観音＝餓鬼道、馬頭観音＝畜生道、十一面観音＝修羅道、准胝観音＝人間道、如意輪観音＝天上道となっています。

十一面観音や千手観音のように手や顔が多くあるのは、いろいろな法力を一目で分かるようにしたものです。

ほかによく聞かれる弥勒菩薩は、お釈迦さまの入滅後から五六億七千万年後に仏（如来）となってこの世にあらわれ、仏法が消えた世界を救うとされ、それまで修行している仏様です。

虚空蔵菩薩は、見聞きしたことを記憶して忘れないという虚無のような広大無辺の福徳と智慧をもつ仏様です。

また、智慧の文殊菩薩と、理性の普賢菩薩は、ともに釈迦如来の脇侍となって釈迦三尊を構成します。

同様に、観音菩薩と勢至菩薩が脇侍となり阿弥陀三尊を構成します。

ほかにも、僧侶がモデルといわれる地蔵菩薩や般若菩薩など、いろいろな菩薩があります。

こうした菩薩は、お釈迦さまが王子だったころの華やかな正装の姿であらわされ、頭には宝冠、胸には瓔珞、腕には腕釧などの装身具をつけ、手には持物があります。

観音菩薩や文殊菩薩は、天台宗や禅宗（臨済・黄檗・曹洞）の寺院で本尊にまつられることもあります。

寺宝として保有する日蓮真筆の曼荼羅と書

上行山（じょうぎょうさん） 法華寺（ほっけじ） 日蓮宗

◆盛岡市北山二丁目四―二〇
◆電話　〇一九―六二二―二四八九
◆住職　第二五世　田口信之

●略図は87ページ参照

寺禄を辞退して檀家を願う

北山の通りから小高く真っすぐ延びる参道を行くと、大樹に囲まれ静かにたたずむ法華寺があります。本堂前に、ひさしのように大枝を広げているのは名木のモリオカシダレです。

法華寺は、南部氏の居城が盛岡に定まるころ開かれました（一五七三～九二年）。千歳院日慶上人が、門祖の日什聖人（顕本法華宗開祖）を仰いで開創しました。

開創になった光台寺の隣接地が、その後、南部利直公夫人（源秀院殿）の霊廟の地に決まり、現在地に移転しました（一六六三年）。

藩とのかかわりでは、二世・日瑚のときに盛岡藩の法華宗の総触頭を命じられ、利直公の息女や孫娘が葬られています。言い伝えによると、寺格を左右する藩からの寺禄を辞退し、代わりに十分（騎乗の侍）の檀家を得たということです。

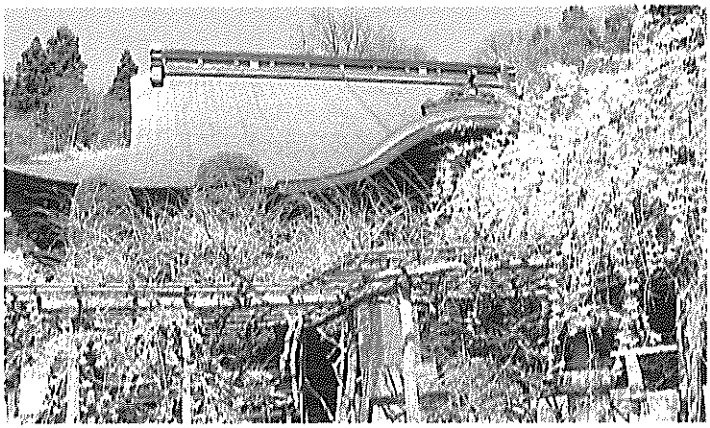
寺宝にちなむ逸話

法華寺では、数々の由緒ある法華曼陀羅（まんだら）を格護しています。その中に、日蓮大聖人真筆のものがあり、ほかに日蓮大聖人真筆の御書が伝えられています。

法華寺に現存する数多くの書画や古文書のひとつに狩野探幽作の遠磨（おろま）の大軸があり、次の話が伝えられています。

江戸時代、報恩寺の一華和尚と法華寺の二世・日瑚が法論を闘わせ、そこで凱歌をあげた日瑚が報恩寺から畑地を付して贈られたということです。ここから法華寺の座敷は遠磨座敷と呼

ばれ、いっぽうの一華和尚はますます精進を重ね、五百羅漢をつくったといわれています。



四月二十日ごろ本堂前で開花するモリオカシダレ

江戸後期（一八三二年）、一八世・観明院日誠上人は、寺社奉行に申し出、霊をなぐさめる供養碑を建立しました。

仙北組町を下った向中野村（南仙北一）の街道沿いにあった小鷹御仕置場は江戸中期ごろには存在し、城下の重罪人の処刑が執行されました。その向かい側に建立された供養碑は、塔身および三段積みの台座を含め、総高四・四メートル。塔身の正面には「南無妙法蓮華経」と刻まれています。

法華寺では、現在も毎年四月八日午後二時からその供養が営まれています。供養塔には地元の方々や、お盆には遠来からの参詣者の献花が見られます。

近年、周辺一帯の市街化が進むなか、平成一四年一一月に県道拡幅のため、供養碑は移設になりました。

希少な樹木のある名園

法華寺の本堂両側の庭は、盛岡ゆかりの名僧・方長老の作といわれ、古来より名園といわれてきました。桃山時代の築庭法を取り入れ、後方の斜面を生かした庭には、各種のツツジをはじめ、めずらしく貴重な木々が植栽されています。そのひとつに、樹齢およそ二〇〇年、高さ八メートルに育った北限のヒイラギがあります。

建造物では、昭和二九年、火災で本堂を焼失したのち、昭和三二年に再建されました。法華寺最古の建物として築造から二六〇年余りを経ている山門があります。新しいものとしては、昭和六三年に斬新なトップライトの構造をもつコンクリートの位牌堂を建立し、つづいて平成三年に鐘楼堂が建立されました。

書画　紙本着色由水図（市文化財）

樹木　ヒイラギ、モリオカシダレ（二件とも市天然記念物）

関連記事　盛岡の桜めぐり

近代仏教界の冠たる黙雷・大等が住職

北峰閣（ほっぽうかく）無量殿（むりょうでん）

願教寺（がんきょうじ）

浄土真宗
本願寺派

◆盛岡市北山一丁目四―五
◆電話　〇一九―六二―二一一一（六九）
◆住職　第二八世　島地興縁

●略図は87ページ参照

九条武子の歌碑のある庭

JR山田線の北側、寺院が連なる北山の通りに面して願教寺があります。

山門から真っすぐ延びる石畳の両側は、ゆったりと広がる庭園。この庭は、魅力ある街並みに寄与するとして、平成九年、市の都市景観緑賞を受けました。本堂に向かって左側、縁（ゆかり）の人々が御手植えした樹木の径の奥に、名僧で知られる願教寺二五世・島地黙雷、二六世・島地大等の墓があります。

付近に建つ「島地大等ぬしをいたみておもへる」として詠んだ九条武子（歌人、本願寺法主大谷光尊次女、九条良致男爵夫人）の歌碑。その解説板のほかに、ここに葬られた鍵屋茂兵衛こと村井京助、自由民権運動に身を投じた鈴木舎定の業績が掲示されています。

願教寺は、江戸時代前期（一六四八～五一年）、浄信房が浅岸の地に建立した一宇に始まります。浄信は、親鸞聖人が東北に派遣した是信房（二四輩の一人）の末裔（まつえい）で、秋田六郷萬福寺の一五世（一説に一〇世）とされます。

開山から約二〇年後（一六七〇年）洪水で堂宇を流失しますが、翌年、南部重信公から賜った境内地に堂宇を再建しました。それが現在地です。

江戸時代中期（一八一六年）、堂宇を焼失したのち、藩主・利済公の幼少時の縁により境内地を拡張し、近江商人系をはじめ城下の多くの商人の信仰により、荘厳の伽藍が再建されました。

再度、大正一三年の報恩講大逮夜厳修の最中に出火しました。その後、わずか一年で堂宇を再建したことが今に語り継がれています。

寺院の存立とその使命

いま、寺院のあり方を深慮する住職に思うところを伺うと、「寺院は観光の資であってはならない。常に民衆の心のよりどころであり、気軽に集まれる心のふるさととならなければ存立の意味がない」といいます。

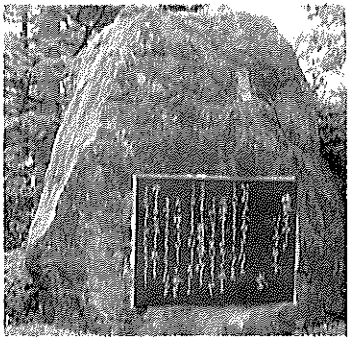
かつて願教寺に入寺した黙雷・大等については、盛岡の先人記念館に郷土の偉人として収められているが、両師

を過去の人として顕彰するに留まっては、そのご苦労が空しくなると言い、先人が何を目指し、何のために苦心していたのかをしのび、これに報いることこそ大事ではないのか、と次のように述べています。

宗祖・親鸞聖人は、和讃に「本師源空あらわれて浄土真宗をひらきつつ」と示したように、恩師の法然上人を慈父のように慕い、単に一宗一派に開くというより真実の教えを明らかにされたといえよう。

時代とともに、そのみ教えを喜ぶ人々（同行）が増し、浄土真宗はこんにちの教団に発展をみている。聞法教団、同朋教団といわれるとおり、仏法を聞き、お念仏を喜ぶ人々により、御同朋、御同行として、お念仏の社会、お陰さまという感謝の社会を実現することを目指している。その中にあって、僧侶は、仏法を聞く（聴聞、聞法）ことを第一義とし、全員聞法、全員伝道の教団として教線をひろめる使命を担っている。

東北開教総監として願教寺に赴いた島地黙雷、つづく島地大等は、後世に名を留めるほどの業績を残したが、夏期講習等にもみられるとおり、東北・岩手の人々に真実の教えを説こうという生涯であった。そのことに思いをいたし、業績をほめ讃えるのではなく、その心をいただくことが両師の願いに応えることになろう、としています。



九条武子の歌碑

工芸品　散石経（国指定重要美術品）

関連記事　盛岡ゆかりの名僧、宮沢賢治の信仰

中津川の洪水で流出後、現在地に移転

月鶏山（かっけいざん） 真行寺（しんぎょうじ）

浄土真宗本願寺派

◆盛岡市北山二丁目四―二二
◆電話　〇一九―六二四―一四八六
◆住職　第一〇世　亀山公賢

現住職の代に堂宇を全面改修

真行寺は、JR山田線の西側、同宗派の願教寺と隣接して建っています。

開山縁起は、江戸時代前期（一六九〇年）、秋田から入った宗円和尚が初代の住職と伝えられ、当初、中津川の上流、春木場付近にあった堂宇を水害で流出し、現在地に移転しました。古老の伝えを総合すると、願教寺と同時代に、同一の経過をたどったと推察されますが、火災（一八一六年）で史料を焼失し、つまびらかではありません。

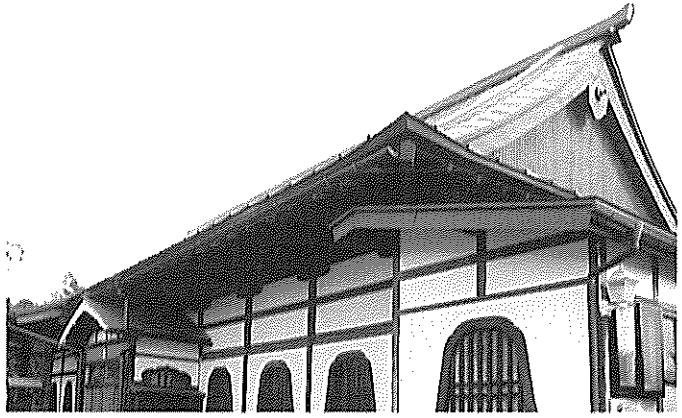
堂宇は、江戸時代中期に南部利済公の命によって建築されますが、明治維新で修復工事を中止した部分もあり、現住職の代に全面的に改修しました。

真行寺で所蔵するものに、本尊の阿弥陀如来像（木造で源信和尚の作といわれている）があります、彫作年代などは不明です。ほかに、熊谷蓮生坊坐像、親鸞聖人や蓮如上人らの絵像が伝えられ、いずれも数百年を経ているもので作者、彫作年代などは不明です。

浄土真宗では、僧侶が剃髪しなくてもよいことになっています。浄土真宗は出家中心ではなく、すべての人に開かれる精神が頭髪にも出ています。真行寺の住職も剃髪していない一人です。

先住職と同様、寺院経営とともに長年、教職にあり、教諭から校長を務めて先ごろ退職しました。在職中、常に頭にあった言葉は、仏典にある「和顔愛語（わがんあいご）」――顔が穏やかで温かい思いやりのある言葉だったということです。

●略図は87ページ参照



第3ブロック

盛岡市――西部・南部、矢巾町

新しい町とともに五〇年の歴史をきざむ

白雲山（はくうんざん） 青山寺（せいざんじ） 曹洞宗

◆盛岡市青山二丁目九―六
◆電話　〇一九―六四六―一八八一
◆住職　第二世　工藤正行

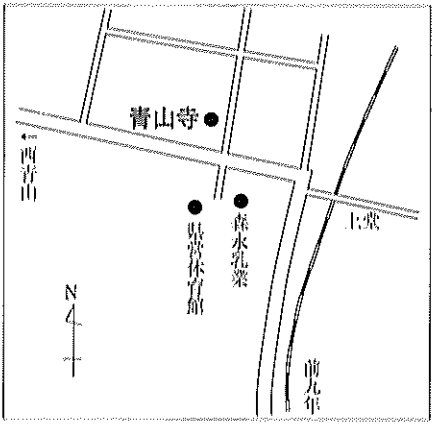
「この地に寺院を」の志

県営体育館の向かい側、道路から少し奥まって、青山寺があります。第二次世界大戦後の開山という若いお寺で、堂宇が古色蒼然ではないぶん、町のたたずまいにマッチした感じです。

青山寺は、昭和三一年五月、盛岡市水祥院の末寺として霊玄道夫大和尚により開山。以来、新しい町とともに歩んできました。

西根町寺田に生まれた霊玄道夫は、第二次世界大戦の戦地から復員して水祥院住職・遠藤霊羊師の弟子となり、仏門に住えました。そのころ、青山町にある陸軍病院では、毎日、十数名が戦病死し、その霊を弔うためにしばしば現地に出向きました。そうしたなかで一念発起、この地に寺院を建立しようと志を立てました。

山門と並ぶ平成10年建立の観音堂



払い下げの軍施設で開山

青山・観武（みたけ）地域は、それまで長い間、兵営の地となってきました。終戦を迎えたとき、旧騎兵連隊の赤レンガの建物や将校クラブの建物は残っていましたが、周辺に少しの水田のほかは広い原野が続くばかりでした。しかし、平

和な時代が訪れ、地域の発展振興を考えたとき、将来、必ずや寺院が必要になると見通し、秀峰・岩手山を遠望する静かなこの地こそ霊魂が安らぐと考えたのです。

そして、霊玄道天は、将校クラブだった軍施設の払い下げを陳情。一〇年にわたる努力で、これを結実させました。旧戦車隊将校クラブがあった建物には、戦後しばらくの間、市役所の支所、郵便局、消防分署、公民館などが雑居していましたが、そこに応急的に手を加えただけで開山しました。

その半年後の昭和三一年一二月、引揚者が居住していた岩鷲寮の一二号（旧騎兵連隊兵舎）から出火。この火災による罹災者一〇五名を収容したのをはじめ、お寺に開いた季節保育所（少年の家）は、のちの児童館となりました。ほかにも、市に陳情して青山墓園を設置するというように、地域住民・檀家とともに、戦後の新しい地域振興の一端を担ってきました。

堂宇も町の発展とともに

建物は、当初、盛岡市の協力を得て、本堂と位牌堂を増改築しましたが、昭和四一年、待望の本格的な本堂と檀信徒会館を建設。さらに平成七年には、新位牌堂と大集会場が併設されました。

平成一〇年には、境内の一角に観音堂を建立し、それまで外山の地にあった馬頭観世音を祀りました。これは外山にある墓地整備のため移転し、安置したものです。

青山寺が開山して約五〇年、地域は往時と比べようもないくらい市街化が進み、町の発展に呼応するように、堂宇にも風格が備わってきました。

その法灯は、祖先の霊をまつる拠点になるとともに、地域における安心立命と菩提功徳の道場となる役割を担っています。

古戦場に建つ市内唯一の安倍氏系のお寺

巌鷲山（がんじゅざん） 天昌寺（てんしょうじ）

曹洞宗

◆盛岡市天昌寺町六―一六
◆電話　〇一九―六四六―二三六六
◆住職　第二二世　岩崎浩和

九百数十年前にさかのぼる起源

天昌寺は、いま、国道四六号沿いに位置しています。付近一帯は厨川柵跡とみられ、「前九年の役」（一〇五一～一〇六二年）のとき、源氏と安倍氏の軍勢が最後の死闘を繰り広げた古戦場の地といわれています。

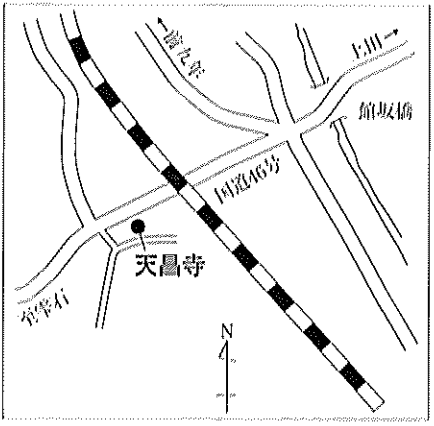
天昌寺は、市内でただひとつ安倍氏系のお寺です。城柵内に天照寺（天台宗）という祈願所があり、安倍氏滅亡後、おそらく、戦死者の霊を弔う場となっていたものを、工藤小次郎行光が護持しました。工藤氏は、源頼朝による奥州藤原氏攻略の戦功により岩手郡三二郷を統治した人物です。

時代がおりて、工藤氏の一族が「栗谷川」を名乗り南部氏の家臣となりましたが、そのころ、寺は荒廃して名ばかりの状態になっていました。

再興からバリアフリー実現まで

寺の再興は、栗谷川八兵衛藤原光成（開基）のときに、長善寺七世・物賛関逸大和尚（一六四九年没）によって行われました。開山師の没年は今から三百数十年前とみられ、このとき曹洞宗に改宗して天正（天性）寺とし、さらに天昌寺に変わりました。

江戸時代中期（一八二三年）の火災により、すべてを焼失しているため、古い歴史は口伝によるものです。



火災から九年、明円寺本堂（岩手町）の古材を譲りうけて再建。ところが、その翌年から数年間、天保の大飢饉があり、本堂建築から一〇年を経て、ようやく庫裏ができました。

その当時の建物は、戦後の昭和二五年以降、老朽のはげしい位牌堂を手始めに、順次、増改築されました。約五〇年にわたり、三代の住職のもとに檀

信徒が一丸となって伽藍整備事業を継続し、現在、本堂と位牌堂にエレベーターを備え、高齢者に喜ばれるバリアフリーとなっています。

深遠なご利益を伝える仏像

天昌寺には深遠なご利益を伝える観世音菩薩があります。

奈良時代の高僧・行基菩薩の開眼とされるこの像は、各時代の武将が信奉し、効験を得て戦勝したという伝えがあります。坂上田村麻呂、次いで厨川柵攻略の源頼義、さらに源頼朝が藤原氏を討ったとき。源頼朝は、このとき戦功のあった工藤氏に岩手郡を与えるとともに厳鷲山の大宮司に任じ、この像を同家鎮護の守本尊としました。

南部氏もこの像を崇敬し、大勝寺（廃寺）を建立して例祭を行いました。明治の神仏混淆禁止のあと栗谷川氏の内秘仏となり、同家の火災の際にも仏像だけが残り、今から一〇〇年ほど前、菩提寺の天昌寺に納められました。

余話　住職によると、本来、宗教は人の生き方に根ざすものだが、現状から、弾式坊主を自称せざるを得ない。そのなかで念頭に置いているのは、檀家とともに歩むこと、という。

仏像・碑　観世音菩薩（盛岡三十三観音一六番）、餓死供養塔・二基（三件とも市文化財）

社会事業　天昌寺保育園（社会福祉法人）

関連記事　お盆と舟っこ流し、安倍氏と厨川柵、「らかん公園」と飢饉と供養塔

安倍氏と厨川柵

――前九年の役・後三年の役――

平安期の決戦場に建つ天昌寺

平安中期の康平五年（一〇六二）、いま天昌寺のある盛岡市の北西厨川あたりは『前九年の役』の最後の決戦場になりました。

厨川柵・嫗戸柵（いまの安倍館町）を最後の拠点に、安倍貞任・宗任兄弟の軍は、勝ち攻めてきた源氏（頼義・義家親子）の軍勢と、まさに死闘を展開。一二年の長い戦いに安倍軍は力つき、大将の貞任は殺され、宗任は捕えられました。

朝廷がおそれた安倍氏の力

坂上田村麻呂の蝦夷追討以来、朝廷は陸奥国に支配を広げ、一〇五〇年ごろは岩手県・秋田県の中央あたりまで勢力をのばしていました。地方豪族の安倍頼時（貞任の父）は朝廷に従いながらも、胆沢・和賀・稗貫・江刺・斯波（紫波）・岩手の六郡に勢力をもち、馬・砂金・織物・漆によって巨大な富を有していました。〝北の王者〟として、二戸の天台寺を建立したともいわれます。

朝廷は、その支配がくずれることを恐れ、安倍氏に兵を向けました。関東地方に勢力をもつ源氏が朝廷の命を受け、安倍一族討伐のため陸奥国に入り、「前九年の役」が起きました。出羽の国（秋田県）の豪族・清原氏が源氏へ加勢したため安倍軍は不利になって、ついに敗れました。

安倍氏の伝説、ゆかりの地名

歴史の本には、負けた安倍氏のことはあまり書かれていません。しかし、岩手県や盛岡市には安倍氏の伝説や、ゆかりの地名も多く残され、それだけ民衆に慕われていたことを思わせます。

例えば、伝説「安倍館の七不思議」のひとつに、安倍氏の城中に射る矢がなくなり、葦の片方の葉をとって代用にしたところ、以後、付近には片葉の葦が繁った、というものがあります。青森県の伝説には、貞任の長子、一三歳の千世童丸は戦死したが、高星丸は逃れて津軽で成長し、津軽安東氏の祖となって栄えたというものがあるなど、人々に長く語りつがれてきました。

安倍氏にちなむ地名も数多く残っています。夕顔に人の顔を描き、甲冑をつけたワラ人形を立て、兵士が大勢いるように見せた所が夕顔瀬。川面に

籾殻を浮かべて陸地に見せかけ、源氏の軍勢を川に落とした所が諸葛川。厨川柵にあった土牢（屋）の場所が土牢。源義家がきずついた愛馬を温泉でいやそうとつないだ所が「つなぎ」。ほかに、前九年町、木伏、貞任橋、宗任橋などがあります。

お家騒動を経て平泉の繁栄へ

厨川柵の最後の二日間、火攻めで落ちる城内にいた数千の男女は、討死したり、自決したり、川に身を投げました。この戦乱で生き残り、帰投した中に、子連れの貞任の妹（藤原経清の妻）がいました。このとき七歳の子が、奥州藤原氏の祖となった藤原清衡です。

貞任の妹（清衡の母）は、息子の助命を願い、安倍氏に代わって陸奥国を治める清原氏、つまり敵に嫁ぎました。清原氏には、長男真衡、連れ子の清衡、その下に生まれた弟・家衡と二人の男子がいました。

長じて清原氏のかしらとなった真衡に、清衡・家衡が反旗をひるがえし、「後三年の役」が起きました。やがて真衡は病死。陸奥国を二分して治めるとした清衡・家衡でしたが、今度は両者が争います。館を襲われ妻子を殺された清衡は、陸奥守源義家の力を借りて家衡を倒し、戦いは終わりました。

その後、清衡は東北地方をまとめ、平泉文化を築いていきます。

師匠の遺志を継ぎ大石仏を建立した住職

萬峰山（ばんぽうざん） 長松寺（ちょうしょうじ） 曹洞宗

◆盛岡市仙北二丁目二一一二六
◆電話　〇一九一六二六一〇四二二
◆住職　第二二世　斗ケ澤祥悦

浄土宗から曹洞宗へ

道路を挟んで正面に仙北町駅、後方に北上川という場所に長松寺があります。長松寺の歴史は、現在、墓地になっている川岸に近い地に始まりました。年代は不明ですが、そこに、六部行脚僧が庵を建て、持参の阿弥陀如来像を安置しました。慈覚大師の作と伝えられるこの仏像は、いまも長松寺にあります。

開山当初は梅香山長昌寺という浄土宗の寺でしたが、江戸時代前期（一六二四～四四年）に曹洞宗に改め、現在の号としました。ときの住職・久誉残察和尚は、祇陀寺五世・然室芳天和尚の徳風を慕って改めての開山に勧請し、自らは開基となりました。

九世・中興松峰玄鶴和尚の代に本堂改築を計画し、一二世・単山全堤和尚の代（一七九七年）に現在の墓地に完成しました。

その後、現在地に堂宇を移転したのは、大正一三（一九二四）年です。檀家総代の徳清家（貴族院議員・佐藤清右衛門）が土地の寄進をはじめとし、資金の大半を拠出しました。建造にあたっては用材を厳選し、今も人々は、長縁の幅の広い栃板に目を見張ります。

●略図は128ページ参照

「火防の秋葉さん」の伝え

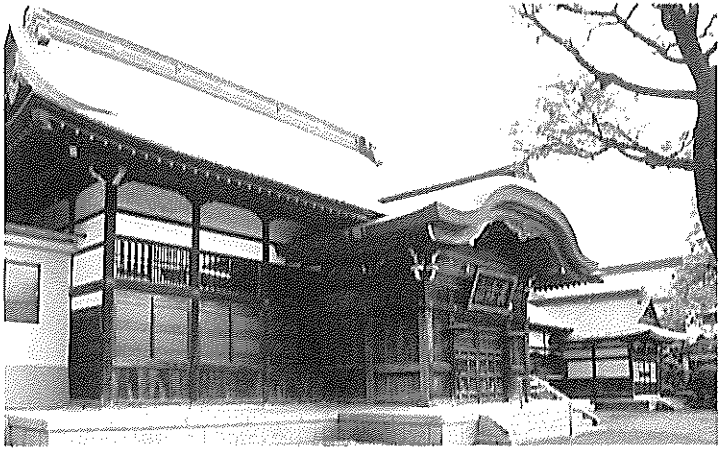
長松寺は、火災などの災害に見舞われることなく現在に至っています。長松寺の鎮守堂として、「火防の秋葉さん」で知られる秋葉三尺坊大権現があり、次の伝えがあります。

今から二〇〇年ほど前、盛岡城下は

火防の秋葉さんを祀る鎮守堂

たびたび火災がありました。

その当時、武家屋敷、町家や農家、寺社まで、大半は茅葺、柾葺、杉皮葺だったので、いったん火の手があがれば延焼を止めるのは至難でした。もし、仙北町に発生すれば、北上川の河床は低く防火への利用はかなわず、他によい水路もありません。そうなれば大火は必至と慨嘆した九世・玄鶴和尚は、神仏に守護をたのむほかはないと、檀頭の佐藤半六らと力を合わせ、火防鎮守で知られる遠州（静岡）秋葉神社の分体を勧請しました。



それから約五〇年、幕末期（一八五三年）の城下の伝記によると、

――仙北組町も全焼を免れまいというときに、棟上に現れた奇人が、団扇で火粉をあおぎ返すとたちまち火が消え、類焼は一〇軒余りで止まった。その後、その人はだれとも分からず、三尺坊大権現の化現であろうとなった――。

こうして世人の知るところとなり、現在では、仙北二丁目自治会を中心とする奉賛会が七月一五日、一六日に盛大な祭りを行い、火災消除、町内安全を祈願しています。

泰恩和尚の功績を語る石仏

長松寺の墓地に、いま基畑のらかん公園にある石仏のために試作した像があります。この像は一三世・徳岩泰恩和尚の労苦と功績の証でもあります。

らかん公園は、かつての宗龍寺（廃寺）の境内。そこに飢饉の餓死者を供養する大石仏二体の建立を発願した祇陀寺一四世・廓巌天然和尚の遺志を、泰恩和尚が受け継ぎました。

世は凶作と不景気で、托鉢しても思うにまかせず、長松寺の田畑を質に入れて資金を捻出するなど心血を注ぐこと一三年、とうとう完成させました。泰恩和尚はその翌年他界し、まさに命をかけて石仏建立を完遂しました。

仏像　千手観世音（盛岡三十三観音一二番）

社会事業　仙北保育園（社会福祉法人）

関連記事　「らかん公園」と飢饉と供養塔

観音信仰と三三観音の巡礼

聖徳太子が広めた信仰

数ある仏様の中で、もっとも親しみをもって崇拝されているのは、観音さま（観世音菩薩）でしょう。その慈愛に満ちた表情は、人に安堵感とやすらぎを与えてくれます。

この観音信仰を人々に知らしめたのは聖徳太子です。多くの経典の中から、庶民を現世の苦悩から救う経典として「妙法蓮華経観世音菩薩普門品」を見いだし、法隆寺の夢殿に救世観音を祀り、その教えを広めました。次いで、聖武天皇により、諸国に国分寺が建立されるに至って、さらに多くの人々が信仰するようになりました。

平安初期の奥州では、征夷大将軍坂上田村麻呂と慈覚大師による布教が大きく、両者の開創という伝えの観音堂もかなりあります。

平安のころまで、とくに天台宗において、十一面観音が信仰されました。その昔、玉山の地は十一面観音の聖地といわれ、多くの観音堂があり、また、玉山の生産様（村の鎮守）とされ、姫神岩権現としてまつられていました。今も東栗寺には、平安末期の作とみられる十一面観音像が保存されています。

三三観音巡礼の由来

観音さまは三三通りの姿に化身し、人生で出合う苦難、災難、悩み、そのすべての願いをかなえてくれるというので、それに由来して三三観音巡礼が設けられました。

平安時代の末ごろ、西国三三観音（主に近畿地方）が設けられると、つづいて坂東三三観音（関東）、秩父三三観音（埼玉県）が成立。それに一寺を加えた日本百観音が全国でもっとも信仰を集めました。

江戸時代になると、全国各地に巡礼の札所が設けられました。また、代表的な七観音を回って、これに代えるかたちも出ました。

巡礼は、由緒ある札所のお寺を順路にしたがって参拝するというものです。なお、弘法大師の霊場で有名な四国八八ヵ所は巡礼ではなく、昔からお遍路といわれました。

身近な巡礼札所

南部領内には、戦国時代（一五一三年）に天台寺（浄法寺町）の僧侶が開いた糠部三三観音（二戸・八戸・九戸地方）がありました。

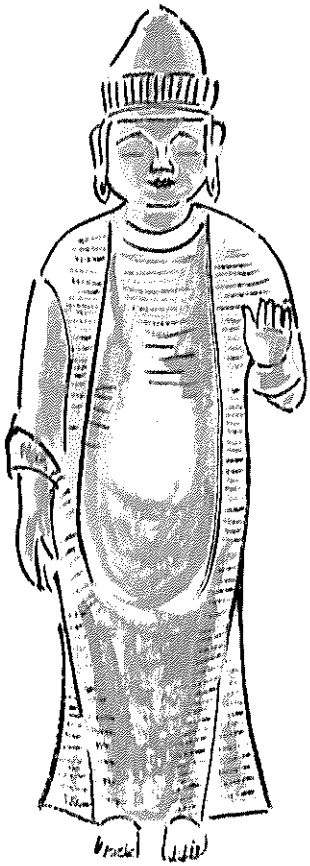
対応するように、安土桃山時代に新たに南部領となった志和（紫波）・稗

貫・和賀に当国三三観音が設けられ（一七七八年）、そのあと盛岡三三観音が成立しています。だれが、どのように盛岡三三観音を選んだのかは不明ですが、昭和四年になって、盛岡観世音会が所在の寺院や観音堂に「第○観世音」という案内の巡礼札を掲げ、巡礼納経印をつくって参詣者の便をはかりました。同時に、盛岡三三観音御詠歌集を発刊しています。

盛岡・紫波郡・岩手郡の本誌の圏内でみると、盛岡市には、盛岡三三観音札所があり、当国三三観音の札所は、旧都南村を含む紫波郡に分布しています（次ページ参照）。

ほかにも、東北各県にまたがる奥羽三三所、福島・宮城・岩手にわたる奥州三三観音があり、その三一番に壇福寺（西根町）、三二番に正覚院（岩手町）、最後の三三番に天台寺（浄法寺町）が入っています。

四国八八ヵ所のお遍路に代わるものとして陸中八八ヵ所があり、盛岡市の峰寿院・連正寺・三明院・金剛珠院の四寺が札所になっています。



盛岡三三観音

&印は複数安置

一番　寿寧院　二番　久昌寺&
三番　長松院　四番　祇陀寺&
五番　千手院&　六番　大慈寺
七番　水泉寺　八番　祇陀寺&
九番※小山観音堂　一〇番　久昌寺&
一一番　円光寺　一二番　長松寺
一三番　不退院　一四番　永祥院
一五番※浅草山　一六番　天昌寺
一七番　聖寿寺　一八番　正覚寺
一九番　教浄寺　二〇番　源勝寺
二一番　龍谷寺　二二番　清養院
二三番　光台寺&　二四番　吉祥寺
二五番　東顕寺　二六番　大泉寺
二七番　報恩寺　二八番　正伝寺
二九番　恩流寺　三〇番　千手院&
三一番※新庄観音堂三二番　三明院
三三番　光台寺&

※寺院以外の場所にあるもの

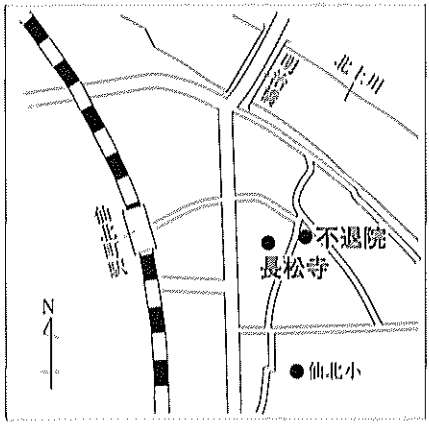
九番　小山観音堂　小山観世音
東中野二五―二三
一五番　浅草山　浅草観世音
新田町九―一
二一番　新庄観音堂　聖観世音
新庄二―四一

当国三三ヵ所

和賀・稗貫・紫波（安永七年）

四番　千手観音（現在十一面観音）
・黄金堂・南片寄村
六番※千手観音・島ノ堂（五郎沼観音）・南日詰村
七番　十一面観音・高水寺・郡山二日町［蟠龍寺］
八番※聖観音・北郡山村竹ノ屋敷
九番　千手観音・万福寺・上飯岡村
［飯岡観音堂、長泉寺］
一〇番　十一面観音（現在千手観音）
・高寺・手代森村［大慈寺］
一一番　千手観音（現在聖観音）・
光西寺・黒川村［大泉寺］
一二番　十一面観音・山寺・山屋村
［常光寺］
一三番※千手観音・千手堂・彦部村
一四番　聖観音・上佐比内村岩谷
［鳳仙寺］

――本誌範囲内のみ。所在寺等は当時のまま（『紫波町史』）。［　］は現在の所在または管理等。



一〇〇年余「虚空蔵さん」に同居する本尊

千日堂（せんにちどう） 不退院（ふたいいん） 浄土宗

◆盛岡市仙北二丁目二二一四八
◆電話　〇一九―六二六―三七二九
◆住職　池口杜孝

念仏供養からきた「千日河原」

長松寺の東側、北上川寄りに建つ不退院。地域の人は、ふつう「虚空蔵（こくぞう）さん」と呼びます。明治二九年に老朽化した本堂を壊したあと、無檀家のため再建を保留にし、境内にある虚空蔵堂に本尊を安置し現在に至っています。

不退院のおこりは、江戸時代前期（一六九四年）、円光寺の良観喜徹和尚が凶作の餓死者を供養する千日の別時念仏を行うために造った草庵です。

北上川浮島（明治橋上流約一〇〇メートル）にあった庵を洪水で流失後、藩主南部家から授与された現在地に移りました。この辺を千日河原というのは、このような経緯によります。

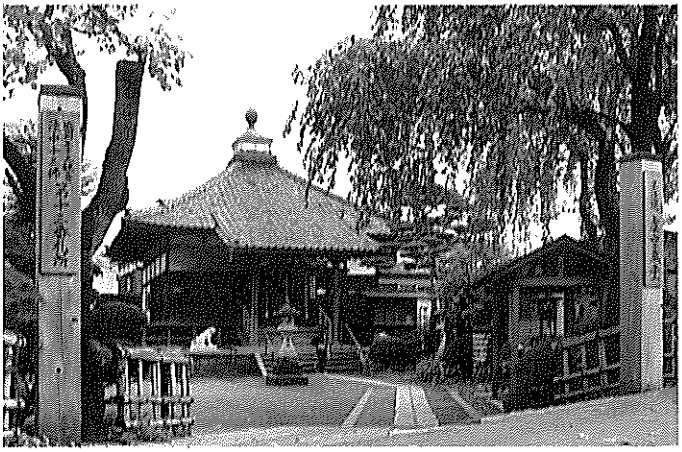
虚空蔵菩薩は、洪水後に農夫が近くの草むらで見つけ、持ち帰って大事に拝んでいました。その霊験を聞いて参詣者がふえたことから、農夫は不退院の境内を借り、はじめ小さなお堂から、やがて仏堂を建立。講中ができ、城下の老舗（しにせ）のだんな方も大いに信仰し、遠来からの参詣もあったといいます。

昭和四年、地域の留守番役に代わって先代が住職となり、昭和一〇年、講中により、現在の虚空蔵堂に改築されました。

いま境内は、夏のラジオ体操、子ども会の境内清掃など、地域のコミュニティ広場になり、七月一二、一三日の縁日は地域をあげての行事となっています。

仏像　聖観世音（盛岡三三観音一三番）

関連記事　お寺の祭り・裸まいり



相馬大作の菩提寺として、その子息が創建

恵日山（えにちざん） 感恩寺（かんのんじ） 日蓮正宗

◆盛岡市南仙北一丁目三二一七九
◆電話 〇一九一六二六一〇五四九
◆住職 第二〇世 大沼雄泰

一五〇周年に伽藍を改修

国道四号の旧道。盛岡バイパス南口から約五〇〇メートル市内側に白い塀があり、門柱の日蓮正宗「恵日山感恩寺」の標示が目を引きます。

創立一五〇周年を迎えた感恩寺は、平成一四年一二月の記念法要にさきがけて、御本尊の化粧直しをはじめ本堂内外の全面改修、塀・門を含む外構の整備により装いを一新しました。

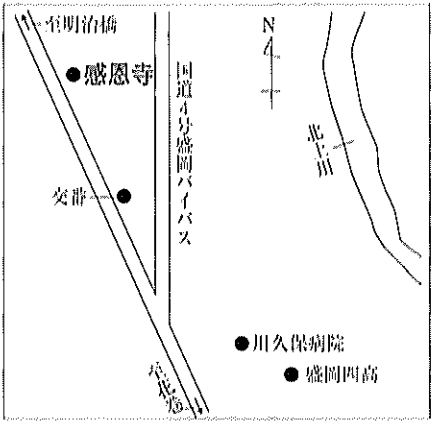
感恩寺は、嘉永五年（一八五二）、南部利官公を開基檀那に、相馬大作の長子である英穏院日淳上人を願主に創建されました。当時、幕府は新寺院の創設を禁じており、廃寺再興の名目で開かれますが、実質的には亡父・相馬大作の菩提所として建立されました。

仏門に入った七歳の長子

創建に至る経緯は、次のように伝えられています。

相馬大作とは江戸潜伏中の偽名で、本名を下斗米秀之進といい、いまの二戸市福岡町に生まれました。長じて、江戸で平山子龍に兵法武芸を学び、南部藩の人材養成のための道場「講武所」を創建。そのころ長子が誕生しました。

相馬大作は、自身の志の一番の理解者であった南部藩主・利敬公の急死の原因を知り、亡君の恨みを果たそうと、参勤交代から帰国途上の津軽氏を襲撃。主君の南部氏から離反、独立して藩主となった津軽氏を討つ行動は、江戸市民から大石内蔵之助の再来と大評判になりました。しかし、目的を果たせず獄門送りになったとき、江戸在住の大石寺信徒らは七歳の長子を大石寺（静岡県）に逃がし、総本山第四九世・日昇上人の弟子としました。

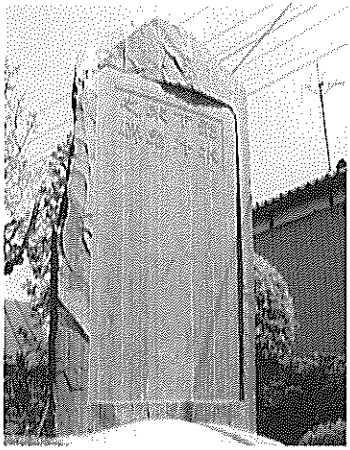


三二歳になった日淳師は盛岡での布教を決意して帰郷。当初、藩公を開基

檀那に本格的な寺院建立が計画されたものの、藩財政の急激な悪化のため土地提供のみとなり、檀信徒は苦心惨憺のすえ堂宇を完成させました。その労苦に対し、日淳上人は棟札銘本尊に、建立にかかわった全二五世帯の戸主名を後世に伝えるべく書きとめました。

開山の数年後（一八五五年）、信徒代表三人が大石寺に参詣し、そのときの「道中日記」が残っています。

約七〇〇キロを片道二三日かけて往復し、本山滞在を含む約二ヵ月の詳細を記した文書は、当時を知るうえで貴重な資料を提供しています。



境内に建つ相馬大作の顕彰碑

人生講話・ちょっといい話の冊子

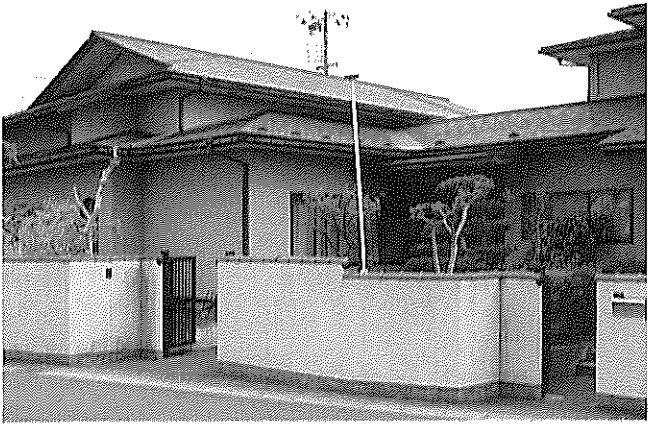
境内に建つ総高六メートル余の相馬大作の顕彰碑。明治二四年、盛岡市の老舗菓子商の長沢屋当主や大石寺布教員ら八人が発起人となって建立したものです。五年前に就任した住職は、その難解な碑文を専門家に依頼して解読し、小冊子にしました。

ほかにも、赴任後、小冊子の寺報を五〇号まで出し、充実した内容で評判になりました。住職は、「念頭に置いたのは、読まれる。捨てられない。信徒の自信につながる機関誌を」といい、そこに連載した人生講話を、冊子『恵日』上下にまとめました。「信仰と人生～ちょっといい話」の添え書きどおり、心にしみる短文が収録されています。

総本山開創七〇〇年記念に開創

明義山（みょうぎさん） 得道寺（とくどうじ） 日蓮正宗

◆盛岡市厨川五丁目八―一七
◆電話　〇一九―六四一―九四四五
◆住職　第二代　小原玄道



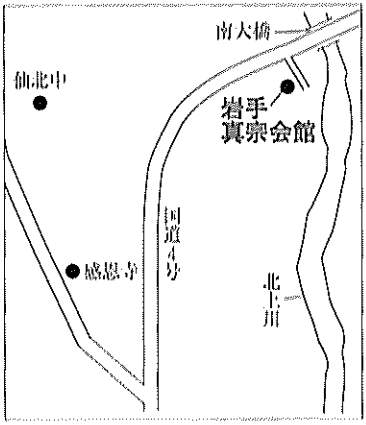
昭和六二年開創の新しい寺

国道四号沿いにある北厨川小学校の西側、JR厨川団地や県営住宅に近い住宅地に得道寺があります。

得道寺が開山したのは昭和六二年五月一八日。開かれてまだ二〇年に満たないという若い寺院です。

信徒の増加に伴って、総本山大石寺（たいせきじ）開創七〇〇年記念に現在地に開創された寺院で、開基は、総本山第六七世・日顕上人です。

その後、平成二年七月二〇日、得道寺創立三周年記念事業として本堂を増築するとともに、御宝前の荘厳と庫裏の増築を行いました。現在、六〇畳の広さを有する本堂となり、檀家数は、八〇余世帯を数えています。



真宗大谷派が市民社会へ提供する（ひろば）

岩手真宗会館（いわてしんしゅうかいかん）

真宗大谷派

◆盛岡市東仙北二丁目二一四五
◆電話　〇一九―六三五―九一六一
◆館長　丸田善明

盛岡で一一〇年の活動

南大橋の南東、北上川と国道四号線（盛岡バイパス）の間にある岩手真宗会館は、昭和六一年（一九八六）春、市内六日町（現在の肴町）で、《六日町の説教場》とよばれて市民に親しまれてきた『盛岡仏教会館』を移転開設した真宗大谷派の教会です。

この説教場は明治三三年（一八九〇）四月、大谷派の北東北教化を担う拠点説教場とするために、池野籐兵衛・川越千次郎・池野権治・池野直次郎・小野慶蔵・砂子田源六・鈴木多兵衛など、近代盛岡の経済界の重鎮たちが設置願人となって創立され、大谷派の門徒と否とに関わりなく、多くの市民に仏教の精神を伝え、青少年の育成に尽力してきました。大正期には青年興徳会による少年の盛岡一周リレーや弁論大会、日曜学校の開設。昭和初期には機関誌『開光』が発行されて多くの読者に仏教精神を伝える一方で公娼廃止などの社会運動を展開しています。

戦後、世界仏教日本連盟盛岡支部の結成や南方仏教国のウェーサカ祭典を導入するなどで新仏教運動を展開、みのり幼稚園を開園するなど、盛岡の仏教運動をリードしてきました。

現在地へ移転と同時に「岩手真宗会館」と改称。江戸時代以来の寺檀制度（だんか）を超えた施設となることを開明（かいめい）しながら、市民と共に仏教の精神を学び合い、人間性を回復する道場として、新たな歩みを始めました。

現在、定期的に真宗学経塾・市民仏教セミナー・教典学習会を開設しているほか、混乱する宗教事情への対応を課題とする「現代宗教研究所」が館内に併設され、現代宗教の実証的研究が進められています。

新都市の道路整備により駅から五分

天恩山（てんおんざん） 宮澤寺（きゅうたくじ） 曹洞宗

◆盛岡市本宮字宮沢九〇
◆電話　〇一九―六三六―〇二五九
◆住職　第二〇世　豊巻章道

地域に合わせて堂宇整備を計画

盛岡の成熟した市街地と対照をなすような新都市、盛岡駅の西口に続く地域に宮澤寺があります。

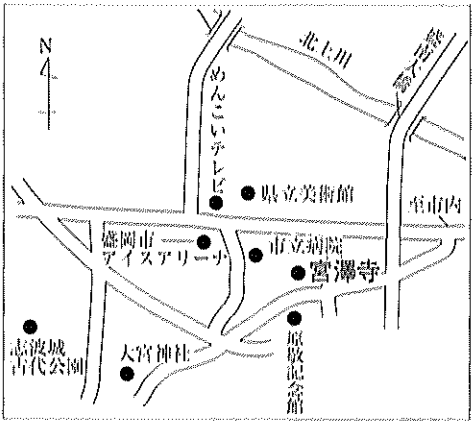
近くに市立病院があり、整備がすすむ中央公園には県立美術館ができ、年々、新しい道路網が広がっています。宮澤寺付近も、開発によって道路状況が一変する地域にあたり、この新道の完成によって盛岡駅・宮澤寺間は車で五分という距離になります。

宮澤寺は、江戸時代前期（一六…年）、東顕寺六世・崇信禅寿大和尚によって開創されました。当初、地名にちなむ「本野山」の山号でしたが、いつのころか、今のように改めています。

歴代住職中、二人に中興の称号があるので、本堂建て替えなどの大事業のときと推量されますが、昭和二二年に再度の火災に遭い、文献等を焼失しました。また、古い仏像や什器なども、重なる火災により現存していません。

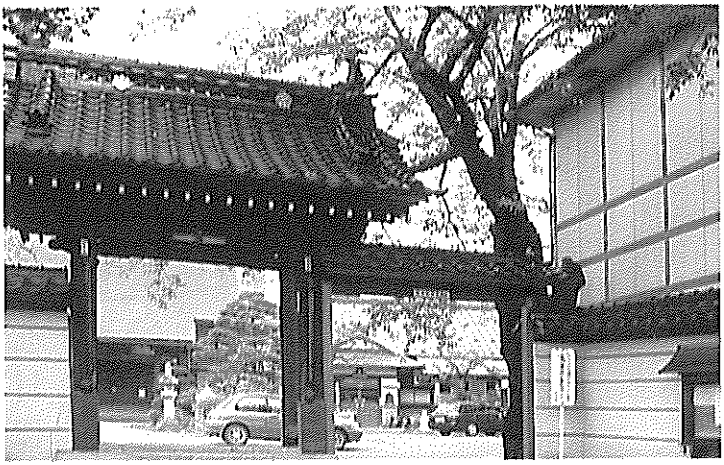
現在の伽藍（がらん）は、昭和二九年築造の本堂、昭和三八年増築の庫裏、昭和四…年増改築の位牌堂となっていますが、住職は、いま、堂宇の刷新計画を練っています。

新都市に建つ寺として、その構想を



うかがうと、エレベーターを備えた…階建てとし、車いすで堂内を移動できるようにしたい、ということです。

宮澤寺の境内地には、墓相学の大家の指導による無縁塔があり、山門の内側には、地蔵菩薩を中心に…〇〇余の墓石が安置されています。



この間、住職は、墓地整備に力を注ぎ、雨天のお参りにも困らないよう全面舗装とし、外灯と水道を備えました。同時に、墓数も多いことから墓地名簿を整え、遠来の参拝者でもすぐに探せるよう一覧化しています。

地名に残る往古のようす

宮澤寺の寺号は、所在地の本宮字宮沢からとったとみられています。この地は、志波城跡や大宮神社に近く、古い歴史を秘めた土地柄といえます。

本宮の地名は、往古、お宮があった地に由来するといわれますが、宮沢の地名にも言い伝えがあります。

その昔、このあたりは大小の支流がながれ、めくら川といわれていました。雫石川の左岸に建つ天照寺（天昌寺）と、右岸の熊野神社（現在の原敬記念館付近）の眺望を、京都の落人たちは、雫石川を賀茂川、南昌山を東山になぞらえて故郷をしのび、月見の場所にしたといいます。

そして、熊野神社の沢のところから付近一帯が「宮沢」に、熊野神社付近が「熊堂」の地名になったということです。

余録　古くから集落ごとに行われてきた先祖供養に百万遍がある。幾人もの人で大きな数珠（じゅず）にとりかかり、念仏を唱えながら、一〇〇回、あるいは一〇八回数珠を回す。これは、念仏を数多く唱えるほどよいという考えによるものらしい。川井村では、円光大師の弟子によって百万遍がはじめられたと伝えている。

碑　道標・百万遍供養塔（市文化財）

お盆の八月一三日に自然発生する祭り

融峯山（ゆうほうざん） 大松院（だいしょういん） 曹洞宗

◆盛岡市上太田館六六
◆電話　〇一九―六五九―〇六〇四
◆住職　第三世　上田浩久

本堂正面の彫り物

太田橋からつなぎ温泉方向へ約三キロ、古くから良米の産地とされた田園地帯に大松院があります。

口伝によれば、むかし大松院本堂の裏手の小高い丘に罪人の処刑場があり、村上民弥がその霊を弔う一宇を建立したといいます。同氏は大松院の開基であることから、それを基礎にして寺が開かれたと考えられます。

大松院の開創は、鹿妻穴堰の築造とほぼ同年代の約四〇〇年前。江戸時代に代わる前後（一五九八～一六一四年）、源勝寺第九世・天室清耽大和尚によって開かれました。

火災で焼失後、明治のころ一七世・法筵明東禎和尚のときに南部家の護摩堂を譲りうけて仮本堂とし、その後、大正一四年、一九世・法雲智道和尚の代に本格的な堂宇を建立しました。

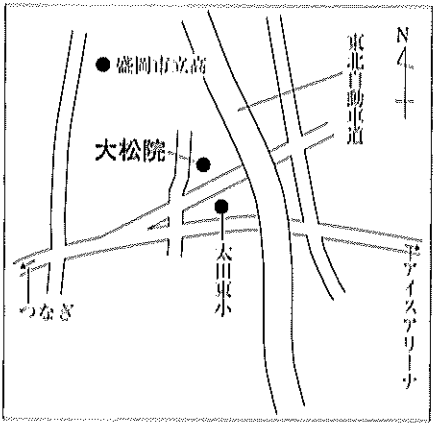
本堂の正面に立つと、重厚な彫り物が目を引きます。この彫り物の制作者の中に高村光太郎がいたといわれ、雀（すずめ）の彫刻部分はその手によるという話があります。

土中の古い墓と『有縁塔』

平成一〇年、本堂の改修と同時に、位牌堂・開山堂が完成しました。

その発掘調査で、樹木が生い茂る庭の土中から、約二〇〇年前とみられる墓が発見されました。土葬と火葬（疫病による死）が層をなすその墓について、住職は、「鏡やキセルの副葬品をみると正規の墓らしいが、墓碑もなく、言い伝えもないことが、かえって不自然」と首をかしげます。

本堂の裏に、かんがい用水路・鹿妻穴堰の水を引く池があります（一六七二年築造）。用水路ができても水量は十分ではなく、長年、水争いが絶えな



かったので、土中の墓もそれにからむものかと想像するばかりといいます。

二〇年ほど前、堂宇の整備に先駆けて墓地の区画整理を実施しましたが、これは今後も継続の予定です。その中で、従来のような家族単位の墓だけでなく、個を単位とする『有縁塔』も設置。まだ要望は少ないが、新しい時代に即したものをと住職は意欲的です。

今も残る古きよき伝統

ある檀家に、キリシタン禁制のころ伊勢神宮に参拝したときの寺請状（身分証明書）が残っています。長いあいだ一村一ヵ寺として存在した大松院は、地域の文化・教育・医療のよりどころとなってきました。今も お盆の八月一三日には、家族連れの参詣者がひきもきらず、境内は自然発生的な〝お祭り〟のにぎわいとなり、屋台が立ち並ぶほどです。年によっては、地域に伝わる土鹿妻念仏剣舞（県指定文化財）が奉納されます。

余話　市内には、なりたちから〝士族寺〟〝ひゃくしょう寺〟があるが、大松院は後者だと住職は言う。大松院の檀家は身内の意識が強く、お寺を大事にする旧来のよさが色濃く残っているという。

関連記事　舞にとけあう供養と娯楽、米づくりの水をめぐって

ロッカー式になった新しい位牌堂

踊りつがれる文化遺産

――神楽・田植踊り・鹿踊り――

芸能に織り込む祈りと伝説

多彩な民俗芸能は、「みちのく」の特徴のひとつです。これらの民俗芸能は、豊作や悪霊退散などの素朴な祈願やまじない、祖先崇拝や供養としておこり、さらに娯楽の要素も加わって、地域文化として伝承されました。

岩手県で、国の重要無形民俗文化財に指定されているのは次のとおりです。

- 早池峰神楽（大償・岳／大迫町）
- 毛越寺の延年（平泉町）
- 永井の大念仏剣舞（盛岡市）
- 山屋の田植踊（紫波町）
- 室根神社祭のマツリバ行事（七市町村）
- 鬼剣舞（北上市・胆沢町・衣川村）

また、県の文化財指定を受けている上鹿妻念仏剣舞（盛岡市）をはじめ、盛岡市（……作四：団体）や、各町村で無形民俗文化財に指定しています。

神楽――「本宮」の地名のルーツ

県内でもっとも数の多い民俗芸能は神楽（かぐら）です。多くは天台系の修験山伏が伝え、天下太平、五穀豊穣、家内安全を祈祷しました。

それに対して、社風（やしろかぜ）神楽とか神明（しんめい）神楽といわれる神主（かんぬし）主導のものがあり、これに属するものに大宮神楽があります。大宮神楽は坂上田村麻呂に随行した神官が引き継いだとされ、大宮神社には、次の社伝とともに多賀神楽絵額一二面（市文化財）が伝えられています。

――征夷大将軍の坂上田村麻呂が奥州に来て滝沢郷の頭領と戦うが、征服はかなわず、一時帰朝して伊勢神宮に祈願し、その後ようやく平定した。祈願の際に伊勢神宮から内宮・外宮の御分霊を賜り、これを奥州の守護、五穀豊穣、万民平安のために奉祀。内宮の分霊は東の仁王の地（盛岡市新山小路旧岩手山神社付近）に、外宮の分霊は西の雫石川畔（本宮字舞屋・蛇屋敷付近）に祀った。が、そこは洪水のおそれがあるため移転。現在地が大宮豊受大神宮となった。元の社（やしろ）があった場所が元宮、いまの本宮の地名になった――

（大宮神社略図説）

田植踊――神代につながる伝説

豊作を祈りつつ明日に夢を託して田作りの所作を舞う――。稲作儀礼と結びついた田植踊りは、数少ない農村の娯楽のひとつで、予祝行事として小正月に上演されました。それは重労働の田植えを鼓舞するものでもありました。

口上にその由来をみると、遠く神代

につながっています。

――西天竺に五穀の種があると聞いた天照大神は、春日大神に、その種籾をわが国に移すことを命じた。春日大神は稲荷大明神と内談し、稲荷大明神が西天竺に渡り、番人のすきをみて五穀の種をかき集めて戻った。稲荷大明神は種の仕立てを命じられてこれに励み、多くの種籾を収穫した。天照大神がそれを万人に与えたので、青々とした稲田になった。天照大神がこれをご覧になり、正月一五日の夜、八百万の神々をお集めになり、安楽喜慶のお遊びをされた――（見前田植踊伝書より）

かぶり、動作をまね、供養と祈りを込めてお盆や秋祭りに踊りました。

その型は、岩手県北と県南で大きく二分されます。盛岡周辺に伝わるものには、南部氏の祖・光行公が甲斐国（山梨県）から陸奥国に移るときに同行したとするものもあります。

獅子（鹿）踊り――祈りと供養

「ししおどり」は、獅子踊り、鹿踊り、鹿子踊などと書かれます。「シシ」とは、古くは猪、鹿など獣類の総称だったとか。古くから村人に親しまれ、また、重要な食料でもあった鹿の頭を

「飯」に包括される地域の歴史

飯嶋山（はんとうざん） 長善寺（ちょうぜんじ） 曹洞宗

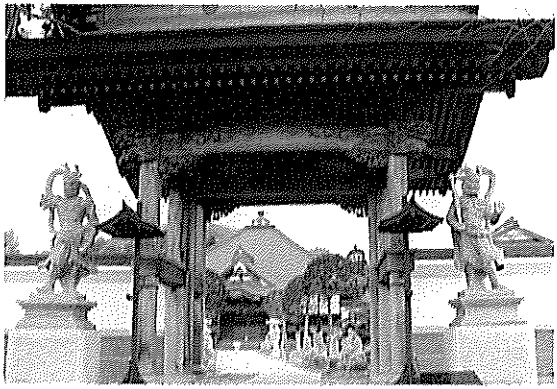
◆盛岡市上飯岡一五一二
◆電話　〇一九一六五九一二五五〇
◆住職　第三〇世　晴山敬義

飯岡の地名と山号

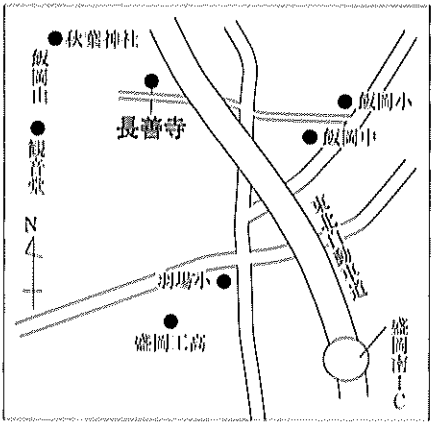
長善寺は、志波古代公園（国指定史跡）近くの飯岡十文字から南に約一・五キロ、盛岡南ICから北に二キロといった場所にあります。

東側を東北自動車道と鹿妻本堰が通り、西には飯岡山。いまのように都市化するまでは、長善寺の前は広々とした田園で、一帯は昔から沼池のある米作りの好適地でした。この飯岡山を高に見立て、「飯嶋」の山号にしたものとみられます。

長善寺は、戦国時代（一五二一～二八年）、飯岡山の中腹に城を構えていた飯岡平九郎（開基）の菩提寺として建立され、宮古市の華厳院の二代目・山月秀関大和尚が開山しました。秀関は、長善寺のほか宝積寺（岩手町、葛巻町）を開いた人でもあります。また、長善寺の五世・六世・七世は、それぞれ高伝寺（矢巾町）、清雲院（滝沢村）、天昌寺（盛岡市）を開いています。



平成９年、山門前に仁王像を建立



近年、東北自動車道の整備や流通センターなど近郷一帯の開発は目覚ましく、呼応するように、長善寺の堂宇も充実してきました。昭和三九年の庫裏にはじまり、昭和四三年に位牌堂と開山堂、昭和五〇年には山門を改築しま

した。本堂の襖や門前の仁王さま（執金剛神）など檀信徒の寄進も多く、境内に建つ幾多の石像にも地域の篤進が感じられます。

古いものでは、江戸時代に鋳造された半鐘が伝来し、南部鋳物師の四代目にあたる鈴木八郎兵衛（一七四一年没）の銘文があります。

観音伝説にみる豊かな実り

飯岡山の、かつて飯岡館があった付近に二つの堂、秋葉神社と千手観音をまつる飯岡観音堂があります。

杉とモミの大樹（市保存樹木）がある秋葉神社は、その昔、斯波氏の臣であった飯岡城主が領内の守護神としてまつったとされます。御本体はふだん長善寺に安置し、九月七日の例祭のときに神社に移す慣例になっています。

千手観音（身丈一〇センチ）には、いまから約一二〇〇年前、坂上田村麻呂の蝦夷征伐にまつわる伝説があります。田村麻呂将軍がこの地に長く布陣していたころ、念持の観音さまが夢にあらわれ、「この地の草の実は米のように食べられる」との教示。さっそく、飢えて疲労困憊の兵に木の実や青菜を炊いて与えたところ士気を取り戻し、ついに蝦夷を平定。これこそ観音さまの慈悲であると、この地に御堂を建ててまつったということです。

時代が下り、観音さまをまつっていた家が傾いたため方ぼうを流転しましたが、地域の人々の熱意により、無事、旧地に帰還しました。毎年、七月一〇日の縁日にはご開帳になり、当国三三観音九番札所の神力ある観世音として、いまも多くの参拝者が訪れます。

住職によると、地名の「飯」、すなわち、食べ物や土地の豊かさにあやかってか、子孫繁栄や富裕祈願に訪れる人が多く、和賀・江刺方面からバスを仕立てての参詣があり、結婚前にお参りする人が目立つということです。

鐘　鋳銅製半鐘（市文化財）

関連記事　観音信仰と三三観音の巡礼

開創四〇〇年の伽藍整備と「寺史」の刊行

朝前山（ちょうぜんざん） 清水寺（せいすいじ） 曹洞宗

◆盛岡市西見前一七―四九
◆電話 〇一九―六六―八一〇〇―二二
◆住職 第二五世 髙田三雄

由緒ある山門と秘仏の十一面観音

国道四号の西側、盛岡市の新都市といった地域に、盛岡南高校に近接して清水寺があります。

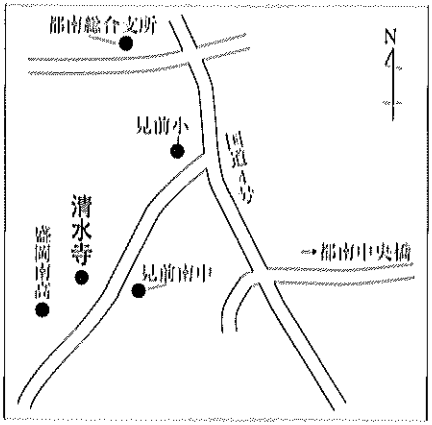
清水寺は平坦地にありますが、その昔、修行場だった寺院は、人里を離れた山に置かれたため山名（山号）を冠し、寺院の門を山門と呼ぶようになりました。清水寺の山門は、小振りながら、盛岡城をしのぶ希少な建造物です。盛岡城の取り壊しのとき、城内の諸門のひとつ（一説に台所の門）を払い下げられた人が、菩提寺の清水寺に寄贈し、移築したものです。

清水寺は、戦国時代（一五五五年）、斯波氏臣下の木村家が建立した寺院にはじまります。その寺に浄法寺村の桂寿院（天台宗）から僧を招きますが、数年後に帰山して無住となりました。

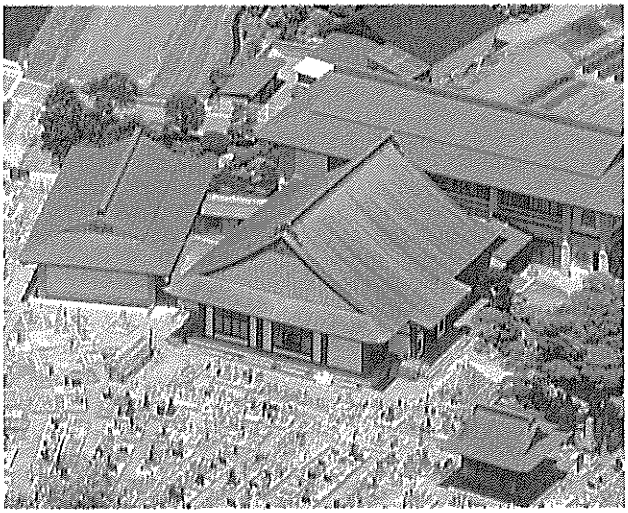
盛岡城内から移築の山門

その後、北条一族の弔いのため出家して奥州に下った禅僧（のちの龍吟伝邀）が、旧知の木村家の依頼で住職となりました。禅修は、それに先立ち、永徳寺（金ヶ崎町・総持寺直末）で曹洞禅を学び、師の龍山伝育（りゅうざんでんいく）を請し、天台宗から曹洞宗に改宗開山（一五九三年）し、自らは二世となりました。

清水寺の境内に、古い井戸があります。清水寺の名称も、伝来の十一面観音が眼病平癒で信仰されたのも、この



地から出た湧水によるとみられます。昔、煙のこもる茅ぶきの家屋で目を傷めた人々は、観音さまに祈願し、この清水に薬効があるとして洗眼しました。明治末期に建立の観音堂には参詣者のための小部屋を設けていました。



この十一面観音は、寺が開創したころ、無人のあばら家に放置されていましたが、所波臣下の見前氏の守り本尊とも伝えられます。花巻市の清水寺に伝わる観音像と同系統（姉妹）とされ、縁日は九月一七日で、ご開帳は五〇年に一回という秘仏です。

仏像や絵で仏教を深める

清水寺は、この間、法堂荘厳整備事業をすすめてきました。さきごろ本堂に設置された一二枚の大欄間は圧巻で、目をうばう見事なものです。また、襖絵や道元禅師の絵像、四天王、十六羅漢などの像が堂内随所に配置され、仏像や絵を通して仏教等を深めることもできそうです。

本堂の改築、戦争で失った大梵鐘の再鋳、観音堂を改築した先代住職につづき、現住職になって大庫院、開山堂兼位牌堂、住持棟を改築。また、平成四年の落慶にあわせて、開創四〇〇年記念に『清水寺史』刊行。深さの中に親しみのもてる中身で、檀家に喜ばれたということです。例えば、十一面観音の項をみると、「頭の中央には、少し大きい仏さまのお顔が険しい面相をして、善男、善女の信者の中に悪心のある者が混じっておらないかとにらんでいる。この仏さまを仏頂と言い、世間では笑顔を見せない人を仏頂面ということは、この仏さまが語源であるという」と解説しています。

整備された法堂は、檀家の活用はもちろんのこと、一二年前に結成された全国清水寺ネットワーク会議（約九〇ヵ寺）を行う予定もあるといいます。そうした機縁により、法話と献茶法会（毎年九月第二土曜日午後一時～）は、京都清水寺の貫主らを講師に招いています。

いまから四〇〇年前、江戸時代前夜の開創

竜洞山（りゅうとうざん） 大泉院（だいせんいん）

曹洞宗

◆盛岡市手代森一六―三二―一
◆電話　〇一九―六九六―三二一〇
◆住職　第二二世　澤口宗且

世は斯波氏から南部氏へ

北上川の東、国道三九六号の沿線。都南大橋と都南中央橋のあいだの住宅地が広がる南端に、小高い丘を背に、大泉院があります。

大泉院は、江戸時代前夜（一五九七年）、正覚寺（紫波町）五世・雪庵東積和尚によって開かれました。開基は手代森館の城主・細屋長左衛門と伝えられ、寺院はその館の下方（現在地）に建立されました。手代森城主は、大萱生氏（滝源寺開基）と同じく河村党から斯波臣下となり、細屋長左衛門は手代森最後の武将といわれています。

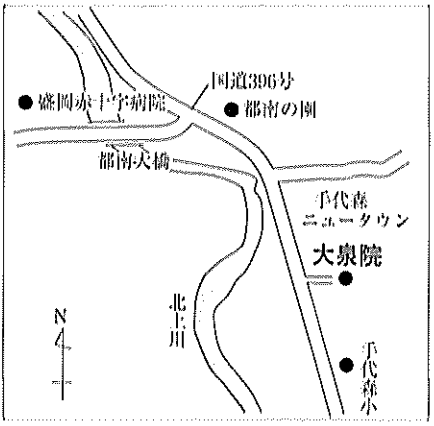
河村氏は鎌倉御家人で、源頼朝による平泉の藤原氏攻略で勲功のあった河村秀清が大巻館（現紫波町）に拠し、紫波と岩手郡の川東を領有していましたが、しだいに斯波氏に押されていき、藩政時代には南部氏の付庸のようになりました。

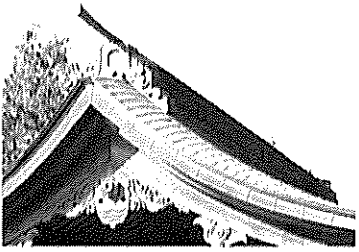
安土桃山時代（一五八八年）、南部氏に攻められた手代森内膳太夫秀親は、主家を離れて帰降。この地域を領有したものの、南部重直公のときに何かの罪により没収されました。

地域に伝来する仏像

大泉院には、作者や制作年代は不明ですが、極彩色の古い地獄極楽額絵図一双が伝来しています。

また、境内にまつる聖観世音は、当国三三観音一一番札所になっています。江戸時代の作とみられるこの観音さまは、明治の神仏分離により、約一キロ南の館林神社か





ら移転したものです。もとの一〇番札所は、大泉寺から約七〇〇メートル北の小山神社（高寺観音）の十一面観音でしたが、やはり大慈寺（盛岡市）に移され、いま旧地には分身がまつられています。

高寺観音は、遠く桓武天皇（七八二～八〇六年）の勅願による建立、観音像は行基の作と伝えられています。ほかにも地域の古仏として、手代森大沢の地に薬師如来像（平安期作）があり、市の文化財になっています。

地域の太古を示すものに、南約一キロ付近に縄文晩期の集落跡、手代森遺跡があります。そこから、宗教的・呪術的に使われたといわれる遮光器土偶が出土し、ほぼ完形に復元され、国の重要文化財になっています。

伽藍と墓地環境の整備

周辺の宅地化に歩調を合わせるように、大泉院の伽藍と墓地整備も進んできました。山門の改築、屋根の葺き替え、モダンな屋根の、広間のある庫裏。本堂も、数十年にわたって壁面を埋めていた遺影をはずして内装を整えました。遺影の約四割は遺族に引き取られて帰宅したということです。

江戸時代、お寺は、いまの戸籍ともいえる寺請制度によって檀家が定まり、安定しました。江戸中期、藩内には一千人前後の出家者がいて、各町村に分布する寺院は四七〇余。庶民六〇〇人に対して一寺院があり、そこに平均二人以上の出家僧侶がいて、庶民に接していました。家庭で何か問題があると僧侶が相談にのり、僧は学問を修めていたので、地域の文教を担いました。

いま、大泉院の、バスツアーで本山を訪ねる企画が好評を得ているといいます。新旧住民が混在する地域にあって、精神のよりどころとしての期待感とみることもできそうです。

開山和尚が植えた珍木・シダレカツラ

早池峰山 瀧源寺（はやちねさん りゅうげんじ） 曹洞宗

◆盛岡市大ケ生三三一九九
◆電話 〇一九一六九六一三五〇〇
◆住職 第二四世 下斗米祖薫

開山にまつわる坐禅石

国道二九六号から東に約二キロ、山あいの静かな集落に瀧源寺（滝源寺）があります。滝源寺のある大ケ生地区は、明治の末から昭和一〇年代まで金山でにぎわいをみせ、滝源寺の数百メートル手前から乙部川を渡って行くと大ケ生金山跡があります。

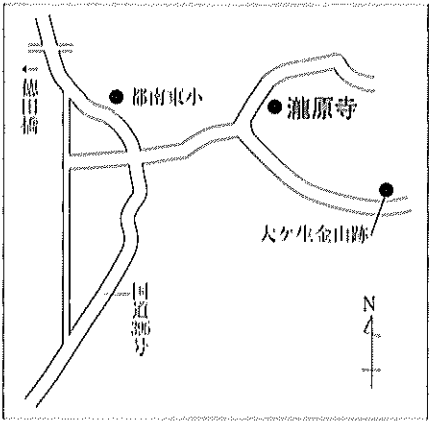
滝源寺は、安土桃山時代（一五七四年）、埼玉県川越市の蓮光寺六世・性翁慶守大和尚によって開山。いま、滝源寺の東一〇〇メートルほどの場所に「坐禅石」がありますが、東北を布教中の慶守が、付近で雨露をしのぐ岩窟を見つけ、その岩石で坐禅をしたと伝えられています。

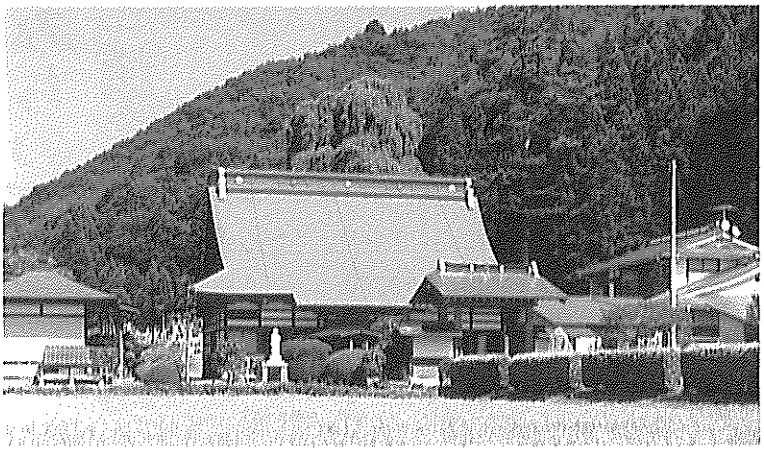
慶守は、坐禅の合間に集落で教化を行い、大萱生玄藩之守秀重（開基）の帰依を得て寺院を建立。すぐ脇を流れる乙部川の滝にちなんで、滝源寺と号しました。

開基・大萱生氏の変遷

開基の大萱生氏は、滝源寺の近くに館を構える、この郷の領主でした。もとは鎌倉御家人・河村秀清の臣でしたが、斯波氏の配下となり、そのころ滝源寺を開山しました。やがて、斯波氏は南部氏との抗争に敗れ（一五八八年）、いったん山王海に逃れた斯波詮直は、その後、ひそかに大萱生家に隠れました。旧主をかくまった大萱生氏は、南部氏に反意ありとみられて攻撃されますが、のちに許されて南部氏に仕えました。そして、江戸時代初頃（一六〇一年）の岩崎（和賀）一揆に出陣して功をあげ、後年、三六代利敬公のときには江戸家老職をつとめました。

いまも大萱生館跡には一族の墓碑があり、そこには自然の地形を利用した二棟の館があったということです。





滝源寺は、江戸時代の中期（一七二六年）に山火事で堂宇を焼失し、それから約二〇年後（一七六七年）、大堂生城主八代・秀妙により再建されました。それがいまの本堂で、二百数十年を経て、なお健在です。

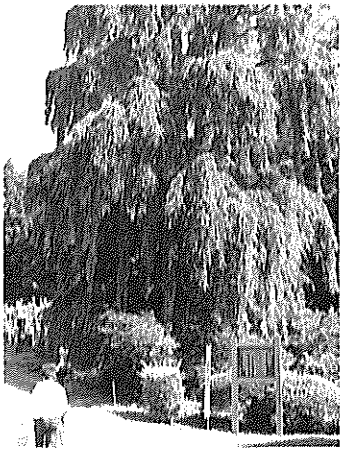
滝源寺の本尊は、全国的にも珍しい釈迦牟尼仏・迦葉尊者・阿難尊者の三尊形式の立像です。青森県三戸町の龍用寺・運門和尚によって作られた像です。

記念物となったカツラ三兄弟

滝源寺の本堂のうしろに、高さ二二メートルのシダレカツラの大樹があります。カツラの葉はお香になり、よく寺院に植栽されますが、枝をたれるのは珍しく、変種とみられています。

最初、大迫町岸で見つかって地元の寺（妙泉寺）に移植され、そのひこばえを開山の慶守が植えたと伝えられています。それから二百数十年、巨木となったカツラは伐られ、本堂の修復用材になりました。

いまの樹は伐根から萌芽した二代目で、樹齢約一七〇年。分株された門（関口邸）と看町（中嶋邸）の樹とともに、大正一三年に国の天然記念物に指定されました。かつては、ひこばえで殖やすだけでしたが、阿部善吉翁が苦心のすえに接木を考案し、近年は大量増殖により各地に植えられています。



学術上めずらしいとされるシダレカツラ

樹　シダレカツラ（国天然記念物）

関連記事　みちのく「黄金の国」の跡、お地蔵さまの信仰とご利益

みちのく「黄金の国」の跡

復元された「大ヶ生金山跡」

国道三九六号から東に入った瀧源寺のあたりは、北上山地の黒森山が目の前にある山間の静かな所です。ところが、時代を六、七〇年さかのぼると、付近一帯は大ヶ生金山で活況を呈していました。坑道には複線のトロッコが通り、製錬所と矢幅駅を結ぶ一二キロの鉄索で鉱石が運搬されていました。

岩手県の北上山地は国内有数の産金地帯で、金の需要増に応じた奨励策によって、砂金地帯はつぎつぎに採掘されました。そうした県内の金山は一七八にのぼり、その数と規模は「金産国」と呼ぶにふさわしいものでした。

大ヶ生金山は、明治三六年（一九〇三）に廃坑が見つかって、三九年から操業。当時は県内有数の鉱山に挙げられ、働く人の数は四〇〇人、鉱山長屋は八〇戸を超え、映画も、盛岡市内の映画館より早く封切られるほどでした。その盛況も、戦争のため昭和一七年に休山となり、二年後に廃坑となりました。

いま、大ヶ生金山の坑道のひとつ「万寿坑道跡」が観光用に復元され、往時の栄華を伝える大きな看板が立っています。（大ヶ生金山跡略図参照）

奈良の大仏に奥州の金

言い伝えによると、大ヶ生金山は安土桃山時代から金を採掘しました。記録がない、少ないというのは県内の各金山に共通し、時の権力に狙われないよう隠したとする見方もあります。

奈良時代、奥州の金が遠く離れた都まで知られるようになったのは、七四九年の天平産金です。

仏教を深く信仰した聖武天皇が、国力を挙げて東大寺に五丈三尺五寸（一六メートル）の毘盧舎那仏（びるしゃなぶつ）を造営したとき、塗金の段になって金が欠乏し、完成が危ぶまれました。このとき、陸奥守（むつのかみ）が黄金を献上。それに助けられて盛大な大仏開眼会ができました。

それまで日本では金は出ないとされていましたが、このころを境に、陸奥国は産金・献金の地に位置づけられ、中央の勢力下に組み込まれていきました。

金色堂建立、外交資金として

天平産金は、いまの宮城県涌谷町で掘られたものです。

江戸初期に佐渡で大きな金鉱が発見されるまで、日本の産金といえば気仙地方が中心でした。その中でも、陸前

高田市の氷上山の峰つづきにある玉山金山は別格の存在でした。

江戸時代の記録には、平重盛が唐（中国）の育王山に玉山の金を贈ったこと、平泉の金色堂の建立も玉山金山による、とあります。

藤原清衡が宋朝（中国）に多額の金を贈って紺紙金銀字一切経（国宝）を受領したほか、年々黄金を寄贈したという伝えもあります。

黄金を好んだ豊臣秀吉も、仙台藩の伊達家も、玉山金山を特に重要な金山として扱いました。伊達家三代までの豪華は今に語りつがれ、支倉使節団派遣のための造船から一〇年余にわたる旅の諸経費、ローマ法王をはじめとする要人への寄贈金などは、玉山金山によるものとされます。

マルコ・ポーロが『東方見聞録』に記した黄金の国・ジパングとは玉山金山を中心とするこの地方だった、という説もあります。ジャパンとは「漆の国」であり、岩手県は古くから漆の生産地だったことを考えると、因縁浅からぬものを感じさせます。

時代がおりて明治の日露戦争のとき、時の外務大臣は財政難を打開するため、この金山の金鉱埋蔵量は四〇億円という報告をもとにして、米英から八億円の借金に成功しました。

四〇〇年間に五回の火災に遭遇

花林山（かりんざん） 如法寺（にょほうじ） 曹洞宗

◆盛岡市乙部三三一一二九
◆電話　〇一九一六九六一二〇三四
◆住職　第二二世　近藤光徳

斯波氏の滅亡と乙部館

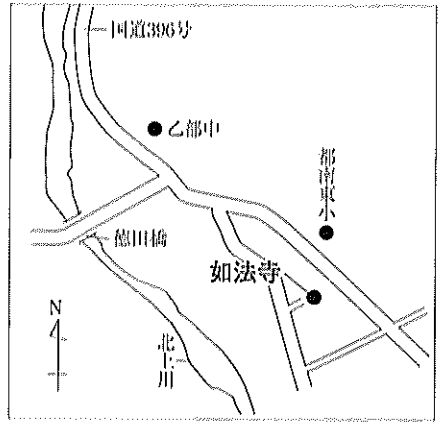
如法寺は、国道二九六号の旧道に沿った通称・乙部町にあります。古来、この地は北の不来方郷と、南の新堀・大迫・遠野に通じる要路で、乙部川と北上川が合流する水運交通の要地でもありました。「乙部町、柳の葉より狭い町、せまいども一夜の宿で、銭をとる」と唄にもあるように宿駅が置かれ、今も街並みに昔の面影をみることができます。

如法寺は、安土桃山時代（一五九二年）、石島谷町の大興寺一五世・檀室瑞鷲大和尚により開かれました。また如法寺二世・養庵泉朗和尚は宮古市に江山寺を開山しています。

当初の地は、乙部館つづきの夏焼山の一角で、いま観音堂（高浦田家所有）が建っています。

斯波氏の臣下・乙部兵庫の城だった乙部館は、乙部川岸の断崖に接し、空堀のある要害堅固の館でした。乙部氏は斯波氏の滅亡後、南部氏につきますが数年後に館は破却。同じころに如法寺も、刑場跡ともいわれる現在地に移転しました。

江戸時代初めの岩崎（和賀）一揆のときに、乙部氏の一族から三人が出陣し、二人が討死しています。その後の一族とのかかわりとしては、朝島山付近に入植した乙部氏の家来が、ゆかりの寺は如法寺だといってきたということです。



中村直元県知事の筆による慰霊塔

付近の古い遺跡に、如法寺の一キロほど南、北上川台地に乙部方八丁があり、こうした方八丁遺跡の多くは蝦夷開拓の基地に関係するとされます。もっと古くは、遮光器土偶（国の重要文化財）が出土した縄文時代の集落、手代森遺跡が三～四キロ北にあります。

火防の秋葉さんの縁日

如法寺は、四〇〇年に五回の火災に遭い、本尊以外のすべてを焼失しました。近くは、大正七年の類焼。その後の再建は、長松寺（盛岡市）の古材を譲り受け、筏に組み、北上川を流下したといいます。

昭和五八年、またも、煙突の加熱から堂宇を焼失し、檀信徒の多大な協力により八年目に再建されました。

火災のあと、篤志の寄進による聖観音像や水子供養地蔵などが建立され、境内も年々充実してきました。まだまだ課題があるという住職、立地が小高くなっているため、お年寄りも楽に登れるようにと緩やかな階段を造りましたが、今後、時間をかけて本堂後方の墓地に続く斜面も環境整備をしたい、と話します。

如法寺には、火防の秋葉三尺坊がまつられています。地区に火災が多発するため、講中をつくり火の用心を祈願してきました。しかし、年一度の縁日はきわめて質素で、各自持ち寄りの豆腐一丁と御酒、駄菓子などで懇談するというもの。それは、近くの熊林榆現と祭りを競い、一方が負けると必ず災難が起きる、との伝承があるからです。

京都の仏師・駒野舟下作の秋葉三尺坊も、前の火災で焼失し、二代目を安置しました。住職は、神仏の信仰と祈願をとおして、自ら火の用心の決意を新たにしなければ、と話します。

関連記事　「らかん公園」と鉦鐘と供養塔

四〇〇年前、高田氏の菩提所として再開山

月鶏山（げっけいざん） 高傳寺（こうでんじ） 曹洞宗

◆矢巾町高田二二―五三
◆電話 〇一九―六九七―二二四
◆住職 第二四世 高田泰明

真言宗の寺院をもとに

盛岡市との境界になっている国道四号の見前橋から南に約〇・五キロ、高田交差点から西進すると高傳寺（高伝寺）があります。近辺にニュータウンが開けていますが、西側には畝上来を産したという豊かな農地が広がります。

高伝寺の開基は、天正年間（一五七三～九二年）、高田（中野）吉兵衛康実とされます。康実については、紫波町にもゆかりの寺（長徳寺、長岩寺）がありますが、斯波氏に入婿したのち南部氏サイドで働き、その功により石高を加増されました。高田の地に康実の城館があり、南接して真言宗の仏堂があったといいます（現昆氏宅地）。

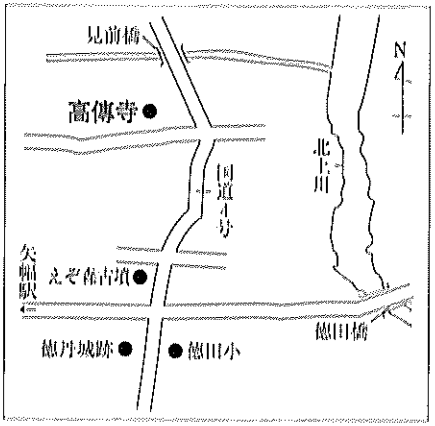
伝えによれば、康実の没後（一五九四年）、高田の地を継承した長男が、城館に菩提所として高伝寺を建立し、長滝寺五世・玉雛長運（きょくすうちょうん）大和尚が曹洞宗に改宗して開山。これを裏づけるように、高田吉兵衛康実の位牌があり、真言宗にみられるように、十三仏を本尊としています。

焼失を免れた観音さま

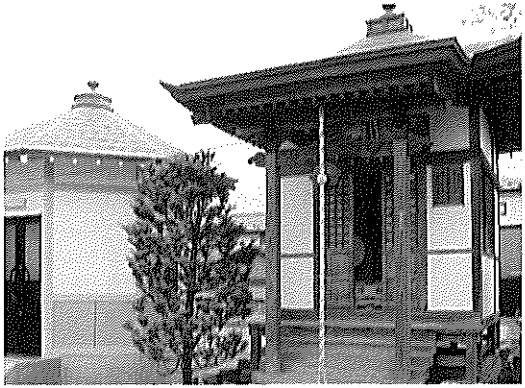
平成三年、高伝寺は山門だけを残して全焼し、平成六年に鉄筋コンクリートの新本堂が落慶。平成一四年には、先代住職の念願だった経蔵が、ちょうど七回忌に完成しました。

火災のとき、唯一、住職が持ち出したという観音堂の観音像。この像は、南部三三代利視公（一七一六～三六）ゆかりの十一面七ツ子観世音菩薩で、次の伝えがあります。

盛岡城内にある稲荷社のご本尊・木像観音（新羅三郎義光公お守り）が数百年を経て傷んだので、利視公は釜屋仁左衛門に全く同じ像を唐銅（からかね）でつくらせました。木像を下賜された仁左衛門



が自宅に安置していると、子どもが持ち出して遊んでいました。元に納めたものの、それから家族に病人が続出。観音さまが遊びの中断を怒っているとされ、祈祷により快癒しますが、この像を高伝寺に奉納し、仁左衛門は縁日ごとに参詣したといいます。



並び建つ観音堂と経蔵

句碑と石塔婆

境内で目につくのは、俳人松本つや女の碑です。石柱に「生誕の地」とあるように、二一世の次女で目姓・高田ツヤ（明治三一年生）は、高浜虚子の「ホトトギス」に入門。俳句結社「笛」の主宰者であった夫・松本たかし亡き後、昭和五八年に没するまで「笛」を主宰しました。その一七回忌の平成一一年、境内に句碑が建立されました。

また、盛岡市出身の女優・宮城千賀子（平成八年没）の墓があります。

高伝寺の西方、昆家の墓所の一角に、二基の石塔婆（町文化財）があり、梵字でア（胎蔵界大日如来）、バン（金剛界大日如来）、キリク（阿弥陀如来）と刻まれています。石碑に梵字を彫ったものを「種子塔（しゅしとう）」といい、真言宗の開祖・弘法大師（空海）によって建立し、仏像と同様に崇拝されました。この碑は鎌倉時代末期の建立とみられます。

一キロほど南には、古墳時代から奈良時代にかけての古墳群（藤沢狄森一号古墳、県指定史跡）があり、ほかに、約二キロ南には徳丹城跡（国指定史跡）があります。

古代国家が造った城柵

――徳丹城・志波城――

仏教文化の浸透

岩手県に伝わる最古の仏像は、七世紀後半、白鳳時代の銅造聖観音立像です（源勝寺所有、国の重要美術品、県文化財）。この仏像について、もと志和稲荷の本地仏で志波城の守護に坂上田村麻呂がまつったもの、という見方もあります。

その昔、紫波町には、弥徳天皇（七六五～七七〇）の勅願による建立といわれる高水寺（盛岡へ移転後廃寺）がありました。そこには一丈（約三メートル）の観自在菩薩像が安置され、平安時代末期には金堂があって一六人の僧侶がいた、という後年の記録もあります。開創はなぜに包まれていますが、志波城の鎮護または蝦夷懐柔のため坂上田村麻呂が創建したのではないか、ともいわれています。

なお、いま高水寺跡に建つ高水寺観音堂には、一丈の仏像の後継に造像したと伝えられる十一面観音（県文化財）が安置されています。

往古、仏教文化は中央勢力の征夷開拓とともに入ってきました。統治支配のための胆沢城・志波城の設置から平世紀、最北の定額寺・極楽寺が北上市に建立されました。定額寺とは、寺田の開墾などかなりの裁量権を持つ準官寺で、中央文化の中心ともいえるものでした。

（高水寺観音堂略図[図表1]）

蝦夷支配の拠点・志波城

古代律令国家による蝦夷攻略は七世紀半ばに始まりました。

平安時代の初頭（七九七年）、征夷大将軍に任命された坂上田村麻呂は軍を率いて北進。岩手県に入ったところで現地の首長アテルイや盤具公母礼を中心とする抵抗軍を破って胆沢・志波間を制圧し、支配の拠点として城柵を造営しました。

さきに造った渟足柵（新潟県）や多賀城（宮城県）につづいて、胆沢城（八〇二年）を、その翌年、志波城を造りました。

志波城が置かれたのは盛岡市の雫石川と北上川の合流点付近。太田方八丁といわれた大規模遺跡がそれです。この地は現在、志波城古代公園（国の指定史跡）として、門や櫓が復元され一般に開放されています。

（志波城古代公園略図[図表1]）

一三〇〇年前の城柵・徳丹城

志波城はたびたび水害に見舞われ、わずか一〇年ほどで移転します。北上川沿いに南下した徳丹城（八一二年ごろ）がそれで、徳丹城は徳田所在の志波城を意味しています。

徳丹城を造営したのは、坂上田村麻呂のあと征夷大将軍になった文室綿麻呂（ふんやのわたまろ）です。文室綿麻呂は、岩手県の最北部まで影響圏に組み入れて蝦夷攻略を成し遂げ、戦時体制から平時体制に移行し、夷をもって夷を制する政策を巧みに推し進めました。徳丹城には、本格的な官衙（かんが）（役所）が置かれましたが、九世紀半ばごろ衰退しました。

いま徳丹城跡（国の指定史跡）の一部は公園になり、近くに矢巾町歴史民俗資料館が建っています。

（徳丹城跡略図152ページ）

北限の城が意味するもの

志波城（徳丹城）は、古代律令国家の北限の城です。文室綿麻呂はもっと北まで勢力を伸ばしたのに、なぜ、盛岡周辺に城を置いたのでしょうか。カギは米です。

もともと南方の作物である米は、古くは寒冷地では栽培できませんでした。中央勢力は米作りの北限を盛岡付近とみて、直地拡大につながる地域選定をしたとみられます。

もうひとつは北上川です。日高見国の母なる川に、中央勢力もまた着眼したと考えられています。

旧村名のもとになり平安期の手法を残す不動明王

洞吟山（とうぎんざん） 龍泉寺（りゅうせんじ） 曹洞宗

◆矢巾町岩清水字北谷地七七
◆電話 〇一九一六九七一一三七七
◆住職 第二六世 石亀良孝

源勝寺につながる縁起

盛岡和賀線から東根山側に少し引っ込み、紫波町まで一キロといった場所に龍泉寺があります。

龍泉寺は、江戸時代前夜（一五九四年）、岩清水泰宏（龍泉寺殿金嶽泰愛禅定門）を開基に、源勝寺九世・天室清耽和尚が開山。寺伝では、かつてその地に源勝寺がありました。

斯波氏・岩清水氏の菩提所だった源勝寺は、紫波町の寺屋敷の地に移ったのち、南部氏の時代になって盛岡へ移転。そこで、岩清水氏をはじめとする旧檀徒が、源勝寺の旧地に龍泉寺を開きました。

地頭の岩清水氏は、源勝寺のほか水分神社・古稲荷神社・不動明王など、地域の重要な寺社に由緒のある豪族で、その祭祀に深くかかわっていました。

岩清水石京は、悪政への不信感から主家の斯波氏を離れ南部氏へ傾斜しました。清耽和尚は南部信直と旧知の間柄で、斯波氏攻略を助けた功績により寺領を与えられたとの伝えがあります。

不動尊の道標と祭礼

龍泉寺には、旧不動村のおこりとなった不動明王像（像高七九センチ）があります。

里人の伝えによれば、蘊覚大師（七九四～八六四年）が一刀三礼で彫像し、今の熊野神社の地に一宇を建立して安置したとされます。像は大補修されて原形をとどめませんが、一部に平安期の手法がみられること、昔、不動堂山（北谷地山）付近を古道が通り、伝法寺の伝承などから、蘊覚大師あるいは法弟による建立もありうるといいます。

●略図は100ページ参照

地名のもとになった岩清水不動明王像

姿を消した（平成一五年）改築前の山門

中世の岩清水一族はこの不動尊を鎮守とし、藩になってからは南部氏配下の白光坊が勤行を行いました。明治の廃仏毀釈で管理が手薄になったとき、子らの遊具にされて像は損傷しましたが、明治一二年、龍泉寺境内に移されました。

不動尊は、民間信仰では火の仏神とし、また武運長久や息災安全を願い、戦前までの信仰はすさまじいものがありました。矢幅駅から街道沿いに石の道標が立ち、祭礼（旧八月三日）には、数町にわたって幡が立てられ、門前には市ができたといいます。

数学の史料「南部算額」

不動堂にある三三〇余の奉納額。そのなかには明治初期、八幡宮での消防の「出初式」の絵や、南部算額など貴重なものがあります。

算額とは、和算家が数学の難問を解いたときに解法を額にしたものです。江戸時代、盛岡は関流の和算が盛んで、岩手県には九二点（全国二番目）の算額がありますが、残存するのは一関市周辺（伊達藩）のものが大半です。

この算額（一〇九×一九三センチ）は、数の多い幾何学図形ではなく、二五乗計算の解法を示したもので、明治一二年、紫波町の鷹匠平次郎と門弟三六人によって奉納されました。

近年、龍泉寺では、順次、伽藍を改修してきましたが、不動堂を移設して、新しい研修道場を築造。住職は、「葬祭のためというよりも、仏さまに近づく道場としてこそ意義がある」といい、それを意図していると話します。

仏像・額　岩清水不動明王像、不動尊堂奉納額（いずれも町文化財）

往古の歴史を秘めた伝法寺の跡地に創建

法輪山（ほうりんざん） 誓岸寺（せいがんじ） 浄土宗

◆矢巾町北伝法寺一―一〇五
◆電話　〇一九―六九七―五七九六
◆住職　第三二世　西沢正明

●略図は160ページ参照

山緒録にある伝法寺

盛岡和賀線の沿線、北谷地山のふもとに誓岸寺があります。古くは山腹にあって、この山から、北に盛岡市、東に矢巾町、南に紫波町を一望でき、中世の街道（盛岡和賀線）に沿って南に岩清水館、北に煙山館がありました。

誓岸寺は、中世末期（一五七三～九一年）、この地を訪ねた宝山和尚が昔の伝法寺の山緒を知り、再興したとされます。往古の伝法寺について、誓岸寺の山緒録は次のように伝えています。

醍醐天皇（八九八～九三〇年）のころ、諸国を行脚（あんぎゃ）した宣旨の琵琶法師・知教僧都蜘丸が、この地に屋彦山伝法寺を開創。寺領一千石を有し、寺域には釈迦堂・山王大権現・熊野三社など本坊七堂山内五社四八坊を構え、弁財天・大聖歓喜天を奉安し、天台宗の座主を置いていました。しかし、戦火で堂宇を焼失し、座主は青森県の五戸に遁れ、奥伝法寺を建立したとあります。

現在、青森県に奥伝法寺はないものの、地名として残っています。

近郷に残る寺院ゆかりの地名

宝山和尚が誓岸寺を再興したのは、伝法寺釈迦堂の跡地といわれています。

宝山和尚というのは、浄土宗名越派の奥州總本山専称寺（福島県）の頓運社良円上人宝山和尚で、現山寺号を付し、浄土宗で開山しました。その後、数度の山火事に見舞われ、現在地に移転しています。

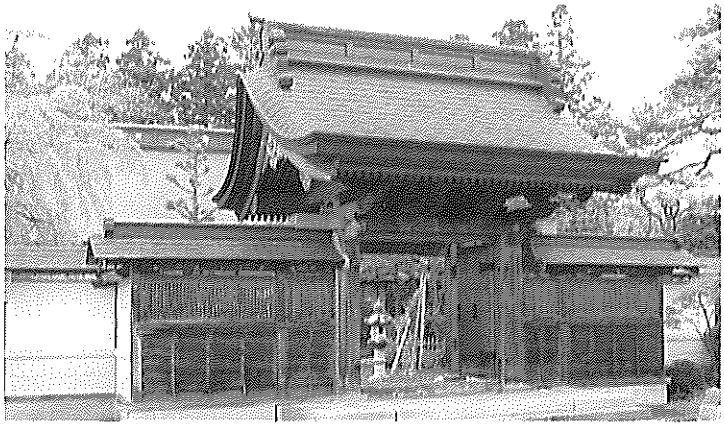
山の斜面を切って平場にした旧地には、今も多数の礎石があります。

周辺には寺院ゆかりの地名が多く、諸坊や堂社があったという口伝から、伝承どおり、中世以前から存在していたとみられます。紫波町の高水寺（廃寺）の前身という見方、また、長慶天皇（一三六八～八三年）の墓陵の地と

釈迦堂の本尊「釈迦の懸仏」

いう説もあります。

住職は、発掘調査をしなければ何とも言えないが、と前置きし、約一千年前の天台寺（浄法寺町、寺伝では七二八年創建）と同じ時間軸で捉えられること。志波城・徳丹城・伝法寺を結ぶと三角形になり、徳丹城の西という位置関係が興味をそそるといいます。



鐘楼の前に建つ釈迦堂にあった石像

山岳伽藍の伝法寺をかかえた座主館（町指定史跡）も、同じように注目されています。

田園に響く鐘の音

誓願寺には、伝法寺釈迦堂の本尊だったという懸仏が伝来しています。神道でご神体とする鏡に仏像をあらわした懸仏（御正体）は、神仏同体説を形にしたもので、明治の神仏分離以降、除去されて、残存するものが少なく、貴重です。

ほかに、知教僧都蝉丸の本像が伝来し、境内には、むかし釈迦堂にあったという釈迦仏の石像があります。

建造物に関しては、昭和四〇年の本堂改築以降、伽藍の充実も進んできました。山門の設置をはじめ、鐘楼に新鋳の梵鐘を備え（平成一二年）、写経塔（平成一三年）が建立されました。

現在、毎朝六時になると、住職の打つ鐘の音が近郷に鳴り響いています。

仏像　鉄造薬師坐像懸仏（町文化財）

史跡　釈迦堂跡（町指定史跡）

鎌倉時代、是信房の布教を伝承する旧蹟

吉水山（きっすいざん） 本浄寺（ほんじょうじ）

浄土真宗本願寺派

◆矢巾町室岡一―八九―一
◆電話 〇一九―六九七―二三七六
◆住職 第二六世 泉山広宣

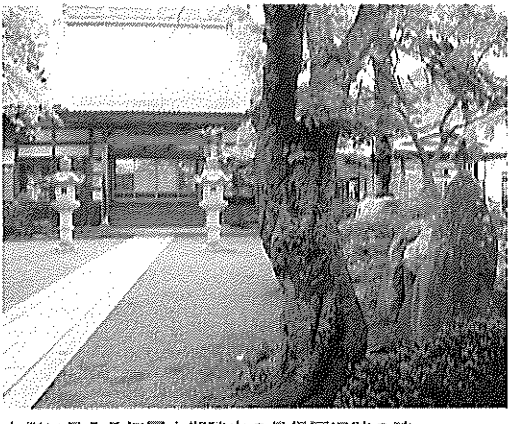
七〇〇年におよぶ変遷

盛岡和賀線から東へ、不動小学校から南西へそれぞれ約五〇〇メートルのところに本浄寺があります。

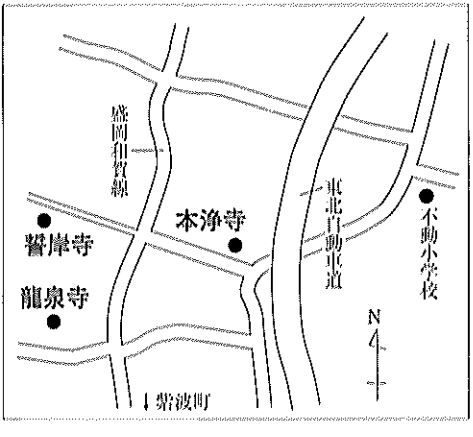
すぐ前を通る東北自動車道の音を聞きつつ、参道から山門へ進むと、しんとした雰囲気の境内に、是信房旧蹟の碑（一七七一年建立）があります。

火災で資料を失いましたが、当時、親鸞の直弟子・是信房の布教の地という伝承があったことを示しています。

是信房は、本願寺伝とほいくぶん異なる浄証寺伝によれば、源三位頼政の曾孫で宗房といい、頼茂の謀反（一二一九年）に連座し、逃れた常陸国（茨城県）で親鸞の弟子となりました。師命を得て奥州に下り、和賀郡・紫波郡で教えをひろめ、八六年の生涯を終えました。



右側に見える江戸中期建立の是信房旧蹟の碑

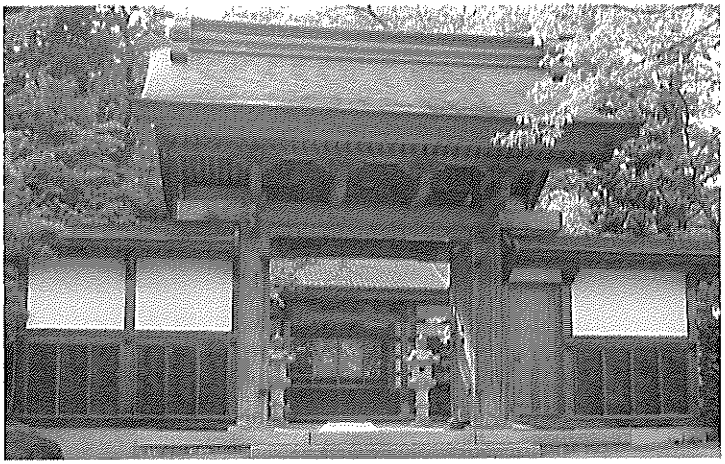


本浄寺は、鎌倉時代中ごろ（一二三一年）、和賀郡万塩一柏の地に、是信房が開創した吉水山清浄院を源流とします。

是信房の子に、本願寺二世となった能信（見）と、行信（弟）の二人がいたといわれます。行信の子に、寿信と浄信がいて、寿信は紫波郡不動村に本浄寺、のちに浄証寺（秋田県六郷町）

を開き、浄信は和賀郡（場所不明）に願教寺（現盛岡市）を開きました。

寿信が本山から本浄寺の寺号を授与されたのは鎌倉時代の末（一三〇〇年）とされます。その後、乱世のため秋田県六郷、いまの紫波町上平沢付近への移転を経て、江戸時代前期（一六〇〇年）、現在地に落ち着きました。



門徒とともに伽藍整備

大正七年、本浄寺は火災で堂宇を焼失しました。現本堂の建立（昭和二〇年）にあたり、仮本堂で二四世・賢英が児童情操教育の日曜学校を開くなど、門徒と一体となった努力が伝えられています。

さらに、昭和四八年には本堂内陣の荘厳を整え、平成三年以降、本堂屋根の銅板修復を実施したほか、山門を設置。平成一四年度には、庫裏会館が新築されました。

寺院は、これまで罪を犯した人の力になり、社会復帰を助けてきた長い歴史があり、現在も多くの僧侶が更生保護分野で大きな力を発揮しています。現住職は、そうした任務のひとつ、教誨師を務めています。少年刑務所などの矯正施設にいる人たちに語りかけ、教えさとす仕事ですが、先代、先々代も同じ任を果たし、三代続けての教誨師はきわめて少なくめずらしいということです。

余録　地域に伝わる民間信仰に「まいりのほとけ」がある。仏像の代わりに仏画を拝むもので、拝む月にちなんで「二〇月仏」ともいわれ、浄土真宗の布教がもとになったという。地域の有力者宅に布教の際の仏画や六字名号（南無阿弥陀仏）の掛け軸を残して、引き続き拝ませたのが民間信仰と習合して継承されたとみられる。減少しているが、近年まで矢巾町に二〇カ所ほど伝えられており、現在、個人蔵の掛け軸は町の文化財に指定されている。

樹　本浄寺のスギ（町天然記念物）

観音さまの年越に行われる「炭つけ」の奇祭

煙峰山（えんぼうざん） 實相寺（じっそうじ） 曹洞宗

◆矢巾町煙山七一三三
◆電話 〇一九一六九七一五六三一
◆住職 第二七世 晴山義昭

煙山氏の菩提寺として

流通センターから南に約二キロ、城内山を背負うように實相寺があります。

實相寺（実相寺）は、江戸時代前期（一六二四～四四年）、東顕寺六世・高獄善寿大和尚が開山。南部信直公からこの郷を給された煙山主殿光邦（開基、煙峯院殿光山実相大居士）が同氏の菩提寺を建立しました。

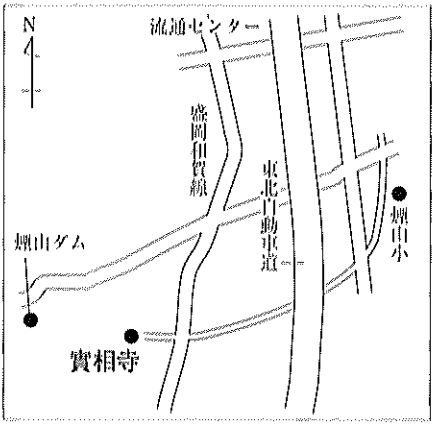
光邦は、源頼朝が藤原氏を討ったときの功により岩手郡を領知した工藤光行の子孫です。光邦の父が栗谷川（厨川）に居住し、東顕寺に葬られたことから、その末寺として開かれました。光邦は工藤を改めて煙山を名乗り、煙山専太郎（明治一〇年生、早大名誉教授）はその後商にあたります。

斯波臣下の煙山氏の伝え

その前に別係累の煙山氏がいて、南部氏が南下し、斯波氏滅亡前夜の話が伝えられています。

一説に、斯波氏家臣の煙山主殿が城内山に館を構えていました（煙山館跡・町文化財）。同志の岩清水石京が主君の悪政に不信を抱いて抗し、南部方に逃れる途次、この館に一泊しました。それを知った斯波氏は、煙山館を攻撃。山中にある館への水断ちをして包囲したので、煙山氏側は米で馬を洗う擬音で対抗しますが、耐えきれずに降伏し南部方に逃れました。館跡から、落城のときのものとみられる多量の焼米が出土したと、古老は伝えています。

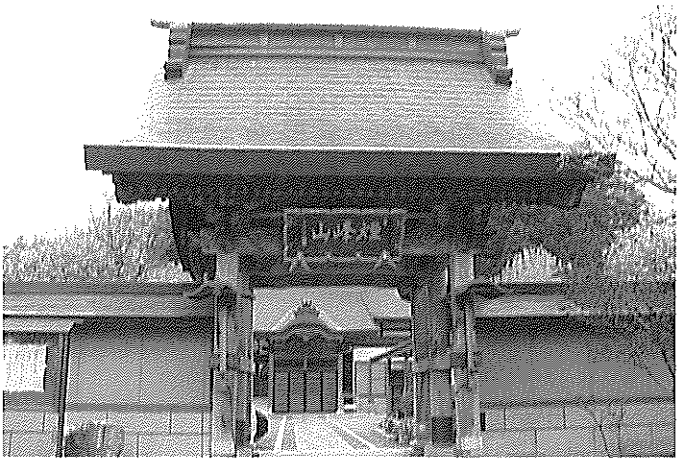
中世の煙山氏は没落して京都に移り、近世の煙山氏（工藤氏）に代わりました。

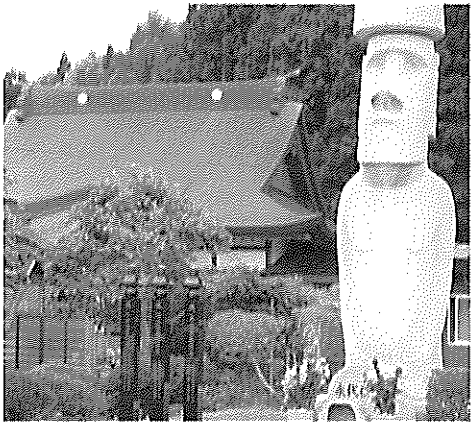


神仏習合の懸仏とモアイ像

いま、城内山といえば、中腹にある観音堂前で行われる「炭つけまつり」

こと「祭灯焚き」（二月第一土曜日）がよく知られています。





焼観音ともいわれるご本尊の聖観音は懸仏（つり下げる形）です。もう一体、南北朝時代の金銅千手観音（二・・四センチ）の懸仏が伝来しています。懸仏は、神器の鏡と仏像を一体化したもので、日本に仏教が伝来すると、在来の神々は諸仏が化身したものという考え方に基づいて造られました。神仏習合の像であるため、明治の神仏混淆禁止により大方は破棄され、貴重な仏像となっています。

新しく珍しい像といえば、境内に大きなモアイ像（平成一二年建立）があります。住職によると、「宗派に関係のない永代供養塔ですから、意味のあいまいなシンボルのほうがいいと考えたのです」とのこと。また、炭つけの奇祭については、「二〇年近く中断していたものを、記憶をたより復活させた」といいます。それからすでに二五年、いまでは全国的にも注目の祭りとなっています。

祭りの復活と同年、蟬山小学校の古講堂を移築した、当時としては珍しい法事場を設置しました。いま、高校生の合宿、坐禅、日曜学校と幅広く活用されています。

実相寺では、毎年七～八月、全檀家を回る棚経を継続してきました。こうした檀家との密なつながりが、各面で底力になっているようです。

仏像　金銅千手観音菩薩坐像懸仏（町文化財）

関連記事　お寺の祭り・裸まいり

悟りを開いた仏・如来について

慈悲をあらわす釈迦如来

如来は、お釈迦さまが悟りを開いた後の姿をあらわします。その目は慈悲の心と精神を集中するさまをあらわし、粗末な納衣をまとっています。基本として装身具は身につけていませんが、大日如来だけは菩薩と同じように装飾品をつけています。

釈迦如来をはじめ、如来の像は、人間を超越したことを示す「三十二相八〇種好」に基づいて造られています。これは、髪の毛が一本ずつ右巻きにカールし（螺髪）、頭上のコブのような肉髻で常人の何倍もの智慧をあらわすなど身体的特徴が三二あって、立居振舞に八〇の特徴がある、ということです。

手や指のかたちを印相といい、それでメッセージを伝えます。合掌も印相の一種で、これは人間が仏様と対話するとき、いちばん有効なかたちです。

お釈迦さまの代表的な印相として、衆生の恐れや苦しみを取りのぞくことを示す施無畏印（右手を胸のあたりに上げて手のひらを見せる）、衆生の願いをかなえてくれる与願印（左手を下にして手のひらを見せる）があります。また、両手親指の先をつけ、指で楕円形をつくる法界定印は、瞑想をあらわします。そして、坐像は考えているときの姿で、立像は衆生を救おうという姿です。

日本で最初に造られた仏像は、お釈迦さまの像。聖徳太子の冥福を祈って法隆寺に釈迦如来坐像をまつりました。

釈迦如来（釈迦牟尼仏）は、天台宗、禅宗（臨済・黄檗・曹洞）、日蓮宗などの寺院でご本尊にまつられます。

極楽浄土の教主・阿弥陀如来

阿弥陀如来は無量寿如来ともいわれ、四八の誓願をなしとげて極楽浄土を建国した教主です。自分を信じるすべての人を極楽浄土に往生させるという仏様でもあります。

平安中期以降、末法の時代に入ったとして人々が不安感をもつようになると、来世に救いを求めて阿弥陀信仰が広がりました。当時の最高権力者、藤原氏は、京都に極楽浄土を思い描いた平等院を建立。阿弥陀堂（鳳凰堂）に仏像を安置すると、貴族たちがこれを拝みました。岩手県の毛越寺の庭園も、極楽浄土をあらわしたといわれます。

阿弥陀さまの極楽浄土には、九品という九区分があり、それを阿弥陀さまの印相であらわします。

阿弥陀さまは、天台宗、浄土宗、浄土真宗、時宗などの寺院で本尊にまつ

られます。

病苦を救済する薬師如来

薬師さまは、病苦から人々を救う仏様で、浄瑠璃国の教主です。薬師さまの台座に草花の文様があるのは、浄瑠璃国にある大薬草園の光景をあらわしています。

それぞれの如来は、基本的には同じ姿をしていますが、大きく違うのは印相と、持物です。平安時代以降、薬師さまの印相は、右手の薬指を少し前に出し、左の手には薬壺を載せるものが多くなりました。

薬師如来を本尊とするのは、天台宗の寺院にみられます。

毘盧舎那如来・大日如来

宇宙の真理、大きな仏の智慧を象徴するのが毘盧舎那如来です。これは、東大寺の〝奈良の大仏〟がよく知られています。

大日如来は、毘盧舎那如来が密教的に変名した仏様です。大日如来の智慧を五体に分けて表現したものが五智如来。これは密教の金剛界曼陀羅（仏の世界の図像）で、大日如来を中心に、東西南北に配置されます。

密教において、大日如来が衆生を救うために動的に変化した状態が明王です。

開山和尚の名を山号とし新都市に建つ

鉄牛山（てつぎゅうざん） 観音寺（かんのんじ） 曹洞宗

◆矢巾町広宮沢二一一五〇一一五
◆電話 〇一九一六九七一五三三〇
◆住職 第四世 山本鉄斎
参禅道場（荀自観天座禅）

国民皆禅のこころざし

流通センターの南端、道路の西側に白い堂塔が見えます。「佛舎利奉安塔」の文字のある高さ一七メートルの建物の後方に、観音寺の本堂と「国際参禅道場」の看板を掲げた坐禅堂が建っています。

観音寺は、その歴史三〇余年、昭和四六年に開創された新しいお寺です。

約三千坪の境内地を矢巾町の佐々木継之助氏（開基）が寄進、伴鉄牛和尚によって開かれました。

鉄牛和尚は花巻市に生まれ、[illegible]歳で福蔵寺（浄法寺町）の小僧となりますが、自らの師匠を発心寺（福井県）の原田祖岳禅師と定めて、その弟子となりました。

道路から見える白い塔

修行ののち、国民皆禅の大雲老師の家風をつぎ、参禅道場として、新寺二カ寺を創建しました。昭和一八年の東照寺（東京都）について観音寺を開き、平成元年には鉄牛寺（大分県）を開山。志を完遂して、平成八年、八七歳で没しました。

鉄牛和尚は、坐禅を通して自己の完成をはかり、それにより世界の恒久平和に貢献することを提唱。郷土の仏師・佐久間自雲による観音像（四・八五メートル）を「平和観音」とし、また山門横の梵鐘を「平和の鐘」と命名しました。

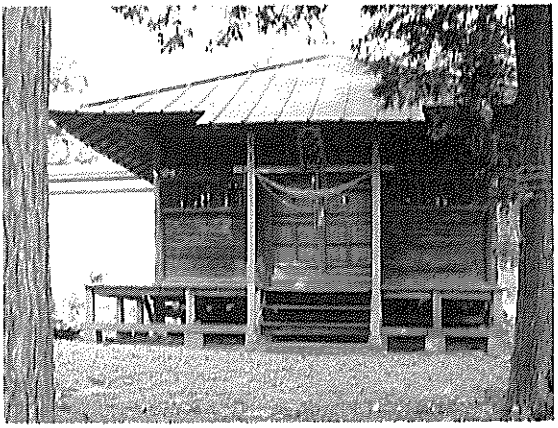
寺院の建立に当たっては、若手のみならず、全国の信者から浄財が寄せられ、本堂・坐禅堂につづき、昭和五[illegible]には佛舎利奉安塔を建立しました。

堂内には、スリランカから寄せられた佛舎利（釈尊の真骨）を胎内に秘蔵した釈迦牟尼像が安置されています。

民間信仰、加持祈祷を伝える修験の仏堂

南行山（なんぎょうざん） 大光院（だいこういん） 本山修験宗

◆矢巾町土橋五―四七
◆電話 〇一九―六九七―〇一五九
◆住職 広田和宏

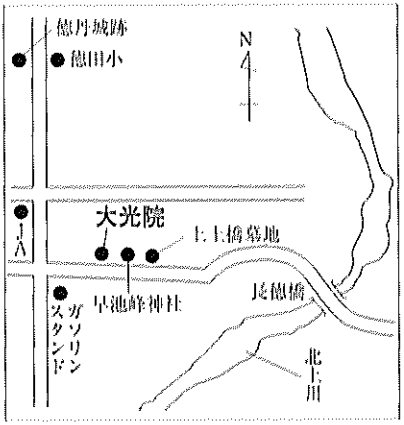


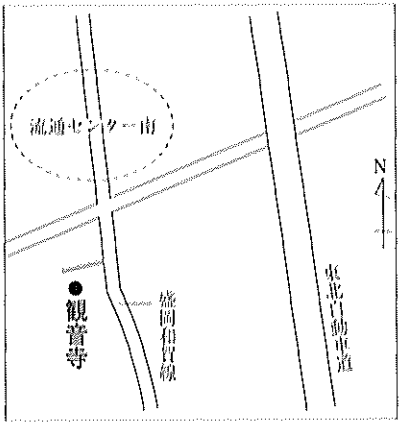
徳丹城跡から南へ二キロ弱、国道四号から東に曲がって長徳橋方向に行くと、北側の小高い地に大光院があります。隣接して本立に囲まれた早池峰神社、上土橋墓地公園と続き、田園の中の霊域といった感じがあります。

大光院は修験の寺院で、由緒の詳細は不明ながら、伝えによれば、天台宗寺門派の近江国（滋賀県）円城寺末で、江戸時代中ごろ（一七〇四年）に開山、浄園の開基となっています。

明治初年の戸籍には、「聖護院末・大光院住職第九世・広田邦純、当村修験宗運寿院第二一世・広田連治、両人は白光坊（現盛岡市志家町）得度」とあります。

白光坊は代々襲名されますが、初代の快学が南部信直の生母の一族出身だったため藩政のころは威勢がよく、領内の霞派（流派名）の祈願所を統括しま





した。迎寿院・大光院ともに霞派に属し、迎寿院の一族が独立して大光院をおこしたと考えられます。

大光院のような祈願所の建立は、修験者（山伏）が地方の権力者を頼って平場に常駐し、加持祈祷で生活をたてるようになったとみられています。県内に多くみられる「おしらさま」が大光院にもありますが、修験者はこのような民間の信仰を包括し、民衆もまた、山岳信仰や呪術信仰に共鳴しました。

堂内には、本尊の不動明王、ほかに院主が彫ったという素朴な十三仏と八体仏が安置され、町内では唯一といわれる護摩壇が残っています。護摩の煤をまとった仏像や仏堂は、長年にわたる庶民の祈願を今に伝えています。

かくし念仏

江戸中期から県内に広がった信仰に、かくし念仏がある。秘密裏に行うので、藩ではキリシタンと誤解して目くじらを立て、片寄の地で医者をしながらひそかに布教をしていた紫波派の開祖・木村養庵は、在住四年にして立ち退きを命じられた。

養庵は仙台領出身で医術の修業中、京都の鍵屋守兵衛から伝授されたという。志和稲荷神社へ参詣した帰りに欣求庵（寺）に宿泊して庵主と法談し、これを立ち聞きした人が感動して、やがて養庵を当地に招いた。

藩が取り締まり、浄土真宗からも排斥されたが、養庵が去ったあとも（一八〇五年）、弟子たちの布教によって盛んになり、紫波派から順教派（盛岡、花巻派）、小舟渡派、三本柳派などが出た。

かくし念仏は、主として子ども（五～六歳）のときに入信する。決まった宿に集め、南無阿弥陀仏の掛軸の前に座らせ、ろうそく一本の暗い部屋で善知識（最高位の人）の法話があり、その後、両手を合わせ、声の続くかぎり「タスケタマエ」を唱えさせる。親たちはうしろに離れて押んでいる。しばらくして、ただ一人子どもについている善知識の「タスケタ」の声によって入信は完了。このような入信は第二次世界大戦後も行われていた。大人も同じように、阿弥陀如来のありがたい話を聞こうといって集まった。

かくし念仏には三つの約束事がある。親子といっても入信したことを話さない。親鸞入寂の日は精進する。盆と正月の一六日には入信した家の仏様を拝みにいく。というものである。

第4ブロック

紫波町

九五〇年前の伝説がある「逆カシワ」

長広山（ちょうこうざん） 勝源院（しょうげんいん） 曹洞宗

◆斯波町日詰朝日山（七三）
◆電話　〇一九―六七二―二六五二
◆住職　第六世　柏葉宗黨

十六羅漢のある二階建ての門

城山あたりで坂になる国道四号のほぼてっぺん、日詰バイパス分岐の近くに勝源院があります。お堀のような池のそばに建つひときわ高い二階建ての門。屋根が二重の楼門というかたちで、二階には十六羅漢が安置されています。著名な修行僧をまつる門は、悟りの世界の入口を意味しています。この門は、久昌寺（盛岡市）の山門築造に多大な影響を及ぼし、巧みの技を競ったといわれています。

勝源院の創始については、平安時代末の伝説があり、慈覚大師（七九四～八六四年）の作という創建当時の木造観世音坐像が伝来しています。

現在につながる縁起は、江戸時代のはじめ（一六一一年）、庵に錫を止めた曹洞宗の高僧・真安大易大和尚が、花巻市の雄山寺を本寺として開山。当時、斯波氏のお膝元にあった有名な六寺院が南部氏の命により盛岡に移転する一方、入れ代わりのように、相次いで寺院が建立されました。

当初の蟹沢庵から、二十数年後に院号を得て、現寺号となりました。

往古の西御所に隣接

寺伝には、時の領主・斯波氏の帰依（開基）によるとあります。江戸時代の開山（再興）は斯波氏の没落後になりますが、その立地は、斯波氏との深いえにしを思わせます。

樹齢約三〇〇年「みだれカシワ」の別称をもつ

●略図は172ページ参照

城山にあった斯波氏の本拠のほかに、別館がありました。相続前の子や隠居者が居住していた「西御所（戸部の御所）」です。その地は、蒲の沢の堀向かい、城の西に見える柵とあり、ちょうど勝源院の山門付近になります。西御所は、勝源院の南西の台地上にあったとみられ、いまも南・東・北の三方にめぐらされた堀跡が残っています。

庭を這うカシワの巨樹

勝源院の本堂のうしろ側に、樹齢約三〇〇年の「逆カシワ」の巨樹があり、南北に約二八メートルと、枝を横に広げて繁っています。

ふつうカシワの幹は直立して高く繁りますが、この樹は「みだれカシワ」ともいわれ、地際で四つに分かれた支幹が地を這うように伸びてから立ち上がっています。珍しい樹形のためカシワでは全国で最初の昭和四年に天然記念物に指定されました。

この樹には、古い伝説があります。「前九年の役」（一〇五一～一〇六二）のとき、朝廷の命により安倍氏征討のため奥州に下った源頼義・義家は、この地（陣ヶ岡）に布陣し、勝利で終結をみました。このとき、敵味方の戦死者の霊を弔う勝源庵を創し、義家が庭にカシワの木を手植えしたということです。

となると、直線的に考えると樹齢九百数十年となり、現在の樹齢と大差がありますが、二世、三世の樹を想像しつつ、伝説と史実の間の間がロマンをかきたてます。

庭の逆カシワの奥のほうには、医師で俳人の木村半水の句碑があり、橋本漳太の顕彰碑があります。

橋本漳太（明治・五年生）は、昭和一四年、毎日確実に産卵する鶏で世界記録を樹立した人物です。当時の国分謙吉知事により、その鶏は「ゼンタークス」と命名されました。

樹木　逆カシワ（国天然記念物）

関連記事　源氏と藤原氏ゆかりの史跡

金山地帯で信仰された「マリア観音像」

摂取院（せっしゅいん） 光明山（こうみょうざん） 来迎寺（らいこうじ）

浄土宗

◆紫波町日詰字石田四七
◆電話　〇一九―六七―一三〇六
◆住職　第四〇世　中野隆全

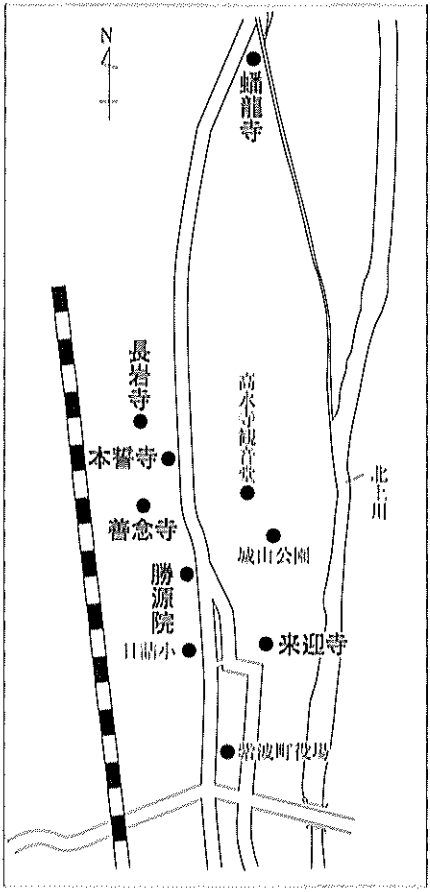
戦国時代に大迫で開創

日詰バイパスの内側、旧国道四号沿いの商店街の近くに来迎寺があります。

来迎寺は、戦国時代の初頭（一四七七年）、大迫町亀ヶ森の地に開かれました。現地の城主、八木沢外記（開基）が、当時、東北の浄土宗総本山であった岩城専称寺から、良円淳廓（りょうえんじゅんかく）上人を招いて開山しました。

やがて、八木沢氏が没落して（一五〇〇～五四年）民衆も移ったため、来迎寺もいまの紫波町の佐比内へ、さらに、桜町を経て現在地へ移転しました。江戸時代前期（一六三五年）、一四世・良花雲徹のときに桜屋善四郎らの誘致により、現在地に堂宇を建立したと伝えられます。

現在地で一度火災に遭ったのち、現在の堂宇が建立されましたが、すでに二二〇年余りが経過しています。



南部領内屈指の金山地帯

最初の移転地の佐比内は紫波郡の東部、北上山地の金山地帯で、現在地は奥州街道の宿駅で栄えた地域です。

奥州には藤原氏時代から金をめぐって人の往来があったといわれますが、豊臣秀吉のころ、全国的に金山開発が進みました。南部領内屈指の金山地帯だった紫波郡のなかでも、佐比内には僧ヶ沢金山（一六〇二年開発）や大規

模な朴木金山があり、最盛期の一時期は、人口一万三千人を数えました。

幕府は、そのあたりにキリスト教禁止令を出したので、信者は、当初規制のゆるやかな奥州の鉱山に流入し、また、禁制を犯したキリシタンが採掘作業に従事させられたともいわれます。

仏像を模したマリア像

来迎寺には、子安地蔵の別称をもつマリア観音像があります。仏像のようなマリア像で、佐比内の金山にいたキリシタンが持んだと伝えられています。像の頭部は取りはずしでき、詮議のときには地蔵さまの首に交換したとされますが、現存するのは西洋ふうのマリア観音の頭部のみです。見ると、衣も、仏像のそれとは異なっています。

この像が来迎寺に安置された経緯はつまびらかではありませんが、禁制が厳重になったころに移転した来迎寺に、大檀那の金子七郎兵衛が内密に預かったともいわれます。いま思えば人目に触れないように、以前は安置する堂内を幕で隠し、見ると目がつぶれるとされていました。現在は、本堂脇の座敷に安置され、いつでも参詣できます。

ほかに寺宝として、天保の飢饉のとき、米六俵と交換に、盛岡の如来堂（魔寺）から寄贈された大きな浄土観経曼荼羅があります。

本堂で注目したいのは、雲形の台座に乗り、須弥壇の上部を飾る二五菩薩です。

来迎寺には、珍しい「御名号流し」の行事が伝承されています。三年に一度、八月二〇日午前〇時に、名号のある紙片を北上川に流し、現世利益を祈願するものです。江戸中期の高僧・祐天上人が当寺に宿泊のおりに伝えたといわれ、三〇〇年の歴史を有しています。

また、日詰には火災が多かったことから、「秋葉山権現」がまつられています。

関連記事　「黄金の国」の跡

藩主となった南部氏が土地を寄進

法王山（ほうおうざん） 善念寺（ぜんねんじ） 浄土宗

◆紫波町二日町字北七久保一八八
◆電話 〇一九一六七二一三三五
◆住職 第二三世 池田道政

●略図は172ページ参照

平成元年に本格的な本堂建立

日詰バイパスの北、国道四号の坂の途中にある三寺のなかで、善念寺は南端に位置しています。

善念寺は、江戸時代前期（一六二六年）に、寺院として教化活動を開始しました。盛岡の光台寺二世・大阿一白和尚がこの地に草庵を結び、近郷の信者を集めて夏安居（げあんご）（練成会）を催したことが契機となりました。

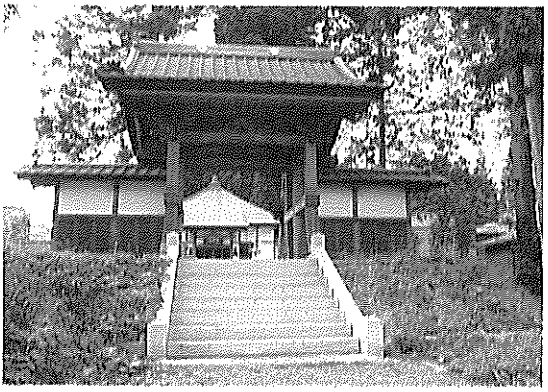
火災により記録は残っていませんが、寺伝によれば、新しく紫波郡の領主となった南部重直公から境内地と松林一〇〇〇坪、年貢地（四石四斗）を授与されて堂宇を建立しました。

歴代住職のうち、明治元年に董職した鑑阿貞応和尚が、本山から中興号を授与されています。

火災で焼失後、明治二五年、一九世・良専光念和尚のときに仮本堂を建立。それからおよそ一〇〇年、平成元年に本格的な本堂を再建しました。近年、周辺にも市街化が及んできたため、それにあわせてうっそうと繁っていた参道の樹木を整理し、平成一〇年に山門を建立しました。

六寺が集合する地域

紫波町は寺院の多い町ですが、善念寺付近にはとくに集中しています。城山を取り囲むように、一キロ圏内に五寺、二キロに広げると六寺になります。これらの寺院をみると、中世の斯波氏時代に二寺（長岩寺・本誓寺）、近世の南部氏になって五十数年間に四寺が創建、あるいは再興建立されています



（勝源院・善念寺・来迎寺・蟠龍寺）。背景として、郡山（日詰・二日町・下町）を中心に人口が増えたことがあげられます。それは、斯波氏が没落した後も郡山城（高水寺城）に郡治の役所が置かれたことと、交通・交易の活発化があります。北上川の水運に加え、奥羽街道の整備に伴って郡山に宿駅が置かれ（一六一〇年前後）、城下町と宿場町が複合したかたちで町並みが拡張しました。

さらに、江戸時代前期に出されたキリスト教禁止令によって寺請手形（身元証明）を発行することになって檀家制度が確立。それ以前の修行場としての寺院に比べると、はるかに安定的になり、いまに引き継がれる弾式法要、盆の祖霊供養なども行われるようになりました。

火災と二体のご本尊

善念寺の須弥檀には、ご本尊が二体あります。火災で焼失したものと思って二代目を安置したのち、裏の林で光を放つものが見つかり、それは本尊だったということです。

寺宝として、江戸時代（一八二五年）に信者と来迎寺講中から寄進された「釈迦涅槃之図」（約一・六×一・五メートル、林慈照作）があります。また、伝来する十三仏の絵は、昔、目の悪い人が拝めば治るが二度は許さないといわれ、そういう方便で信仰心をそそったのだろう、ということです。これに対応するように、近くの来迎寺には、目がつぶれるとして人目を避けたマリア観音が伝わっています。

寺を支えた近江商人三祖のひとり村井権兵衛

石森山（せきしんざん） 本誓寺（ほんせいじ）

浄土真宗大谷派

◆蒲生郡三日市町字北七久保三〇四
◆電話 〇一九―六七―三四四〇
◆住職 第三〇世 永井 隆

開創から三度の移転

城山の下方、国道四号の沿線に四寺院が集合しています。坂の下のあたりの道路に面する本誓寺は、もっとも日につく場所にあります。

本誓寺は、八〇〇年近い歴史のなかで三度移転し、それぞれ旧地に寺院が存続しています。

河村氏が領主だった鎌倉時代（一二一五年）、そのお膝元とされる彦部の地に、親鸞の高弟・是信房によって本誓寺（現正蓮寺）が開かれました。約三七〇年を経て、野火による堂宇焼失を機に、現在地に移転（一五八四年）。このとき、高水寺城主の斯波詮直の招きがあったことから、お寺は城に正対して建立されました。

その数年後、政変により斯波氏は亡命。斯波氏の城に入った南部氏は、おそらく宣撫の厚遇として、郡内の主な寺院に盛岡へ移ることを命じ、本誓寺を含む六寺が移転しました。江戸時代前期（一六三五年）、盛岡への移転と同時に、紫波の本誓寺は掛所（支院）となって、当地の教化を担いました。

現在地への移転は一四世のとき、盛岡への移転は一六世のときで、一五世を加えた三代、約五〇年間の布教教化はめざましく、町内に願円寺・光円寺（改宗再興）が開かれています。

各寺院に激震を与えた明治維新のあと、明治一三年に紫波の本誓寺が独立。隣地にあった永光寺（寺籍移転）を合併し、現在に至っています。

独立中興の祖二七世・涛江師は盛岡中学の秀才といわれ、病に倒れるまで宗内の改革運動を推進。孫にあたる先代・利正のとき、同朋会運動として開花しました。なお、利正は、真宗大谷派南米開教監督の任にあった昭和五九年、一時帰国中に急逝しました。

●略図は172ページ参照

○年、新たな寺宝が加わりました。

是信房七〇〇年忌に、近江商人として名を馳せた江戸時代の豪商、京都の小野家から、秘蔵の仏壇一式が寄贈されました。仏壇は江戸時代、本尊は室町時代の作で、ともに逸品です。

江戸時代、小野家は、京都鍵家として全国的な組織をもち、また、東本願寺全門徒総代七講の雄でもありました。同じころ、本誓寺のスポンサーの主流は近江商人の一統で、なかでも志和の村井家は群を抜いていました。

盛岡圏の近江商人三祖の一人とされる村井（本姓小野）権兵衛は、江戸時代前期、近江屋をおこしました。濁酒しかなかった当地方で、酒づくりに最適の軟水・米、山王海の杉材（桶・樽）を使って清酒を醸造。ここから日本三大杜氏のひとつ、優秀な志和（南部）杜氏が生まれました。

当時、「あねこどさいく一升樽さげて、志和の権兵どに酒買いに」と唄にもうたわれ、のんべえたちが酒と砂金を交換したとか、田を質に入れて小作になったという話も残っています。

また、権兵衛は八戸藩の御用商人として、味噌醤油の醸造、質屋、塩の販売、砂金採取も行い、十数年で莫大な財産をつくり、盛岡や日詰に分家しました。権兵衛は四八歳で没し、本誓寺に葬られました。

余話　学生時代合唱団に所属し、いまも歌が友という住職の読経は、その声量が檀家でも大評判。今後のお寺や宗教について住職は、何をどうなすかが難題ですが、と言いつつ、「長く生きることよりも、美く生きることを学んでいこう」の言葉を挙げる。

工芸品　京都鍵屋小野家仏壇一式（町文化財）

近江屋と南部杜氏の発祥

本誓寺に伝来する、恵心僧都作の阿弥陀如来（本尊）、親鸞聖人御絵像、聖徳太子七高僧の軸のほかに、昭和五

近世幕開けの動乱

――斯波氏の興亡・九戸政実の乱――

武将の戦いと寺院

盛岡市と紫波町に石森山本誓寺があります。この二寺は同じ縁起を有し、親鸞の高弟・是信房が紫波町彦部に開いた寺（現正蓮寺）を斯波氏のお膝元へ、南部氏の居城の地へと移転して開かれました。斯波氏の城下に建立された本誓寺は、現在、桜の名所になっている城山公園の下方にあります。

城山は、名前のとおり、斯波氏の拠城・高水寺城があったところです。

足利氏の一族である斯波氏が下向したのは鎌倉時代の中ごろともいわれますが、南北朝時代に高水寺城に定住しました。この城について、川と深堀に囲まれた堅固な城で鳥も飛び越せないほど、という記述があります。

当時の斯波氏は実質的な郡主であり、北朝（将軍側）の重鎮だったことから、「斯波御所」とも呼ばれました。

鎌倉時代からみれば三百数十年、南北朝時代から二百数十年、一〇代つづいたといわれる斯波氏は、中世末期（一五八八年）、三戸から南に勢力圏を伸ばしてきた南部氏に破れて滅亡しました。その後、南部氏の指令（厚遇）によって、紫波町の六つの有名寺院が盛岡へ移転しました。本誓寺のほか源勝寺・高水（廃）寺・広福（廃）寺・大荘厳（廃）寺・新山（廃）寺です。

岩手町と葛巻町に、天井山宝積寺という同じ由寺号のお寺があります。

「九戸政実の乱」のとき、葛巻氏は九戸政実につながる嫁を離縁して、南部信直に忠誠を貫いて武功をあげ、報賞により岩手町一方井の地を得ました。その後、葛巻が八戸南部領になるにおよんで、葛巻氏は普提寺の宝積寺ともども一方井に移転。そのため葛巻の心のある人たちは宝積寺を再興しました。

戦国武将の抗争は、否応なく寺院をも巻き込んでいきました。

（城山公園略図122ページ）

天下統一仕上げの「九戸政実の乱」

戦国から天下統一への時代（一五九〇年）に斯波氏が滅亡したあと「九戸政実の乱」が起きました。

南部家の跡目相続をめぐって家臣団が対立し、南部信直が二六代につくと、九戸政実が反旗をひるがえしました。信直は、九戸郡・二戸郡を支配していた政実の挙兵に対抗するため豊臣秀吉に援軍を求めました。各地の騒動をしずめ天下統一の総仕上げをもくろむ秀吉は、奥州仕置軍を編成してこれに応じました。

五千余の兵を率いる政実は、六万五千とも一〇万ともいわれる敵軍と戦い、難攻不落といわれた九戸城もついに陥落します。この「九戸政実の乱」を区切りに、武将が武力をもって領地を拡大する時代は終わり、秀吉による奥州領主の再配置のもとで、南部氏・伊達氏・津軽氏らは近世大名となりました。

福岡城・郡山城・盛岡城

斯波氏を破り、「九戸政実の乱」を終結させた南部信直は、旧来の三戸（青森県）から盛岡に拠点を移すため、築城に着手します（一五九八年）。

信直は、九戸城を福岡城と改めて盛岡城ができるまで居城にし、斯波氏の高水寺城は郡山城と改め、郡支配の根城にしました。郡山城を拠点に十数年間、盛岡城の築城を指揮した二七代・南部利直は、のちに郡山城を破却（一六六七年）。建築材や石垣の資材は、盛岡城築城に運ばれたと伝えられます。

二八代・南部重直のころに本格的な完成をみた盛岡城は、周りの上手二・一キロ、広さ九万坪、南部氏一〇万石（のち二〇万石）の居城として申し分のないものでした。

築城から約二七〇年後、城は明治七年に取り壊しになりますが、残る石垣は、いま岩手公園のシンボルになっています。

（岩手公園略図37㌢）

中興開基は、斯波氏と南部氏の抗争に関与

久保山（きゅうほざん） 長岩寺（ちょうがんじ） 曹洞宗

◆盛岡市二日町字北七久保一二三
◆電話 〇一九―六七―二〇三四
◆住職 第二五世 齋藤盛久

斯波氏時代の開創

かつての斯波氏の居城の地、城山を見上げるように、三寺が並び建っています。そのいちばん北、国道四号から少し奥まり、本誓寺の西側に長岩寺があります。

長岩寺は、志和市之進正明が再興造立し、その翌年、死没（一五六〇年）したと伝えられています。再興した正明なる人物についても、それ以前の開創も不明ですが、斯波・志和の字は併用されたことから、斯波氏に関係する開創だろうと考えられます。

また、中興開基・中野修理康実（一五九四年没）という記録に基づき、現在、由緒の明らかな康実を開基としています。開山は梅岩嶺雪和尚。長年寺（秋田県花輪町）を本寺としますが、大本寺は崇徳寺（弘前市）になります。

康実が生きた不穏な時代

中野修理康実は、南部信直の重臣の一人です。斯波氏を破った南部氏が郡山城（高水寺城）に入城した際、康実は初代城代として郡内を統括しますが、それ以前に、斯波氏没落に深く関与しています。

斯波氏は、滅亡（一五八八年）の十数年前、いったんは敵の南部氏と和解し、南部氏側から婿養子を迎えました。

●略図は172ページ参照

高さ約2.5メートル。開基・中興・再興の三碑

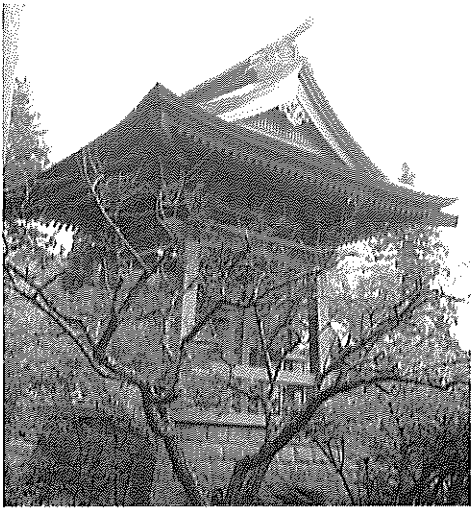
妻は斯波氏最後の城主詮直の妹・鶯鏡一妙君で、婿は吉兵衛を名乗りますが、またの名が中野修理康実。九戸政実の実弟で、南部氏の支族にあたります。

もとより政略的な縁組でしたが、康実は斯波氏との不和から身の危険を感じ、南部氏側に戻りました。いつのころか妻は亡くなり、康実は南部氏への情報提供をはじめ、斯波氏の家臣が南部氏へひるがえるのを仲介するなど、二者が離反するキーマンとなりました。

南部信直に近い康実は、「九戸政実の乱」の首謀者である実兄の政実とも敵対しました。南部氏の策謀とともに、民心を失った斯波氏は没落します。実質的な郡主として、百数十年、将軍家の支族として名を馳せた斯波氏の高水寺城は陥落。このとき、康実は第一の殊勲者として片寄と高田に領地を給与されました。

郡山城代となった康実は、九戸の長興寺五世・岸翁林賀和尚の徒弟にあたる嶺雪を招き、長岩寺を中興。敵味方の戦死者を慰霊し、亡き姫の菩提を弔い、断絶した実家（九戸政実家）の冥福を祈ったということです。

なお、郡山の久保山で康実の葬礼を行ったとあるので、長岩寺だったとみられます。



昭和51年建立の山門（上）と59年建立の送霊供養鐘

「志縁の塔」とペットの墓

長岩寺は、昭和一四年の火災のあと昭和二六年に現本堂を建立、築五〇年余の本堂を中心に、昭和五一年に山門を、昭和五九年には鐘楼に送霊供養鐘を設置しました。

平成一〇年には、墓地を造成するとともに、永代供養の「志縁の塔」を建立。住職は、反響をみながら、機をみて納骨堂伸間の「志縁の会」をつくりたいといいます。

墓でユニークなのは、ペットの合葬墓。飼い主がお骨にしたものを納骨し、供養もします。そばには、ムーミン似のあいきょうのあるカバの石像があり、ほのぼのとしたコーナーとなっています。

関連記事　近世幕開けの動乱

観音堂の天井を飾る四八人の写仏

和融山（わゆうざん） 蟠龍寺（ばんりゅうじ） 曹洞宗

◆柴波町高水寺字向畑九七
◆電話　〇一九一六七六一二三六六
◆住職　第二六世　中野英明

千年も昔の開創と再興

矢巾町と紫波町の境界ちかく、五内川橋の下流に、国道四号から引き込んだ道があります。その沿道の酒蔵（さかぐら）に隠れるように、蟠龍寺が建っています。近くで岩崎川と五内川が合流、さらに一キロほど先で北上川に注いでいます。

蟠龍とは、とぐろを巻いた竜を意味しますが、お寺の縁起も水にかかわっています。蟠龍寺は、江戸時代前期（一六五四年）、川東にある江岸寺の二世・伝達和尚によって再興されました。伝達は、舟で渡河中に漂流し、土倉稲荷（現在の蟠龍寺の地）付近の藤蔓（ふじづる）につかまって九死に一生を得ました。それを縁に、十日市九郎兵衛の寄進により寺院を建立しました。

付近の地名に、十日市、二日町、六日町（川東）がありますが、高水寺城（城山）に近いこのあたりで定期市が開かれ、古くから北上川の渡舟場があったということです。

また、二キロほど北に徳丹城跡がありますが、蟠龍寺の開創は、徳丹城ができて数十年後（八二四年）と伝えられています。高水寺五代・伝法子法宥阿闍梨がこの地に祝融山（のち和融山）を創立。源頼朝が奥州藤原氏を追討した平安末期、兵火に遭って荒廃したということです。

●略図は172ページ参照

耳病の快癒を願い八耳聴聖徳太子像に奉納された穴石

蟠龍寺は、江戸時代の中ごろ（一七五二年）、火災で堂宇を焼失。二五世・為孝和尚は、六年あまりも托鉢に身を投じて再建したことから、中興の祖とされています。

奉納された千数百個の穴石

蟠龍寺には、開創以来の伝宝として、八耳聴聖徳太子像があります。平安時代、慈覚大師が当寺において一刀三礼で彫ったと伝えられ、古来、耳病に霊験ありとして信仰されました。穴石を借りて二日間祈願し、成就したときにもう一個プラスして奉納する習わしがあり、また、穴石を奉納すると呆けないともいわれてきました。こうして奉納された千数百個の穴石が、いま連珠にされ本堂の壁を埋めています。

観音堂には、千枚苞巻観音（約五・五センチ、当国七番観音）を中心に、不動明王、十三仏がまつられ、それぞれの由緒が案内板で紹介されています。

この観音像は、奈良時代に唐の鑑真和尚が持参し、孝謙天皇から宮内官の藤原仲麻呂に渡ったとされる秘仏で、もと二日町の走湯神社境内の片山寺にあったものです。ちなみに、高水寺が盛岡に移転した跡地に建立されたのが片山寺で、高水寺ともども明治に廃寺となりました。

観音堂は、明治時代に火災で焼失し、一〇〇年の空白を経て、平成四年に再建されました。

注目したいのは、この観音堂の天井です。この十数年、蟠龍寺では月一回、仏像を描く写仏を実施してきましたが、そこで描いた四八人の作品が天井を埋めています。写仏には、中学生から九〇歳の人まで参加し、一人ひとりがさまざまな願いを込めて描いたものです。

余話　詩人の土井晩翠は、子に先立たれてから、しばしば盛岡の有名な霊媒師を訪れて、親交を深めていたという。その霊媒師の遺族が、晩翠の書、色紙、写真などを保管していたが、先ごろ、菩提寺の蟠龍寺に寄贈があったという。

一寺一社のかたちをとどめる修験のお寺

阿吽山（あうんざん） 覚王寺（かくおうじ）

本山修験宗

◆紫波町北日詰字下東ノ坊六一
◆電話 〇一九一六七六一五三六五
◆兼務住職 広田和宏
檀家総代 佐藤観悦

大日覚王如来の伝え

JR日詰駅に近い、日回道四号と日詰バイパスの分岐点付近に覚王寺があり、境内を二分するように走る国道を挟んで大日堂が建っています。

覚王寺は、斯波氏滅亡のあと、大円恵我法師「石動山城守法身」によって再興（一五九八年）されました。

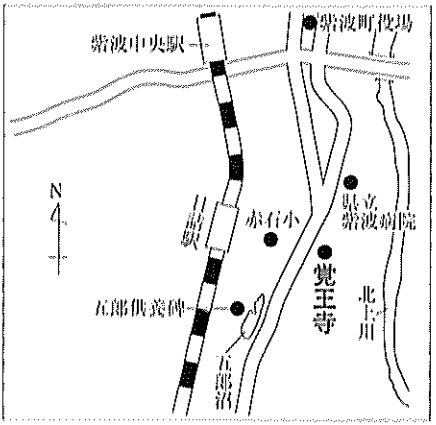
覚王寺の前史と本尊に関して、次の伝えがあります。奥州藤原氏ゆかりの一族がこの地に居館を構え、池を掘り、山王権現薬師如来を館内に勧請し、四方に五智如来を鎮座。その如来の一つ、大日如来が覚王寺の本尊とされ、時代とともに斯波氏、南部氏がこれを修営したといわれています。

なお、覚王寺は、嘉永二年（一八四九）からの名称で、それ以前は円学院を号していました。

中興の法身と泥塔

覚王寺には鎌倉期の作とみられる古い大日堂五輪泥塔（高さ一二センチ）が伝わっています。底に趣意を記したものが入っていたらしい穴があり、小さく梵字が刻まれています。この地方には類例のないこの泥塔は、北陸にあった古刹・天平寺につながるもので、再興の法身が奉持したとみられます。

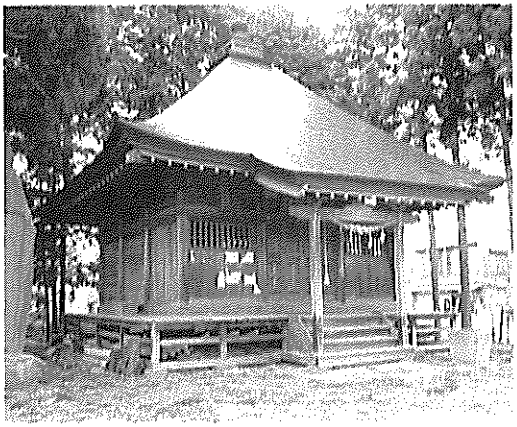
能登半島の基部に石動山塊がありま

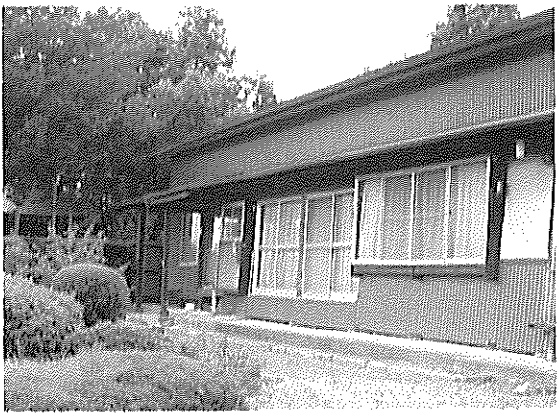


高さ12センチの五輪泥塔

す。そこには往古より天台宗・真言宗の修行道場があり、戦国時代には石動山天平寺の僧坊三〇〇余が建ち並ぶほど栄えていました。しかし、安土桃山

時代の末期（一五八二年）、織田信長についた前田利家の焼き打ちに遭い、三千ともいわれる衆徒は討ち死にし、生存した者は各地に落ちのびていきました。落人の一人、大円恵我法師は、十数年かかって当地に至り、旧来からの寺を再興したことを、この泥塔は無言のうちに示しています。





国道4号をはさむ大日堂（上）と大日堂王如来を安置する本堂

神仏を共にまつる修験

藩政のころの覚王寺は、天台僧が開いた聖護院（修験道の一派）に属していましたが、維新後、天台宗となり、現在は昭和二一年に独立した修験宗に属しています。

仏教（密教）と仏教以前からの山岳信仰が結合して成立した修験道は、神仏の習合性が濃厚です。そのため、大日堂と覚王寺のような一寺一社の形態や、神社持ちの修験の場合は本地仏をまつり、寺号を称するのが普通でした。

僧侶と神主の二重的な性格を有する修験者は、密教呪法に通じるとともに精進潔斎・参篭奉幣なども行って人々の崇敬を集めました。

藩政時代には、領主の命による天下太平などの祈祷、庶民のための風雨順時・無病息災・商売繁盛のほか、個人的な祈祷など多岐にわたっていました。祈祷に応じてそれぞれ護符を授与しますが、大日堂では、その種類が数十におよびました。

なお、明治に学制が確立する前に覚王寺に寺子屋が置かれ、やがて、今に続く赤石小学校となりました。

考古資料　大日堂五輪泥塔（町文化財）

関連記事　源氏と藤原氏ゆかりの史跡

源氏と藤原氏ゆかりの史跡

――紫波町陣ヶ岡・五郎碑――

中央軍の布陣と「逆カシワ」

紫波町の城山公園の下、国道4号沿いの勝源院に、古木の「逆カシワ」があります。「前九年の役」のとき北進してきた源頼義・義家父子がこの地に布陣し、そのとき義家がカシワを植えたという伝えがあります。

勝源院から二キロほど西にある陣ヶ岡史跡（町指定史跡）も源氏にゆかりの深い場所。伝えによれば、最初に陣ヶ丘に布陣したのは坂上田村麻呂の蝦夷討伐のときといわれています。

それから約一五〇年後、「前九年の役」（一〇五一～一〇六二）のとき、源氏の軍勢は陣ヶ岡を拠点に安倍氏との決戦にいどみました。このとき源氏の軍は陣ヶ岡にいたハチを使って勝機を得ることができたので、ハチを祀る蜂神社を建てたという伝説があります。

貞任・泰衡の「首洗いの池」

「前九年の役」から一二〇年ほどのち平安時代末期（一一八九年）、源頼朝は平泉の奥州藤原氏を攻め滅ぼしました。このとき、二八万騎を率いて陣ヶ岡に滞陣した頼朝は、ここで、家来が届けた斬首が藤原泰衡のものであることを確認。そして、「前九年の役」で源頼義が安倍貞任（やすべのさだとう）の首をさらした例にならい、泰衡の眉間に八寸くぎを打ち付け、その首をさらしたといわれます。

丘のすぐ東側には、いまも貞任・泰衡の首を洗ったという「首洗いの池」が残っています。

藤原氏三代の栄華と滅亡

平安末期、奥州藤原氏は約一〇〇年にわたる平泉文化を築きました。

安倍氏の血を引き、数奇な運命をたどったのち、奥州藤原氏の祖となった清衡は、「前九年の役」「後三年の役」以来の戦禍を弔う意味を含めて、中尊寺の仏堂を建立しました。

二代・基衡は、荘厳美の毛越寺を造営し、京文化に匹敵する文化をつくりあげました。

三代・秀衡は、宇治の平等院を模した無量光院（新御堂）と浄土庭園を造り、ここに藤原三代の栄華は頂点に達しました。

しかし、源義経をかくまったなどにより源頼朝との対立が顕在化します。秀衡の没後、後を継いだ四代・泰衡は頼朝の軍に破れ、栄華を誇った奥州藤原氏は三代で滅亡しました。

藤原氏の分家・樋爪氏の去就

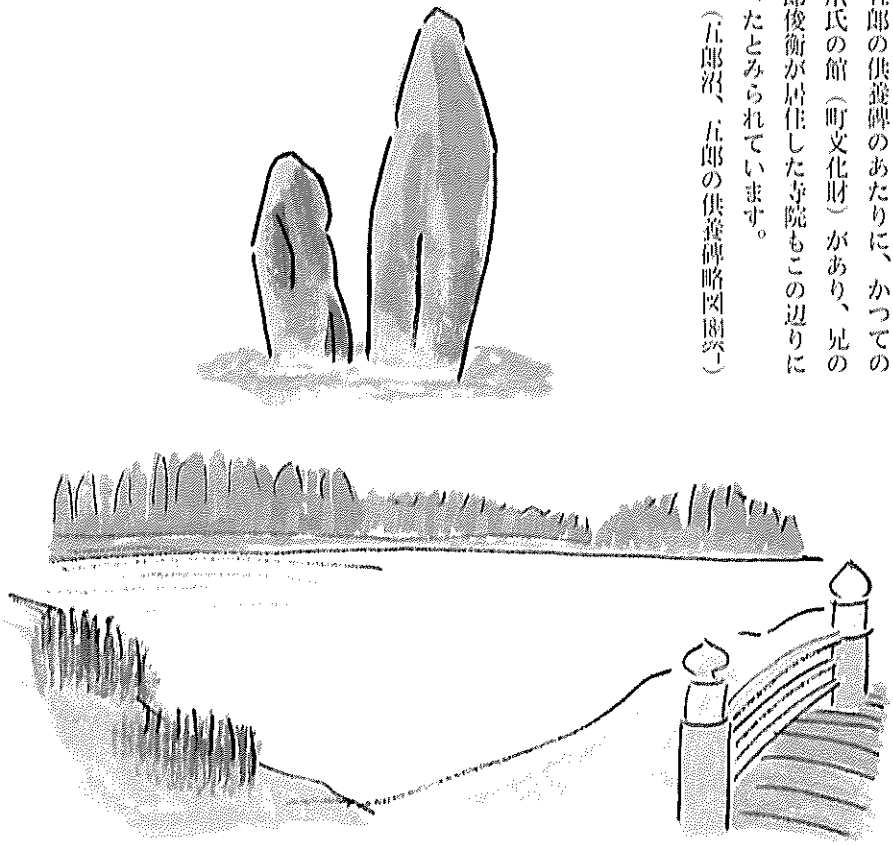
奥州藤原氏の時代、樋爪（比爪）氏が志波郡一帯を治めていました。樋爪氏の祖は藤原清衡の子・清綱で、樋爪氏は砂金採集・馬産・塩の管理運搬などで本家を支えました。

本家にあたる藤原氏の没落は樋爪氏を巻き込み、清綱の子・五郎季衡（弟）と一族の大半は関東各地に配流になりました。その中でただ一人、清綱の子・太郎俊衡（兄）は、頼朝に許されてこの地にとどまりました。そして、太郎俊衡は藤原泰衡の子を育て、自分の娘と夫婦にして藤原氏の血脈を後世に残したという伝えもあります。

現在、紫波町南日詰に樋爪氏ゆかりの五郎沼があり、沼の北側に五郎の供養碑があります。「五郎沼」というのは、かんがい用に造った沼で五郎季衡がよく遊泳したことからきています。

五郎の供養碑のあたりに、かつての樋爪氏の館（町文化財）があり、兄の太郎俊衡が居住した寺院もこの辺りにあったとみられています。

（五郎沼、五郎の供養碑略図184頁）



約六一〇年前、名刹正法寺の末寺として開創

青龍山（せいりゅうざん） 廣澤寺（こうたくじ） 曹洞宗

◆柴波町平沢字鼠七三
◆電話　〇一九一六七六一五九〇八
◆兼務住職　森田眞英

月泉みずから布教

廣澤寺（広沢寺）は、東北自動車道紫波ＩＣの東、盛岡石島谷線に近い田園の中に、八幡神社と並んで立地しています。

広沢寺は、室町時代のはじめ（一三九五年）、正法寺（永沢市）二世・月泉良印和尚（禅師号・仏学古心）の大願により、その弟子・端山惠忍によって開山。一寺建立の地を紫波に定めた月泉は、自らも布教に出向きました。月泉が寄宿した神田氏も帰依して東奔西走し、神田氏の寄進した地に七堂伽藍を建立しました。

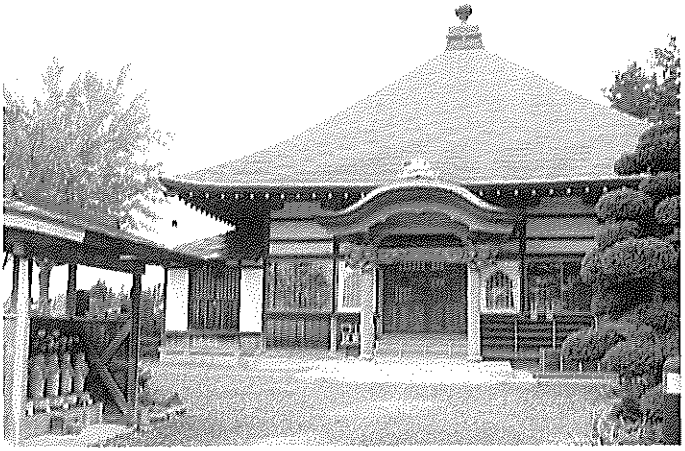
建立の際に、惠忍も木材運搬などの労務に従事したといわれ、のちに正法寺六世として晋住しました。

曹洞宗屈指の名刹・正法寺

正法寺は曹洞宗屈指の名刹で、現在、県内最多の八八ヵ寺の本寺となっています。本寺は盛岡以南の内陸部に多く、紫波町では、長男格の広沢寺をはじめ、正音寺、高金寺、常光寺があります。盛岡在来の最古刹という東顕寺は、月泉の第二弟子が開いたとされています。

正法寺は、正しくは大梅拈華山円通（だいばいねんげさんえんつう）正法禅寺といい、南北朝時代（一三四八年）、無底良韶（むていりょうしょう）により、奥州最初の禅林として開かれました。崇光天皇（北朝）の勅旨により、永平寺（石川県）・総持寺（現在横浜市）に次いで曹洞宗第三の大本山となり、七堂伽藍を備えていました。宗門法度（はっと）が制定（一六一五年）されてから総持寺直末となりましたが、いまも、老木が茂る五〇ヘクタールの境内には、日本一のかやぶき屋根の本堂をはじめ、修行僧の専門僧堂など二二棟の堂があり、数々の文化財を保有しています。

正法寺開山の無底良韶、二世の月泉、



三世の道叟の三人は、ともに、宗祖・道元から数えて五代目にあたる本山の我山紹瑾（がさんしょうきん）の高弟で、いずれも布教に大きな力を発揮しました。

とくに月泉の代には、四四人の優秀な和尚を育て、五〇八ヵ寺を開創。広沢寺を開いた恵忍は、月泉の高弟中、四番目にその名があります。

月泉（一三一九～一四〇〇）の人物については、宮城県本吉郡に生まれ、七歳にして和歌に通じ、自らの意志により一四歳で出家。塩釜神社（法華宗）で教えを受けたのち、教典の研究で禅の大旨を知ったと伝えられています。

山号額を掲げる本堂正面

流亡後に戻った山号額

当初、滝浦（南目詰字甘木）の地にあった広沢寺は、大洪水によって流出します（一五六〇年）。北目詰目向の地に小庵を建てますが、その後、正法寺の信者の長、二由俊益が北目詰野岸に堂宇を建立（一五七一年）し、自ら住職となりました。

しかし、幾年もたたないうちに斯波氏と南部氏が戦い、斯波氏の居館となった広沢寺は兵火で炎上。俊益和尚は五一歳の誓願を立て、現在地に再建を果たしました（一六〇四年）。

いまも野岸の地に、御堂（阿部氏宅）の屋号がありますが、これは、広沢寺の旧地にあった観音堂に由来するということです。

洪水にちなんだ逸話があります。流出した「青龍山」の山号額が石巻で発見され、盛岡の某寺を経て、無事に広沢寺に戻ったということです。

平安時代、小屋敷阿弥陀堂の地に開創

高木山（たかぎさん） 光圓寺（こうえんじ）

真宗大谷派

◆嵯波町南伝法寺字高木一一
◆電話 〇一九一六七二一七三二〇
◆住職 第一六世 高木正機

源義家の霊夢

高速道の西側、矢申町から嵯波町に入ってすぐのところに光圓寺（光円寺）があります。光円寺から一・五キロほど北側に、矢申町の龍泉寺・誓岸寺・本浄寺があり、一帯には天台宗弥彦山伝法寺や不動など、古寺に由来する地名が多くあります。そして、往古の光円寺付近は、岩清水館と斯波御所の交差点にあたっています。

光円寺は、遠く平安時代後期（一〇六二年）の「前九年の役」にさかのぼる縁起を有しています。

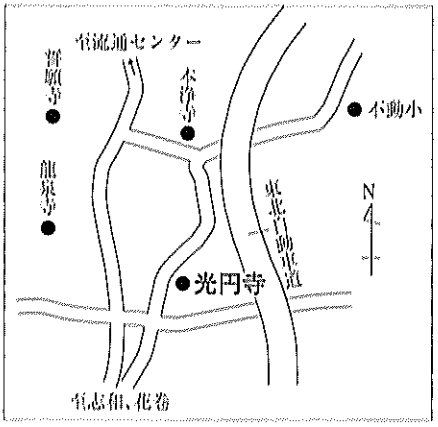
源義家が安倍氏を討って帰国する途次、往時の街道に近い、いまの小屋敷阿弥陀堂の地に宿泊しました。そのおりに、年来崇敬してきた兜内（かぶと）のご本尊が夢にあらわれ、衆生化益のためにこの地にとどまりたいというお告げ。随行の柳田右京直信も同じ霊夢をみたことから、阿弥陀如来を付属して阿弥陀堂を建立し、当地に残留しました。そこはいま、地名に残っています。

本誓寺・賢勝との出会い

五百数十年間、二二代にわたって血脈相続したのち、二二代・順誓のときに、こんにちの礎が確立しました。

二二代に嗣子がなく、たまたま当地に居住していた出羽国出身の高林近江治行（順誓）を養子に迎え、後継者としました（一五九三年）。寺伝によれば、やはり霊告によって現在地に移転し、堂宇を建立しています。

そのころ、彦部から郡山（二日町）に移転した本誓寺が教線を拡大していました。本誓寺の賢勝との知遇を得た治行は、剃髪して順誓を名乗り、その後、京都に創建された東本願寺にのぼります。そして、教如上人から現在の由寺号と阿弥陀如来の絵像、蓮如上人



の六字名号を授与されて帰国しました（一六一二年）。

境内の珍樹と挽臼

いま、光円寺の境内には大小の木々が繁っています。高野槇・柊、紅垂れ、その中には青みを帯びた花をつける桜、茶の木、生きた化石といわれるメタセコイアなど珍しい木々があります。なかでも横綱格といえば、シダレアカマツです（樹高さ約八メートル、根元周囲約一メートル）。

アカマツは、一般的な樹形のほかに傘型や、根元で枝分かれして箒型になるものがありますが、光円寺の木は突然変異によって完全に枝を垂れた非常に珍しいものです。

教如上人から授与された絵像と運如上人の六字名号

本堂の前に鎮る珍樹・シダレアカマツ

大正時代まで、光円寺付近にはアカマツの原生林が広がり、そこから大正五年ごろに移植した木です。まだ老木ではありませんが、先ごろ根元周辺の舗装によって衰弱しました。住職は、「七、八年たってようやく樹勢は戻ったが、余裕ができたら根に水と酸素を供給する高機能舗装にしたい」と話します。

植栽された木々の根元には、きれいに敷かれた丸い石。よく見ると、みな同じようにスジがあります。挽臼です。一五〇年前、門徒が本山参りをした際にヒントを得、各家から募ったものです。その後、挽臼寺という呼び方もされるようになったということです。

樹木　シダレアカマツ（町天然記念物）

米づくりの水をめぐって

――鹿妻穴堰・越前堰・山王海ダム――

岩山に取水トンネル・鹿妻穴堰

盛岡市太田から御所湖畔のつなぎ温泉に向かって行くと、途中、鹿妻穴堰頭首工が見えてきます。川辺には遊歩道がめぐらされ、付近を見下ろす小高い杉木立のなかに鹿妻神社が建っています。

その地は、いまから約四〇〇年前、盛岡市・矢巾町・紫波町の西側一帯を米作地に変えた水のトンネル、鹿妻穴堰が築造された場所です。

盛岡市や紫波郡の西側は、北上川の水位より位置が高いため水利が悪く、土地は荒れていました。盛岡に築城がはじまり、集まった人たちの食料確保が課題になったとき、高いところを流れる雫石川に着眼した人がいました。鉱山師の鎌津田甚六です。

甚六の陣頭指揮のもと、約二年がかりで剣長根の岩山に取水トンネル（穴堰）が貫通。農民はたいへん喜び、鹿妻神社を建て甚六を祀りました。

その後の改修のとき、穴口を掘った岩盤は除かれましたが、いまも県内最大の用水路として水田をうるおしています。

県内最古の用水路・越前堰

滝沢村の清雲院の境内に立つと、越前堰の大きな顕彰碑が目につきます。越前堰は、全長二六キロの長い用水路で、滝沢村役場から清雲院のあたりを含め広範な水田を支えています。

県内一古いこの用水路は、江戸時代の少し前、綾織越前広信（遠野城主の長男）が造ったものです。滴石（雫石）城主に仕え、滴石城再建のためにこの地にきた越前は、この広い荒れ地を水田にしようと、私財を投じ、岩手山麓の複数の沢から水を引く工事に着手しました。高い技術をもつ越前でしたが、難工事つづきで、完成までに二四年もの歳月を要しました。

そのころ、南部氏は越前に警戒心をもっていたため、住民は越前の顕彰を差しひかえ代わりに越前の愛馬を祀り、篠木に馬頭観世音堂を建立しました。そこには、今も越前が馬をつないだという穴開き石が残っています。

明治になってから清雲院に現在の顕彰碑が建てられ、碑文には、旧南部藩主の名前も入っています。

現在、この用水路を流れる水は岩手山麓のものではなく、北上山地からの水をたたえる岩洞湖（玉山村）から引いています。

水げんかを収めた山王海ダム

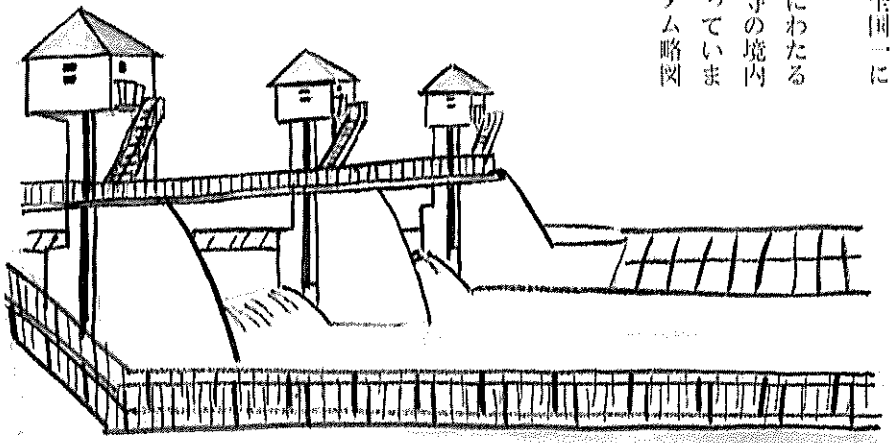
志和稲荷神社にある耳が欠けたキツネの像――これは「水げんか」のときの投石で壊れたものです。農民にとって水田の水不足は死活にかかわる大問題。そのため、長いあいだ争いのたねになりました。

紫波町の西部を流れる滝名川は、農業用水の貴重な供給源でした。ところが水量が少なく、いっぽうで水田がどんどん開発されるため水不足は深刻で、力づくで水を奪い合う「水げんか」が絶えませんでした。記録に残るだけでも二〇〇年余に三六回を数え、そのうちの数回は、死者を出すほどすさまじいものでした。

最後の水げんかは大正の末ですが、その後もにらみ合いは続きました。

これを終結させたのは、昭和二六年完成の山王海ダムです。山王海ダムはその後もかさ上げされ、現在では農業用ダムとして、その貯水量は全国一になっています。

こうした江戸初期から長年にわたる水争いを物語るように、極楽寺の境内には、犠牲者供養の石碑が建っています。（志和稲荷神社・山王海ダム略図205ページ）



境内に建つ奥州夢殿、内陣を飾る彫り物

蓮台山（れんだいさん） 極楽寺（ごくらくじ） 浄土宗

◆柴波町升沢字久保四八
◆電話　〇一九一六七三―一六八八
◆住職　第二六世　吉田祐倫

一八五年前に現本堂を建立

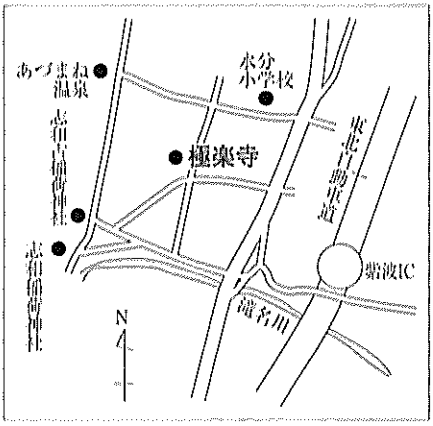
平安時代、すぐそば（東）を安倍道が通っていました。江戸時代には、近く（西）を稲荷街道が通り、南部公が志和稲荷神社参拝に往来しました。

極楽寺は、JR日詰駅・柴波中央駅・古館駅の各駅より西の山系に向かいそれぞれ約七キロ、東北自動車道柴波ICより三キロの地点、田園の中の杉の森にあります。車では、盛岡和賀線から一キロ余りで、近くに志和稲荷神社やラ・フランス温泉館があります。

極楽寺は大永六年（一五二六）、近くの土松本田身の僧・鉄幻が、磐城（福島県）の専称寺で修行し、帰省して現在地より一・三キロ山手に結んだ草庵で念仏を広めたのが初めです。

二世までは檀家三軒のみでしたが、三世のとき、本山より華開院の号と蓮台山の山号を授与されました。開創から約一五〇年、七世のときに（一六七三年）、片寄村の小田中字八郎（屋号朴田）が約一町歩の境内地と門前屋敷、水田を寄進して、現在地に移転。現在の本尊、阿弥陀如来を安置しました。

いまの本堂は一八五年前に建立（一八一七年）されました。下陣に対し内陣がかなり高い名越派の堂宇建築を特色とし、竜・極楽鳥・蓮などの金色燦然の欄間、色彩美の浮き彫りが側面を飾っています。



内陣の欄間は東西が欠損しましたが、往時は、内陣の床にそれら極楽の美が映り、「寺を建てるなら極楽寺を見よ。南部に慈観あり」の合言葉があったと伝えられます。

各住職の横顔と境内散策

その一五世の慈観は、学僧でもあり、参道に代に合わせて一五段の石段を造

りました。二二世の味方豊憲は指頭画伯で、有名な蟹の爪書き墨絵が現存しています。二三世の栗山真英は開教師として朝鮮の釜山に赴き、二四世・昆野秀賢、二五世・吉田光覚と続きます。

奈良法隆寺の夢殿と同型同積の英霊殿

先代の光覚は、昭和の仏教学者友松円諦を師とし、和訳経典の普及に力を注ぐとともに、戦没者の英霊を供養する八角形の奥州夢殿「英霊殿」（奈良の法隆寺の夢殿と同型同積）を境内に建立しました。その本尊仏として、中国に依頼し純白の大理石の弥勒菩薩像を安置しました。

夢殿の前には四メートルに及ぶ仁王の石像があります。山門前には右側に釈尊ゆかりの菩提樹があり、左側には沙羅（ナツツバキ）の木があり、夏に花が咲きます。そのそばに、天保の餓死塔、水ケンカで死亡した農民二人の供養碑、上のほうには山王海ダム建設水没家の先祖供養五輪塔が建っています。

余話　現住職は、公立高校で長く国語の教鞭をとり、俳句や文筆が趣味。新聞などにエッセイを投稿し、二〇〇一年、それを総集しエッセイ集『続・竹の春』を著した。新聞に布教のための文章も発表。浄土宗の吉水流の詠唱「三宝和讃」「慶祝和讃」「仏名会和讃」の作詞が全国からの公募に選ばれ、二五年度新曲の作詞を依頼されている。

関連記事　米づくりの水をめぐって

地域の宗教活動の拠点となった庵寺

欣求寺（ごんぐじ）

浄土宗

◆葉渡町土龍字内川八
◆電話　〇一九―六七二―六八八一
◆兼務住職　吉田祐倫

地域の大商人らによる普請

欣求寺は、滝名川に架かる志和橋の近く、通称志和町の住宅が建ち並ぶところにあり、一般に「あんでら」と呼ばれます。それというのも、昭和二七年に現寺号になるまで、欣求庵と称していたからです。

欣求寺は、江戸時代前期（一六四六年）、前屋敷の地に欣誉浄心大徳によって創建。それから七五年後（一七二一年）、三代昭誉西光大徳のときに現在地に移転しました。

幕末のころ（一八五一年）、いまの堂宇が建立されています。その普請記録を見ると、当時の志和地域の大商人らが名をつらね、大槻那の村井氏のほか、内田屋、近江屋、井筒屋、桶屋、山形屋、馬医の名があります。

また、山門は、志和の長者といわれた稲荷の太田元（屋号）の隆盛時の屋敷門を移築したものです。

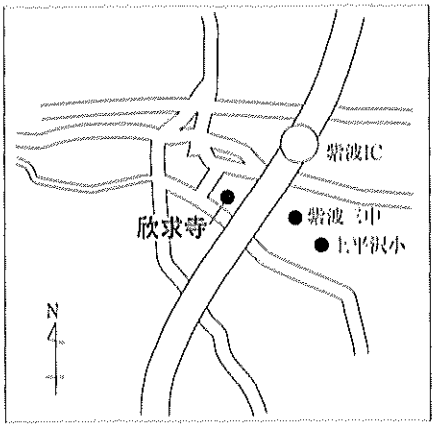
境内に教育功労者の彰徳碑

堂は小規模ながら内陣、外陣の別もあり、藩制のころ、この地域は八戸領

ということもあって八戸子爵家先祖代々の位牌と、大檀那の村井家の位牌が安置されています。

また、境内には、明治二〇年に建立された教育功労者松野学斎先生の碑があります。多年、寺小屋を経営していた松野先生は、土平沢小学校の開校（一八七四年）とともに初代校長に推された人物です。

開創以来の三一名の住持は、正規の資格をもたない人も多かったようですが、欣求寺は、長い間、地域の宗教活動の拠点となり、集会場になってきました。そのうち、花まつり、盆行事の灯籠流し、正月・盆・彼岸の百万遍供養は現在も継続されています。



いま檀家はなく、一八八坪の境内に八〇戸あまりの墓地があり、墓地所有者によって建物が維持されており、その管理は極楽寺が担っています。

中世の紫波五山

鎌倉時代から室町時代にかけて、紫波町には五つの大寺院があった。高水寺・新山寺・本誓寺・源勝寺・大荘厳寺である。

斯波氏から南部氏の時代になり、いずれも盛岡に移転。現存するのは二寺（本誓寺・源勝寺）で、三寺は明治はじめに廃寺となった。もうひとつ、広福寺（のちに法輪院）も盛岡に移転して天台宗の惣禄寺院となるが、やはり廃寺となった。

高水寺　城山（二日町）にあって、源頼朝が陣ヶ岡にきた平安の末ごろには、称徳天皇（七六五～七〇年）がまつったという一丈（三メートル）の観音像があり、坊舎も多くあったらしい。

新山寺　新山神社ゆかりの寺。平泉の藤原氏の祈願所といわれるが、ほかに、頼朝が陣ヶ岡に滞在したおりに遠矢の競技で優勝した青年が開いたとする新山権現垂跡縁起がある。

大荘厳寺　南日詰の五郎沼付近にあったとされ、初代の僧は斯波氏に随行したという。近くに鎌倉期のものなど二〇基ほど古碑がある。

教えに随喜した郷士みずから寺院を建立

長亀山（ちょうきさん） 願圓寺（がんえんじ）

真宗大谷派

◆柴波町片雲字中平九
◆電話　〇一九―六七三―一七四一八
◆住職　第二五世　櫻田正憲

歴史を秘める「安倍道」

奥羽連峰の新山の下方に位置する願円寺。山門の内側を川が流れ、橋を渡って境内になります。これは山王海からの幹線水路で、これに並行して古道の安倍道跡（町指定史跡）があります。

「安倍道」は、九百数十年前、六郡の支配者・安倍一族らが、衣川と厨川を往来した道、あるいは胆沢城と志波城を結んだ道ともいわれています。

安倍道が通る西側、新山の中腹には新山寺跡（盛岡に移転後廃寺、跡地は町指定史跡）があり、その昔、堂や坊が一八もあったといわれ、跡地から平安期の品々が出土しています（五点は町文化財）。そのふもとには宿坊とみられる源勝寺跡（盛岡へ移転、町指定史跡）があるというように、古い歴史を秘めた土地柄です。

願円寺は、いまから四四〇年あまり前（一五五八年）、櫻田刑部という郷士によって開かれました。

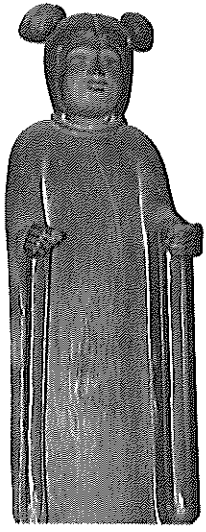
当時、彦部の地に親鸞聖人の高弟・是信房ゆかりの本誓寺があり、そこに参詣した櫻田刑部は、真宗の教えにふれ、歓喜のあまり剃髪しました。そして本山の本願寺で得度し、釈了興の名と寺号を授与され、自らの所有地に堂宇を建立したといわれます。

●略図は205ページ参照

映画にも出た鐘楼

願円寺には、聖徳太子一六歳の木像が安置されています。慈覚大師の東北巡錫の際（八三四～四八）、御堂を建て、尊像を彫刻し奉安して庶民信仰の拠点にしたという伝えがあります。

もと坂の上家の太子堂にあったものですが、当主と一五世の夢想が一致、願円寺に行きたいという太子の願いにより移転されました（一七七二～八一年）。掉取（さお）りの太子様とも呼ばれ、田植えで人手不足のとき、田掻（たかき）の掉取りをしてくれた誰ともしれない少年が太子さまだったという話があります。



16歳の太子像

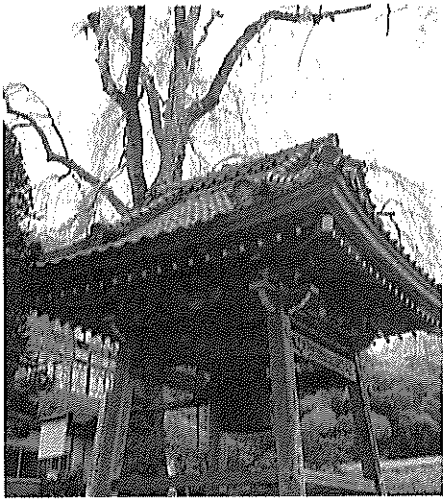
梵鐘について、先の大戦で供出した鐘は、臨済宗妙心寺派聖寿禅寺（盛岡市）のものを門信徒が購入し寄進（一七五八年、一六五二年鋳造）したというものでした。その後、旧鐘をしのび京都妙心寺の名鐘（国宝）と同型のものを新鋳し、昭和二四年に設置しました。この鐘つき堂は、昭和五九年に映画『男はつらいよ』に登場。「フーテンの寅」がうたたねをして夢を見るシーンのロケが行われました。

老樹と竹の群落

本堂の裏から墓地を囲むように孟宗竹が群生しています。約二〇〇年前、一六世が平泉の毛越寺からもらい受けた株と伝えられ、いま約六〇〇本。孟宗竹の群落の北限といわれています。

境内には、本堂再建記念に植えたとみられる樹齢二〇〇年余の四本の大きな伽羅木（きゃらぼく）があり、シダレザクラの古木は、県内四番目の大樹です。

また、参道登り口に餓死供養の石碑があります。過去帳をみると、当地方で特に苛酷だったのは天明三年（一七八三）ですが、五穀があったためか、死者は山手のほうが少ないということです。



本堂裏の孟宗竹と鐘楼堂そばの枝垂桜

余話　五三年の長きにわたって住にあった前住職。一二年間、宗門内では全国六五人の一人として宗議会議員を、地元では町議会議員を務めた。本山から在任五〇年の表彰を受けたあとの平成一二年、二五世にバトンタッチした。

樹木　モウソウチク、シダレザクラ（二株とも町天然記念物）

はるか六四〇年前の記録を残す如来の塑像

蓬莱山（ほうらいざん） 隠里寺（いんりじ） 浄土宗

◆葉波町片雷字中平一五
◆電話　〇一九―六七―六二一八
◆住職　第三九世　武田俊之

浄土宗として五〇〇年

鉄塔がシンボルの新山の下方、東北自動車道に沿うように四寺がありますが、隠里寺はその一寺です。近くの新山神社の場所には、平安期の藤原時代に建立されたとみられる新山寺（盛岡へ移転後に廃寺）があり、すぐそばを古い『安倍道』が走ることなどから、付近一帯は、早い時代に開かれていたとされます。

近在の寺のなかでも隠里寺の開創は古く、本寺である名越大本山円通寺（栃木県益子町）の記録に、戦国時代（一五〇七年）、存蓮社良慨上人覚意和尚の開山とあります。

当初、現在地の少し南の小高い山にあったといわれ、現存する過去帳から推察して、江戸時代前期に火災に遭い、その後、現在地に移転したようです。

五〇年ほど前、屋根を銅板にする際に、『寛保二年建立』の棟札が見つかり、現本堂はいまから二六〇年前に再建されたこと、また、欄間の彫刻は本堂建立から五年後に完成したことが判明しました。

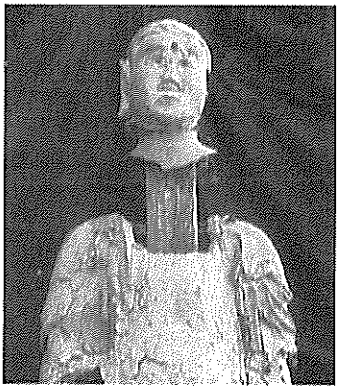
塑像に残る古記録

隠里寺の裏山（通称吉町山）に、薬師堂跡という場所があります。

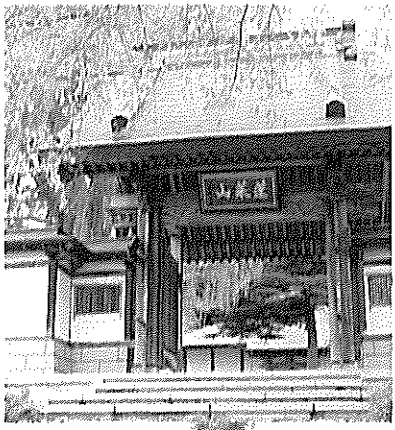
隠里寺の境内にある薬師堂は、それを移転したものといわれてきましたが、棟札により、本堂の建立から一八年遅れて薬師堂が建てられた（一七六〇年）ことが分かりました。安置される塑像は傷みがひどく作風も稚拙なので、『薬師』如来かどうかはっきりしませんが、たしかに如来像です。

堂修復のため移動した際、たまたま、塑像の頭部の支柱に墨書があるのが見つかりました。記録されていたのは住持と檀那名（藤原朝光）と貞治五年（一三六六）の年号です。そこにある

●略図は205ページ参照



古い記録がある塑像の如来像



書かれている年号が南北朝時代の北朝のものであることから、その当時、北朝の支配がこの地におよんでいたことを伝えています。

本堂再建のころからの大樹

本堂の横から位牌堂の後ろのほうへ、階段状に整備された墓地を登っていくと、高さ一八メートル以上と大きく枝を広げたシラカシが目につきます。ブナ科のシラカシは、暖帯の常緑高木で、福島県以南に分布します。隠里寺の木が植栽されたのは二百数十年前。住職によれば、「おそらく、本堂を建造したあと栃木県の本寺参りをし、そのとき持ち帰り、記念植樹をしたのではないか」ということです。

この木は、自生の北限を大きく越え、岩手県でも最大です。

仏像　貞治五年伝薬師如来朝像（町文化財）

樹木　シラカシ（町天然記念物）

舗装整備された傾斜面にかかる段々の墓地。左上方に枝を広げるシラカシが見える

住持名から、昔、寺院があったのではないか、あるいは新山寺との関係も考えられています。

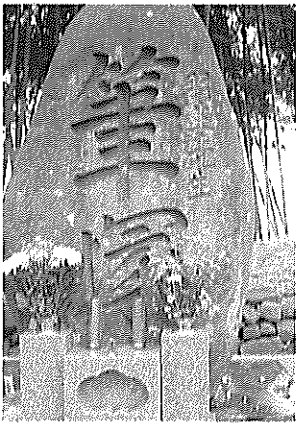
住職は、「いま開創の根拠になっているのは浄土宗本山の記録だから、それ以前に天台宗か真言宗の寺があったかもしれない。だとすると、隠里寺は浄土宗として約五〇〇年、開創からおよそ六四〇年になる」と話します。

地域の教育の草創を物語る石碑

憶念山（おくねんざん） 称名寺（しょうみょうじ） 浄土宗

◆紫波町片寄字鶏森六―三
◆電話　〇一九―六七三―七四五五
◆住職　第三五世　笹井岳雄

●略図は205ページ参照



火災をまぬがれた黒木尊

称名寺は紫波町の南西部、奥羽連峰のふもとを通る盛岡和賀線沿いにあります。五〇〇メートルほど北には隠里寺と願円寺、南には黄金堂があり、田園の中の寺域といった場所にあります。

称名寺は、当初は専修院と称し、江戸時代のはじめ（一六一九年）に、良証（諸）故白和尚によって開かれ、花巻市の広隆寺末となっています。

伝えによれば、故白は隠里寺の一二世でしたが、弟子の曇竹との間に紛争があったため本尊と檀家一六戸とともに同寺を去り、別に寺を建立。それが称名寺だということです。

称名寺の山門を入った右手に、大きなカヤの古木があります。江戸時代中期（一七八八年）に火災に遭った際、すべて焼失したと思っていた矢先に、カヤの梢に本尊がかかっているのを見つけ、信者ともども驚喜し、ますます信仰を集めたという話があります。

この阿弥陀如来像（八〇センチ）は、その姿から黒仏様とか黒木尊と呼ばれ、恵心僧都の作と伝えられています。

住職で特筆されるのは、三三世の良乗円随です。若くして就任した円随は、内陣を整え、伽藍を改修し、早くに茅葺き屋根から銅板に替えました。

大正九年には、善光寺（長野）一二九世法主の尼宮様（大宮智栄上人）を招いた授戒会を開催。さらに、一代に一度は、といわれる五重相伝会を二度開くなど、中興にふさわしい活動をしました。

地方には出掛けない尼宮様（当時一〇代後半）を迎えたことで大反響を呼び、岩手日報に二回も報じられました。向こうの裏話も、後日もれ聞こえたという佳職。あまりの田舎に驚き、その後は綿密に下調べをするようになったとか。漆塗りの風呂を新設して、かぶれができるといったハプニングもあったようです。

参道と境内の三つの碑

称名寺の境内に、当地の学校教育の草創を物語る碑があります。

大きな自然石に「筆塚」「羽生先生」と刻まれ、裏面に門弟八人の名前があります。羽生利兵衛先生は、有力檀家の寺田家の出身で、寺を借りて寺子屋を開いた人です。明治に学制が発布されたとき、最初の約二年間、称名寺に片寄小学校の仮校舎が置かれました。羽生先生は、小学校でも引き続き教鞭をとったと記録されています。

ほかに、参道入り口に二基の碑があります。「飢餓供養塔」には天明（一七八一～八八年）とあり、珍しい「蚕供養塔」（蚕は虫の古字）には、安永四年（一七七五）と刻まれています。

旧八戸領の米産地

地域の風土について住職は、義理がたく、独立心があるといいます。役場だのみではなく、自力で小学校にプールを造り町に寄付するといった気風は、昔、ここが八戸領だった影響ではないだろうか、といいます。

藩政のころ、八万石の盛岡南部藩と二万石の八戸南部藩とに二分割されるとき（一六六四年）、紫波町西南部の旧四村（上平沢・稲藤・土館・片寄）は飛び地で八戸領となりました。

南部二八代・重信公に実子がなく、家督を決めないまま没したため、家名断絶の危機に直面しました。家臣は幕府に相続を願い出ますが、一方において、内部では人選をめぐって各派が対立していました。幕府は、利直公の先功に免じて相続を認めましたが、藩の分割を命じました。そのとき、八戸藩領は畑作地帯なので、一部、米産地のこの地域を組み入れたとみられています。

仏像　木像阿弥陀如来立像（町文化財）

田村麻呂と慈覚大師の縁起を伝える仏堂

宝珠山（ほうじゅさん） 黄金堂（こがねどう）

真言宗醍醐派

◆紫波町片寄字沢口六
◆電話 〇一九―六七―二六五七四
◆執筆者 漆沢寛蔵

別当の屋敷内に移転

南北に走る盛岡和賀線と東北自動車道の間に黄金堂があります。

本尊の十一面観音を安置する黄金堂は、いま、地域の講中によって支えられています。そこには、次のような縁起が伝えられています。

「坂上田村麻呂将軍、東夷征伐の後、その報恩のため、且つは両軍戦死者の霊を弔わんとこの地に一寺建立、黄金堂と称し、十一面観音の尊像を安置して京に帰る。承和年中、慈覚大師御来錫、五尺二寸の尊像を刻して安置す」

黄金堂に伝わる鎌倉時代中ごろ（一二六二年）の古い板碑（棟札）により、当時、「再興」され、「宝塔一宇」が建てられたことがわかります。その後、江戸時代（一八二五年）に再建されたらしい立派な棟札があり、大工の棟梁、匠工、仏師、還宮導師、別当などの記録から、仏像の修理、堂の装飾もされたようです。

黄金堂は、もと一キロほど南の小山沢の黄金堂山にありましたが、管理に不便だったためか、明治三年、別当の屋敷内に移転。現在、一五〇坪の境内に拝殿（一六坪）と奥の院（五坪）が建っています。

奥の院には、本尊とともに、もと志和稲荷神社にあった不動明王が安置されています。

坂上田村麻呂の創建を伝え鎌倉時代に「再興」の板碑が現存する黄金堂

志和稲荷神社は、古くは成就院玄孤寺を号し、寺社をもつ修験の寺で、護摩修法も行われていました。明治の神仏分離の令によって神社一本になりますが、その際、経済的なこともあって、多くの什宝物を放出しました。そうして人手に渡った不動尊を、明治三六年、宥勝が入手しました。

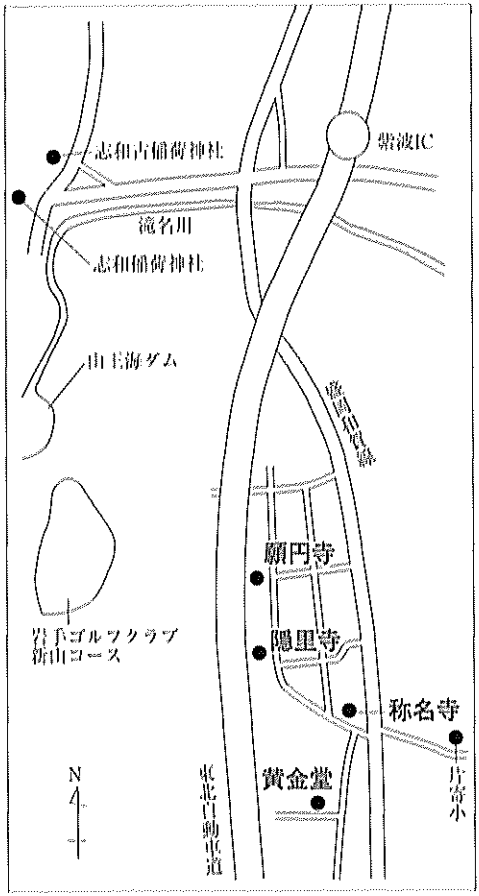
もうひとつ、拝殿にある御神鏡（直径一二センチ）は、石沢交友の蔵品だったものですが、子孫（漆沢リヨ、長男種次郎）から寄進されました。

当国三三ヵ所の四番札所

黄金堂は、当国三三ヵ所の四番札所になっています。

有名な神社仏閣を巡拝する霊場めぐりは中世から行われていました。奥州でも、戦国時代（一五一〇年代）に南部糠部三三ヵ所ができ、そのあと志和・稗貫・和賀の三郡を巡礼圏とする当国三三ヵ所が成立。四番の黄金堂のほか、旧都南村を含めて紫波郡内にある札所は、六番から一四番までの一一ヵ所。そのうち四ヵ所は坂上田村麻呂が安置した観音さまと伝えられ、真偽はともかく、いずれも、古くから民衆の信仰を得ていた仏像とみられます。

関連記事　観音信仰と……観音の巡礼



参道入口にある狛犬

開創五〇〇年。産金にちなむ寺号の正法寺直末寺

養龍山（ようりゅうざん） 高金寺（こうきんじ） 曹洞宗

◆紫波町大巻字花立二八
◆電話　〇一九―六七―一四―六五
◆住職　第二五世　大松博典

隣接する町の火葬場

国道四五六号を、紫波橋から一キロほど南下して山手に曲がったところに高金寺があります。すぐ隣りは、紫波町の火葬場。実は、高金寺の所有地に火葬場があるということです。

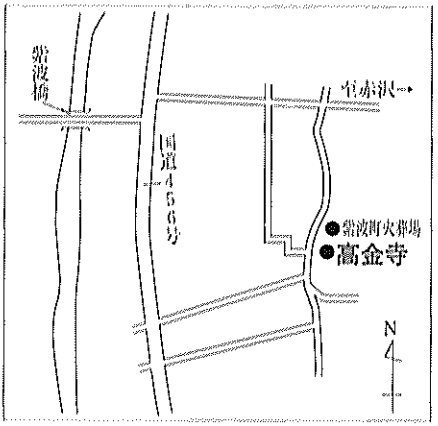
高金寺は今から約五〇〇年前の戦国時代（一五〇五年）、正法寺（水沢市）の曹叟（そうそう）大渓大和尚（正法寺輪住九九世）が建立した仏堂にはじまりました。

正法寺に伝わる唐の経本二巻には、彦部郷の満室山瑞泉寺の寄進（一五七六年）という署名があります。いまはない瑞泉寺ですが、近郷に三寺が現存することから、仏教の浸透した地域だったといえます。

高金寺の開基は、川村氏の花嶺存公大姉。現在、位牌を残すのみで、一切は不明ですが、平安時代末期以降、この地を領有した川村（河村）氏ゆかりの人物とみられます。

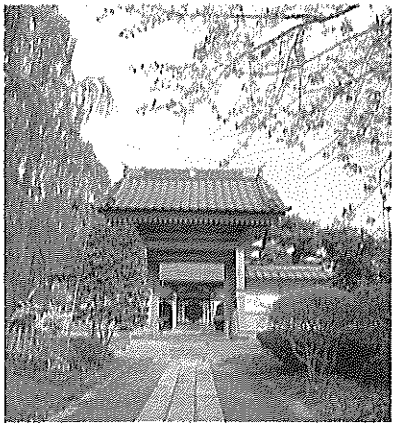
中世の紫波郡は、大巻城を拠とする河村氏が川東を、斯波氏が川西を支配していました。しかし、やがて南朝（河村氏）と北朝（斯波氏）が対立し、河村一党からも斯波氏につく者が出るにつれて河村氏の記録は途絶え、寺の由緒も残らなかったとみられます。

位牌壇に安置する親指のない達磨像



達磨像にまつわる話

高金寺が開山した地は山居沢で、のちに川村氏の大巻館下の小玉根・達磨（ケンゾウ）



堂付近に移転。当初の滝浦高吟庵から興金庵、高金寺と変わりました。この号は、当時、付近に興った金山にちなんだとみられます。

現在地に移転したのは江戸時代中ごろ（一六九八年）で、今から約二〇〇年前に現本堂が建立されました。

高金寺には、達磨堂の本尊、義眼入りの古い達磨像があり、運慶の作と伝えられています。

中国禅宗の始祖・達磨（円覚）大師については、九年間の坐禅修行がモデルとなって張り子のダルマができたほか、昔から画題になった故事があります。達磨大師の教えを乞う慧可が、自分の肘から下を切って差し出したという「慧可断臂」です。高金寺の達磨像には両親指がなく、これについては、むかし達磨堂に二体あった達磨同士が喧嘩をし、指を折られたという、むしろ人間くさい伝説があります。

晋山と伽藍整備

現在、高金寺では、黄昏時に打鐘しています。この梵鐘は、一三代鈴木盛久釜師の作で、昭和三五年に篤志（阿部徳蔵）から寄進されたものです。なお、鐘楼は、平成一四年の開創五〇〇年記念式典並びに晋山式を前に、山門とともに改修されました。

境内には『銭形平次捕物控』の作者で音楽評論家「あらえびす」でも知られる、地元出身の野村胡堂の句碑があります。

余話　私立高校で教鞭をとる住職は言う。砂漠の国の宗教とは異なり、瑞穂の国に根づいた仏教は、本来、水を分けあうような包容力をもっていた。ところが近年、こういう宗教観、民族性が希薄になってきた気がしてならない。やはり、小仏事（葬礼）ばかりではなくて、教義に基づく大仏事に、もっと力を注がなくては、と。

開基の中野氏の戒名に由来する寺号

近城山（きんじょうざん） 長徳寺（ちょうとくじ） 曹洞宗

◆紫波町彦部字蟇坪一六八―一
◆電話 〇一九―六七二―三三三六
◆住職 第二三世 森田眞英

五〇〇年前、旧跡に堂を建立

国道四五六号から佐比内方向に向かう道の分岐点ちかく、彦部小学校と児童館に近接して長徳寺があります。

長徳寺が開創されたのは、今から約五〇〇年前、戦国時代中ごろ（一五〇一年）で、宗得寺（石川県）四世・大陰恵全大和尚によって開かれました。

火災で焼失しなかった一部の史料と寺伝によると、由緒はおおむね次のとおりです。

大巻の赤川館主・葛原義敬は、無底良韜禪師（水沢市の正法寺開山）のために、修験の霊山であった黒石山に仏殿を造営し、近城軒と号しました。ところが、無底は在住五年にして正法寺に転じたことから、仏殿は無住となって荒廃しました。義敬の子孫・伯耆が寺の再興を企図していたおりに、諸国を行脚（あんぎゃ）していた恵全がたまたま赤川館に投宿。これを機縁に、伯耆は恵全のために旧跡に堂宇を建立し、かつて と同様、近城軒としました。

郡山城代・吉兵衛の墓

無底が黒石郷（水沢市）に正法寺を創建したのは、南北朝の時代（一三四八年）です。

当時の奥羽地方は、南朝方の勢力が全く衰えていました。そのころ、曹洞宗本山は北朝の足利方の支援により、奥羽地方の布教に乗り出しました。布教の使命を担う無底が、足利氏一族である斯波氏の勢力圏にあった当地に入ることは、十分に考えられます。

ただ、『紫波町史』によると、本願

主の赤川館主・葛原義敬は斯波御所の二男とされ、そうなると年代的にずれるので、無底による開山は疑問があるとしています。

寺伝によると、斯波氏滅亡の翌年（一五八九年）、中野修理康実（開基、初代吉兵衛）により四ツ家の地に移転。康実は南部信直公の重臣で、初代の郡山城代となりますが、その五年後（一五九四年）に死没したことから、戒名の「長徳寺殿休安知公大禅定門」をとって、寺号を長徳寺と改めました。

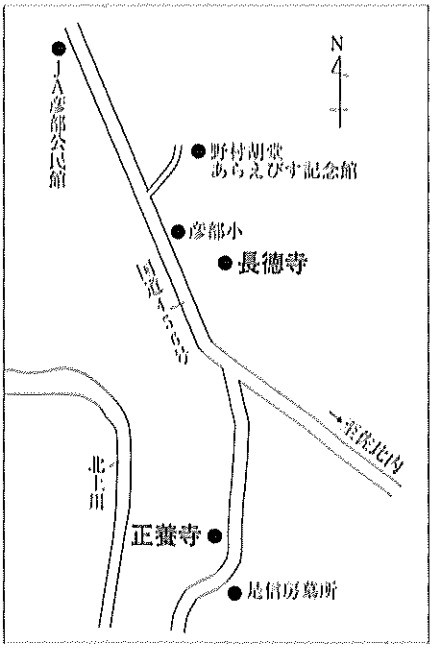
それから約二〇年後（一六一三年）、康実の子・正康（二代目吉兵衛）によって再度の移転。それが現在地です。

『紫波町史』には、正康の子・元康の墓が長徳寺に現存し、康実や正康も葬られた公算が強いから、このことは事実と思われる、と記しています。

なお、長徳寺には、慈覚大師の作という聖徳太子像が伝来していますが、由来は不明で、明治二三年の火災により、かなり損傷しています。

余録　中野修理康実は、実兄である「九戸政実の乱」の九戸政実と敵対し、斯波氏の没落を策するなど、時代を動かした人物。康実が、来訪中のいとこに突然刺殺されたのは四二歳のとき。その場に居合わせた康実の二男・一二歳の正康はすぐに仇を討ち、その勇気がかわれて家督となった。三〇年後、花巻城で毒殺事件があり、そこに連座していた正康も毒酒で落命。父と同じ四二歳であった。

関連記事　近世藩開けの動乱



親鸞の高弟・是信房が開創し生涯を終えた寺

石森山（せきしんざん） 正養寺（しょうようじ）

真宗大谷派

◆紫波町彦部字川前二一〇
◆電話　〇一九―六七―二二二〇
◆住職　第三〇世　石ケ森正信

寺号の由来

国道四五六号の沿線、あと数キロ南は石鳥谷町という地、彦部川岸の木立に沿うように正養寺があります。

正養寺は、鎌倉時代の初期（一二二五年ごろ）に開山した古刹です。この時代に興った新しい仏教は、やがて奥羽にもひろまりますが、正養寺はそうした布教の先駆者、是信房によって開かれました。

正養寺は、紫波町の本誓寺、盛岡市の本誓寺と同じ縁起を有しています。三寺は、ここ開山の地から移転設置されました。開創から約三七〇年、天下統一に動いた安土桃山時代（一五八四年）に紫波町二日町へ、江戸時代（一六三五年）になって、さらに盛岡へ移転。すなわち、鎌倉御家人の河村氏のお膝元の当地から斯波氏の城下へ、南部氏の居城の地へと移りました。

盛岡への移転にあたり、一六世・賢勝は、始祖の墳墓のある地に正養寺を建立。弟の教勝がこれをまもりました。

是信房の出自

是信房は、親鸞聖人の高弟の一人で、特にすぐれた二四人中、一〇番目にその名が出てきます。

寺伝によれば、是信房は俗名を吉田大納言信明卿といい、京都に生まれ、父の後を継いで朝廷に仕えますが、朋友の讒言（ざんげん）によって越前国に流刑となります。勅免となったあとも復官を望まず、常陸国稲田に親鸞聖人を訪ねて弟子になりました。

その後、是信房は祖師の御名代として御真影を奉持して奥州に下向し、北上川に沿って上り、和賀郡一柏を経て、彦部（石森山）に来住。五〇年間この

●略図は209ページ参照

木立の中にある是信房墓所

地にとどまって念仏の教えをひろめ、人々を導き、都の文化や文物を伝えて郷土のために力を尽くし、七五歳の生涯を終えました。

当地で没した是信房は、花巻市にある上人塚で荼毘に付され、石ヶ森に葬られたとしています。

聖地・是信房の墓所

正蓮寺から南へ五〇〇メートル、是信房の墓所のある石ヶ森は田園の中のこんもりとした高台で、「お墓山」と呼ばれています。

「是信房の墓参道」の案内板のある道を行くと大小の碑があり、八〇段余の石段を登った木立の中に、是信房の墓所があります。そこは、宗教上の聖地として、いまも参詣者が訪れます。

古来、多くの人がこの地を訪れたことを示す道標が、紫波町の彦部に残っています。明治のすえに北上川で発見されたこの道標には「明治四拾年三月下旬是信房墳墓道」とあり、川の東岸に立っていたとみられます。

この地で是信房が最初に草鞋をぬいだのは、墓所の近くにある当時の豪農、小深田彦太夫の家。是信房に帰依した彦太夫は、是信房の家従二人とともに、布教に協力したといわれています。

家従の一人、千原長左衛門は剃髪して信円房を名乗り、光照寺（盛岡）を開山しました。

もう一人の橋本左内も彦部に草庵を建て（後庵家の祖）、この地に定住したといわれています。

なお、伝来する寺宝に次のものがあります。

阿弥陀如来四方六字の名号
聖人の御筆
聖徳太子の木像　聖人御作
御獄観音像　吉田家持仏

史跡　是信房墓所（町文化財）

明王・仁王・天部の神々

実際に働く状態の「明王」

明王は如来や菩薩の状態から変化して、実際のエネルギーになってくれる仏さまです。

ふだん見聞きすることの多い不動明王は、大日如来の化身で、実際に働く状態なので非常に力強い表現になっています。

不動明王の像は、太陽を象徴する大日如来が火焔の光背となり、右手には、両刃の具梨伽羅剣、左手には綱状の索をもっています。

剣の片方では人間の煩悩を切ることを教え、もう一方では、人間の邪魔をする悪魔を切るというものです。索の先には、悪をこらしめるための分銅と、困っている人を救う鐶がついていて、ひとことでいえば、切迫した危険にさらされている人を、必死になって救う仏様が明王です。

その像は、お釈迦さまが王子だったころの勇ましい姿がモデルになっています。

毘盧舎那如来は、密教的には大日如来になります。大日如来の五つの智慧を五智如来が分け持ち、これがエネルギー化すると五大明王になります。明王の中で、強烈な愛情をもつのが愛染明王で、必死で守るということから、不動明王と同じように忿怒の表情をしています。

盛岡市には、長福院に伝わる愛染明王像があり、付近を愛染横丁と呼んでいました。現在、この像は盛岡市中央公民館で常設展示されています。

（盛岡市中央公民館略図87ページ）

仁王は守護神のひとつ

仁王さまは、金剛力士とも呼ばれ、お寺の門の左右にあります。ふつう、向かって右側の像は阿形、左は吽形。二体が阿吽の呼吸で、お寺を守護しています。

貴族社会の平安時代には優雅な仏像が好まれましたが、武家社会の鎌倉時代になると勇壮な仏像が好まれ、仏師たちも、力強く生き生きと写実的な表現をするようになりました。

お寺では、仏様をまつっている祭壇を須弥壇といいますが、これは須弥山からきています。蓮華蔵世界観（梵網経）で示している仏の世界で、中心をなす高い山が須弥山です。そこには三千諸仏といわれる無数の仏がいて、その上空に如来・菩薩・明王らの仏たちがいます。この仏様を仏敵から守護するのが天部の神々。須弥山には、竜王、夜叉神、四天王、梵天・帝釈天ら……

天がいますが、いざ緊急事態というときには、帝釈天が自ら変身して、仁王になります。

県内一の巨像・毘沙門天

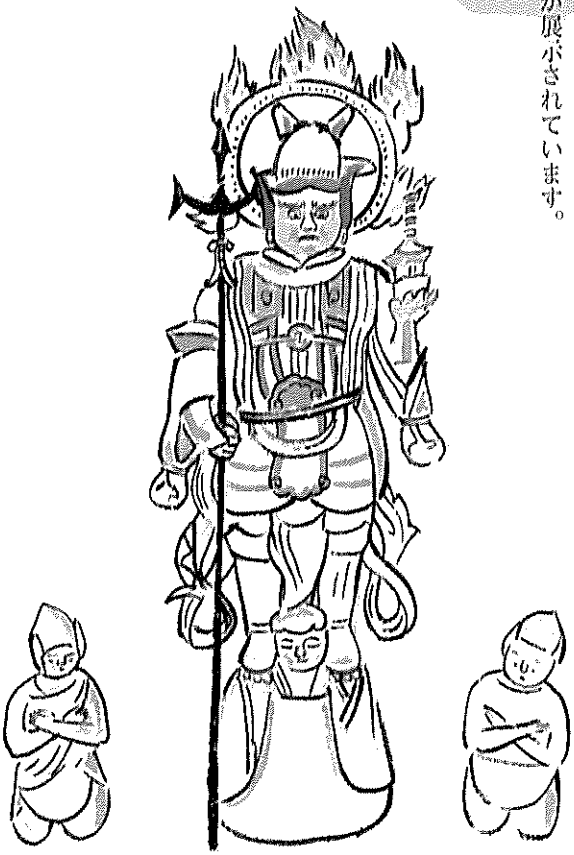
天部の仏たちは、インド古来の神々が仏教に帰依して、仏教の守護神となったものです。このため種類も多く、働きもさまざまで、他の仏様と違って、男神、女神の区別があります。

その姿の基本は、お釈迦さまが王子だったころの家来や女官がモデルといわれますが、日本に伝来した女神（吉祥天・弁才天・伎芸天など）は、優美な中国ふうの貴婦人の姿をしています。

男神の仁王、四天王（持国天、増長天、広目天、多聞天―毘沙門天ともいう）、十二神将、二八部衆などは、鎧や武器を身につけています。

岩手県には、国の重要文化財になっている東和町北成島の兜跋毘沙門天像があります。毘沙門天は北方守護の神であるとともに、外敵を撃退する神通力があるとされ、その姿は西域の兜跋国の大王を模したといわれています。

平安時代に造られたこの像は県内一の大きさで、像高は五メートルに近く、本体は一〇メートル近くもあります。岩手県立博物館には、この像のレプリカが展示されています。



三四〇年前、遠野南部氏が領内に開創

立福山（りゅうふくざん） 鳳仙寺（ほうせんじ） 曹洞宗

◆紫波町佐比内字芳沢一―四
◆電話　〇一九―六七四―二〇一九
◆住職　第一八世　清水圖次

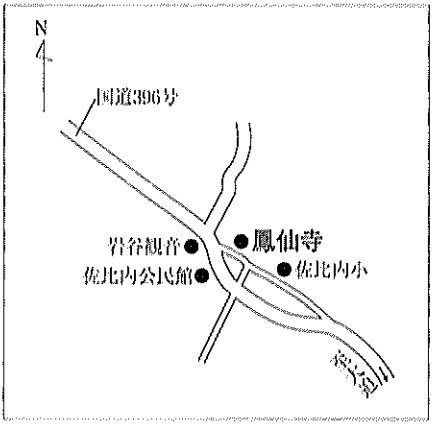
盛岡と遠野を結ぶルート

北上山地のふもとを走り、盛岡と大迫・遠野をつなぐ国道三九六号。一帯は果樹の好適地であることから紫波町では「フルーツロード」といい、沿線に産直所が点在します。鳳仙寺は、大迫町との境にある直売所から二キロほど北側にあります。

鳳仙寺の開創は、盛岡と遠野の往来にかかわっています。寛文元年（一六六一）夏、遠野南部三三代、弥六郎直栄公の奥方・千代が盛岡で死没。直栄公は、自領地の当地まで遺体を運び、荼毘に付しました。それを機に、佐比内館前にあった古い小庵を火葬の地に移転して一寺を建立。遠野市大慈寺一〇世・隆室泰育大和尚が開山しました。開山の大和尚に随行したのが、伊藤次郎右衛門（佐比内片山の祖）と伝えられています。

鳳仙寺には、直栄公の子、二三名の墓があります。直栄公の側室は三五人ともいわれ、死亡した側室の子はすべて鳳仙寺に埋葬したといわれます。こうしたことから、鳳仙寺には、遠野南部藩から墓地掃除料として、人扶持（ふち）を給付するという書状が残っています。また、藩公が遠野・盛岡間を移動する際、送迎の役割をしるした書柵、南部氏から贈られた刀掛けが伝来しています。

なお、現在の山門は、明治二年に佐比内の代官所が閉鎖になる際に移築されたものです。



田村麻呂伝説のある観音さま

鳳仙寺から歩いて三分、片山の石灰岩の洞窟に岩谷観世音がまつられ、そこに古い伝えが残っています。

延暦年中（七八二～八〇五年）、東征した坂上田村麻呂が洞窟に隠伏していた蝦夷（えみし）を討ち、戦勝と平定を祈願し、

鳳仙寺

戦死者の冥福を祈って聖観音像を安置したということです。この仏像は、紫波・稗貫・和賀に設けられた当国三十三観音の一四番になっています。

産金で名を馳せた地

地域の歴史を語るものに、佐比内城跡（佐比内字神田）とキリシタン墓碑があります。

佐比内城の館主は斯波氏の家臣で、河村秀清の子孫。河村秀清は鎌倉御家人で、平安時代末期、軍功により紫波郡の川東を領有。数ある系図のひとつによれば、南北朝時代、八代目にあたる秀基が大巻館から佐比内城に移ったとしています。鳳仙寺の前身となった庵も、この館に関係するとみられます。

金山地帯の北上産地には、古くから人の往来があったとされます。佐比内には、江戸時代初期に開発された僧ヶ沢金山、朴木（ほおのき）金山があり、ここからの産金が藩の財政をうるおしました。

金山の労働者にはキリシタンが多かったという記録があります。鳳仙寺とは関係ないものですが、佐比内字低ヶ崎に四基のキリシタン墓碑が現存します。八〇～五〇センチの自然石に十字形に草花が刻まれたもので、希少な遺産として町の文化財に指定されています。

余話　平成一三年春に着任の新住職は三〇代になったばかり。県内の寺に生まれ自然体で僧侶になったという、静かな農村風景は、生地に似るという。

地域の仏教文化を秘める平安仏

法廣山（ほうこうざん） 正音寺（しょうおんじ） 曹洞宗

◆紫波町遠山字上小深田二九一一
◆電話 〇一九一六七二一一三三九八
◆住職 第二四世 石亀孝文

開創は約六〇〇年前

紫波町の「フルーツロード」、国道三九六号から数百メートル東側に正音寺があります。近くに道の駅と併設の産直所があり、北上山地沿いの丘陵地は、いま果樹の里ですが、往古は金を産する山域とされていました。

正音寺は、正法寺（水沢市）二世・月泉良印禅師の弟子である大応玄徹によって開かれました。開山年は、文正元年（一四六六）としてきましたが、正法寺に残る月泉良印禅師の葬儀（一四〇〇年）の分担表に「塔山正音寺」とあり、それ以前にさかのぼるとみられます。開基は、記録を焼失して定かではないものの、斯波城主四代公と伝えられます。

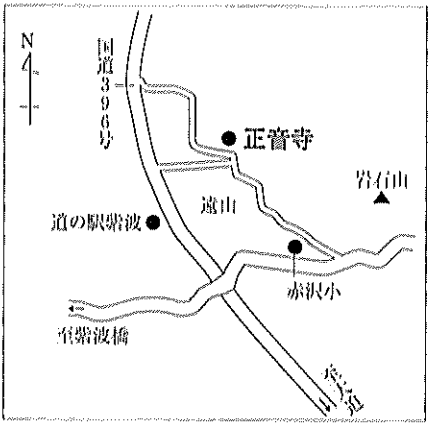
正音寺の駐車場から一段高い場所に鐘楼があり、梵鐘には越前守藤原家綱（南部藩お抱え鋳物師、鈴木氏初代）の作銘があります。これは、法輪院のために鋳造（一六四三年）されたものですが、明治はじめに同院が廃寺となる際に譲り受けたものです。

南部領内天台宗の惣禄寺院だった法輪院（旧号広福寺）は、もともと斯波氏の祈願所で、斯波氏の没落後、南部氏の命により盛岡に移転しました。

密教ゆかりの明王像

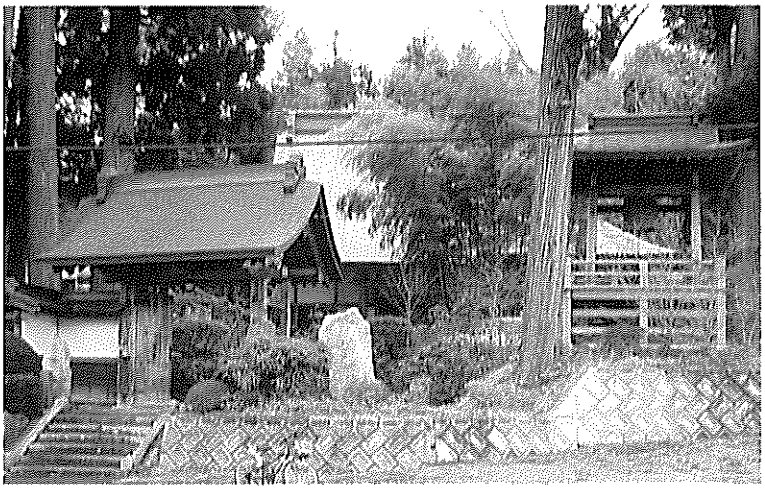
正音寺には、藤原時代（平安期）の作と推定される古仏があります。木造の毘沙門天立像と、四体の明王像で、県の文化財になっています。腐朽により、像は腕や足を失い、また、本来、明王像は五体一具なので、一体を欠失したとみられます。

弘法大師・空海によって中国から五大明王が伝えられると、密教寺院では五大堂を建立して像を安置しました。ただ、作例は少なく、東北には松島の五大堂があるだけです。



産金地にあった古寺

古仏は、明治の廃仏毀釈のときに薬師堂から正音寺に移管になりましたが、もともとは蓮華寺（廃寺）にあったとみられます。蓮華寺（白山権現別当寺）には、藤原経清（清衡の父）の母の墓のほか、多くの古碑があり、中世のころは当地方の仏教文化の中心地だったようです。



平安仏の毘沙門天像（一七四センチ）と明王像（一一〇～八六センチ）

かつて、紫波郡には藤原氏の分家にあたる樋爪氏がいました。当時、白山宮と新山社の二つの鎮守社があった平泉になぞらえ、樋爪氏は産金地鎮護のため、東に白山権現（蓮華寺）を、西に新山権現（新山寺）を勧請したのではないか、という見方もあります。

さらに、いま正音寺の飛び地境内となっている薬師堂には、平安時代後期の作とみられる七仏薬師如来があります。一回り大きい中央仏と左右に三体ずつの薬師如来。このように全七体がそろっているのは全国にも数少ないということです。

仏像・鐘　木造毘沙門天立像、木像明王像四体、七仏薬師如来立像（薬師堂）（以上いずれも県文化財）正音寺銅鐘（町文化財）

関連記事　源氏と藤原氏ゆかりの史跡

町内第二、県内でも古碑に属する石卒都婆

圓明山（えんめいざん） 常光寺（じょうこうじ） 曹洞宗

◆紫波町東長岡字竹洞一一六
◆電話　〇一九―六七―四三七七
◆住職　第三二世　森田英仁

正法寺につらなる寺

紫波町の川東の主要道は、由側を国道三九六号が通り、田園の中を北上川と並んで四五六号が走っています。この二筋の分岐から南に約一キロ、丘陵地と田園の境に常光寺があります。

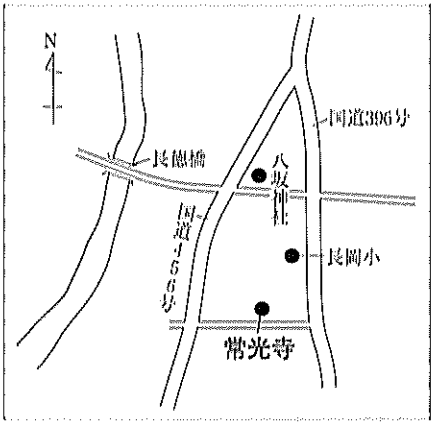
常光寺は、戦国時代（一四九六年）に湖心寿徳和尚が開いた常光庵に始まります。法系は、三キロほど南の正音寺と同じく、正法寺（水沢市）です。

常光寺の門前に、紫波町で二番目に古い碑（一・八メートル）があります。鎌倉時代後期（一二九五年）に父母の供養のために建立したもので、梵字で「キリク（阿弥陀如来）」「サ（観音）」「サク（勢至菩薩）」、すなわち、阿弥陀三尊が刻まれています。

この碑は、町内で最古のものから三年後、県内で最古のもの（東磐井郡門崎）から四九年後に建てられ、県内でも古碑に属します。

この碑を含め、町内には県南部と同類の石卒都婆（板碑）が五三基と多くあり、鎌倉中期から南北朝時代に建碑が流行したとみられます。

町内で一〇基以上の碑が集合する地は、赤沢の薬師神社周辺（華厳寺伝承地、現正音寺飛び地境内）、南日詰の五郎沼接続地（大荘厳寺伝承地）、西部に、上館の金田館と三ヵ所。二ヵ所は現存しない寺に関係しています。



北上川を挟む東西交流

常光寺は、当初、西長岡の長谷田の地にありましたが、江戸時代前期（一六七三年）に炎上。三年後、南部藩士郡山与力の小田島源右衛門輝秀が大檀那となり、現在地に移転再建されました。この地は、かつての高水寺城（城山）の北東三キロ、長岡城があった館山の下にあたり、以前は修験の寺（清光院）があったと伝えられています。

旧地は現在地より北上川寄りの六日町に近く、その地名は、対岸の十日市、二日町とともに定期市に由来するとみられます。ちょうど斯波氏の城下に近く、対岸は高水寺門前という好条件も加わって、すでに中世のころから川を挟んでの交易はかなり活発だったようです。

いまの長徳橋近くには、戦後まで大きな渡し場が残っていました。住職は、「西の山は遠いので、川西からも川東の館山のあたりに来て柴を刈り、馬車ごと船に乗って往来したそうです」といい、こうした歴史を語るように、常光寺の檀家も北上川を挟むように東西に分布しています。

なお、長岡城主の長岡八右衛門は、高水寺城落城の際、斯波氏が最後の頼みとした人物で、かなり高位にいたとみられます。長岡氏は、室町幕府管領高国を祖とし、新潟県の長岡から移って斯波氏に仕えたとも、大巻館に拠した河村氏の後裔ともいわれています。

移転建立から約一〇年後、南部重信公の末妻が守り本尊としていた釈迦如来坐像（約六〇センチ、厨子入）の寄進があり、以来、本尊としています。

伝来する寺宝として、十三仏図像のうち一〇幅、甘満参り画像（光斉芳亀作）、涅槃画像（石沢竹村作）、竜升書像（西有穆山作）があり、観音堂の十一面観音は、当国三三ヵ所の一二番になっています。

常光寺の本堂は、三〇年前の建物で、一六〇前に建立の庫裏は、目下、改築中です。

碑　東長岡永仁三年碑（町文化財）

『関ケ原』の五年後、戦乱を背景とした開創

松島山（しょうとうさん） 江岸寺（こうがんじ）

曹洞宗

◆紫波町江柄字自尚四
◆電話　〇一九―六九六―二四〇五
◆住職　第二八世　鷲盛瑞良

北上川べりの「江岸」

国道三九六号の沿線、盛岡市との境界近くに墓地があり、その向こう側にお寺の屋根が見えます。それが三九六号の旧道に面して建つ江岸寺です。

『江岸』の号は、当初、栃内家の地続きの北上川河岸に建てられたことに由来します。あるいは、川の氾濫（はんらん）をしずめる願いを込めたのかもしれません。

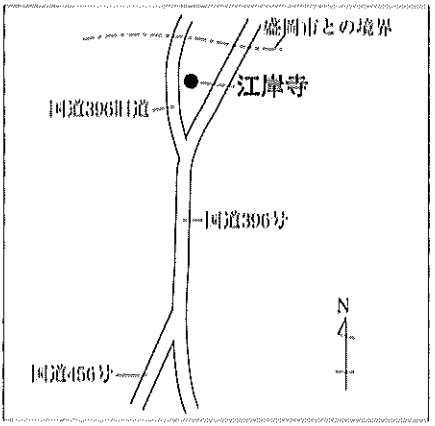
江岸寺は、地域の有力者、栃内与兵衛の招請により、江戸時代初頭（一六〇五年）、大迫町の桂林寺三世・梵玖和尚によって開山。寺が開かれたのは、戦乱で多くの死没者があったことに関係すると考えられます。

近世前夜、県央部での決起

安土桃山時代（一五八八年）、この地を長く支配していた斯波氏は、南に勢力を伸ばした南部信直によって滅亡しました。つづいて『九戸政実の乱』を鎮圧した南部氏が、根城を三戸から盛岡に移すことを決め、築城に着手します。

それと前後して、新しく藩主となった南部利直は、徳川家康の要請にこたえて最上に出兵。そのすきをねらって和賀氏・稗貫氏が決起（岩崎一揆）し、これに斯波氏の旧臣らも加わりました。一揆軍は鳥谷崎城（花巻）を攻めるも失敗し、ついに和賀氏の拠点であった岩崎城に籠城（ろうじょう）。主力は伊達領内にのがれた後に自刃（じじん）し、多くの兵士は落城と命運をともにしました。

中央で天下分け目の戦いがあった西暦一六〇〇年ごろは、岩手もまた戦乱が絶えませんでした。こうしたなか、故あって南部家の家臣となった栃内氏が寺院を建立したのは、敵味方に分かれて戦い、死没した多くの兵士の霊を弔う意味があったとみられます。

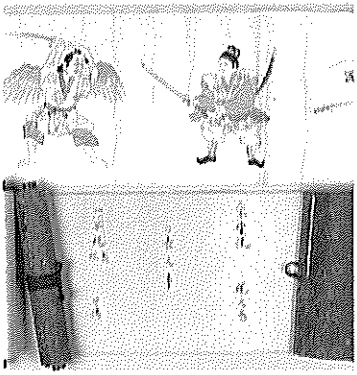


開基の栃内家は武門にひいでた家柄で、幕末期、八代・栃内逢吉は兵法を著しています。一門との関係は定かではありませんが、幕末に武術師範として名を馳せた南部藩士の栃内吉重、全国的に著名な盛岡出身の栃内曽次郎海軍大将がいます。

江岸寺の本尊・釈迦如来像は、南部重信公の側室となった栃内氏の娘が、両親の供養に寄進したものと伝えられています。

北上川の氾濫と移転

南部藩の記録によると、江戸時代前期（一六三七年）に北上川の大洪水があり、当時、伊達領の県南部で二〇〇人以上の死者を出す大惨事となりました。九年後（一六四六年）、またも北上川が氾濫し、盛岡城下の三橋が流されています。



栃内家「兵法秘伝」の一部

川の増水で江岸寺もたびたび被害を受け、二度、伽藍を流失しています。建物だけでなく二世・伝達和尚は、増水のおり渡川中に流され、漂着して命拾いをした対岸の地に、蟠龍寺を開いたということです。

そうした水害を避けるため、北上川を見下ろす高台の現在地に移転しました（一七八九～一八〇二年）。新しい境内地は、古くからの信仰の地で、稲荷大明神、蒼前社（馬頭観音）、宇部森神社が集合しています。

洪水をのがれたものの今度は火災に遭い、地域の人々によって再建されたといわれます。なお、現本堂は、幕末のころ（一八五七年）に建立されたものです。

関連記事　近世幕開けの動乱

お彼岸と仏教行事

『彼岸』とは悟りの世界

祝日の「春分の日」「秋分の日」を中日とし、前後七日間が彼岸、すなわち仏教週間です。

もともと民間にあった太陽を信仰する農耕儀礼が仏教と結びついたといわれ、インドにも中国にもない日本独自の仏教行事として、すでに平安時代に彼岸の法要が行われています。

昼と夜の長さが同じで太陽が真西に沈むので、昔の人は太陽の沈むところに死者の国「浄土」があると考え、先祖供養と結びついた彼岸の行事が行われるようになったとみられています。

彼岸は到彼岸のことで、パーラミター（波羅蜜）の漢訳です。彼岸は向こうの岸、此岸はこちらの岸です。彼岸は、本来、悟りの世界のことですが、一般人は生きている間に悟ることはできそうにないため、あの世と理解されるようになりました。

悟りの岸に至るにはどうするかというと、「六波羅蜜」の六つの徳目があります。布施（施しをする）、持戒（戒めを保つ）、忍辱（苦しみに耐える）、精進（努力する）、知慧（正しい判断）、禅定（精神の統一）です。

彼岸には、先祖に感謝しつつ、悟りの世界に思いをはせたいものです。

主な仏教行事

修正会（一月一日～）　正月行事が仏教化したもの。五穀豊饒を祈る。

修二会（二月）　修正会とセットになった行事。修正会は前年の稲の収穫を感謝し、修二会でその年の豊饒を祈願する。

涅槃会（二月一五日）　釈迦入滅の日。涅槃忌、仏忌ともいう。旧暦の二月一五日に行うところもある。

春季彼岸会（春分の日の前後一週間）

花祭り（四月八日）　釈迦誕生日。仏生会、灌仏会、降誕会ともいい、誕生仏に甘茶をそそぐ。誕生仏は花御堂にまつられるので花祭りという。

四万六千日（七月一〇日）　観音菩薩を本尊とする寺に、この日参詣すると四万六千日分お参りしたのと同じ功徳があるとする。

お盆（七月または八月一三～一六日）　精霊会。精霊流し、無縁仏者のために飲食を施す法要「施餓鬼」を行う。

秋季彼岸会（秋分の日の前後一週間）

成道会（一二月八日）　臘八会。釈迦が悟りを開き仏陀となった日。

除夜（一二月三一日）　一〇八の鐘を撞き、過ぎる年を反省し、来る年の幸を祈願する。

第5ブロック

玉山村、滝沢村、雫石町、松尾村、
西根町、岩手町、葛巻町

往古の「十一面観音の聖地」を示す古仏を保有

玉東山（ぎょくとうざん） 東楽寺（とうらくじ） 曹洞宗

◆玉山村玉山字一笠三二
◆電話 〇一九一六八五一二五一〇
◆住職 第三二世 阿部東龍

玉山氏が奉納した山号額

国道四号の船田橋付近から渡民川又線を南下すること約五キロ、バス停「小屋場」から、姫神山に向かって約二キロの地に東楽寺があります。

東楽寺は、東顕寺（盛岡市）七世・俊庵門鷹禅師（一六六一年没）が開山。開基は、東楽寺の近くにある玉山館跡（村文化財）の、かつての城主・玉山氏とされています。なお、「玉東山」の山号額は、江戸時代中期、玉山家九代・玉山六兵衛直人がクナシリ島の警備に出発するにあたり、武運長久を祈願して奉納したというものです。

この開山よりも古く、衣川文書に安倍時代（一〇～一一世紀前半）の寺院としても見え、玉山観音堂（現姫神嶽神社）のそば、寺久保が旧地ともいわれますが、明らかではありません。

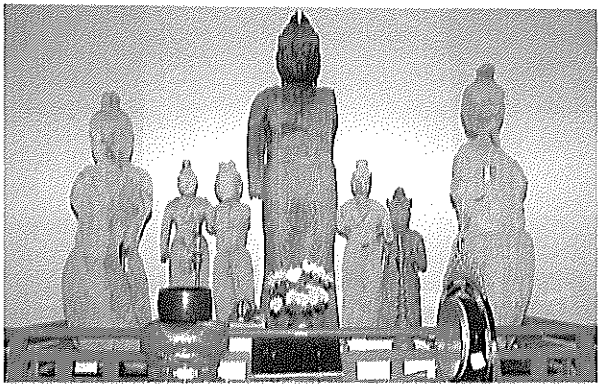
頭上に神をのせた観音さま

境内に建つ六角形の白いお堂。ここには古来、姫神権現としてまつられた平安期の十一面観音等の諸像と仁王像九体が安置されています。

平安時代、坂上田村麻呂は姫神山を霊山と定めました。前山の寺、玉東山筑波寺の十一面観音を姫神前立十一面観音としたのをはじめとし、山麓一帯は十一面観音の聖地といわれるほど多くの観音堂が建立されました。

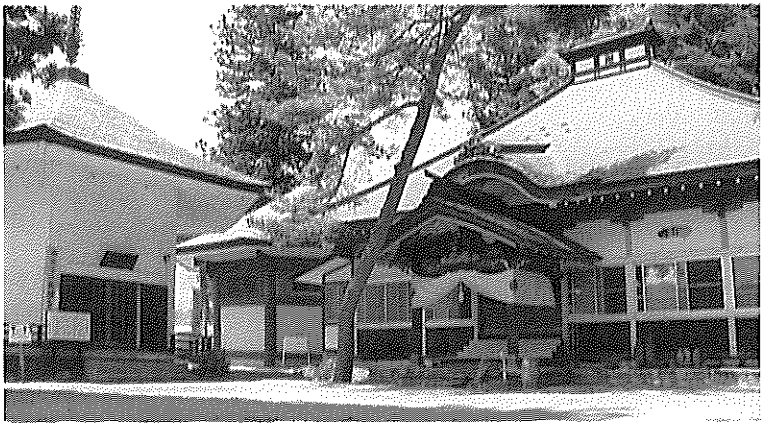
長い歴史のなかで信仰は変遷を繰り返し、やがて山伏が祭司となって神々の本地として仏像をまつる神仏混淆（こんこう）の信仰が定着しました。そして明治期、

●略図は226ページ参照



収蔵庫に安置される十一面観音と仁王像

廃仏毀釈により山麓の寺院は廃止。集められた諸仏は転々とし、姫神獄神社で間借り状態にあったのをうれい、住職が東薬寺に迎えました。



頭上に神面のある神仏像

十一面観音の諸像の中に「神仏像」があります。頭上面が仏面と異なるもので、神仏習合の成立期に、姫神山の山の神を頭上にいただいた像をまつったとみられ、注目されています。

盛岡市仁王にあった仏像

古仏のうち十一面観音と阿吽の仁王像の三体は、盛岡市仁王にあったといわれています。

盛岡に南部氏の居城が築かれ、仁王観音（仁王廃寺）の地が家臣団の屋敷町に割り振られるにおよび、藩主は国家安泰と武運長久を祈って尊像を姫神山に奉納し、玉山観音堂に安置したと伝えられています。

この十一面観音像の高さは二・六メートル。県内の古仏では成島の毘沙門天に次ぐ大像です。

現在、住職は、毎月、古仏の祈祷と坐禅会を行っています。知人から知人へといったかたちで、毎回二、三人の参詣者があるといいます。「私自身、未熟ですから、そういう法話に共感を覚えるのでしょうか。拝んだあと、各自のお供え物を一緒に頂くのが楽しみでもあるようです」という住職。檀家というよりも、首都圏や盛岡市から訪れるということです。

仏像　木造十一面観音立像、仁王像（全九体県文化財）

姫神山のふもとの啄木誕生の部屋がある寺

日照山（にっしょうざん） 常光寺（じょうこうじ） 曹洞宗

◆玉山村日戸字古屋敷七一
◆電話　〇一九一六八五一二五一〇
◆住職　第二七世　豊巻宗道

開山から再三の移転

盛岡市側から、国道四五五号を桜台団地の手前で分かれて北進すること約五・五キロ、バス停「玉山支所前」から東に入った姫神山の山すそに常光寺があります。

常光寺は、江戸時代末期の火災で記録の大半を失いましたが、次の沿革が伝えられています。

江戸時代前期（一六二四～三〇年）、報恩寺（盛岡市）六世・善室梵積大和尚によって開創。開山師は数年後に没して、布教は中座したようです。やがて五世のときに青森県野辺地に移り、のちに玉山日戸に移転。幕末期（一八六〇年）、一五世のときに日戸村野田の太屋から観音堂境内の現在地に移転しました。

啄木の父とその時代

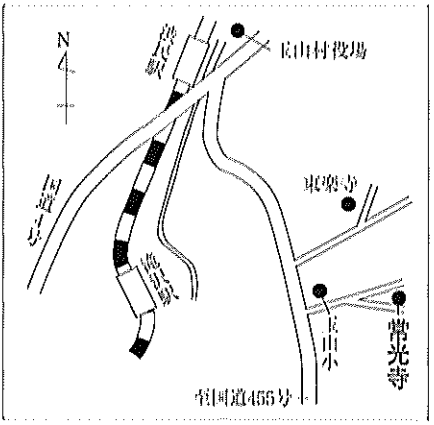
石川啄木の父・一禎は、明治四、五年ごろに、常光寺前の広内家で寺小屋を開き、明治八年、師僧・葛原対月の推挙によって常光寺一二世となりました。一〇年あまり住職を務めたのち宝徳寺（玉山村）に転住しますが、移る一年ほど前に啄木が誕生しました。

一禎の妻、すなわち啄木の母親は、対月の妹です。のちに石川一家が困窮したとき、よく家出した一禎が身を寄せたのは、師僧で義兄にあたる対月の寺、青森県野辺地にある常光寺でした。

一禎時代の常光寺の堂宇は、昭和四七年に再建されますが、啄木の誕生した部屋は復元されています。

また、大杉のわきには啄木の生涯を通じての友人・金田一京助の書による「石川啄木生誕の地」の大きな碑があります。

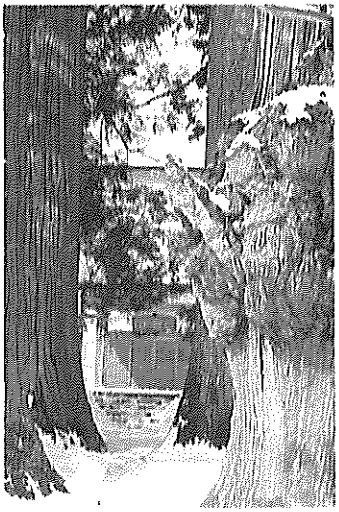
明治一〇年代、一禎の転住後、常光



寺は運営が困難となり、名僧で知られる本寺の報恩寺・七世・下村泰中がこれを中興。寺宝「米櫃」の箱書に泰中和尚が飯米金として八五円を送り常光寺の経営困難を援助し教化指導したと記され、一頃のころの苦境をうかがうことができます。

姫神山と十一面観音堂

常光寺の門前に杉木立があります。これは、かつて常光寺の上方、寺長根の地にあった観音堂の参道に植えられたといいます。観音堂は明治に廃堂となり、本尊の十一面観音像は常光寺に移されました。



幹に大きなコブがある山門代わりの大杉は、昔、観音堂の参道に植えられたという。

観音堂の縁起には、慈覚大師が東国教化のおりに日戸村に立ち寄って観音像を彫り、日戸十一面観音堂に安置。これを守るために常光寺を開いたという伝えがあります。

奈良時代以降、中央勢力は東北地方（蝦夷）の征伐平定を進め、同時に、人心の安定をはかるために寺院や神社をつくりました。坂上田村麻呂が志波城を設置（八〇二年）すると、鬼門（東北）に位置する姫神山を国家安全の守護山とし、多くの寺社を建立したとみられます。こうして、奈良から平安時代までの、とくに天台宗に多い十一面観音像が姫神山付近にまつられることとなったようです。

関連記事　啄木そのふるさと

一五世を父とし、啄木が幼少期を過ごしたお寺

万年山（まんねんざん） 寶徳寺（ほうとくじ） 曹洞宗

◆玉山村渋民字渋民二一一
◆電話 〇一九一六八二一一六一六
◆住職 第一八世 遊座芳蕭

一禎が眠る墓

国道四号に架かる船田橋の北側が、かつての宿場町、渋民です。橋から一・五キロほど北に啄木記念館があり、その南隣りに、石川啄木が幼少期を過ごした寶徳寺（宝徳寺）があります。

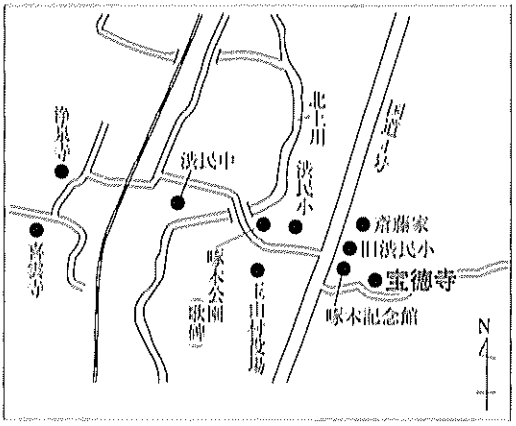
宝徳寺は、江戸時代前期（一六五八年）、報恩寺（盛岡市）九世・蘭翁嫩芝大和尚によって開創。開山年の万治から「万年山」、蘭翁の高徳知識から「宝徳寺」にしたとされます。

第一四世・遊座徳英の死は早く、突然でした。遺児が幼少で法灯を継ぐことができなかったため、常光寺（玉山村）から移ってきた啄木の父、石川・禎が一五世となりました。明治二〇年、啄木（はじめ）が満一歳のときです。

時を経て、石川一禎は宗費滞納の理由で罷免され、再び遊座家が後任となりました。一禎は没したのち宝徳寺に戻り、累代住職の墓に、そのお骨が納められています。

啄木の源泉

宝徳寺における啄木の幼少期は、両親、二人の姉、一人の妹とともに、何不自由ないものでした。秀峰・岩手山を望み、北上川の流れる地。万年山の春夏秋冬。ゆるぎない自然と、あざやかに変化する四季の彩と色と音が、啄木の感性を育んだといえましょう。



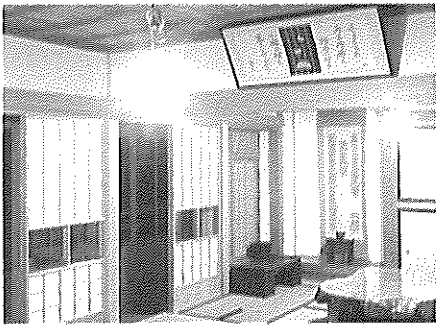
裏庭の池に咲く白い浮き草にちなみ中学時代には白萍（はくへい）を号し、境内の大樹の幽をたたく啄木鳥（きつつき）は、生涯のペンネーム「啄木」になりました。

境内には、樹齢三〇〇年余、高さ二七メートル以上のさわら（ヒバ）が左右対称にそびえ、遠方にこの寺のありかを示しています。啄木は、この老木

を、「ふるさとの寺の畔の／ひぼの木の／いただきに来て啼きし閑古鳥！」と詠みました。

一祖は、師僧であり義兄でもあった葛原対月らとともに、歌作にいそしみ、こうした環境のなかで、啄木は文学的資質を高めました。

渋民尋常小学校を終えた啄木は、盛岡の高等小学校を経て、盛岡中学校に進みますが、当時、寒村の寺の子としては異例のことでした。僧となって法灯を継ぐのであれば、あえて必要ではなかったからです。一祖は、世襲よりも啄木自身の力で人生を開くことに期待をかけたようです。



復元された「啄木の間」

発見された啄木時代の襖絵

宝徳寺の堂宇は、明治一〇年、一三世のときに焼失し、明治二三年、一祖の代に再建。それから約一一〇年後の平成一二年、啄木が育った建物は解体され、改築されました。その際、「啄木の部屋」はもとの位置に、古材を再生して復元されました。

解体のおりに、啄木の時代の襖絵が下貼りから発見されました。その調査に携わったメンバーが、宝徳寺「さわらの会」として活動を継続し、成果の発表や展示等を行っています。

四月一三日は「啄木忌」。毎年、この日は宝徳寺で法要が営まれます。

社会事業　渋民保育園（社会福祉法人）

関連記事　啄木そのふるさと

啄木 そのふるさと

父の修行、母との縁組
―大泉院・龍谷寺

石川啄木は、僧侶の子に生まれ、お寺で育ちました。

西根町出身の父・一禎は、大泉院（西根町）の葛原対月のもとに弟子入りし、その後、龍谷寺（盛岡市）に転住する師僧・対月に随行。やがて、一禎と、対月の妹・カツが結ばれることとなりました。

対月は漢学・歌道に通じた学僧で、一禎も、対月や立花長吉（宝徳寺総代）らとともに盛岡の文芸結社「脩文会」に所属し、歌稿「みだれ芦」を残しています。啄木は、こうした歌人に囲まれて文学的資質を高めました。

寺に生まれ育つ―常光寺・宝徳寺

啄木、石川一は、明治一九年二月二〇日、常光寺（玉山村）で誕生しました。姉二人と妹が一人、石川家唯一の男子でした。

啄木は一歳のとき宝徳寺（玉山村）に移りました。幼少年期の啄木は、大きな自然に抱かれ、鳥や虫や草木を渡る風の音、本魚や読経など宗教の音の中で成長し、九歳になった明治二八年、盛岡高等小学校に入り、三年後には県立盛岡中学校に入学します。しかし、やがて〝自ら奏でるべき音〟を模索して文学に傾倒し、学業への意欲を失い、中学五年の秋、中途で退学。文筆家をこころざして一歩を踏み出しました。

一家の大黒柱―新婚の家

一〇歳の啄木は、一度目の上京で処女詩集『あこがれ』を出版します。新進詩人として栄光を予にした直後、明治三八年六月、恋人の堀合節子と結婚。ところが、その少し前、父・一禎が宗費滞納によって寺を罷免されたため、盛岡での新婚家庭は両親・妹との同居になりました。

啄木は一家の生計を背負いつつ、詩壇に風雲を巻きおこす意気で文芸雑誌『小天地』を発行しますが、雑誌は売れず、試みは失敗におわりました。

（啄木新婚の家略図四ページ）

「日本一の代用教員」
―斉藤家・渋民小学校

盛岡での九ヵ月間の生活に見切りをつけ、啄木一家は、明治三九年三月に渋民に戻りました。住まいは、街道沿いの一農家、代々獣医を生業とする斎藤家です。啄木の収入では、五銭という家賃が滞り、のちには二階だけを借りました。

帰郷時から行っていた父の宝徳寺への復帰運動は挫折し、実家で出産した妻が長女・京子とともに帰宅する日、父・一禎は家計を案じて家出しました。

啄木は、故郷に戻って一ヵ月後の明治三九年四月から、月給八円で渋民小学校の代用教員となりました。

啄木は「日本一の代用教員ならむ」と自負し、子らに慕われ、家はしばしば夜学の場となりました。このころ執筆した「林中書」で、型どおりの教育を排して生徒一人ひとりの自主の精神と新しき思想を注入する、と主張しています。

一年後の四月、教育刷新のため高等科の生徒を指揮してストライキを決行。その結末は、免職でした。

明治四〇年五月四日の日記に、啄木はこう書いています。「午后一時、予は桐下駄の音高らかに、遂に家を出でつ。……啄木（斎藤家に）留まること一ヶ年二ヶ月なりき、と後の史家は書くならむ」。こうして一家は離散し、啄木の放浪が始まりました。そして、このあと啄木が故郷に帰ることはありませんでした。

ふるさと、その後

渋民公園に建つ啄木の歌碑。碑の背面には「大正一一年四月一三日無名青年の徒之を建つ」と刻まれています。

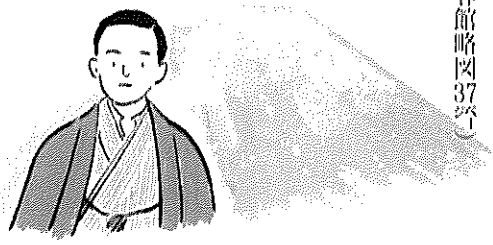
啄木の窮死から一〇年余、故郷に啄木を呼び戻そうと岩手県出身の在京の学生が動き出したとき、地元で、啄木の教え子たちが呼応しました。

玉岩を運ぶのは人力という時代、作業には村人二〇〇人が参加しました。

それから半世紀、昭和四五年に石川啄木記念館が開設されました。さらに、昭和六一年の改築にあわせて、新奥の細道（東北自然歩道）のひとつに、ゆかりの地をめぐる約一〇キロのコース「啄木を訪ねる道」が設けられました。

いま、日本の詩人のなかでも啄木ファンは圧倒的に多く、啄木を目当てに訪れる人々は、玉山村の観光客のほぼ半数を占めています。

平成一四年秋には、盛岡市の旧第九十銀行本館（明治四三年建造）に、「もりおか啄木・賢治青春館」が開設されました。（石川啄木記念館・碑・復元の斎藤家・渋民小学校略図228㌻、啄木・賢治青春館略図37㌻）



新本堂の正面を飾る阿吽の龍の彫り物

稲荷山（とうかさん） 喜雲寺（きうんじ） 曹洞宗

◆玉山村下田生出塚五四
◆電話 〇一九―六八―二一八八九
◆住職 第二二世 佐々木端瑛

●略図は234ページ参照

昔の下田城の地

渋民駅から約一・五キロ北進すると喜雲寺があります。啄木の歌碑がある渋民公園の側からは、鶴飼橋を渡り、線路の西の下田集落を抜けると真正面に喜雲寺の山門があります。小高い丘をなす喜雲寺付近は、かつて下田城があった場所です。

喜雲寺は、江戸時代前期（一六六一～七二年）、下田城主・下田弥三郎秀祐を開基に、報恩寺（盛岡市）一〇世・天山宝堯和尚を請して開山。下田（もと石亀）氏は南部氏の家臣で、三戸から同行した人です。

実は、それ以前にも寺がありました。南部氏の中興・信直公が、子どもの病死した地、北上川べりの鉢金森に一宇を建立。開闢（かいびゃく）は紫山廬道和尚といわれています。その後、水害などに遭い、改めての開山に際し、現在地に移転したといわれています。

防寒を考慮した新本堂

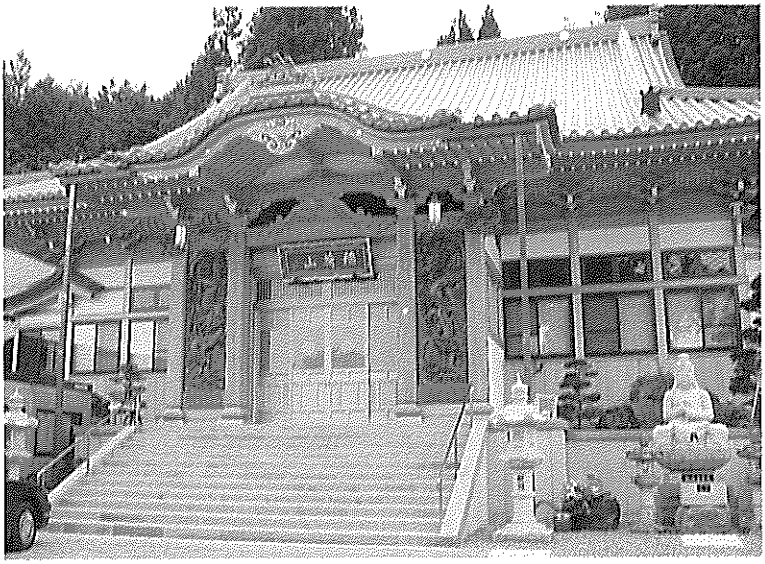
平成一五年五月、喜雲寺の本堂が竣工。一一世のときに建立した築一八〇年の本堂から、欅（けやき）とヒバ材を用いた新本堂になりました。

正面に立つと、高さ三メートル余の見事な阿吽（あうん）の龍の彫り物に圧倒されます。新しいシンボルについて住職は、「ようやく探した一枚板の欅材。いまのところは東西随一でしょう。この形は、違和感なく風除室を設置したいと工夫する中から出てきたものです」と話します。

本堂改築に先立ち、一〇年前に鐘楼門を建立しました。地元の石を用いた

新本堂の正面を飾る龍の彫り物

高い石垣。この構造は、かつてこの地に城があったことを考慮して決めたということです。



キリシタンにまつわる古文書

喜雲寺では、古文書『寺詰状之事』一〇枚を保存しています。襖の裏張りになっていたものを、昭和三年、庫裏改修時に発見しました。内容は「これらの者は当寺の門徒であり、ご法度のキリシタンではないことを証明する」というもので、江戸時代中期（一八二二年）、宗門御改御用所に出した証明書です。

古い伝えに、城内の農家がキリシタンとして訴えられ、一家が夜逃げしたという話があります。城内を含む川東の姫神山付近は金山として発掘され、キリシタンはよく金山に潜んだことを考えてみると、貴重な文書といえます。

もうひとつ、古い書物に、啄木の父・石川一禎の座右の書『正法眼蔵』があります。一禎はこの書を師僧・対月から与えられ、長く愛蔵していましたが、のちに同門だった喜雲寺の住職に記念に贈ったものです。これは現在、石川啄木記念館に収蔵されています。

余話　「喜雲寺焼」とは、陶芸歴三〇年という住職の「端窯」でつくる焼き物のこと。毎年、お盆の舟っこ流しを手伝った人に作品を分けている。玉山村・岩手町の陶芸クラブ顧問でもある住職は、希望者に窯を開放。これも布教活動のひとつといい、展示会で入賞する作品をつくりながら、あくまでも趣味だという。

社会事業　下田保育園（社会福祉法人）

関連記事　啄木そのふるさと

年間一〇〇回を数える住職の法話

慈雲山（じうんざん） 浄泉寺（じょうせんじ）

浄土真宗
本願寺派

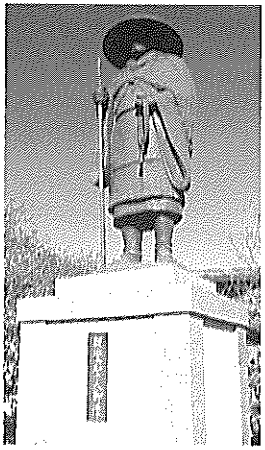
◆玉山村下田三九一
◆電話　〇一九二六八三一二二九
◆住職　第三代　山崎教真

説教所開設から二一〇年

北上川の西側、渋民駅から約一・五キロ北側にある浄泉寺。親鸞聖人の像がある境内は、車一〇〇台近くを収容する広さがあります。

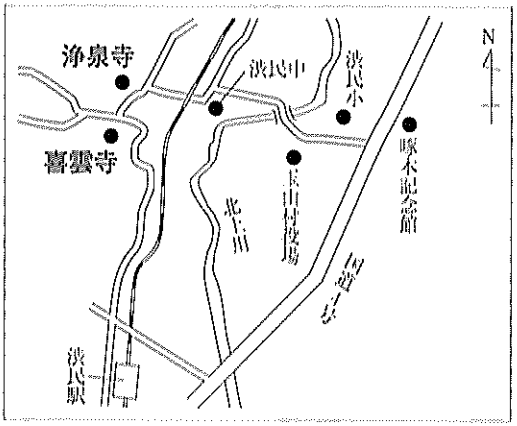
浄泉寺は、東京都港区元麻布にある淨福寺の寺中として、江戸時代前期（一六二八年）に開かれました。それから二七五年後の明治三六年、本山である京都の本願寺から、寺号譲受移転許可を得て、今に至っています。

淨福寺は、宗祖面授の六老僧の一人である了海上人ゆかりの寺院。その本堂は、京都に徳川家康が建立した東本願寺を再々移築したもので、初代アメリカ公使館となりました。また、福沢諭吉の墓所のある由緒ある寺です。



岩手県での浄泉寺の歴史は、明治一三年に創設された説教所（渋民村下田、竹田竹松家）に始まります。

当時の渋民には、近江商人系の駒井家に浄土真宗の教えが相続されている程度でしたが、やがて、熱心な信仰者が輩出され、幾多の困難を乗り越えて寺院を設立。昭和五年、駒井家をはじめ数十名の門信徒の寄付により、堂宇が建立されました。その後、平成六年の改修を経て、現在に至っています。



人生を考える場として

浄泉寺が東京都から岩手県に移転してから、住職は三代になります。現住

職は、盛岡市内で三〇年近く高校教諭をしていましたが、定年を待たずに退職。専任となった心境について、「大人社会はお金。子どもたちは直裁。いつでも欲望と自己中心的に生きている世の現状に対し、大河の一滴であっても、僧侶としてなすべきことがあると思った」と話していました。

現在、年間一〇〇回以上も法話を実施。さらに、浄土真宗の西本願寺布教使として、全国的にも活躍しています。講話を依頼されて、学校・病院・警察署・公民館・老人ホームなどにも出向いているということです。

「浄泉寺法座日程表」には、毎月、連続三日間ほどの開催日が記載されています。その方針は、檀家のみならず人生を考える人が自由に参加できるように、というもので、毎回の参詣者は一〇〇人前後。それだけの人が集まる背景として、本人の回心（えしん）によって浄土真宗に改宗した信徒が多いこと、また長年、住職が年に四～五回、子ども対象の「日曜学校」を開いてきた〝親しみ〟があるようです。

住職によると、「儀式もさることながら、教えの原点が大事。それは布教と法話に集約される」といい、心の荒廃が叫ばれるいま、仏の教えを人々に伝えるのが自身の務めといいます。

啄木のボランティアガイド

「駅からハイキング」として、JR好摩駅から渋民駅まで、望郷の詩人・石川啄木の生地を訪ねる約一〇キロのコースがあります。途中八ヵ所のポイントが設定されていますが、その三番目に、浄泉寺があります。啄木ゆかりの寺ではありませんが、住職が「啄木の史跡めぐり」のボランティア案内人になっているからです。

渋民に生まれ育った住職にとって、啄木は小学校の先輩。できることで地域に役立つことがあればと案内役を買って出たということです。

関連記事　啄木そのふるさと

効験あらたかな大黒福寿尊天を奉安

一乗山（いちじょうざん） 妙光寺（みょうこうじ） 日蓮宗

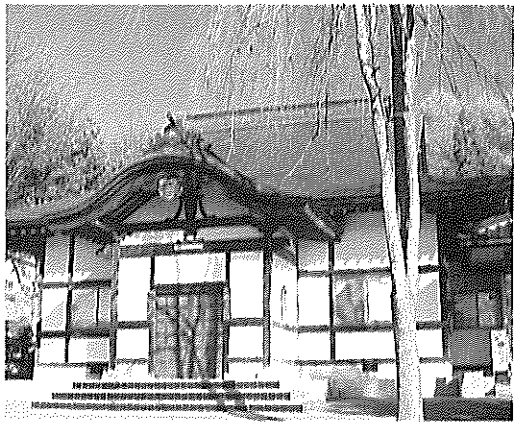
◆玉山村字田字武道五三二一
◆電話　〇一九一六八三一一四〇一
◆住職　第四世　新田教順

一乗妙法蓮華経にちなむ山寺号

玉山村の啄木記念館から国道四号を一・四キロほど北進し、バス停「武道」付近、案内板に従って東へ三〇〇メートルほど行くと妙光寺があります。

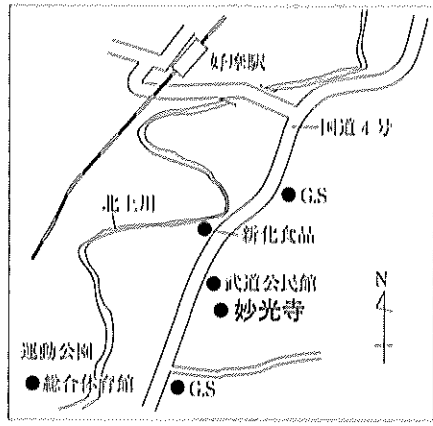
妙光寺は新しい寺院で、第二次世界大戦後、国中が復興に全力投球をしていた昭和二二年、寺号公称（開山）をしました。開基および開山は、遠光寺（盛岡市）二世・上原教秀師です。

教秀師は大正一二年、師僧とともに千葉県から岩手に来て、布教に東奔西走。人々の厚信を得て遠光寺を確立したほか、妙光寺を開き、さらに青森県三戸町に法華寺を開山しました。



一乗妙法蓮華経にちなんだ山号・寺号を冠し、宗祖・日蓮大聖人が図顕した大曼陀羅を本尊とし、当初のころ浄泉寺の建物を移築して本堂を設置しました。それから三十数年後、昭和五六年に本堂を改築しています。

参道の中ほどの児を抱いた慈母観音像は、すべての物故者の霊をなぐさめるために安置されました。また、前住職は日蓮宗荒行第参行成満し、大黒福寿尊天を勧請し、これを奉安。商売繁盛・交通安全・安産などの効験を求める人たちがよく参詣に訪れます。



岩手山と姫神山を望む高所に建つ

天峰山（てんぽうざん） 桂松院（けいしょういん） 高野山真言宗

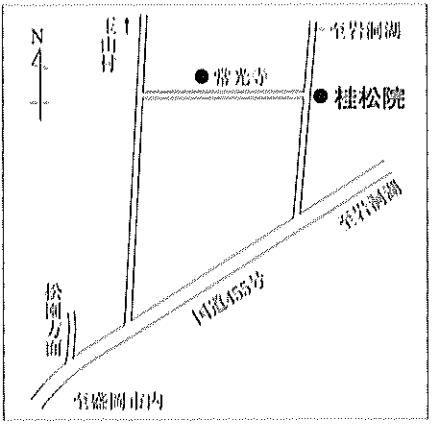
◆玉山村日戸字新田二四
◆電話 〇一九―六八五―二三六〇
◆住職 亀井春永

国道四五五号の松園への分岐から約一・二キロ、案内板を見て北の山手を登ること約一・五キロ、標高約八五〇メートルの地に桂松院があります。

眼下に日戸地区、上方には長く裾野をひく岩手山、振り向けば間近に姫神山。二つの山は夫婦という民話を絵にしたような眺望の中に立地しています。

桂松院は、昭和五五年、亀井公良によって開かれました。初代で先代の庵主である公良は、昭和六年、岩手県江刺市で、父方が神主、母方が僧侶の家系に生を受けました。二〇代はじめ夢枕に立った観音さまのお告げにより修行を決意し、昭和五一年に高野山金剛峰寺で得度しました。

いけばな桂流の創始につづき、桂松院観音堂を建立。さらに胸中に大志を抱きながら、平成六年に没しました。



桂松院には、供養と祈願を込めた幾多の観音像、地蔵像が安置されています。総数およそ一八〇体。野分吹く一月、それらの仏像は、参集した信徒により冬の衣装をまとい、五月には、夏向きに衣替えをします。

桂松院では毎月定例で、八日に薬師祭、一七日に観音祭、二二日に大師祭を実施。毎月第二、第三火曜日にはご相談日（要電話予約）を設けています。

開創五〇〇年。地域の発展とともに寺院を拡充

巌鷲山（がんじゅざん） 東林寺（とうりんじ） 曹洞宗

◆藤沢市大釜字外舘二
◆電話　〇二九―六八七―二七三七
◆住職　第三二世　竹花國夫

大釜氏の城館の地に移転

国道四六号からJR田沢湖線大釜駅に向かう途中に、東林寺があります。東林寺の広大な敷地の中には、四〇年前に開設した保育所があり、さらに幼稚園も設置され、そのためか、近辺一帯が明るく、にぎやかな空気が感じられます。

東林寺は、いまから五〇〇年ほど前、東顕寺二世・南翁東橘大和尚によって開山。記録は残っていませんが、開山和尚の没年（一五〇五年）から、戦国時代の開山と考えられます。

安土桃山時代、いまの東林寺付近に大釜氏の城館があり、大釜氏により、当初の太田猪去の地から現在地に移転したと伝えられています。移転年代には諸説があって、戦国時代後期から江戸時代はじめ（一五五五～一六一五年）と幅があります。

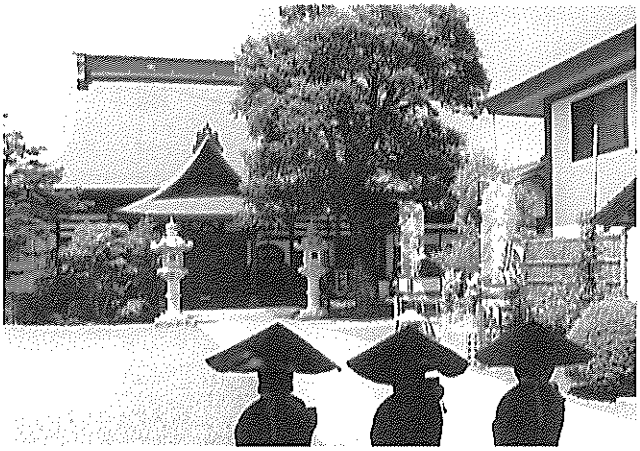
発掘調査により、現在地には中世の大釜館だけでなく、仏教の儀式（地鎮祭）に用いた近世の墨書石（三×四センチ）が発見され、さらに古い縄文時代の土器や古墳跡も出るなど、複合する遺跡であることが分かりました。

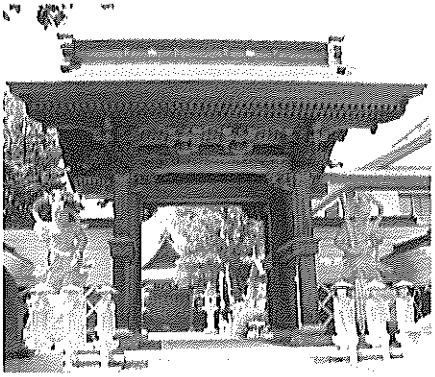
地域の発展、お寺の飛躍

宅地開発が進み、めざましく変貌する大釜駅周辺の中で、長くめぐらされた東林寺の塀は、躍進する地域を代表しているようです。最近、庫裏を改装して位牌堂にしましたが、車椅子でも不自由しないようにエレベーターが設置されました。

人口全国一の村として面目躍如の滝沢村と歩調を合わせるように、ここ数十年、東林寺の檀家は飛躍的に増えています。県職員だった先代は、当時、まだ若かった現住職に、寺の経営を任せました。

若くて元気があったし、大寺院ではなかったので、むしろ自由にやれたという住職。まず、昭和二七年に保育園を開設しました。異色なのは、若者にやる気をもたせたいと、「滝沢村陸協」の名で自ら監督となり、マラソン選手





を育成しました。十数年の取り組みで選手は実力をつけ、昭和四〇年代の常勝チームだった谷村新興を抜いて大会で優勝。当時の新聞は、「平凡な農村に若いランナーが続々と育っているのは篤志家がいるためだ。……選手数人を同居させ職を与えて走らせている」と紹介しています。住職は、「選手を寺に寝泊りさせて布施を注ぎ込み、そのかわり墓掃除などもさせた」といいます。若い選手たちが園児の指導を手伝ったことが父母の間で評判になり、ひいては檀家の増加につながりました。

高校で走っても一番手三番手でスカウトの声がかからない若者を鍛え、一流の選手に育てたことから、その後、青少年の健全育成にかかわることになりました。そしていま、刑を終えて出所した人を一時保護する更生保護施設、若手保護院の理事長を務めています。

余録　いま、多くの僧侶が保護司として過ちを犯した人の立ち直りを支援している。古来、過失で人を殺したときなど寺で修行すると免罪される「寺入り」があった。出獄者の社会復帰を助ける近代の更生保護事業も寺院の総意で着手され、明治の末、源勝寺で初会合がもたれている。この事業を継承し、第二次世界大戦後に国の責任が明確になった。

社会事業　大釜保育園（財団法人）、大釜幼稚園（学校法人）

綾織越前の愛馬をまつる馬頭観世音

巌鷲山（がんじゅざん） 清雲院（せいうんいん） 曹洞宗

◆滝沢村篠本字中村五九
◆電話 〇一九一六八四―五五八
◆住職 第三六世 髙田裕功

天井を埋める二〇〇枚の絵

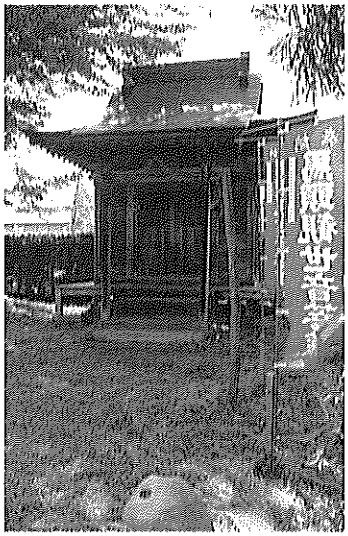
滝沢村役場から国道四六号方向に向かい、約二キロの地点から山手に入ると、清雲院があります。至近の地にある篠本小学校は、明治六年、清雲院を転用して開校されました。

清雲院に縁起の記録はないものの、次のように伝えられています。

当地に錫を止めた宝岩招泉和尚が教化に尽力したおり、南部藩士・松岡作左衛門が招泉の高徳を慕って帰依しました。そして、みずから私財を投じ、盛岡の大工棟梁・戸沢氏衛秀貞に一宇を建立させ、招泉の師、長泉寺（盛岡市上飯岡）六世・岩翁文雲和尚を請して開山しました。江戸時代の少し前（一五九七年）のことです。

この開山年に関して、明治三一年、墓地の隅の青く苔むした碑に「貴山宝公信士貞享元甲子年（一六八四）九月二一日松岡作左衛門開基」とあるのが見つかり、作左衛門が死没する八七年前の開山は疑問、という見方も出されています。

藩政時代の『南部藩事務日記』に清雲院の記述があります。天明年間、二度にわたり（一七八四、一七八六年）清雲院の本堂・衆寮・庫裏が数十年たったので建立したい由、用材に関して願書が出



観音堂の前には綾織越前が愛馬をつないだという穴あき石がある

されたというものです。ここから、現本堂の建立は二〇余年前から準備され、約一八〇年前の文化・文政時代に建てられたとみられます。

清雲院の本堂は、大本山・永平寺（福井県）の傘松閣の格天井と同じように二〇〇の桝形が天井を埋め、一枚一枚に異なる花が描かれています。住職によれば、おそらく棟梁の采配で描かれたもの、ということです。

馬の守護神・蒼前さま

清雲院と、裏手にある田村神社の間を越前堰が流れています。越前堰というのは、この一帯で米作りを可能にした県内最古の用水路です。その顕彰碑とゆかりの馬頭観世音が清雲院の境内にあります。

この馬頭観世音は、明治維新前まで綾織蒼前と呼ばれていました。綾織とは、越前堰を築造した綾織越前広信。蒼前さまは、馬の守護神です。その昔、各村に蒼前社があって、馬にかかわる各種行事が伝えられました。中でも有名なのが、滝沢村のチャグチャグ馬コ（国文化財）です。

旧名が示すように、この馬頭観世音は綾織越前の愛馬をまつったものです。明治維新のころ、本尊は駒木家の内神として崇拝されていましたが、のちに篠木の多吉どの（屋号）の所有となり、関係者の協議により、昭和七年、清雲院に移されました。

余録　清雲院に近い田村神社に、滝沢村一の老木、樹齢一〇〇〇年以上の杉と、樹齢五〇〇年というカツラがある（二本とも村天然記念物）。杉の名は、幹が直立する、す（直）き（木）、または、すくすくと立つ木からきたといわれ、葉は線香の原料となる。カツラは、香出（カズ）からきたという説があり、その葉から抹香が作られる。

関連記事　米づくりの水をめぐって

チャグチャグ馬コと南部曲がり家

――伝統のある良馬産出地――

馬とともに神社参拝

チャグチャグ馬コ（国文化財）は、毎年六月第二土曜日、着飾った馬たちが滝沢村の駒形神社（旧名鬼越の蒼前社）から盛岡八幡宮までの一五キロを行進する伝統の行事です。むかし、盛岡藩主が江戸参勤するときの軍装小荷駄の馬装にならって飾りつけた約一〇〇頭の馬が、小鈴をチャグチャグと鳴らしながら初夏の道を進んでいきます。

この行事は江戸初期に始まったとみられ、その由来について、二、三の伝説があります。

ひとつは、三戸から引いてきた駒がこの地で急に息絶えたというもの。ほかに、端午の節句に田の代かきをしていた馬が急に駆け出し、この地で立往生したため小祠を建てて蒼前の神に祀り、旧五月五日には一日仕事を休んで、近郷の人たちが馬とともに参拝することになった、というものです。

（盛岡八幡宮略図37ページ）

古来からの良馬産出の地

この地方の馬産は古く、奈良・平安のころには良馬産出の地として、その名が響いていました。中央勢力が東北に進出してきた背景のひとつに、馬が挙げられています。

南部馬は体格がよくて力があり、性格もよく育てやすいところから、多くの名馬が出ました。古くは陸奥の豪勇・悪路王が坂上田村麻呂に贈った阿久里黒、その直系といわれる安倍貞任の愛馬・沖黒、藤原秀衡が源義経に贈った太夫黒、藤原泰衡の愛馬・高館黒、宇治川の合戦で先陣をきった生唐、摺墨などが文献に出ています。

時代がおりて明治になると、明治天皇の御料馬・金華山号が出ています。

藩政のころ、藩主の南部氏は一一牧（牧地）を整備し、馬産に力を注ぎました。チャグチャグ馬コの駒形神社付近にも放牧地があり、日常生活が馬とともにあった地域です。

明治時代、玉山村に外山牧場が開かれると、外山牧場は宮内省に買い上げられ、それから約三〇年、御料牧場として馬を飼育しました。

古代から昭和二、三〇年代に至るまで、馬は軍用・乗馬・運搬・農耕などに欠かせないものでした。それだけに、人々の馬に対する敬慕は深く、馬の神を祀ったほか、代々行ってきた各種の馬の安全祈願が伝えられています。

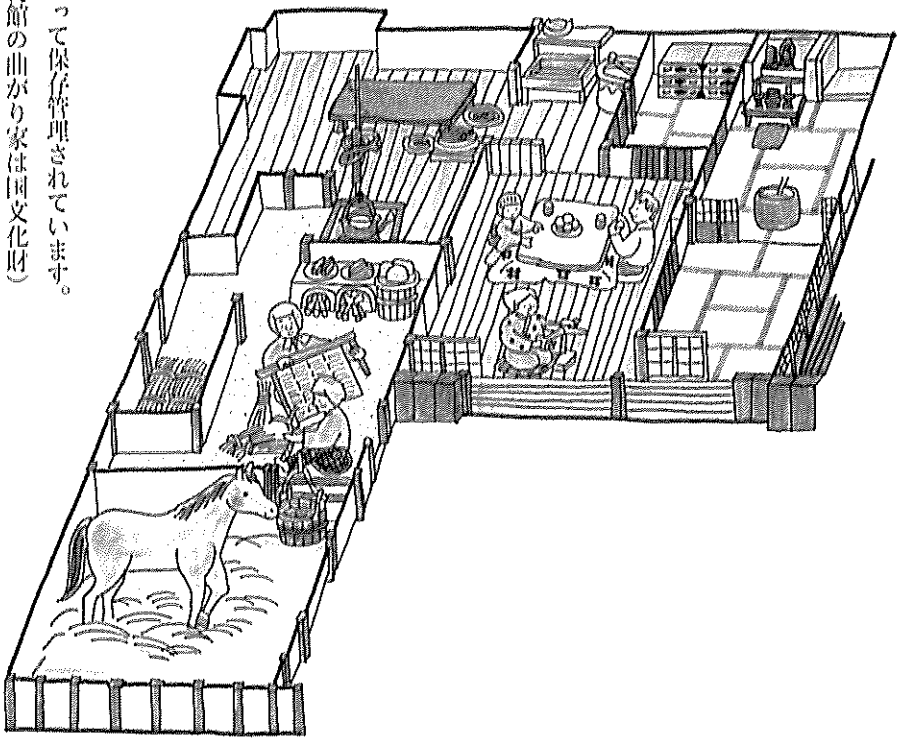
人馬が同じ屋根の下に

馬産地・岩手を語るものに、昭和一六年に制作された映画『馬』があります。大ヒットして多くの賞に輝いたこの映画は、南部曲がり家で育てた子馬との離別を軸に、人と馬との愛情を描いたものです。その撮影地は、盛岡市・小岩井農場・外山牧場でした。

映画にも出てくる「南部曲がり家」は、旧南部藩領にみられる独特な形の民家です。とくに盛岡市周辺と遠野に多く建てられ、寒さと積雪という自然条件のもとで、人と馬がともに住み、馬の世話がしやすいようにかぎ形の構造になっています。

第二次世界大戦後、農家は機械化とともに馬の飼育をしなくなり、住居としての南部曲がり家はしだいに姿を消していきました。現在は、歴史的文化財として、岩手県立博物館をはじめ、自治体によって保存管理されています。

（県立博物館の曲がり家は国文化財）



酒造業・高嶋屋の寄進により諸堂を建立

浄居山（じょうこざん） 廣養寺（こうようじ） 曹洞宗

◆雫石町源大堂五四
◆電話 〇一九―六九―二三〇三
◆住職 第一九世 平井正道

真言宗の庵から曹洞宗へ

雫石の街は、駅付近の低い地と小高い場所にまたがっています。段の上方に二寺が並び建ち、両側にある廣養寺（広養寺）は、一般に「上寺さん」ととおっています。

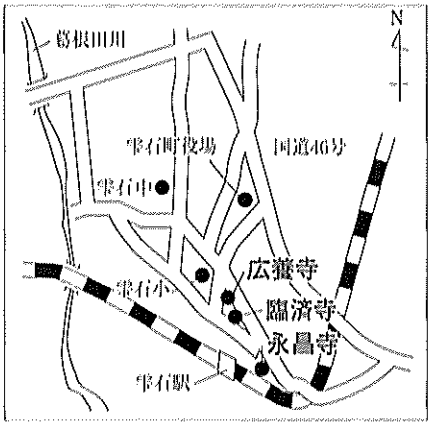
古く、南朝・北朝が対立して争乱のあったころ（一五三二～五五年）、広養寺の地に真言僧が結んだ草庵があったと伝えられます。その庵がすたれ、織田信長の天下統一のころ（一五七三～九一年）、報恩寺五世・鳳庵存竜和尚を勧請開山し、二世・蔵翁広鰲和尚により、浄居山興陽寺が開かれました。

五世のときに火災に遭遇しますが、寛文六年（一六六六）、高嶋屋市左衛門（開基）の寄進により、堂宇を建立。市左衛門は近江国（滋賀県）から当地にきて酒造業を営んだ人物で、その初代から同家四代までの間に、広養寺の諸堂と設備が整備されました。

高嶋屋四代・広徳のとき、貧民救済の事業として禅堂を建立（一七四八年）し、現寺号に改号しました。開基と広徳の位牌は並んで安置されています。

街中にある広大な境内

広養寺は三一〇〇余坪の境内地を有し、街中とは思えない森閑とした雰囲気をたたえています。

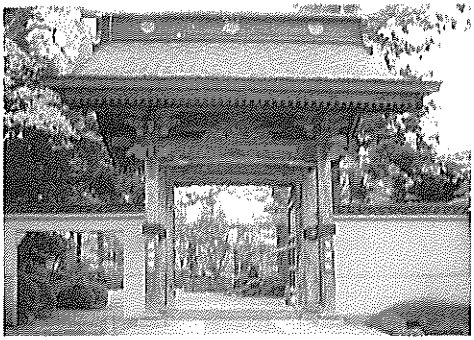


かつて「広養寺の晩鐘」は雫石八景に数えられ、名勝の一つとなっていました。梵鐘は先の大戦で供出して現存しませんが、大檀那の高嶋屋と米沢平兵衛の両人が寄進した大梵鐘（一七三四年鋳造）だったということです。

いま境内には、県内唯一とされる日本海系中門造りの曲がり家があります。昭和四五年、滝藤家（町内御明神）の持ち家を移築したもので、「知新館」と名付け、雫石郷の生活史料を保管し

ています。

もうひとつ、幕末から明治への転換期、戊辰戦争（一八六八年）で戦死した福田栄之助の墓があります。この人は、官軍の長崎振遠隊斥候長として秋田から仙岩峠を越えて橋場に入り、その地で小休止中に猟師に撃たれて没しました。その当時、明治政府は、従軍し殉国した戦没者の墳墓を官費で修理することを決め、広養寺に遺骸が埋葬されていたので、その指定を受けました。



その昔、境内には多くの池があり、たくさんの田ツブが棲んでいました。そのツブにまつわる伝説があります。

お寺では、田ツブを大事にし、池さらいをしたあとも一つ一つ拾って、池に放していました。不運にも大火に見舞われ、ご本尊も焼失したと悲嘆していたところ、田ツブがご本尊に隙間なく吸い付いて火を防ぎ、焼失を免れたということです。

なお、木立の繁る広い境内をもつ広養寺は、昭和二六年の大火のときには焼失を免れています。

余録　戦国時代、地方豪族は学問を修した禅僧を師匠にするためにお寺を開いた。江戸時代、寺請制度により檀家が定まると寺は安定し、僧侶は江戸や京都から書物を購入して読書もできたので、寺を中心に庶民に文教が浸透した。また仏壇を通じて正月と盆には祖先に感謝する暮らしが定着していった。

明治の幕開けに官軍本陣一行が宿泊

恵照山（えしょうざん） 臨済寺（りんざいじ）

臨済宗妙心寺派

◆雫石町下町三九
◆電話 〇一九―六九―二二五
◆住職 第二二世 目時大堂

昔人の納涼地

雫石駅の前方の小高い場所に、本立に囲まれた臨済寺があります。臨済寺の両側に寺があることから、「中寺さん」と呼ばれています。

むかし、雫石八景のなかに「恵照山の納涼」がありました。いまも、本堂わきの林の中に、子どもの遊具と四阿（あずまや）があり、鳥のように駅方向を見下ろしながら休んでいると、ここで涼んだ人々の風流が伝わってくるようです。

臨済寺の由緒について、某家に次のような記録があります。江戸時代前期（一六五八年）、隣の広養寺住僧・丹道和尚が檀家とのいざこざから、本寺の報恩寺（盛岡市）から勘当を受けました。それが原因で広養寺の檀家が分離し、東禅寺から桃谷和尚を迎えて中興開山し、独立しました。

なお、それとは別に、古くは雫石の地に天台宗の寺があったが、滴石城（戸沢氏）の敗亡とともにすたれ、残った家臣が寺の再興をはかったという伝えもあります。

汲泉が描いた本堂の龍

臨済寺は過去に二度、江戸時代中期（一七二二年）と昭和二六年に火災に遭い、堂宇をはじめ多くの仏像や文書を焼失しました。

●略図は24ページ参照

汲泉いちばんの大作という天井の絵

いまのご本尊・釈迦牟尼仏は、盛岡の旧高等農林学校の近くにあった雲樹院の本尊だったものです。殿鐘は江戸時代中期（一七六一年）、盛岡の鈴木忠兵エ家久の作で、上野村作右エ門・御明神村喜左エ門が寄進。また江戸時代後期の画工・上野氏作の涅槃（ねはん）像は、石山重左エ門義方・重次父子の寄進に

よるものです。

ほかに、雫石七観音のひとつとして信仰をあつめた十一面観音があります。これは、もと、中世の戸沢氏居城・滴石城の堀の内にあったので内堀観音ともいわれ、明治三年、朝命により臨済寺に移されました。

臨済寺は、火災後、昭和三〇年に再建。このとき、中井汲泉画伯によって、本堂の天井に大きな龍が描かれました。これは氏の作品の中で、いちばんの大作といわれています。

中井汲泉は、雪の美しさに憧れて昭和四年に来盛し、三一年に京都に帰るまで、学校で教鞭をとりながら日本画をはじめ染色、陶芸など多彩に活動しました。法泉寺（盛岡市）にある汲泉の画碑は、知人や教え子らが建立したものですが、先代住職もそのメンバーで、汲泉と交流のあった一人です。

出羽への道と秋田戦争

時代が明治に代わるとき（一八六八年）、臨済寺に奥羽鎮撫総督九条道孝の本陣が置かれ、火災前には一行が宿泊した「御成り座敷」がありました。

古来、出羽への交通の要衝だった雫石は、戊辰戦争、南部藩でいう秋田戦争の際、戦略の地となりました。

幕末、徳川慶喜が将軍職を返上すると、これをめぐって国内は混乱。奥羽二六藩は同盟を結んで官軍（薩摩藩・長州藩）に対抗しますが、中途で秋田佐竹藩が脱退したため、盛岡軍は秋田藩を攻撃しました。一部は雫石から生保内に入り、形勢が逆転すると、今度は秋田から官軍が入ってきました。東北各地を転戦した九条道孝は、東京に凱旋。以降、対抗勢力は賊軍の汚名に苦しめられました。九条は公卿の家柄で、道孝はのちに貴族院議員を務め、娘の節子は大正天皇に嫁しています。

寒中、阿弥陀如来に奉納される裸参り

石水山（せきすいざん） 永昌寺（えいしょうじ） 曹洞宗

◆雫石町下町二三九
◆電話 〇二九―六九―二―三三四
◆住職 第一八世 藤本徳文

神仏かけもちの参拝

雫石駅に近い、街中の一本の道路に沿って三つの寺が並んでいます。そのため上寺、中寺、下寺と通称で呼ばれますが、東側にあるのが、「下寺さん」こと永昌寺です。

永昌寺は、近くにある広巌寺の三世・裏光呑鏡和尚（一六四二年没）により開創されました。伝えによれば、呑鏡和尚が裕福な檀家六〇戸余りを引き連れ、隠居寺として開いたといわれます。

永昌寺には、町のイベントになっている裸参りが伝わっています。むかし酒造に携わる若者たちが、元気にまかせて三社座神社と阿弥陀如来と、神仏両方に奉納したことに始まります。

旧来、阿弥陀如来の祭礼日（旧暦一二月一四日）を恒例としていましたが、現在は、一月第三日曜日に実施。町の青年団、婦人会、民生委員の共同で取り組まれ、いちばん寒い季節に、例年、約二〇人の青年が参加します。

住職は「保育園の卒園生も多く、男たるもの三年はやらないと、とも言われていますが、中には七年という人もいますよ」と目を細めます。なお、現在奉納する阿弥陀像は、火災の見舞いとして、久昌寺（盛岡市）から寄進されたというものです。

●略図は244ページ参照

七ツ森から遷座した地蔵さま

永昌寺の本堂の後方に、保育園があることから、道路に面した境内の間口は広くてオープン。その境内に建つ地蔵堂には、子どもにゆかりのある生森地蔵尊がまつられ、次の由緒が伝わっています。

三姉妹の一体をまつる地蔵堂

第五五代文徳天皇の代（八五一～五九年）、全国に疱瘡が流行し、多数の死者が出て難渋しました。そのとき、皇子安産祈願の布令が出され、各地に子安地蔵がまつられますが、その際、同じ松の木から姉妹地蔵三体が彫られました。大姉が石島谷町の松林寺の門前地蔵尊。中姉が沢内村の貝沢地蔵尊。三番目が、この生森地蔵です。

生森地蔵は、雫石町の七ツ森のひとつ、生森山にありましたが、懐妊した女性が山に登ってお参りするのは難儀であると、水昌寺がこれを勧請し、明治三年に遷座しました。

木造の地蔵堂も地蔵さまも、昭和二六年の火災で焼失。昭和四三年、コンクリートのお堂が再建され、二代目の地蔵さまは石像となりました。現在、毎年二回、六月と一二月の二三日に祭礼を行い、女人安産、五穀豊穣、家内安泰、交通安全などを祈願しています。

未曾有の火災で二寺が類焼

昭和二六年五月一三日、雫石町全戸数の三分の一を灰じんにするという有史以来の大火災が発生しました。水昌寺を含め、全焼一二六戸、被災者は一千名におよびました。その日は釈迦降誕の日にあたり（旧暦四月八日）、農家の休養日だったため、盛岡の大名行列見物などで留守が多く、消防団も、消防演習のため安庭に行っていました。

数日前から晴天が続いたうえに、当日は風速一〇メートル。駅前の製材所工場から出た火はまたたく間に下町まで拡大し、盛岡から到着した消防車は一本道の炎上地に入ることができず、水昌寺付近で防御したといいます。

火は、館町（たてまち）といわれた下町の水昌寺から臨済寺までを焼き、すぐ西側の広済寺の手前で収まりました。当時、ここにいなかったという住職は、「不幸中の幸いは何よりも死者が出なかったこと。その後に道幅が広がったことでしょうか」と話します。

社会事業　雫石保育園（社会福祉法人）

関連記事　お寺のまつり・裸まいり

地区民により願教寺の脇寺を移転建立

法林山（ほうりんざん） 妙誓寺（みょうせいじ）

浄土真宗本願寺派

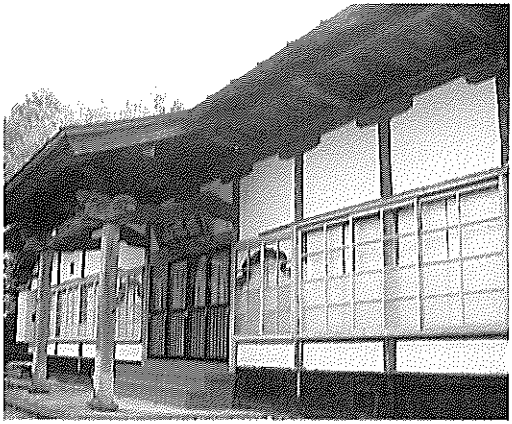
◆雫石町安庭七四
◆電話 〇一九―六九―二二四二
◆住職者 林 栄美子（坊守）

境内に建つ戦没者慰霊塔

盛岡横手線の安庭橋から少し西側、御所湖寄りに妙誓寺があります。

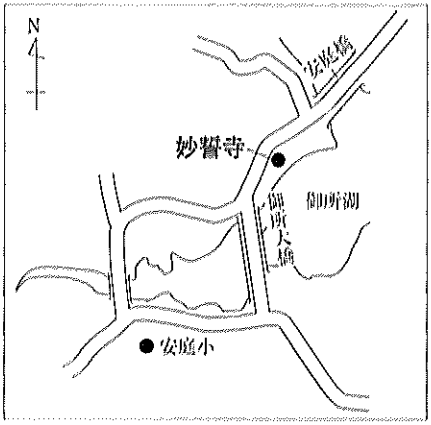
妙誓寺は、伝えによれば、江戸時代前期（一六五二～五四年）、釈教法師によって開かれました。願教寺（盛岡市）の脇寺として建立されますが、明治維新に独立。しかし、寺の維持管理が苦しかったこと、また、御所地区の強い希望もあって昭和二九年に現在地に移転。六〇年その任を務めた前住職は平成一三年、九五歳で没しました。

堂宇は、江戸時代後期（一八四五年）八世の代に、南部霊承院殿（南部家の姫）より創立拝領したものを、そのまま再建しています。



本尊は、江戸時代前期、康雲の作という阿弥陀如来です。ほかに、見真大師・聖如聖人・聖徳太子らを描いた古軸、古い唐獅子像が伝わっています。

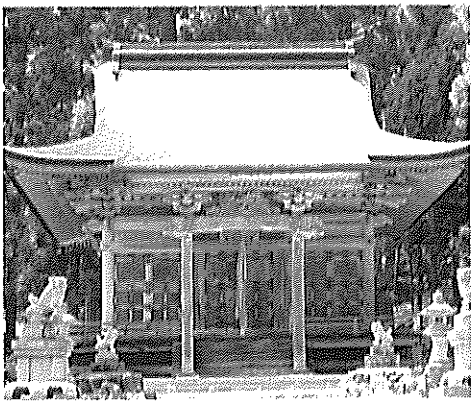
境内には、昭和三二年に完成をみた、元県知事国分謙吉の筆による大きな戦没者慰霊塔（高さ七・三メートル）があります。米沢春治（元海軍大尉）、川崎勝治（元海軍大尉）、広瀬留次郎（元陸軍大尉）が発起人となり、町長はじめ、町民の募金と労力奉仕によって建てられたもので、雫石町の戦病没者五六〇余の英霊をまつっています。



雫石七観音、岩手郡三所の馬神のひとつ

上和野馬頭観世音（かみわのばとうかんぜおん）

◆雫石町大字上野字下沢田一〇五
◆電話　〇一九一六九二一三〇一〇
◆管理者　岩持静麻



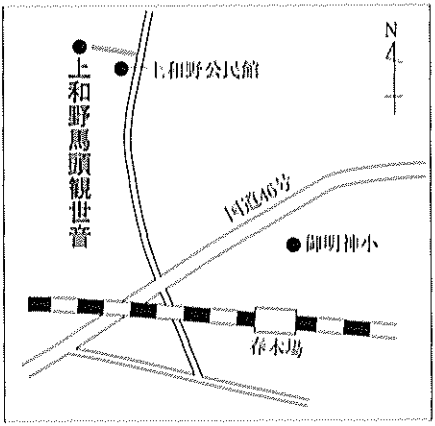
目をうばうみごとな彫刻のお堂

江戸時代前期、将軍家ならびに各藩の御馬買衆は、仙岩峠を越えて秋田から岩手に来ました。玄関口にある雫石も名馬産出の地。人々の馬神信仰はあつく、馬の霊をなぐさめる馬頭観世音の碑を建て、仏像の馬頭観世音を安置して崇仰しました。五七〇余坪の敷地を有する御明神上和野の観音さまもそのひとつ。渋民村の芋田、滝沢村の蒼前社とともに岩手郡三所の馬神として広く信仰されました。

明治維新のころまで、雫石の風習に、四月一七日の早朝から七ヵ所を回る「七観音詣」がありましたが、その一つでもあります。なお、七観音は、ほかに内堀観音（臨済寺）、下久保の福崎観音、春木場の新里観音、御所桝沢の川井観音、下御所の馬頭観音、西山西根八丁野観音となっています。

この馬頭観世音は明治三年、いったん魔堂となりますが一四年に再興。大正はじめに再建された堂宇は総欅（けやき）で、正面を飾る彫り物は、東北の左甚五郎と讃えられた円満（まんまる）造こと高橋市蔵（秋田県中仙町）の作です。奇行の人で名人肌。たいそう唄好きで、秋田県の有名な「ドンパン節」は「円満造甚句」が元唄といわれています。

馬頭観世音は、九月一七日が縁日。町内の曹洞宗寺院（広養寺、永昌寺）がお勧めします。



二〇〇年前、三度目の現在地に堂宇を建立

松尾山（まつおざん）鷲連寺（じゅれんじ）

曹洞宗

◆松尾村松尾二〇―二三
◆電話　〇二九五―七四―三〇二八
◆住職　第一七世　蔦　行彦

松尾村唯一の寺院

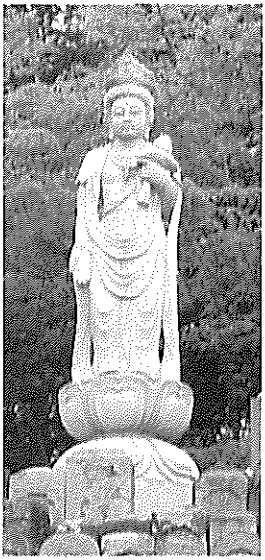
松尾村唯一のお寺、鷲連寺は、並行して走る国道二八二号と線路の西側、役場付近と松尾八幡平駅のほぼ中間に位置しています。

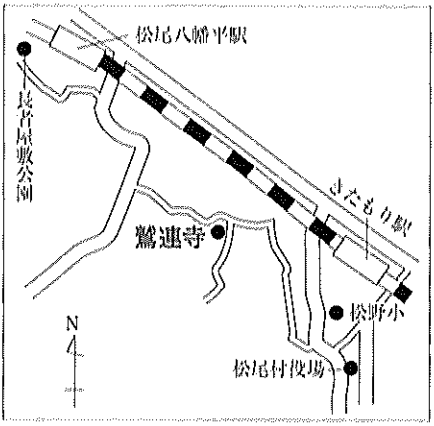
鷲連寺は、当初、北館跡に開創されたといわれます（北氏関連・西根町聖福寺）。略記と口碑によれば、当時、一帯に布教していた飯一庵（おいちあん）があり、そこに報恩寺（盛岡市）七世・慶室恕悦和尚が錫を止めたおりに、庵主の寄進を得て、曹洞宗に改宗して開山しました（一六三四年）。

その後の歩みではっきりするのは、寺久保の地に改めて建立したこと（一七一五年）。事情は不明ですが、その一〇余年後（一七二七年）に、伽藍を再建す、とあります。

それからさらに一〇数年後（一七六二年）、谷地中の赤羽根万九郎が、新たに境内地を寄贈（子孫吉川小次郎氏、屋号赤羽根）。現在地であるその地に、すぐには移らず、二〇余年を経て（一七九六年）、五世・中興鳳林台山和尚のときに新築に踏み切りました。

なお、現本堂は、大正三年、一四世・中興慈広大雲大和尚のときに再建されています。





飢饉を伝える碑

鷲連寺の境内に経塚があります。経塚とは、一つの石に「佛」の一字を書いて埋めたものをいい、碑に刻

まれた年号（一七八三年）から、天明の凶作の餓死者を供養したものとみられます。

村内にもうひとつ、天明の飢饉にかかわる碑があります。向村の墓地にある行人塚です。うち続く凶作でたくさんの人が餓死し、人々の心はすさみにすさみ、ついに修験僧をあやめる者まで出ました。僧は今際のきわに「水田を青田にしてやる」とうらみの言葉を吐き、それで凶作が連続すると村人は恐れをなし、行人塚を建てて供養したということです。

鷲運寺には、経塚のほかに「餓死供養塔」と刻まれた天保一五年（一八四四）建立の碑、また、明治四三年建立の蚕供養塔があります。

建碑は、かつては武士や富裕な人だけのものでしたが江戸時代以降、農民一般にも広がり、松尾村では江戸中期から明治にかけてさかんに碑が建てられました。主流をなすのは念仏塔、山岳信仰、社寺参詣で、それらは費用の面から、また、個人よりも共同のほうが霊験あらたかとされ、仲間意識を深めつつ、講などで建立されました。

新しい鐘楼と除夜の鐘

境内にある稲荷堂、薬師堂の前に、新しい鐘楼があります。これは、亡夫の供養にと柚澤タカ氏から寄せられた浄財で、昭和五八年に建立。以来、大晦日の除夜の鐘は、国家の安泰を願い、地域の人々の煩悩をしずめています。

鷲運寺に赴任二五年目を迎えるという住職。目標としているのは、お寺がだれからも親しまれ、心やすらぐ場所であること。葬儀や法事以外にもお寺に足を運ぶ機会（行事）をもうけ、少しでも仏法にふれ、日常生活の中に宗教心のある暮らしをしてほしいことだそうです。

こうした中での住職自らの規範、それは「祖山を離れず」とのことです。

湧水の里・水の伝説

名水一〇〇選・金沢清水のこと

岩手山麓には水にまつわる話が数多くあります。

全国名水一〇〇選に選ばれた松尾村の金沢清水。これは古来、座頭清水の別称で親しまれ、岩手山塊の伏流水が、七ヵ所から日量一二万トン湧出しています。

伝説では、岩手山中腹の滝にすむ七つ頭の蛇龍が、里に下りるときに地中をくぐり、頭を出したところが湧口（蛇頭清水）になったもので、今も、中腹にある滝の水は、そのまま地下に浸透しているということです。

ほかにも、悪さをする鬼がいて、里人の飛礫（つぶて）が目に入ったとき、改心を誓う見返りに、清水の神に目を治す湧水を授えられたので、座頭清水と呼ばれたという伝えがあります。

古代史を秘める長者屋敷

もうひとつ、松尾村には、県の名水二〇選の一つ、大小八ヵ所の「長者屋敷湧水群」があります。いずれも巨岩の根元から湧出し、湧口には古くから蛇が祀られています。これは古モンゴロイド系の蛇神信仰につながる縄文系の神様とみられています。

長者屋敷（村指定史跡）は、県内有数の古代遺跡で、エミシのチャシ（砦）跡など、数々の伝説を秘めています。

そのひとつ。時代が奈良から平安の時代に変わるころ、長者屋敷には、蝦夷の頭領、高丸悪路の子《登鬼盛》という山賊が居を構え、各地から奪った財宝を貯えていたが、登鬼盛に娘をさらわれた神子田多賀康（盛岡）がその悪事を訴え出て、坂上田村麻呂将軍がこれを討伐。そのとき刀を洗ったところが、以降、太刀清水と呼ばれた、というものがあります。

異聞伝説もあります。屋敷にある清水の水神を信仰して栄えた長者がいたが、日高見の南のほうに大和の国が攻めてきたので、息子の《登喜盛》に屋敷をゆだね、長者は出陣。長者は、敵の大和の人たちに高丸悪路（アテルイにもあてはまる）と呼ばれておそれられた、としています。

二つの伝説は、いわば表裏の関係にあり、朝者の田村麻呂に敵対して戦った長者一族が、後年、山賊に置き換えられたとする説もあります。

松尾の地名をアイヌ語にみると、「マク・ウン・トー＝マトー＝奥にある池」というのがあります。これは、エミシの国のまほろばの地（胆沢）からみて奥にある場所という意味で、池

とは、長者屋敷の湧水ではないだろうか、という見方もあります。（菅原迪氏『八幡平物語』）（長者屋敷公園説明）

「雫石」と水の逸話

雫石の地名をアイヌ語でみると、「シツ・ケス（シ）＝尾根の麓」、「スズ・ク・ウシ＝清水を飲みつけている所」、「シン・ブイ（スイ）＝水・穴＝井戸」の訛りがあげられています。

また、沈く石の意味で、川底（葛根田川・竜川・雫石川）に石が多い所。

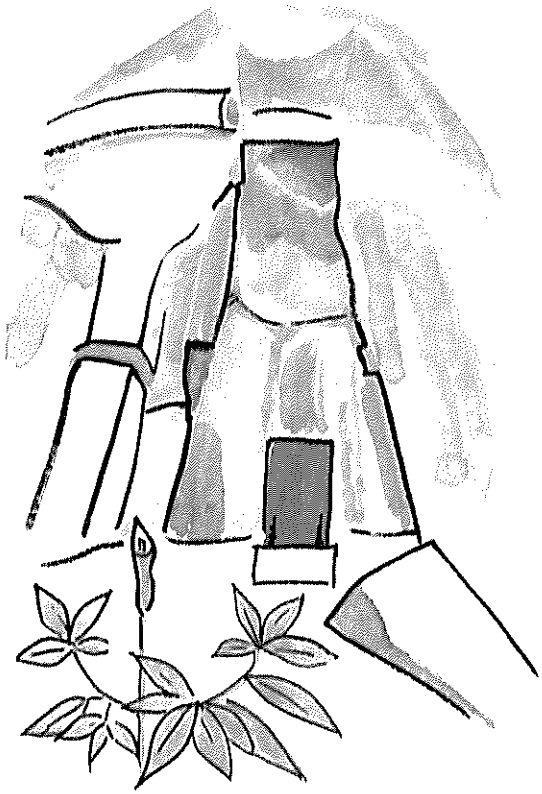
このほか、次のような伝説由来説があります。

滴石神社の巨木の杉の根の奥から、シズクイシという音をたてて湧く清水があり、それがタンタンと落下。地元の人たちは水神様を祀って「滴石たんたん」と呼んでいたが、安倍氏滅亡の一〇六〇年前後から一帯を滴石と呼ぶようになった、というもの。そして、中世までは「滴」、一六世紀中ごろから「雫」の字も使われました。

水にちなんで、雫石と盛岡にほぼ同じ筋書の「八郎太郎伝説」があります。

イワナを食べて竜（大蛇）になった若者が、川をせき止めて住みかにしようとするが、山の権現様にさとされて断念し、十和田湖を経て八郎潟に行ったというもの。その地は、盛岡では米内浄水場、雫石では御所湖の場所だということです。また、紫波町の山王海ダム付近にも同様の話があります。

なお、現在の北上川は日高見川が転じたものとされます。



住僧に弟子入りした若き日の啄木の父

蟠竜山（ばんりゅうざん） 大泉院（だいせんいん） 曹洞宗

◆西根町平館二四―三八
◆電話　〇一九五―七四―三〇二四
◆住職　第二三世　井上賢三

類焼により三度の移転

西根町の街の北側、国道二八二号が大きく西方向にカーブする個所から少し進むと大泉寺があります。平館駅から約一キロの現在地は、三度目の地。開山から約二四〇年、ここに伽藍を構えて約一九〇年になります。

大泉院は、江戸時代前期（一六六五年）、恩流寺（盛岡市）二世・湖岸存太和尚により、松尾村寄木地内に創建されました。山火事の類焼で堂宇を焼失したのち、平館本平に再建。しかし、江戸時代中期（一七九〇年）に、また も山火事で類焼しました。

現在地への移転再建は、焼失から二十数年後（一八一四年）のことです。このとき、縁起をかついで、紅葉山の山号を改め、水にちなむ蟠竜山としました。蟠竜とは、竜が蟠（わだかま）み、飛びあがる前を意味します。

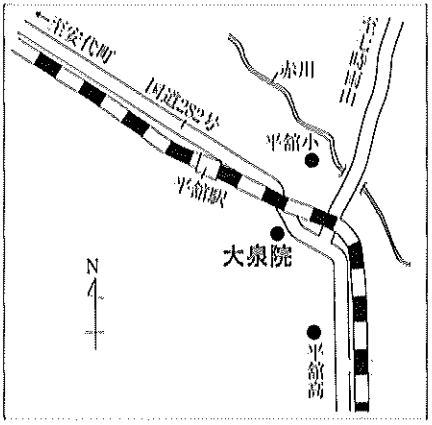
名僧による庶民教育

大泉院ゆかりの名僧に、二二世・卜村泰中和尚がいます。江戸後期（一八三〇～四三年）、人々の化導に力を注ぐかたわら、子弟に読み・書き・算術を手ほどきし、大勢がその薫陶を受けました。

藩政時代、庶民の教育の場となったのは「寺子屋」で、初期にはもっぱら僧侶、修験、医師、神官が師匠となりました。当時ほかに教える場はなく、さかのぼって起源をみると、中世の武家や豪族の子を、僧侶が預り、教育したことに始まります。

泰中和尚は、のちに龍谷寺（盛岡市）を経て報恩寺（盛岡市）へ昇住しました。一四世・佛堂梅賢和尚は、恩流寺を経て報恩寺に昇住しています。

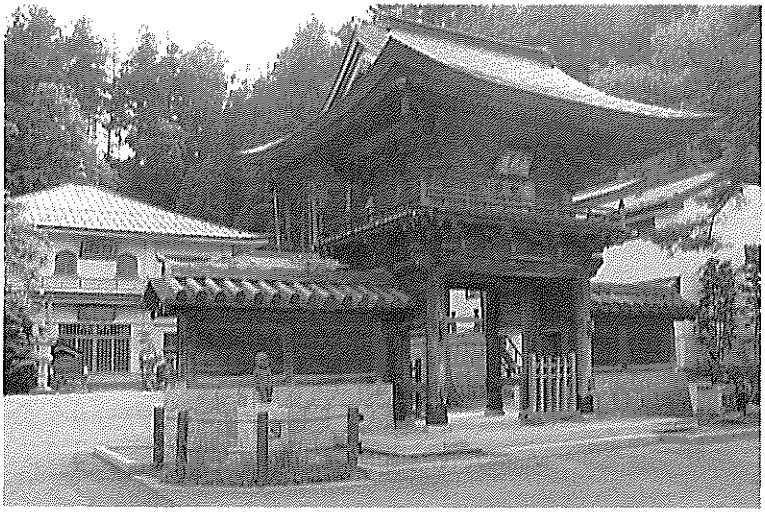
一七世・対月和尚のときには、平館町に生家がある石川一禎、のちの石川

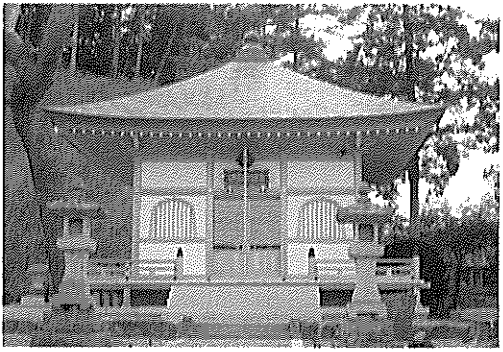


啄木の父親が弟子入りしました。

対月が龍谷寺に転住するとき一禎も随行し、師僧の妹との縁ができ、結婚しました。

大泉院には、先代のときに建立した啄木の歌碑二基があります。書家だった先代の筆になるその碑に、対月と一禎の生涯の交流を詠んだ歌、「わが父は／六十にして家をいで／師僧のもとに聴問ぞする」が選ばれています。





昭和六二年改築の山門（上）と改築三年目の地蔵堂（右）

安産・子育ての地蔵さま

大泉院の境内には、数年前に改築された地蔵堂があり、二体の子安地蔵尊が安置されています。ひとつは石島谷町松林寺の子安地蔵尊の分身という地蔵さま。もう一体は、以前、松尾神社の地蔵堂にあり、明治初期に大泉院に遷座したものです。

松林寺の地蔵尊については、平安時代前期（八五〇年）染の后の安産祈願のために、父の忠仁公が全国に六六体の子安地蔵尊を安置したうちの一体と伝えられ、永昌寺（半石町）にその妹という地蔵さまがあります。

七月二二日（旧暦六月二二日）の例祭は、昔から婦女の参詣が多いと伝えられてきましたが、現在も屋台が立ち並び、町内有数のにぎわいをみせる祭りが繰り広げられます。

関連記事　啄木そのふるさと

岩手山頂と境内に奉安された薬師如来

法量山（ほうりょうざん） 東慈寺（とうじじ） 曹洞宗

◆西根町田頭三三―六一
◆電話 〇一九五―七六―三四―四
◆住職 第三世 駒ケ嶺泰正

源流は田頭氏の菩提寺

国道二八二号から東八幡平のほうへ約一・五キロ、田頭小学校の南側の丘陵地に東慈寺があります。

東慈寺は、田頭城主・田頭右衛門佐直祐の奥方（法量院殿松岩鶴公大禅定尼）が直祐の菩提を弔うために開いた仏堂に始まります。巷間に、九戸城主の田頭城攻略により直祐は討死（一五八三年）したと伝えられていますが、史実には見当たりません。いずれにしろ、当時、戦国の世は収まらず、この地に武将や豪族が群雄割拠し、騒然としていたのは確かです。

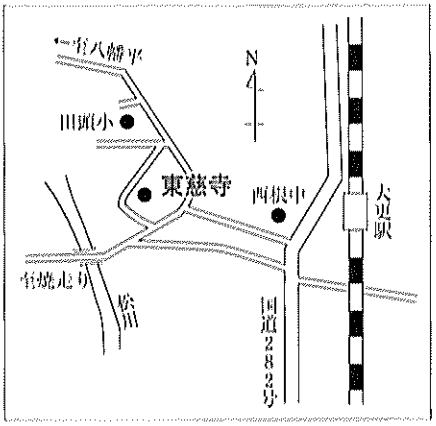
その後（一六五八年）、報恩寺（盛岡市）九世・龍翁嫩芝禅師が騎馬を駆けて巡錫したおりに、館山（田頭城跡）のふもとで荒れていた寺を再興。山号は開基の戒名からとり、寺号を定め、弟子の雪端林積大和尚を二世に迎えて寺門を盛り立てました。

本尊に残る記銘

東慈寺の本尊・釈迦如来には、松峯山東顕寺六世の遺立（一六五九年）という朱漆の銘があります。田頭氏の祖先は、鎌倉御家人で岩手郡を領有した工藤小次郎行光の弟・祐光です。兄の行光の後裔に栗谷川家があり、栗谷川家は東顕寺を菩提寺とすることから、先祖を同じくする田頭氏に仏像を贈ったとも考えられます。

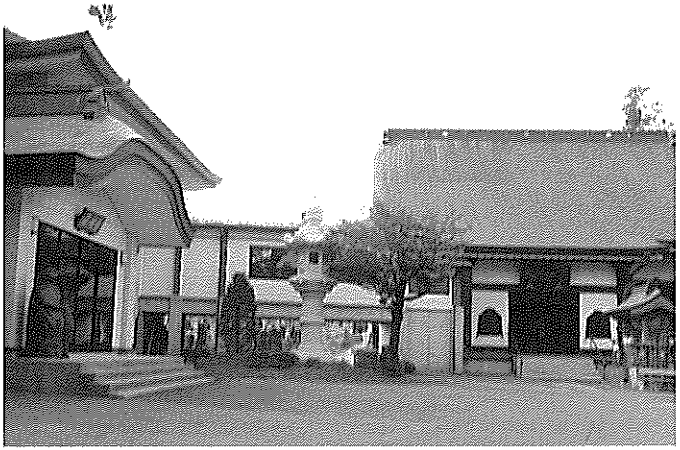
また、境内にある薬師堂に、銅造薬師如来坐像（約三〇センチ）が安置され、この像には、元禄元年（一七〇二）願主・金右衛門と刻まれています。

この像以前に、開山禅師みずから薬師如来を刻み、寺門の興隆を祈願したとされますが火災で焼失。その後、信仰のあつい金右衛門が薬師堂を再建し、薬師如来二体を鋳造し、一体は境内の



仏堂に、一体は岩手山頂に安置しました。それから、岩手山の頂上を薬師岳と称したといいます。

しかし、堂の薬師像が忽然と姿を消し、山頂の像も噴火（一六八五年）で行方しれずとなりました。あるとき、一〇世・法山俊明が、夜道で光るものを目にし、それが薬師如来像だったので、喜んで奉持したのが現存する仏像です。寺の西の方には「薬師田」と称する場所があったということです。



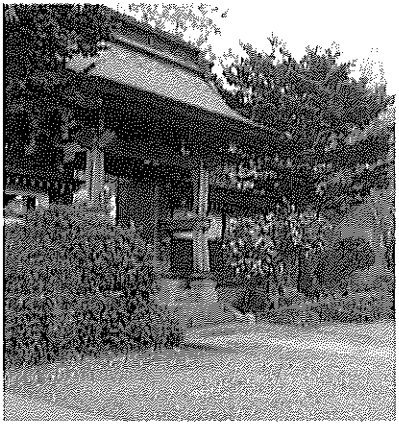
肖像のある二〇世泰賢の碑

境内に、二〇世・木村泰賢大和尚の報恩碑があります。正面上部には岡本一平画伯の描く師の肖像、その下に泰賢の流麗な字を刻んだ碑は、昭和一七年の一三回忌に建立。それに先立つ七回忌には梵鐘を設置しています。

中興と仰がれる泰賢は、僧であり、学者（東京大学）であり、その著作『印度六派哲学』で学士院恩賜賞を受賞し、五〇歳の若さで他界しました。

また、山門のわきには、二一世の句碑があります。ホトトギスの同人で、駒ヶ嶺不虚を俳号とし、『不虚五百句集』を著しています。

二二世は西根町の教育委員長を務め、『西根町史』に携わった文系の人ですが、つづく現住職は体育会で活躍。現在、スキーの全日本技術員として、インストラクターを指導しています。そうした縁により、ここ一〇年ほど、出身大学の陸上部員が箱根駅伝の合宿で西根町を訪れています。



山門わきに二一世の句碑がある

社会事業　東慈寺保育園（社会福祉法人）

奈良時代、勅願による建立を伝える観音堂

江峰山（こうほうざん） 聖福寺（しょうふくじ） 曹洞宗

◆西根町寺田二〇―二七
◆電話　〇一九五―七七―二九四〇
◆住職　第一九世　美濃部吉永

寺田城主・北氏の命運

大きくカーブする国道二八二号から分かれて七時雨山方面に進むこと約五キロ、バス停「上寺田」の近くに聖福寺があります。

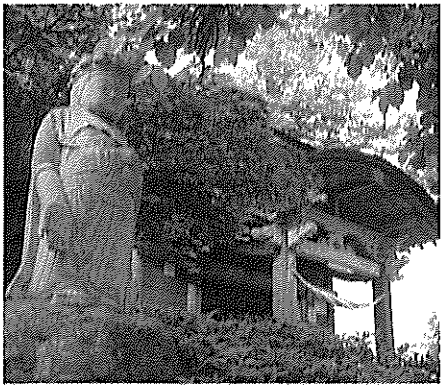
聖福寺は、江戸時代前（一五九六年）、寺田城主・北氏を開基とし、水泉寺（盛岡市）二世・尽室長春禅師の開山と伝えられています。

北氏といえば、南部一党の名門。花巻島谷ヶ崎城主・北信愛は南部信直の片腕となって南部藩を築いた人物です。北氏は松尾の北館から移ったといわれ、信直公のころ信愛の長男・愛一が寺田城主になりました。

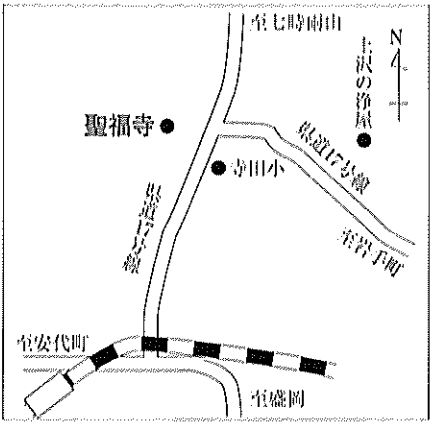
しかし、大坂夏の陣で豊臣方に味方した愛一が徳川幕府のとがめを受けたことから、名門北氏に不運が訪れます。愛一（夏山道雲大禅定門）は城を去って死没したためか、開基は二代・北直慶（景信陽公大居士）となっています。なお、直慶の奥方は、南部藩主・利直公の娘です。

その後の北氏について、南部重直公の鹿狩りに参加した直慶は、鹿を逃がしたとして勢子奉行から除外され、その翌年死没。三代の愛時は病弱により隠居し、子の景松が家督となりますが、幼童で死去して嗣子がなく、家は四代で断絶しました。

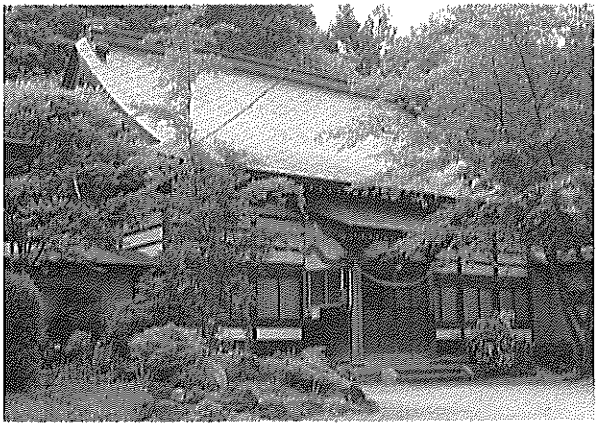
地元には、北氏の娘を出すようにと



明治八年移転建立の観音堂



の重直公の求めを断ったため所領を没収された、という伝承もあります。重直は変わり者で、こうした処遇を受けた者が多数いたということです。



植山佐渡の守本尊となった地蔵尊

主家の断絶を予感した佐々木六助昌政は、おそらく永代供養の心づもりで、岩松が亡くなる一年前（一六五四年）に四石分を聖福寺に残しました。そして、幼君の初七日を終え、その翌日、殉死しました。この主従の墓は、歴住の墓と並び建っています。

往古を秘める仏像と大鏡

聖福寺の境内に、由緒ある観音様があります。奈良時代（七二八年）、聖武天皇の勅願所として行基が開創したと伝えられ、御堂（岩手町正覚院）、桂清水（浄法寺町天台寺）ときょうだい観音といわれます。この三観音は、奥州三三観音の最後に並んでいます。

この観音様に関して、伝来する大鏡（直径一メートル余、一二〇キロ）の記銘に、朱雀天皇が寿応山沢両寺として再興建立（九三〇年）とあります。

安置する仏像は、珍しい鋳造の七面観世音立像（約五〇センチ）で、毎年七月一七日の縁日にご開帳になります。

もと染田川上流の白坂にあって白坂観音ともいわれ、明治八年、別当の修験、南山院が還俗したため、そのいっさいが聖福寺に移管になりました。当初は鹿角街道沿いの七時雨山麓にあったと伝えられています。

また、貴重な仏像、木像地蔵菩薩（平安末期作）があります。光味地蔵、子安地蔵ともいわれ、戊辰（ぼしん）戦争の鹿角口総帥だった南部家家老の植山佐渡は、切腹が迫ったときに当山からこの地蔵尊を勧請したとされ、三年後、再び報恩寺から聖福寺に還座しました。

仏像等　木像地蔵菩薩（県文化財）、七面観世音（奥州三三観音三一番）、白坂の大鏡、白坂の棟札、木造釈迦如来坐像（四件とも町文化財）

室町前期に創建された町内最古の寺

虎石山（こせきざん） 龍松寺（りゅうしょうじ） 曹洞宗

◆西根町堀切一―七〇
◆電話 〇一九五―七四―二二八一
◆住職 第一七世 田村敞一

二〇〇年後の再開山

国道と七時雨山方向への道が分岐する少し南で西側に入り、赤川を渡った堀切地区の中に龍松寺があります。

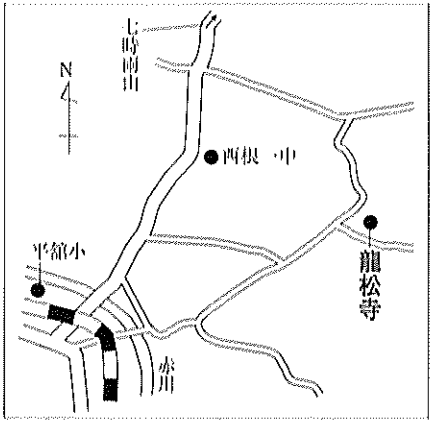
西根町に現存する寺では、龍松寺はもっとも早くに開かれ、廃寺となった沢両寺に次ぐ古寺です。開創は耕雲種月（こううんしゅげつ）禅師。当初、寺田の地に建立され、その年代は、開山師の没年（一四一六年）から室町前期とみられます。

耕雲種月は、本山の命により奥州へ巡下した大梅聞本禅師に随行。峨山派の偉材といわれた大梅聞本が大興寺（石島谷町）を開山したあと、命により単身この地に赴き、一宇を建立したといわれています。

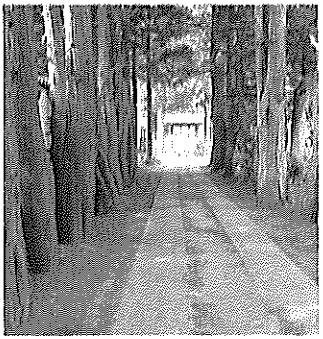
時を経て、慶長年間（一五九六～一六一四）に現在地に移転し、大梅聞本の法系である源勝寺（盛岡市）九世・清耽禅師を迎え、開山二世としました。このとき、師の一字「梅」を付した大梅山の山号から、いまの山号に改めました。その後、二度の火災で史料を失い、詳しい由緒沿革は不明です。

武将たちの争い

中世のころ、龍松寺の開山地付近を開発したのは豪族治左エ門や荒木田氏だったことから、その帰依があったとみられます。



盛岡以北の北上川東部の豪族は、中世まで鎌倉御家人の河村氏に従属し、時代が下りて、いずれも二戸南部に従ったので、隣り合った豪族同士の争いはありませんでした。ところが西根は、鎌倉期からの工藤氏が弱まり、二戸の南部氏に押されていく過程で、多くの武将が入り組んで抗争しました。南の勢力にとっては北の勢力を防ぐ要衝だったこと、北の勢力とすれば、交通の要であり、米のある西根盆地がねらいに

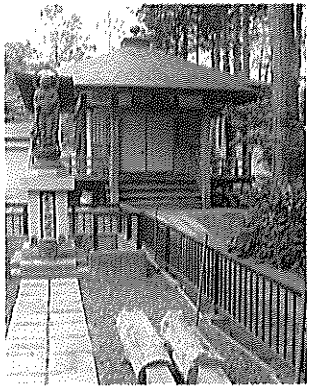


木立のある参道

なりました。

そうしたひとつに「二戸政連の変」があります。二戸城主である兄の政連を、平館城にいた弟の政包が殺害し、領内から追放された事件です。これをそそのかしたのが九戸政実というように、南部氏一党内でも内紛がありました。戦国の動乱の影響があったのか、龍松寺は、荒木田の六日市、さらに寺屋敷に移ったといわれます。

境内の「火伏せの観音」



十一面観音を奉安する堂

龍松寺の境内に観音堂（昭和五二年新築）があり、十一面観音が奉安されています。この観音は「火伏せの観音」と呼ばれ、江戸時代に堀切に大火があったとき、里人に姿を変えて御堂を守ったという伝承があります。

藩制のころ、御堂の別当は山伏喜楽坊（岩鷲山大勝寺、天台宗羽黒山寂光寺支配）でしたが、明治はじめの神仏分離令によって堀切神社になったため、龍松寺に移されました。

以前、この観音像には金の目玉が入っていました。それは極秘でしたが、どこかで知った者に抜き去られました。顔面も大きく傷つけられましたが、前住職のときにこれを修復。現在、金箔の目が入っています。

なお、廃寺となった古刹の沢両寺については、観世音や薬師等、跡地の出土品から、平安期の創建ではないかといわれています。地名の寺田は、寺領田のあった所ともみられますが、明らかではありません。

九〇戸の檀家が木材を持ち寄り堂宇を創建

岩鷲山（がんじゅざん） 吉祥寺（きちじょうじ） 曹洞宗

◆西根町平笠八―二六―五
◆電話　〇一九五―七五―〇二二二
◆住職　第二二世　丹内禅海

昭和四二年に現在地へ

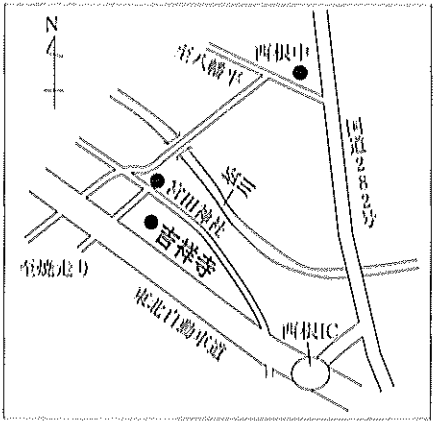
大更や田頃と、熔岩流で知られる焼走り（国天然記念物）を結ぶ道路の中ほど、東北自動車道のすぐ東側に吉祥寺があります。小高く、ひときわ空の広さを感じさせるその場所に立つと、西側には岩手山がそびえ、北につづく山なみには八幡平、東はるかに北上山系の姫神山が見渡せます。

吉祥寺は、慶安年間（一六四八～五一）のころ永祥院（盛岡市）三世・通外香達大和尚によって開かれました。通外香達の没年（一六五四年）からみて、当地で布教したのは晩年のころか、その弟子が開山に迎えたものと思われます。

その当時、檀家となった九〇戸が木材を持ち寄って一宇を建立したと伝えられています。そのおりに和尚が止宿したのが高橋善一氏宅で、「宿」の屋号となりました。堂を建立したのは古くからの墓地に隣接する地で、屋敷の周りに川と堀をもつ総本家「下」（高橋功氏宅）の北側でした（平笠二六―四九）。

西根町の寺院や神社の多くは江戸時代に開かれ（再興）、豪族ではない、一般の村人一人ひとりの信仰を集めるようになったのは、このころに始まったとみられています。

創建から二〇〇余年後（一八二四年）、八世・順戒秀孝和尚のときに改築再建したという棟札が現存しています。このとき、豪農の「下」（屋号）の尽力



が大だったということです。

さらに約一五〇年を経て、山崎公弟地に隣接する現在地に移り、堂宇を改築しました。昭和四二年、二〇世・禅山宗海のときです。

吉祥寺に安置される仏像に、胸に乳飲み子を抱いた子安地蔵尊があります。

これは、もと大更で助産婦をしていた人が自宅に安置して安産を祈願していたものですが、昭和二五年、仕事をやめたあとで吉祥寺に奉安されました。

自然石、お山の信仰

その昔、出産や病気、作物の出来、不出来になすすべを持たなかった民衆は、いわゆる民間信仰として祈願したり、心をなぐさめたりしていました。鹿角街道沿いの七時雨山麓に、旅人が道中の安全を祈り小石を一つずつ積み上げた寄の神群があります。これは、村外から入ってくる悪霊をここでふさぎ、村を守るためにまつったともいわれています。このように、とくに自然石や、岩石が形成する山を神聖視し信仰の対象としてきました。

古来、人々は、噴煙を巻き上げる岩手山に畏れをいだいていましたが、ことに江戸前期（一六八五年）に始まった噴火活動は人々を驚かせました。その後も噴火は収まらず、その三十数年後（一七一九年）、ついに「焼走り」が噴出しました。

岩手山には、不動平、三六童子、熊野権現といった、石や岩に、修験道に縁の深い神仏にちなむ名称があります。それは山岳信仰によって呼ばれたものとみられます。岩手山への登山は、祈祷詞を唱えてそうした神仏の加護を得、奥宮の胎内くぐり岩から新しく生まれ変わると信じられていました。

余録　信仰登山は「御山（おやま）かけ」と呼ばれ、岩手山へお登山口は、西根、雫石、滝沢の三ヵ所があり、それぞれの遥拝所に別当がいて、神をまつる神楽（平館神楽、雫石神楽、篠木神楽）が伝えられている。また、平笠には、宮田神社に伝わる裸参りがあり、田植踊り（町文化財）が伝承されている。

修験と山岳信仰

信仰を伝える浄屋と碑

松尾村寄本には、その昔、坂上田村麻呂の建立による幻の寺、観験寺があったとされ、この寺の無量寿仏（阿弥陀如来・薬師如来・観音菩薩）が大同二年（八〇七）に厳鷲山（岩手山）に移され、以来、厳鷲山は神仏混淆の山になったとの伝承があります。

北奥羽の最高峰岩手山は、古来、厳鷲山大権現（現岩手山神社）として尊崇され、南部氏が盛岡に居城を定めると、その守護として重んじられました。岩手山を神体として山頂に奥宮を置き、柳沢口（滝沢村）、平笠口（西根町）、雫石口の各登山口に遥拝所（新山堂）が建てられ、別当が置かれました。とくに柳沢口は正参道として重視され、文政二年（一八一九）には麓から山頂まで一〇本の参詣道しるべの碑の建立。約四〇年後には、山頂お鉢に三三所観音の石仏と、滝沢村分れに「厳鷲山道分の碑」が建てられるなど、岩手山信仰は高まりをみせました。

村々の男子は年一度登山をするのが勤めとされ、江戸時代末期になると、松尾村・西根町・岩手町の各集落には「浄屋」が造られました。お山への参拝も浄屋も女子は禁制とされ、信仰登山をする男たちは、一週間ほど前からここで自炊して身を清めました。こうした浄屋は、いまも岩手町の秋浦浄屋（町文化財）、西根町には、寺田土沢の浄屋（町文化財）をはじめ数ヵ所に残っています。

また、山岳信仰の組織（精進講、二三夜講、三山講）をつくり、参拝記念に碑を建立しました。岩手山周辺の町村には、「厳鷲山」「玉東山（姫神山）」「羽黒山・湯殿山・月山」などの碑が数多く残っています。

（岩手町秋浦の浄屋略図278㌻）
（西根町土沢の浄屋略図280㌻）

聖地と崇められた山々

山岳信仰を母体とする修験道は、天台・真言の仏教（密教）と習合して全国に広まりました。岩手県では、藤原清衡・秀衡が修験道とつながりをもち、そのころから、山林修行者（修験者）の山伏が、半僧半俗の姿で岩手県内にも現れるようになりました。

主な山々が霊山・霊場とされ、岩手山・早池峰山・姫神山・兜神獄・五葉山・駒獄などが修験者の道場になると、一般の人々も山を崇敬の対象にしました。人々は、空に近い清浄な山に尊い霊が集まり、死者の霊も、……年を過ぎると仏から神様となって高山に鎮ま

ると信じ、山伏を先達に参拝登山をするようになりました。

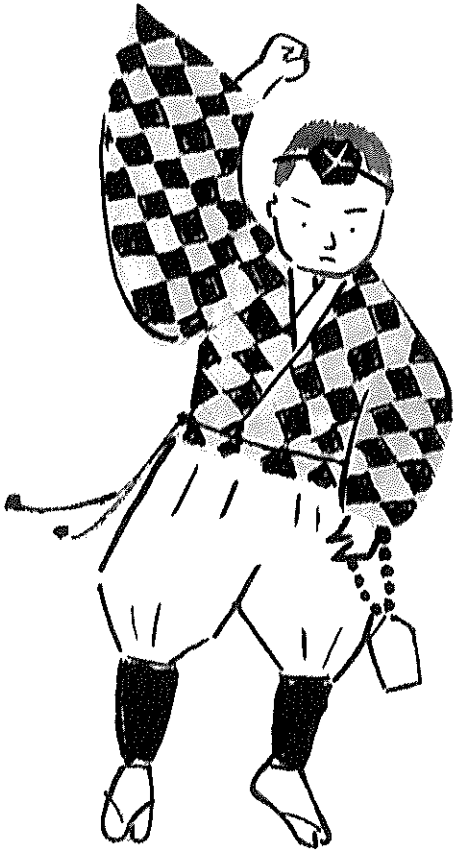
いま一般に行われる「山開き」も信仰登山に由来し、その年はじめて、夜明け前に頂上まで登り、ご来光を拝むものでした。

里人に頼られた山伏

松尾村には、山岳信仰修験者といわれる人たちの最大の目的は、現世利益・社会福祉にあったとの記述があります。そして、「金鳴る」という豊作占いの法の会得や、「刀渡り」「火渡り」など心の止観を修法して庶民の幸せを図ったこと、念仏踊りや念仏剣舞、山伏神楽を伝え、庶民の生活にうるおいを与えた、としています。

南部藩のころ、領内には一千人前後の山伏がいて、本来の業のほか、医者、民間信仰教導者、寺子屋教師、芸能演出者となり、多くは妻帯して村々に住みました。現在、国の無形文化財になっている早池峰神楽も、修験集団によって伝承されました。

修験道は、民間信仰の庚申講、観音講、かくし念仏などを排除することなく包括し、当時、一般の寺院が少なかったこともあって、各地に浸透しました。しかし、明治になって、政府の神仏分離策と雑宗排除策により、修験道は戦後まで公認されませんでした。



千古の創建を伝え、境内に北上川の源泉

北上山 新通法寺 正覚院

天台宗

◆岩手町御堂三一九
◆電話　〇一九五―六二―八三一九
◆住職　第六四世　阿部亮圓

開山と再興の伝説

国道四号の一戸町との境から約二キロ南、バス停「御堂」からわき道を行くと、正覚院があります。通称の「御堂観音」が地名になり、境内から北上川の源泉「弓弭の泉」が湧出する正覚院には、往古の伝えがあります。

正覚院の始まりは、平安初期（八〇七年）、奥州を平定した坂上田村麻呂が祈願所を開き、十一面観音を安置し、一族の僧了慶を開山として護持したと伝えられています。

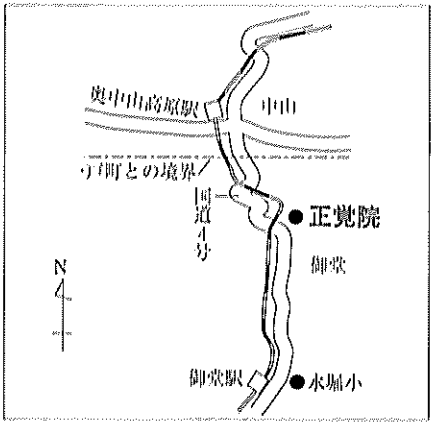
一五〇年を経て、安倍氏征伐のため源頼義・義家父子が進軍（前九年の役）しました。対陣が長引き、沢水もかれるほどの炎暑に苦しんだおり、当地で本国を伏し拝み救世祈念をし義家が弓弭で杉の根元を掘ると、そこから清水が湧き、兵も士気を取り戻しました。

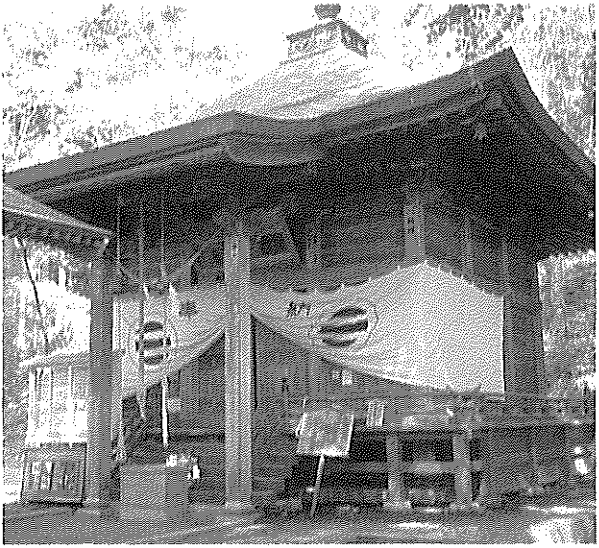
霊験を得た義頼・義家が観音堂を改築し、陣中の護持仏としていた黄金の千手観世音を安置し、新通法寺正覚院と命名したと伝えられています。また、このとき寄進したと伝えられる陣中釜が伝来しています。

東北開拓と天台宗の古刹

伝説について『岩手町史』は、真偽は不明ながら、北上川の源泉の地に御堂を建立したのは相当古いとみられること。東北地方には天台宗ゆかりの古刹が多く、巡国した慈覚大師の開創には疑問があるとしても、蝦夷地開拓期に下ってきた天台宗の僧侶が多くの寺を開いたこと。正覚院は、浄法寺町の天台寺、下北半島の恐山とも関連して平安時代に開かれ、堂宇が住んだと考えられる、としています。

正覚院は、天台寺とともに奥州三十三観音のしめくくりに列挙され、現在、中尊寺の末寺となっています。





南部家所蔵の本尊

正覚院の本尊は、金銅の千手観音（三・七センチ）です。現在、南部家が所蔵し、正覚院にはその分霊が安置されています。

この本尊には、源頼義・義家以降、次のような深遠な伝えがあります。

戦国の乱世のなかで本尊が行方不明になりました。どういう経過によるのか、それが豊臣秀吉の手に渡って護持仏となり、家臣の蜂須賀小六に恩賞として授与されました。以来、蜂須賀家代々の家宝となりますが、江戸時代（一七一〇年）、徳島藩主・蜂須賀隆長の姫（三代）が南部家に輿入するとき、形見の護持仏として持参。こうして、奇しくも数百年後に南部の地に戻りました。

正覚院は藩政時代（一七五八年）に堂を焼失しますが、源義家に由緒があるので藩主が復興を命じた、と棟札にあります。その堂も、昭和四三年の雷火で焼失。二年後に現堂宇が再興されました。

明治天皇が二度も拝礼に訪れた由緒ある「御堂観音」の周りには、堂を守るように杉の古木が繁っています。

余録　岩手町では、寺の向かいの地に、水車小屋や蓮池のある「川の駅」づくりを進めている。四つ駅を交流・観光拠点にしようというもので、ほかの三つは、「新幹線の駅」「道の駅」、商店街の「街の駅」である。

建物　御堂観音（町文化財）

ゆかりの沼宮内城に秀吉の軍が駐在

金峯山（きんぽうざん） 沼福寺（じょうふくじ） 曹洞宗

◆岩手町沼宮内一一一一
◆電話　〇一九五―六二―二三五〇
◆住職　第一八世　藤澤忠清

開基は沼宮内城主

沼宮内駅から北に約二キロ、沼宮内小学校に近い旧国道四号から蔦巻町に通じる道沿いに、沼福寺があります。裏手の高台には城山公園（沼宮内城址）があり、そのふもとに沼福寺と大蓮寺の二寺が並び建ち、道路をはさんで稲荷神社があります。

沼福寺は、沼宮内城主・民部常利の創建と伝えられ、宝積寺三世・寿山関祝によって開山されました。

創建年代は明らかではありませんが、開山師の没年（一五八二年）から、天正（一五七三年）以前にさかのぼり、沼宮内城主が居城していた戦国時代に建てられたとみて差し支えないようです。なお、開基の民部常利については過去帳に「年号不分明」とあります。

地方豪族と曹洞宗寺院

城山公園の地は、かつて、寺山城ともいわれた沼宮内城があった場所です。城主の沼宮内氏は、源頼朝の奥州藤原氏征討に従ってきた河村氏（紫波・岩手郡東部を領有）の一族で、のちに南部氏の勢力下に入り、後代に続いたといわれています。

戦国の終わりを告げた「九戸政実の乱」（一五九二年）のとき、沼宮内城に豊臣秀吉の奥州仕置軍五万三千余が駐在しました。そこで、主な武将である浅野長政、蒲生氏郷、堀尾吉晴、井伊直政らが南部信直と軍議し、「当地から南下させず」と結束したといわれています。

●略図は272ページ参照

客殿のわきに建つ明治天皇御料馬の墓

曹洞宗寺院と地方豪族のかかわりをみると、戦国時代、葛巻氏の菩提寺として宝積寺が創建され、明円寺も川口城主との関係で、おそらく戦国時代に開かれたとみられます。

曹洞宗は、幕府の権力との結びつきではなく、教線を地方に拡大し地方に多くの寺院を建立しました。曹洞宗は僧侶の修行を重んじたため、室町から戦国時代、禅僧は学僧として地方豪族の学問や宗教の師となり、豪族はお寺を開いて禅僧の教えを受けました。こうしたことから各地の有力豪族の居城の近くに曹洞宗の寺が建立されました。

明治天皇御料馬の墓碑

沼福寺の新装なった客殿の横に、明治天皇御料馬・滝沢号の墓があります。

明治一四年、天皇の奥羽行幸のとき、輓馬が病に倒れ一〇日ほどで死んだため、委託をうけた沼宮内警察の警部が沼福寺の境内にこれを埋葬。明治二二年に碑が建立されました。碑銘には、青森県七戸村産うんぬんの滝沢号の履歴と経過が刻まれ、最後に、石井県知事命による建立とあります。また、沼福寺には滝沢号の蹄鉄が保存されています。

ほかに、昭和二八年に室町時代のものとみられる菊花双雀鏡が発掘され、保管収蔵しています。

建造物に関しては、明治三五年、町の大火で沼福寺も類焼し、その翌年には現本堂が再建されました。丸柱に欅が使われますが、中に二本、栗材が混じり、火災後のあわただしさを物語っています。

沼宮内は岩手郡の中心地として、明治期には沼福寺が兵隊検査会場となりました。本堂の柱に、当時の身長計測のキズが残っています。石川啄木もここで検査を受けますが、甲種合格にはならなかったといわれています。

関連記事　近世幕開けの動乱

明治三五年の大火で頭のみ残ったご本尊

功徳山（くどくさん）一白院（いっぱくいん）大蓮寺（だいれんじ）

浄土宗

◆岩手町沼宮内一一一三三
◆電話　〇一九五―六二―二六〇一
◆住職　第二六世　工藤壽雄

南部公から拝領の境内地

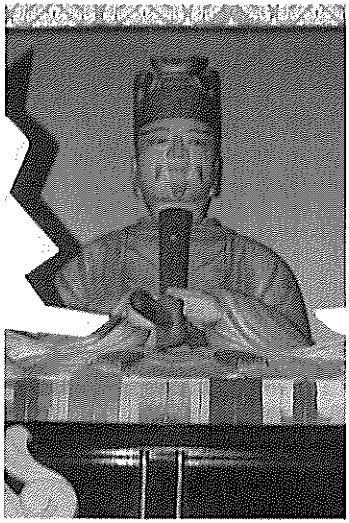
沼宮内の街の北側、沼宮内小学校付近で東に入ると、城山公園（沼宮内城跡）のふもとに二寺があります。岩手郡唯一の浄土宗である大蓮寺は、道路から少し奥まって建っています。山門の前方に、「南無妙法蓮華経」と刻字した他宗派の碑があるのは、旧国道四号を整備する際、寺院にゆかりがあるとして移したもののようです。

大蓮寺は明治三五年の大火で全焼し、山緒沿革は詳しくないものの、次の縁起が伝えられています。

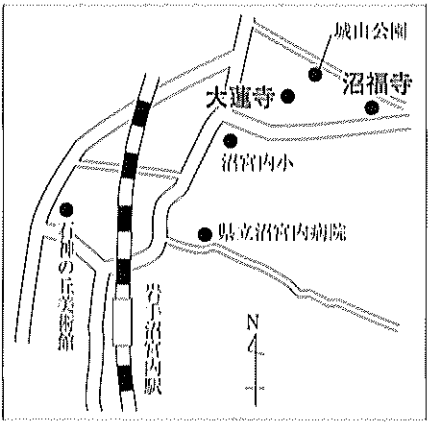
江戸時代前期（一六五二年）、光台寺（盛岡市）三世・一白上人が沼宮内に布教伝道して大蓮寺を開山しました。当時、百余人の信者があったといわれ、南部重直公から寺領一六〇〇坪を拝領して堂宇を建立。一戸から招いた賢頓長老が二世となりました。

開山年代について、『岩手郡史』には明細帳の山緒により「寛永六年（一六二九）一月を以て建立す」とありますが、つまびらかではありません。

汽車の飛び火に端を発した明治の大火は街をのみ込み、大蓮寺も伽藍を焼失しますが、翌、明治三六年には、現在の本堂が再建されました。二三世・英山和尚のときです。



棟梁たちが曲がりガネ発案者の聖徳太子を奉納し、毎年法要を営む



開山師一白と南部公

ご開山の一白は、南部利直公の奥方・

於武（源秀院殿）が深く帰依した和尚で、於武は自らの遺言により光台寺に葬られました。嗣子の重直公が造った於武の壮麗な霊廟は、いまも盛岡市の名所になっています。

於武の輿入れは蒲生氏郷が「九戸政実の乱」で南部信直を支援したことが機縁になったとされ、その当時、軍議の場になったのが沼宮内城でした。

大蓮寺の墓地の最上段に岩手町で最も古い五輪塔があります。八角家の墓です。於武が南部氏に嫁すとき、従者として八人兄弟が随行しましたが、この兄弟が八角を名乗りました。「ゆかりの人が奉行として沼宮内に赴き、早い時期に檀家になったのではないでしょうか」と、先代大黒さんはいいます。

一白上人は、ほかに盛岡市の円光寺、紫波町の淳念寺を開山しています。

豪商が奉安した本尊

火災によって全焼した大蓮寺ですが、本尊の頭だけが焼けることなく、庭のツツジの根元にころがっていたということです。

この阿弥陀如来像は、開山した当時、沼宮内の豪商・久保長右衛門が京都から下して奉安したというものです。火災後、残った頭に、三戸の仏師・本田藤太郎の手により身体舟光明台を復元し、現在も本尊として安置しています。

寺宝に、非常に珍しいかたちをした仏像、印相（手）の上に釈迦の首を抱いた阿弥陀如来坐像があります。製作者や年代、来歴も不明ですが、おそらく火災後に寄贈を受けたものとみられ、現在、位牌堂に安置しています。

地名の由来

―盛岡・岩手・紫波―

県・郡・町・山名にある「岩手」

「岩手」は、県・郡・町・山名につけられています。この地名のおこりは、岩手山や、ふもとの地名が先だったとみられます。明治五年、郡名の「岩手」が、そのまま県名になりました。

太古、火を噴く山（岩手火山）から噴出した岩が荒々しくむき出ている山麓（焼走り熔岩流など）や、突き出ている大岩（渋民）などから、「岩が出ている所＝イワデ」と呼んだのは、ごく自然だったでしょう。

また、よく知られているのが別項でもふれたように、盛岡市東顕寺、三ツ石神社の「鬼の手形」伝説の由来です。もうこの地には来ないという誓いの手形を大岩に押し、その岩の手形にちなむ、というものです。

ほかに、坂上田村麻呂の蝦夷征伐とともに来た農耕技術集団、物部氏がもってきた飯豊神のイイデからきているという説。アイヌ語のイワ・テュケ（岩の手、枝脈）、イワア・テエ（岩地の森林）などの説もあります。

岩手山については、この山は雪が消える五月はじめ、残雪の形が鷲が羽根を広げたように見えるので、「巌鷲山」と呼ばれました。発音は「がんしゅうざん」ではなく「いわわしやま」だったといわれ、「いわて」に類似します。

アイヌ語のイワは、岩とか山の意味ですが、その昔のイ・イワ（畏れ多い岩）が詰まったと考えると、岩手山も、青森県の岩木山と同じく聖山、つまり信仰の山からきているとみることもできます。

『しわ』の多様な当て字

紫波郡のシワはシハともいわれ、文献で初見される『続日本記』に、志波村（七七六年）とあります。それ以来、志波、子波・斯波・斯和・此波・志和・紫波など多様な字が当てられてきました。これらは、そのまま多彩な地名発祥の説に結びついています。

地形にちなんで、北上川の段丘のツバ（崖）やシボ（萎）から転じたというもの。たわんで曲がった所のシワ。川流れのシハ、シハという音。また、稲田を守る志和稲荷神社の鎮座の古有（シメニハ、標庭）の約とするもの。大和朝廷の勢力範囲のシハ（終末、端末）などの諸説があります。

字に関しては、藩政時代の公式文書に「志和郡」を用いてきましたが、明治維新前後になって、一般に「紫波」の字が多用されたことから、一六世紀

の古歌、最後の領主・斯波詮直の「川の石に打つ波紫に似て」にちなみ、明治二年に「紫波郡」に統一されました。また、「志和」は明治二二年から昭和三〇年まで旧村名に使われました。

「宝の珠の盛る岡山」

盛岡の地名は、山岸の永福寺の裏手にある庄（現在、桜が丘団地）からきています。ここを古くは「森が岡」といい、永福寺は藩公の祈願寺として名を馳せ、元禄時代には七堂伽藍が出来上がっていたといわれます。

地名は、宝珠盛岡山永福寺四二世・筑波の僧正と、盛岡藩三代南部重信公との連歌がもとになっています。

永福寺に参詣した重信公が、

「幾春も華の恵みの露やこれ」

と上の句を詠むと、

住職の清珊法印は、下の句を、

「宝の珠の盛る岡山」

と詠み、これは非常にめでたいということになりました。

もとは不来方という地名でしたが、利直公がお城の御鍬立御祝儀（工事起工式のお祝い）の席上、城は森ケ岡と号するとしました。それが連歌ののち（一六九一年）、字は「盛岡」に統一され、地名に定められました。

三百数十年前、藩祖信直公の出生地に移転

天井山（てんせいざん） 寶積寺（ほうしゃくじ） 曹洞宗

◆宿毛町一方井一五一五九
◆電話 〇一九五一六二一二（六五六
◆住職 第二五世 四戸秀賢

開山五〇〇年を迎える

石段を登り山門をくぐると、杉の巨木が天を衝くように立っています。そこが寶積寺です。三百数十年前、寶積寺は、藩公の意志によりこの地に移り、記念にこの杉を植えたとされます。

寶積寺は、今から五〇〇年前の文亀二年（一五〇二）、葛巻の地に、工藤掃部亮光祐を祖とする葛巻氏（開基）の菩提寺として、今の宮古市の古刹、華厳院の二世・三月秀関大和尚によって開山されました。現在、三ヵ寺の末寺があります。

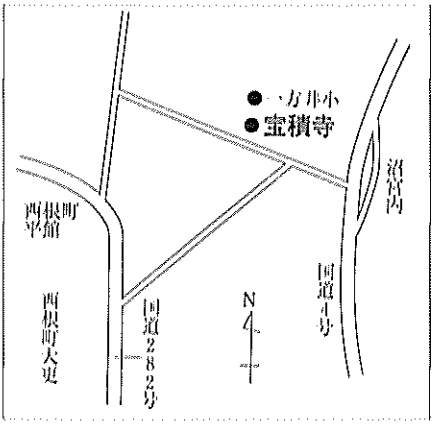
寛文四年（一六六四）、南部藩は盛岡藩と八戸藩とに分割され、葛巻の地は八戸藩領となりました。葛巻氏は、その七〇年ほど前の「九戸政実の乱」の戦功により、藩祖・信直公の出生地、一方井に領地替えとなりますが、藩分割にともなって寛文八年（一六六八）、寶積寺もその一切の移転を完成。六世・一峯祖聞大和尚のときです。

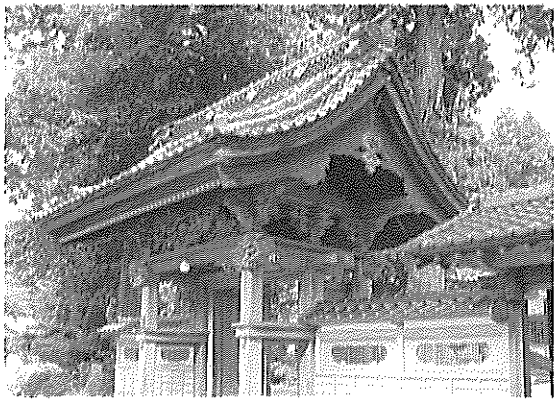
幼少のころ華厳院で学んだ時の藩主・重信公は、華厳院ゆかりの寶積寺を藩祖の出生地に移し、藩の安泰を祈念したのではないでしょうか。

移転から四九年、山火事によって寺院を全焼（一七一七年）。飢饉や若手山の噴火などに重なって仮住まいを余儀なくされ、一一四年後に本堂再建に着工し、九年あまりを要して二〇世代に完成し（一八四〇年）、さらに庫裏も建てられました（一八五七年）。

寶積寺で特記したいのは山門です。見事な龍の彫刻が、表と同じく裏にも施された後世に誇れる建物です。

鐘楼堂には、先の大戦に供出するまで南部藩お抱えの鋳物師鋳造（一六四四年）の立派な梵鐘がありました。鐘楼堂に梵鐘のないのをうれい、昭和六三年、檀徒の篤志家から梵鐘が献納され、「四恩の鐘」と命名されました。





境内には、ブロンズ像では北東北随一の「子育・水子地蔵尊」があり、町内外から善男善女が参拝に訪れます。

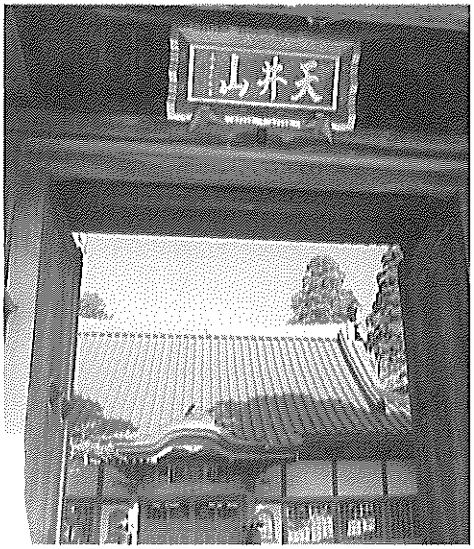
このように、寶積寺は歴史に翻弄させられ、多くの苦難を、その時代時代の檀信徒とともに乗り越えて今日に至り、平成九年には、開山五〇〇年記念事業として本堂の大改修がなされ、位牌堂ならびに会館等が新築されました。

開山和尚の出生譚

ご開山・三月秀関の位牌の裏に、次のようにあります。「当寺開山之実母者箱石城主之女子也　悪女故一世不男面三ヶ月信斗（中略）一四世哲心慎記」、すなわち「宮古の箱石城主であられた母上は毎月三日月にむかい一晩中熱心にお祈りしたため、ご開山を身ごもり安産なされた。母上のお顔はたいそうみにくくあらせられた」。

こういう出生譚は弘法大師など傑出した高僧しか持ち得ないめずらしいお話です。寺号は「日月星辰の天恵を与えられた」との意味を含めて「天井山」になったとされます。

ところが、英邁の誉れ高い重信公も同じ出生譚をもっています。重信公は、初代藩主・利直公の五男として閉伊郡花輪内膳の娘との間に生まれ、その母上について「容貌甚だ醜く、公これに戯れ、短冊を賜いて記念とす、既に同女懐胎し」とあります（「南部史要・全」）。華蔵院の傑僧三ヶ月大和尚と英主重信公、ともに藩祖信直公の出生地、寶積寺でむすばれているのです。



関連記事　近世幕開けの動乱

創建後まもなく設置された由緒ある梵鐘

柏樹山（はくじゅさん） 明圓寺（みょうえんじ） 曹洞宗

◆岩手町川口一五一一七
◆電話　〇一九五一六五一二〇二八
◆住職　第二五世　藤本徳久

火災後に再度の開山

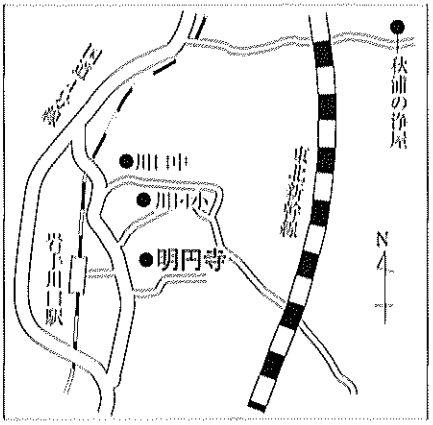
玉山村との境の近くで旧国道四号に入ると、岩手町川口の街になります。その中ほど、岩手川口駅と道を挟んだ向かい側に、やや奥まって明圓寺（明円寺）があります。

明円寺は、江戸時代前期（一六三六年）、川口城主・川口源之丞正家（覚証院殿体安心空大居士）を開基とし、源勝寺（盛岡市）一〇世・天岩雲暁によって開山されました。

これをさかのぼる前史があります。秋浦の地にあった月光山円満寺が火災に遭い、本尊はじめすべてを焼失。移転開山の約二〇年前（一六一七年）のことです。再興をこころざした三世・外室雲積は、正家に願い出て現在地を授与され、檀家と力を合わせて再建しました。このとき開山師を勧請し、二世には凡山大突を請して、みずからは三世となりました。このとき山寺号も改め、長年住職した柏道老僧と桐仙老僧からそれぞれ一字をとって柏樹山とし、月光山の「月」に「日」を加えた明、旧号の円満寺の円を組み合わせ明円寺にしたということです。

地方豪族・川口氏の去就

川口の地名は、丹藤川、古館川が北上川に合流するところから生まれました。



中世のころ、古館川合流点に川口城があり、通称、豊城（とよしろ）または古館といわれました。川口氏は、沼宮内氏と同様、岩手郡・紫波郡の川東を勢力圏とした河村氏の一族といわれています。時代とともに南部氏に従い、斯波（しばは）氏や「九戸政実の乱」に出陣したほか、正家は父に代わり、私兵八人を率いて「大坂冬の陣」にも出陣しました。

『岩手町史』には、明円寺も川口城主と関係ある寺として、戦国時代に創

建された寺と考えられること、川口城主の城地召し上げと、その破却後、この地に新たに寺を再興したであろう、と記しています。

正家の死没（一六四六）後、その女が盛岡藩と二分された八戸藩主・直房の室だったので、その子・川口秀寛は八戸藩の家老として八戸に移りました。

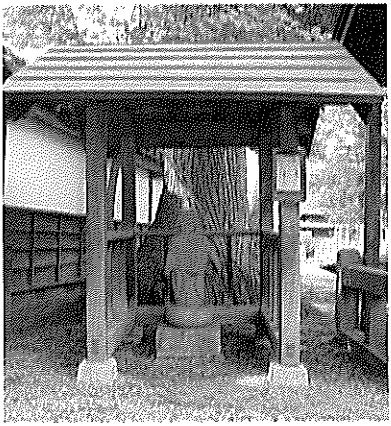
伝世する「物」と「行事」

明円寺に伝わる「行形」のものとして、正家が寄進した「寛永二一年（一六四四）」の記年銘のある梵鐘があります。町内にもう一つ、宝積寺（岩手郡一方井）にも同じ記年銘のある梵鐘がありましたが、戦時中の金属回収で失いました。明円寺のものは応召を免れ、三五〇年変ることなく時を知らせ、人々にやすらぎを与え続けています。

ほかに、古い記年銘のある香炉と花立（一六八九年）、半鐘（一七七二年）、磬鉢（一七八一年）が伝来しています。

「無形」のほうでは、精霊をおくる舟っこ流しがあります。提灯、花などで飾った舟が寺に奉納され、和尚の読経と念仏婆さんの和讃に送られ、北上川へ流されるお盆の行事です。

また、最近、祭りは休止中ながら、山門わきにダイバラ地蔵があります。腹の大きい妊婦が安産祈願に訪れることからきたダイ（大）バラ（腹）の呼称がなんとも庶民的です。



六地蔵の隣にあるダイバラ地蔵

関連記事　お地蔵さまの信仰とご利益

お地蔵さまの信仰とご利益

六地蔵とその供養

お寺の山門やお墓の入口で、よく、ならんで安置された地蔵さま、「六地蔵尊」を見かけます。お地蔵さま（地蔵菩薩）は、六道の衆生を救って苦難をのがれさせ、女人豪産、衆病悉除などの福運を授けると、そのご利益が説かれています。

六道とは、地獄（極苦の世界）、餓鬼（飢渇に苦しむ世界）、畜生（無智の世界）、阿修羅（喧嘩、口論にあけくれる世界）、人間（貴賤、貧富、賢愚の差が大きく、苦楽が存在する世界）、天上（光明の世界で最善、最楽）の世界のこと。

平安以降、死後の地獄思想がいきわたると、貴族階級は阿弥陀仏にすがり、庶民は地蔵菩薩に救済を求めて、広く信仰されました。六体の地蔵を六道に配し、衆生の救済を願うところは六観音にも通じます。

六観音は一〇世紀の中国でさかんに信仰されますが、中国に六地蔵の信仰はみられないことから、天台や真言の僧が考え出したともいわれます。

今に引き継がれるものに、盛岡市の上鹿妻念仏剣舞の「地蔵和讃」「六地蔵讃」があります。お盆に、葬提寺である大松院の山門入口に建つ六地蔵尊の前で死人を正しく導いてくれることを讃え、念仏を唱えて一心不乱に先祖の供養をするというものです。

子どもとの深いつながり

さらに、お地蔵さまは賽の河原で死んだ子どもを救うといわれ、子安地蔵や安産の仏、水子の仏として信仰されました。日本では、六、七歳ぐらいの子どもは神の子、神の使いという習俗があったことも地蔵信仰に結びついたとみられています。

賽の河原といえば、下北半島の恐山を連想する人も多いでしょう。

今から一二〇〇年ほど前、慈覚大師の開山によるとされる恐山は、日本三大霊場のひとつで、地蔵信仰のメッカでもありました。恐山円通寺では、五〇〇年ほど前から「地蔵菩薩像」の掛図を発行しましたが、それが盛岡市中央公民館に所蔵されています。

ほかにも、生活に即して現世利益はいろいろに変化し、「身代わり地蔵」のように特別な名前をもつ地蔵さまが立てられました。

（盛岡市中央公民館略図87ページ）

盛岡周辺の主なお地蔵さま

盛岡周辺の地域で、主なお地蔵さまをあげてみましょう。

もっとも多いのは「子安地蔵」です。盛岡市の長松院、聖寿寺、永福寺（覚淳院）、円光寺、滝源寺、雫石町の永昌寺、西根町の聖福寺、大泉院にあります。また、盛岡市の正覚寺と神子田町内に「間引き地蔵」があります。

盛岡藩主の母堂ゆかりの花輪地蔵（東禅寺・盛岡）や四ツ家の地蔵（盛岡市本町）など、女性と子どもにちなむものが多く、子抱地蔵（法泉寺・盛岡）、子育て地蔵（教浄寺・盛岡）、親子地蔵（蟠龍寺・紫波町）、妊娠中の大きなおなかを意味するダイバラ地蔵（明円寺・岩手町）があります。

ほかに目立つのが「食べ物」に関するものです。地蔵さまの好物という小豆にちなむ小豆とぎ地蔵（王山村馬場）、いわれに豆腐が登場する覚山の地蔵（光台寺・盛岡市）、豆腐買地蔵（連正寺・盛岡市）、また、酒買地蔵（永祥院・盛岡市）というのもあります。

さらに、龍谷寺の身欠地蔵は、病気と同じ部分を地蔵さまからけずりとって飲むと効き目があるとされています。

岩手町の旧街道沿いには、旅人の行き倒れや死者を供養する水垌の地蔵、御堂の地蔵、地蔵坂の地蔵があります。

死者が生存者を正しく導く導引き地蔵（来迎寺・紫波町）や、お墓を守護する墓地蔵（大慈寺・盛岡市）というのもあります。

山腹から湧出する清水に由来する山号

天井山（てんせいざん） 宝積寺（ほうしゃくじ） 曹洞宗

◆葛巻町葛巻一五―一五
◆電話　〇一九五―六六―二〇〇四
◆住職　第二四世　田村清晃

町の名所の松並木

沿岸と内陸を結ぶ宿場町として栄えた葛巻町。その中心地に、宝積寺があります。国道沿いにある「塩の道旧道入口」の標柱の向かい側、やや急な坂道を登ったところに参道があります。

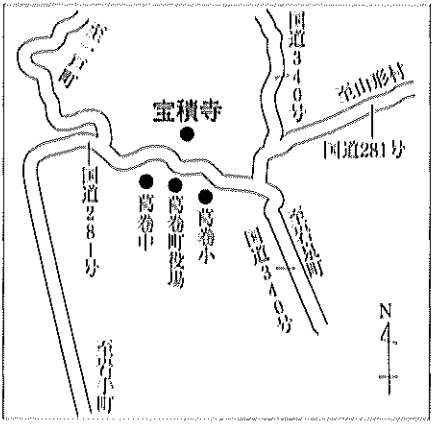
トンネルのように松が繁る参道の奥に、重厚な楼門造りの山門があります。葛巻町の景観のひとつに数えられる松の木は、樹齢およそ一八〇年、その数は百数十本にのぼります。

宝積寺は、いまから約五〇〇年前、文亀二年（一五〇二）に開創されました。宮古・下閉伊地区で最古の歴史をもつ華厳院の二世・山月秀関大和尚の開山で、開基は葛巻掃部介光祐。

宝積寺は葛巻氏累代の菩提寺でしたが、開創から百数十年後、時代の荒波をもろに受けることになりました。

八戸藩領下での再建

「九戸政実の乱」（一五九〇年）のとき、葛巻氏は南部信直に加勢し、報償として岩手郡一方井の地を給されました。三館一城といわれる葛巻城は、いまの役場と宝積寺の墓地付近、葛巻八幡宮の場所にありました。ところが江戸時代前期（一六六四年）、南部藩が盛岡と八戸に分割され当地が八戸藩に属するにおよび、葛巻氏は一方井に移りました。続いて葛巻氏の菩提寺の宝積寺も一方井へ移転したことから、その後三年間は廃寺同然となりました。



しかし、郷党の菩提心により再興され、六世・智庵昌察大和尚によって続されました。

なお、山号の天井山は、裏山の中腹からの湧水が天の井戸のように清らかに流れていたことに由来すると伝えられています。

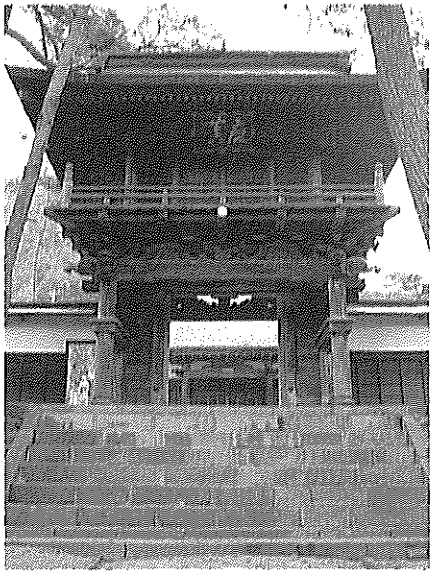
八戸領の時代には、八戸藩の曹洞宗

黙録だった名久井の法光寺と縁が深く、宝積寺一二世、一四世、一五世、一六世は、法光寺の住職に晋山しました。なかでも一五世・天瑞泰亮は名僧の誉れ高く、八戸の奇僧で有名な不磨定石（瓦鏡）は、泰亮を生涯の師と仰いだといわれています。

楼門造りの山門

復興後に改築された本堂は、蔦巻の街が全滅するほどの大火で類焼（一八一六年）。その数年後に再建（一八二一年）されたのが現在の本堂です。

また、明治二九年、二二世のときに山門が建立されました。二階建てで下層に屋根のない楼門式の造りで、上下層の間には高欄つきの回廊がめぐらされています。かつては山門に梵鐘がありましたが、戦争に応召したあと、楼上に十六羅漢が安置されました。



境内の観音堂には、西国三三観音と六観音像がまつられています。室町時代の作とみられる六観音は、もと平船寺（真龍山大権現堂）にあり、明治の廃仏毀釈の際に別当の藤岡家の屋根裏に隠されて奇跡的に難をのがれました。

裏の庭にある芭蕉の句碑は八戸藩に二基というもので、江戸時代後期に檀家の同好の志により建立されました。

碑　芭蕉句碑（町文化財）
樹木　タネナシ（町天然記念物）
関連記事　近世幕開けの動乱

大正年間の開山にちなむ山号

大正山（たいしょうざん） 柳善院（りゅうぜんいん） 曹洞宗

◆葛巻町江刈二四―二
◆電話　〇一九五―六八―二五二〇
◆住職　第二世　懇津森文夫

隠居の庵寺から寺院を開創

葛巻町を走る国道二八一号から国道三四〇号（小本街道）に入り、岩泉の方へ約一〇キロ、ドーム型の五日市小学校校舎を過ぎて間もなく、西側の小高い場所に柳善院があります。

柳善院は、明治三八年、葛巻宝積寺二二世・定由泰禅大和尚が隠居所として庵寺を建て、移り住んだことに始まります。そして、大正二年、静岡県下河津村の普門院末寺として開創されました。往昔は真言宗で「揚善院」と称していた寺を再興し、曹洞宗の「柳善院」としていたものを、許を得てこの地に移転したものです。山号の大正山は元号にちなんだとみられます。開創当時、普門院から仏像を勧請し、静岡県まで出向いて仏像を背負ってきたといわれています。

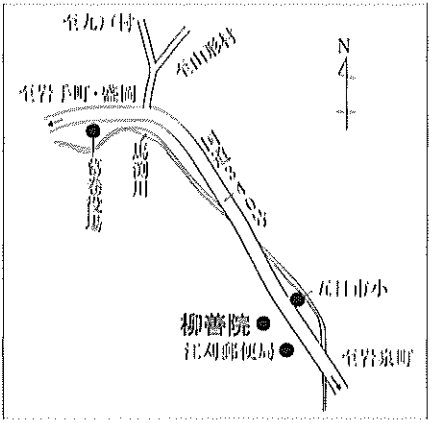
泰禅和尚がこの地に一山を開いたのは、それまで宝積寺の檀家であった五日市村木家の勧請（開基）によるものです。なお、現在は、葛巻の宝積寺を本寺としています。

高台に建つ本堂

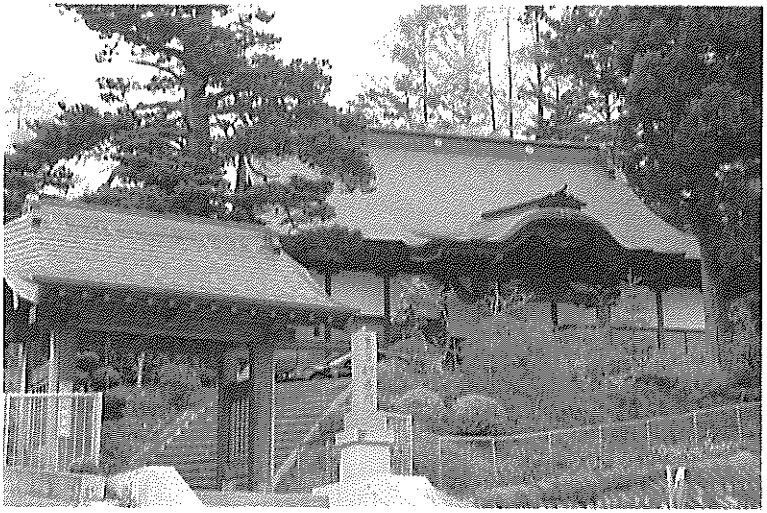
柳善院の開山について、もうひとつの推考があります。

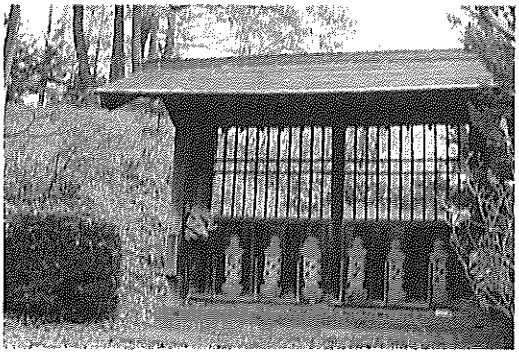
安置する位牌に、「前総持　法光寺・七世当庵初祖充胤大棟大和尚　安永七年（一七七八）一二月一八日示寂」とあります。大棟和尚に関しては、村木家の古い墓地に卵塔があり、葛巻宝積寺の鑑住（正式に住職が決まるまでの留守居役）を務め、葛巻・江刈地方で幅広く宗教活動を行い、葛巻小田の耕雲（庵）寺で歿しています。この位牌から寺院開創の機運がうかがえます。

高台に建つ柳善寺は、道路から新しい伽藍が望できます。宮大工として



卓越技能習認定証をもつ名工の菅原武美一門の手により、平成元年、銅板葺屋根の本堂が完成。山門から前庭につづく斜面の植物も伽藍に調和し、美しい景観をみせています。





境内から墓地への上り口に三基の石碑があり、そこにはそれぞれ三峯山、庚申、金毘羅山大権現と刻印されています。

余録　とくに江戸後期から、各集落や仲間同士でさかんに建碑が行われた。仏教というだけでなく、神道、儒教、道教の要素が混じり合い、民間信仰として浸透した。

町内には庚申塔が多く、明治まで庚申の行事がさかんだったとみられる。一〇干と一二支の組み合わせにより六〇回に一度めぐってくる庚申の日を「守庚申」とか「庚申待」と呼び、夜通し眠らず話をしたり食べたりして過ごした。道教の三尸説に由来するもので、奈良・平安の貴族社会で行われていた。その説とは、人間の頭、腹、足に三匹の虫がいて、庚申の夜、眠っている間に抜け出して天帝にその人の罪を告げ、それが命を縮めるので、身をつつしみ虫にすきを与えないようにする、というもの。

これが仏教と習合して青面金剛菩薩になったり、神道の猿田彦命になった。また、庚申と読むことから「見ざる、聞かざる、言わざる」の三猿信仰が生まれた。

伽藍と墓地を整備し、近十数年で面目一新

瑞祥山（ずいしょうざん） 正福寺（しょうふくじ）

曹洞宗

◆葛巻町田部字荒屋二〇
◆電話　〇一九五―六六―一六五五
◆住職　第二九世　佐々木綱光

報恩寺一〇世による開山

国道二八一号から分岐して馬淵川の流れに沿って一戸葛巻線を北上し、一・五キロ先は一戸町という地に正福寺があります。

正福寺は、いまから約三四〇年前、江戸時代前期（一六六五年）に開創しました。この地方を布教巡行していた報恩寺（盛岡市）一〇世・天山宝鏡大和尚が冬部の山根伊右衛門宅（現関向氏）に錫をとめて教化に励み、一宇を建立して開山。報恩寺末寺名簿によると、末寺二九ヵ寺中、開山順位三三番となっています。当時の通例として、開山師は勧請とみられ、二世に法光知恩大和尚の名があります。

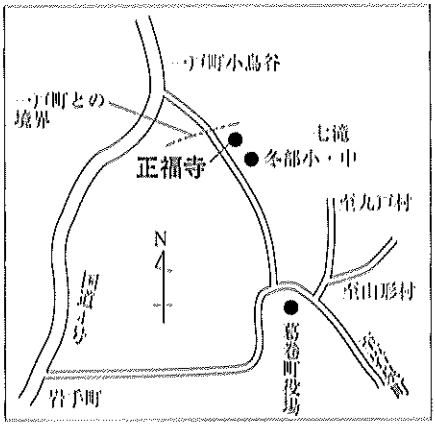
開基は、一説に当地の地行目那であった目時氏との伝えもありますが、篤信の人、山根伊右衛門とされます。

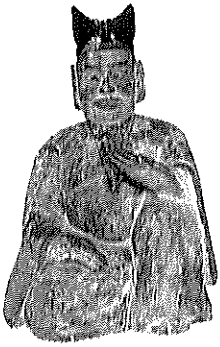
本堂修復と施設の整備

開山後の沿革としては、まず、山根長七の寄進による宝暦八年（一七五八）銘の殿鐘があります

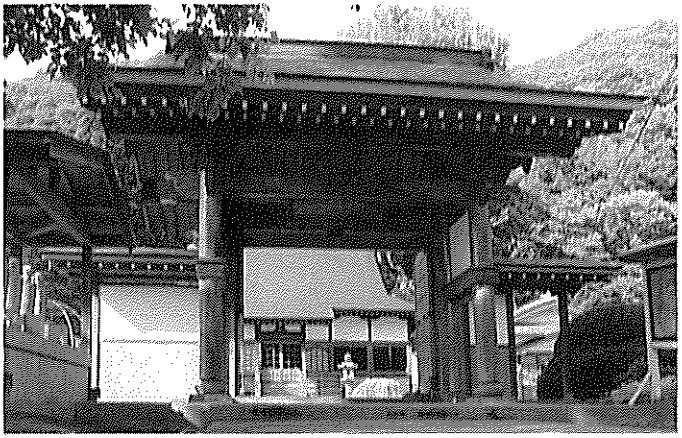
中興の一二世・天性廓真大和尚の代には、三九坪の本堂が建立（一七七五年）され、寺宝の涅槃絵図や草駄天尊像が奉祀されました。

本堂は、それから二一〇年を経て昭和六〇年に修復され、ほかにも、昭和の終わりから平成にかけて、施設の充実は目ざましいものがあります。昭和五九年、境内に三界万霊塔を建立。平




高さ約50センチの十王像の一体（右）と導衣婆像（左）

成元年に山門が完成。平成一〇年には、本堂裏手にある二集落の公葬地が地区民の総意によって区画整理され、墓地の入り口には立派な「完成記念碑」が建てられました。



二本の巨樹と十王像

正福寺本堂の前後に巨樹があります。ひとつは、門前にある大杉（高さ約三七メートル）で、樹齢およそ四〇〇年、根まわり八・五メートル。裏手には、約三八〇年のイチョウが大きく枝を広げています。二本の老樹は開山前後に植栽されたとみられ、正福寺の歴史の生き証人ともいえます。

また、保有する貴重な仏像に、江戸中期の作とみられる十王像一具があります。十王像一一体、奪衣婆ほか一三体の着彩された木造で、もと下冬部の阿弥陀堂にあったといわれるものです。

十王とは、よく知られる閻魔（えんま）大王を中心に、死後、地獄で生前の罪を裁くという信仰にもとづいて造像されました（十王信仰は盛岡市臨江庵参照）。

余録　古くから近郷の人々の信仰をあつめたものに七滝大明神がある。この呼称は、正福寺付近で馬淵川に合流する七滝川からきたもので、上流の、仙境を思わせる七つの滝が連なる場所に祠堂がある。その昔、旧暦の三月二〇日、いまの五月の連休のころ、地元のみならず県内外から花見がてら大勢の参拝者が訪れた。その水が眼病に効くとか、縁結びのご利益があるとされ、事実、ここで出会って夫婦になる若者も多かったという。近年、参拝者は少なくなったが、往古と同じように神秘性をたたえた景観は観光面から着眼され、整備されている。

仏像　十王像一具（町文化財）

樹木　杉、イチョウ（二件とも町文化財）

民衆の信仰拠点

――大更説教所・浄土庵・念仏太夫――

大更説教所（西根町）

外観は似ていても寺院ではない、大更説教所（大更阿弥陀堂）。江戸時代前期（一六一五年）、幕府は寺院御法度で、新たに寺を設けることを禁じ、取り締まりが厳しくなってから、この地が本格的に開発されました。人々は、お寺とは別に、心のよりどころとしてお堂を建て、お寺と同じように祭壇を造り、阿弥陀さまをまつりました。現在の建物は、九年がかりで五六人から寄付を集め、明治二九年に建立。明治三七年に浄土真宗本願寺派に属してから「説教所」とも呼ばれるようになり、当時、盛岡市や玉山村浄泉寺の住職、また日本の傑僧といわれる島地黙雷、赤松連城らそうそうたるメンバーが説教しました。その説教はいまも継続されています。

浄土庵（岩手町）

沼宮内の野口町に、「あみださん」と呼ばれる小堂があります。阿弥陀如来像を安置する浄土庵です。仏像の箱書きには大泉寺（盛岡市）の末寺とあり、ある時期、住職も常住していたようですが、現在は大運寺の管理となっています。

阿弥陀如来像にある元禄五年（一六九二）の記銘、その箱には文化一二年（一八一五）とあるので、そのどちらかの創建とみられ、境内の墓石から江戸時代中期から明治初期まで、檀家もあったようです。

念仏太夫（西根・松尾・岩手）

西根町と松尾村の各寺院、岩手町の宝積寺では、地域の「念仏太夫」とともに諸活動を行っています。いずれも禅宗寺院ながら、浄土教に基づく念仏があまねく浸透し、人々は同じく仏の教えととらえていることから門戸を広げ、北岩手布教団として年に一度総会を開催しています。たとえば聖福寺の場合、新年を迎える催しや観音さまの祭りなど、念仏太夫の奉仕が要になっています。

主な宗派の概況

●天台宗

中国隋の天台大師智顗（ちぎ）が『法華経』の教えを中心に確立したのが天台宗の起源である。

最澄（伝教大師、七六七～八二二）は短期留学生として入唐し、中国天台教学のほか、密教や禅、大乗菩薩戒など、まだ日本に正式に入っていなかった教えを学び、帰国後に天台宗を開宗した。最澄が開いた比叡山延暦寺は、のちに各宗派の祖師を多く輩出し、鎌倉新興宗派の宗祖はいずれも天台宗に学んだことから、日本仏教の母胎といわれる。

最澄亡き後、円仁（慈覚大師、第三代座主）、円珍（智証大師、第五代座主）らの働きで発展した。密教では真言密教の「東密」に対し、天台の「台密」と呼ばれる。

慈覚大師が下野国（栃木県）出身のためか、関東・東北地方の古寺は慈覚大師の開山と伝える寺院が圧倒的に多く、主要な寺院として中尊寺、毛越寺、山形立石寺、青森恐山、松島瑞巌寺などがある。

《教典・本尊・本山等》

天台宗の各寺院は、それぞれの縁起により釈迦牟尼仏をはじめ、薬師如来、観音菩薩、阿弥陀仏、大日如来、そのほかいろいろな仏を本尊としている。

天台宗の所依の教典は、根本が『法華経』である。密教の『大日経』、浄土教の『阿弥陀経』など他の教典は『補宗（ふしゅう）の聖典』と称している。勤行は「朝題目、夕念仏」と呼ばれ、朝のお勤めに『法華経』を、夕のお勤めには『阿弥陀経』を読み、念仏を唱える。

岩手県内にある天台宗寺院は五五ヵ寺。

総本山は比叡山延暦寺（滋賀県大津市）。中尊寺は東北大本山。

●真言宗

真言宗は、弘法大師・空海（七七四～八三五）が開いた密教を中心とする宗派である。密教には、古来インドの呪術の要素が取り入れられている。

留学生として入唐した空海は、当時の真言密教のトップ、恵果阿闍梨（けいかあじゃり）から密教の秘法を残さず相伝され、その後

継者として帰国した。密教を広めるべく幅広い布教活動を行い、生きているままで仏になる即身成仏の教えを広めた。

全国を行脚した空海は、布教だけでなく、香川県の満濃池の修築事業、日本初の庶民教育の学校「綜藝種智院」（現京都市、種智院大学の原型）の開講など、社会事業や民衆救済に努めた。空海の足跡は、現在、お遍路さんで知られる四国八八ヵ所巡りからも、その行動半径の広さがうかがえる。

「弘法にも筆の誤り」のことわざがあるとおり、能書家で、多くの著作を残した。

「真言」とはサンスクリット語「マントラ」（仏が説いた真実の言葉）を漢訳したもの。真言宗では、悪を払い幸運を招く護摩行が行われる。「護摩」とはサンスクリット語の「ホーマ」の音写で、護摩の火は仏の悟りを表す「智恵」、護摩木は人間の煩悩、悩み、苦しみを表す。

密教寺院で見かける、たくさんの仏像や仏画を配した「曼荼羅」は、悟りの世界を表わしたもので、「両界曼荼羅」は九世紀に弘法大師が日本にもたらしたといわれる。

《教典・本尊・本山等》

真言宗の根本経典は『大日経』と『金剛頂経』で、真言宗の中心にいる仏さまは大日如来。真言寺院の本尊は、大日如来をはじめ、いろいろな仏さまをまつっている。岩手県内の真言宗寺院は四五ヵ寺。

総本山は派ごとにあり、高野山真言宗は金剛峯寺（和歌山県高野町）。真言宗豊山派は長谷寺（奈良県桜井市）。真言宗智山派は智積院（京都市）。真言宗醍醐派は醍醐寺（京都市）など。

●浄土宗

浄土宗の宗祖は法然（源空、一一三三～一二一二）である。平安末期から鎌倉時代、天変地異や戦乱がつづくなか比叡山で修行した法然は、中国の善導大師の著『観経疏散善義』にある「一心に阿弥陀仏の名をたたえ、念仏をとなえれば、誰もが等しく極楽浄土に往生できる」という一文に出会い、これこそ大衆の救いにこたえると確信し、教えをひろめた。

それまでの仏教は上流階級を中心とし、厳しい修行を必要としたが、性別、職業、身分を問わないとして多くの民衆を引きつけた法然は、鎌倉新仏教の先駆者といわれる。

広い意味での法然門下は、直弟子で浄土真宗を開いた親鸞、法然の直弟子・証空の孫弟子にあたる一遍が、時宗を開いた。

法然亡き後、分派と合同を繰り返しながらも広がっていき、浄土宗の七祖・聖聞により教義体系が整備されて統一的に発展した。江戸時代には徳川家

の帰依を受け、増上寺がその菩提寺となった。

浄土宗の教えの核心は「南無阿弥陀仏」の念仏をひたすらとなえることから、専修念仏といわれる。「南無」とは帰依を意味し、阿弥陀とは梵語の「アー・ミータ」を音写したもので、はかり知れない偉大な力をもつ仏さまを意味する。

《教典・本尊・本山等》

浄土宗の本尊は阿弥陀如来。根本教典は「浄土三部経」（無量寿経・観無量寿経・阿弥陀経）。

岩手県内の浄土宗寺院は三四ヵ寺で、盛岡市から水沢市間に多く分布する。

総本山は知恩院（京都市）。七大本山は、増上寺（東京都）、金戒光明寺、百万遍知恩寺、清浄華院（以上京都市）、滝導寺（福岡県）、鎌倉光明寺（神奈川県）、別格本山・滝光寺大本願（長野市）。

●浄土真宗

比叡山で修行したのち、法然の門に入った親鸞（一一七三～一二六二）を開祖とする。略して真宗ともいう。親鸞に教団をつくる意志はなく、親鸞亡き後、子孫や門徒によりかたちづくられた。浄土宗との大きな差は、「専修念仏」の浄土宗に対し、真宗では阿弥陀仏の大慈悲を知り、感謝して自然にたたえる念仏「報恩念仏」としている。

法然・親鸞の教えに対して念仏禁止令が出され、法然と親鸞は配流になった。越後に流された親鸞は還俗し、非僧非俗を宣言。肉食妻帯を実践することで、出家・在家にかかわらず救われる在家仏教を確立し、九〇歳の高齢で没した。

親鸞亡き後、血脈を継ぐ本願寺のほかにも真宗の派が生まれるが、蓮如が勤行教典、『正信偈』をまとめ、分かりやすい教えが支持され本願寺の中興となった。

《教典・本尊・本山》

根本経典は浄土三部経で、なかでも『無量寿経』を重視する。本尊は阿弥陀如来の一仏。本像、掛け軸の絵像、名号の三種類がある。

岩手県における真宗は、親鸞の高弟・是信房の教化の影響が大きく、大谷派（東本願寺）四九ヵ寺、本願寺派（西本願寺）十七ヵ寺がある。

真宗一〇派といわれるが、本山は、本願寺派が本願寺（西本願寺）、大谷派が真宗本廟（東本願寺）。ともに京都市下京区にあり、「お西さん」「お東さん」と呼ばれている。

●時宗

時宗は、捨聖といわれる一遍智真（一二三九～一二八九）が宗祖である。時衆とも遊行宗ともいわれる。一遍は

七歳で仏門に入り、浄土教聖の訓行を受け、鎌倉時代（一二七六）に悟りを開く。

一遍は、北上市に墓がある河野通信の孫にあたる。平安時代からあった踊り念仏を取り入れ、仏と民衆の縁を結ばせながら諸国を廻り、二五万枚の念仏札を配り、一二八〇年には祖父の墓参をしている。

一遍は、生涯一宗として教団をつくる気はなかったが、その遺徳を継いだ弟子の真教が、約一〇〇ヵ所の念仏道場をひらき、組織化がはかられた。

遊行僧は、布教のみならず、和歌や立花、作庭、能楽や医学にいたるまで「阿弥文化」を生み出し、鎌倉末期から南北朝の時代には武士に付き添って戦場に行き、戦死者を回向し、形見の品を遺族に届け、合戦のようすを語り聞かせた。それが『太平記』をはじめ、戦記文学の元になったともいわれる。

《教典・本尊・本山》

時宗の本尊は阿弥陀如来。根本教典は、浄土系宗派と同じく浄土三部経。

時宗は県内には早くに布教され、代々の遊行上人が岩手町の御堂観音に参拝した記録があり、岩手県内には一二ヵ寺がある。本山は、清浄光寺（遊行寺）（神奈川県藤沢市）。

●禅宗―臨済宗・黄檗宗・曹洞宗

日本では、臨済宗・曹洞宗・黄檗宗を総称して禅宗という。禅宗では、仏教の真髄は坐禅修道によって直接的に自証体得することによって把握されるとする。六世紀前半、達磨が中国に伝え、中国と日本の禅宗の始祖となった。やがて、門下から臨済宗・曹洞宗など五家・五派、七宗と呼ばれる宗派が生まれた。日本に禅宗が伝来したのは奈良・平安時代で、当初は散発的だったが、一二世紀前半の栄西の登場から本格的になった。

●臨済宗

臨済宗の開祖は栄西（一一四一～一二一五）である。鎌倉時代、二度の入宋を経て、栄西が日本に臨済禅をもたらすと、鎌倉幕府の支持を得て武士階級にひろまった。のちの道元の曹洞禅とともに鎌倉仏教の新しい波を起こした。

栄西は天台宗の比叡山延暦寺で学んだのち、中国で禅修行に励み、帰国して九州を中心に禅をひろめた。栄西の願いは天台宗の再興であったが、その試みは実らず、結果として、武家社会の到来という時代の波に乗り、日本に臨済禅を確立することとなった。

武家のみならず、朝廷、公家までも帰依者となり、京都と鎌倉にそれぞれ五山一〇刹が整備され、格式を有するようになった。

室町時代になると大陸の禅僧の影響

も受けながら、禅宗文学や庭園、建築、書道や礼法などに大きな影響を与え、室町文化を支える仏教となった。

《教典・本尊・本山》

臨済宗では、釈迦牟尼仏の本尊が多いが、必ずしも一定していない。教典についても、特にこだわらない。それは、釈迦の悟りの体験や境地は文字や言葉で表現しきれるものではなく、師資相承（師から弟子への伝承）という考えにもとづく。臨済禅の特徴は、坐禅と、公案と呼ばれる禅問答によって悟りの境地を師資相承する。

現在、岩手県内に二九ヵ寺がある。臨済宗には一四派あるが、妙心寺派の本山は妙心寺（京都市）。

●黄檗宗

黄檗宗の開祖は、中国臨済宗の高僧、隠元隆琦（真空大師、一五九二～一六七三）。多くの諸堂を建て、文書伝道に努める隠元を、日本の京都でも注目していたが、長崎の唐寺の住職として招請され、六二歳で渡来した。鎖国の当時、明からきた隠元のもとに大勢の修行僧が集まって仏教儀礼や新しい授戒法を学んだ。新風を吹き込んだ隠元は、日本禅宗を中興したともいわれる。宗風は臨済宗とほとんど同じである。

隠元がもたらした中国の最先端の文化は日本の公卿や武家をひきつけ、四代将軍・徳川家綱は隠元の保護者となり、宇治の地に、故国と同じ山寺号の黄檗山萬福寺の建立を許した（一六六一年）。隠元が教勢を伸ばし、次の第二代住職の木庵により、一宗の基礎が確立した。

木庵の弟子、鉄眼は明版の『大蔵経』を『黄檗版大蔵経』として刊行。この版木文字は明朝体活字の源流である。

萬福寺の歴代住職は、江戸中期までほとんど中国から渡来した高僧で、日本に明文化を伝えた。普茶料理は中国の寺院で行われた特別な食事作法が元祖である。今日、うずら豆や金時豆を総称して「いんげん豆」というが、これは隠元がもたらしたとされる。

《教典・本尊・本山》

教典は、とくに所依のものは定めていない。大本山は黄檗山萬福寺（京都府宇治市）。大本山の本尊は高さ九・五メートルの釈迦如来坐像だが、一般寺院の本尊は観音菩薩が多く、薬師如来や地蔵菩薩のところもある。とくにこだわらないところは臨済宗と同じである。岩手県内には、大慈寺と、その末寺の二ヵ寺がある。

●曹洞宗

曹洞宗の開祖は、道元（一二〇〇～一二五三）である。鎌倉時代に入宋し、中国曹洞禅の継承者の如浄から、法を相承して日本に伝えた。道元の禅は、

釈迦以来の正法にしたがった『只管打坐』（ひたすら坐禅に撤する）の禅。武士、商人、農民と、それまで仏教に縁のなかった人にも浸透し、念仏に次いで、禅を通して仏教が大衆にひろまった。女性は成仏できないという従来を批判し女人成仏論を展開した。

京都で布教し、『正法眼蔵』を執筆した道元は、ゆるぎない地位を確保したが、さまざまな圧力もあり、越前に身を移して傘松峰大仏寺（二年後に永平寺と改号）を建立した。

道元自身は特定の宗派名をたてることを否定したが、第四代瑩山のころから曹洞宗が使われはじめた。瑩山は、総持寺を開き、民衆化に努め、地方に発展する基礎を築いた。その功績は大きく、道元を高祖、瑩山を太祖とし、両祖といわれる。

瑩山は温泉の発見、井戸の採掘、架橋、医療などで庶民の共感を得たほか、葬祭祭礼の儀式を積極的に行った。極力者にも庇護されて江戸時代初頭には日本最大の教団に成長し、今日の隆盛の基礎をつくった。

《教典・本尊・本山》

曹洞宗は、永平寺（福井県永平寺町）と総持寺（横浜市）を両大本山とする。本尊は釈迦牟尼仏。他宗から転じた際、前の宗派の諸仏をそのまま祀る寺もあり、禅宗全般にみられるように、一定の形式に限っていない。

宗典として、道元著『正法眼蔵』と、その抜粋である『修証義』がある。

岩手県内に三一四ヵ寺と最大の勢力をもつ。県内には六系統で拡張された様相がみられ、六系統のうち、水沢市の正法寺系統は盛岡以南に八八ヵ寺、報恩寺系統は盛岡以北の内陸部に約三〇ヵ寺、源勝寺系統は盛岡以北や県北沿岸に三一ヵ寺ある。

●日蓮宗、日蓮系

日蓮宗の宗祖は日蓮（一二二二～一二八二）である。鎌倉仏教の宗祖はいずれも弾圧されたが、日蓮はもっとも強い迫害を受けた。

日蓮は比叡山延暦寺へのぼり、「法華経」こそ末法の世を救うと確信し開宗した。日蓮は、真実の教えはひとつであり、釈迦は永遠に生き続ける久遠仏で、実践行として『法華経』をひろめることを唯一の菩薩行とした。人々には、『法華経』に帰依する「南無妙法蓮華経」のお題目をとなえる信心唱題が往生への道と説いた。

他宗を批判しつつ伝道活動を開始した日蓮は、鎌倉幕府にも『立正安国論』を献上して宗教の改革を訴えた。それにより最初は伊豆へ、二度目は佐渡へ流罪となるが、精力的な布教により帰依者が増した。

経典名から「法華宗」を称したが、天台法華宗と区別するため日蓮法華宗・日蓮宗といわれるようになった。

日蓮亡き後、六老僧と呼ばれる弟子たちが各地で布教し、それぞれ門流を生み出し、発展した。

《教典・本尊・本山》

各派とも経典は『法華経』（正式には妙法蓮華経）。本尊は、基本的には日蓮が著した『曼陀羅』だが、派によって本尊にこだわりがあり、呼称も決まっている。

日蓮宗の総本山は、身延山久遠寺（山梨県身延町）。法華宗本門流の大本山は光長寺・鷲山寺・本興寺・本能寺。本門仏立宗の本山は宥清寺（京都市）。日蓮正宗の総本山は大石寺（静岡県）。岩手県内にある日蓮系の寺院は、三二ヵ寺である。

●修験宗

修験宗は、日本固有の山岳信仰のおもかげを濃く伝える一宗派である。山そのものを仏として修行に励んだ仏教徒が修験者（山伏）のはじまりとなった。大和国葛城山に住み、仏教を修行し、吉野の金峰山、大峰などを開いた役行者（本名・役小角、生没年不詳）が、没後、修験の開祖と仰がれるようになった。役行者は、光格天皇から、神変大菩薩のおくり名をもらっている。

山岳信仰を母胎とする修験は、天台・真言の仏教（密教）と習合して急速に展開し、県内でも藤原氏の時代には、すでに修験道とのつながりがみられた。また、岩手郡を給与された頼朝の御家人・工藤行光が岩手山に参詣（一一九〇年）し、山開きの先例をつくるなど、このころから県内の主だった山は密教系の僧や修験者の道場として聖なる霊山と呼ばれた。

県内の修験者は、聖護院下の本山派（天台系）と、醍醐三宝院下の当山派（真言系）、東北きっての霊山出羽三山の羽黒派の三派で占められ、中世初頭には熊野修験が入ったが、江戸時代には、主に本山派と羽黒派の二派になった。

護摩を焚き、呪文を誦し、加持祈祷を中心に、災厄を除き、五穀豊穣、福徳を招来しようとする修験道は、冷害と凶作に見舞われ続けた県内の人々に特に期待されたが、これにこたえたばかりでなく、医術を身につけ、文化芸能に精通した山伏によって文化流入がもたらされた。民間信仰も排除しないで包括し、また、一般の寺院が少ないこともあって江戸時代には村々に浸透した。しかし、明治政府による神仏分離策・雑宗排除策によって修験道は廃止され、戦後まで公認されなかった。

県内の修験宗寺院は一二ヵ寺。

●あとがき

今回、いろいろな文献を通じて、昭和五〇年発刊の「いわてのお寺さん」が、郷土資料として、いかに広範に活用されているかを改めて知りました。そして、それ以降に、各市町村史（誌）等が発刊され、寺院を含む地域の歴史が万人につまびらかになってきました。

そこで、新たにお寺さんの本をまとめるにあたり、まず、思い描いたことは、親しみやすく平易な表現にし、より多くの方々が寺院に凝縮されている歴史をみずからに引き寄せて〝時空旅行〟ができるようなものにしたい、ということでした。

日本のみならず、世界中の出来事や歴史等々がメディアを通じて入手できる昨今ですが、足元のことを知るチャンスが思いのほか少ないのではないだろうか。そういうことから、各寺院の間にコラムを設けました。それは各寺院の背景でもあり、寺院の歴史を「縦糸」とするなら、「横糸」のようにも思われます。

ただ、そうした思いとは裏腹に、歴史に関して一般以上の知識もなく、まして、深淵な宗教の世界に存在するお寺さんを対象に文字をつづることは、浅学非才には過重な任であったと、取材を重ねるほどに自覚させられることとなりました。しかしながら、一〇〇人を数えるご住職にお目にかかってお話を伺いましたこと、さらには、原稿はすべてお目通しいただきました。

ご住職各位には、この間のご教示に対しまして、深く感謝いたします。

最後に、山号寺号については必ずしも表記が統一的ではなく、常用漢字にしたものがありますことを、ここにお断わりしておきます。

（外内英子）

十王像（臨江庵）
虚空蔵菩薩（千手院）
瀧ノ上観音（水泉寺）
十一面観音（大泉寺）
秋葉大権現（正傳寺）
釈迦如来（東禅寺）
雲板（源勝寺）
以上七点の写真は『廃仏毀釈を免れた仏たち』柳原康著　二陽印刷株式会社出版部編より転載させていただきました。

■参考文献

「わが家の宗教を知るシリーズ『お経がわかる本』」双葉社
「岩手県の歴史」河出書房新社
「古都ほとけ出会い旅」NHK出版
「奥州三十三観音の旅」河北新報社
「わが家の仏教」実業之日本社
「いわて未来への遺産」岩手日報社
「盛岡の先人たち」盛岡先人記念館編
「盛岡の寺院」盛岡市仏教会
「廃仏毀釈を免れた仏たち」
　梅原唯著　三陽印刷株式会社出版部編
「盛岡三十三観音巡礼」高木弥三郎
「いわて人物風土記・アメニモマケズ」
「宮沢賢治と法華経」森荘已池ほか
「宮沢賢治―その文学と宗教―」
　潮文社
「石川啄木記念館」石川啄木記念館
「岩手の歴史ものがたり」日本標準
「岩手の地名ものがたり」小島俊一
「いわて歴史探訪」岩手日報社
「雫石盆地の石碑は語る」
「岩手のお地蔵さん」福田重義
「ふるさとの歴史掘り起こし講座」上田公民館
「盛岡の民俗芸能」
　盛岡市無形民俗文化財保存連絡協議会編
「ふるさと再見読本 湧口と碑」松尾村
「松尾八幡平物語」菅原進
「雫石（滴石）盆地の地名」
「岩手郡誌」
「盛岡市史」
「矢巾町史」
「紫波町史」
「村誌たまやま」
「滝沢村誌」
「岩手町史」
「葛巻町史」
「西根町史」
「松尾村誌」
「雫石町史」
「もりおか物語」シリーズ
　熊谷印刷出版部
「盛岡市文化財」シリーズ
　盛岡市教育委員会
「ふるさと物語」紫波町教育委員会
「西根郷土史物語」近谷秀雄編
「龍谷寺史」
「法華寺略誌」
「聖天の御由　永福寺」
「不動尊信仰のしおり」永福寺
「清水寺史」
「紫波本誓寺普判会資料集別冊」
「護龍山黄金寺開創五百年記念誌 法灯」
「願円寺物語」櫻田力
「東慈寺誌」
「幸福をよぶ霊感説法」亀井公良

■協力機関

岩手県総務部学事課
岩手県総務部総務学事課
盛岡市教育委員会
矢巾町教育委員会
紫波町教育委員会
玉山村教育委員会
滝沢村教育委員会
岩手町教育委員会
葛巻町教育委員会
西根町教育委員会
松尾村教育委員会
雫石町教育委員会
盛岡市中央公民館
雫石町歴史民俗資料館

いわてのお寺さん

[盛岡とその周辺]

平成15年8月16日発行

企　画／株式会社　テレビ岩手開発センター

編集・取材／北稿房E&R　外内英子

〒020-0103 盛岡市西松園4-11-12

印　刷／株式会社　熊谷印刷

発行所／株式会社　テレビ岩手

〒020-8650 盛岡市内丸2番10号

TEL (019) 624-1166

定価（本体1,714円＋税）